

第 1 図 沖永良部島の位置と遺跡分布図

中国大考古第7号 正誤表

(A) 文章の部

頁	欄	行	誤	正
51	左	9	角形刺突文を	角形刺突文を
63	右	12	下帯	下端
68	左	28	概して多く	概して多く
77	右	37	圧倒的に多く	圧倒的に多く
79	左	10	外彎状に張らむもの	外彎状に脹らむもの
85	右	13	陵線間で	稜線間で
86	左	2	人口遺物に	人工遺物に
114	右	15	少量の雲母か	少量の雲母か
121	左	6	少量加えるか	少量加えるが
126	右	24	週辺の	周辺の
130	左	13	半截竹管工具	半截竹管状工具
138	左	30	約8ミリを計るものも	約8ミリを測るものも
139	左	17	脆いものは小数	脆いものは少数
142	右	7	幾何学文を施し	幾何学文を施し

(B) 図の部

頁	
I	第1図の表中の(南東系)をすべて(南島系)に訂正
4	第2図、B—トレンチのグリッド番号は右側より2、3、4、5
153	第 図→第63図

(C) 図版の部

頁	図版番号	
163	9	スケールは5 cm
167	13	最下段の土器番号は7
185	31	スケールは5 cm
189	35	最下段中央の骨器番号は6
192	38	スケールは5 cm
204	50	最下段左端の土器番号6を7に訂正し、その上の土器を番号6に



# 沖永良部島神野貝塚発掘調査概報

## I はじめに

本貝塚は沖永良部島の知名町字大津勘神野に所在する。沖永良部島は琉球列島の中部圏を構成する2諸島のうち北部の奄美諸島に属し、奄美本島の南約100km、その南約80kmには沖縄本島がある。

遺跡は太平洋に面する臨海砂丘地に立地し同砂丘の北端は大津勘川によって切られている。この川は上流では水流が認められるものの、下流では地下にもぐり、遺跡附近では大雨の時以外水流をみることはない。遺跡からは晴天の日など与論島や遠く沖縄本島を望むことができる。

本遺跡は1980年2月、同町が屋子母海岸から大津勘海岸へかけて建設中だったサイクリング道工事中に、高宮らによって発見されたもので(註1)、その際、屋子母海岸でも新たに喜美留遺跡(当時は屋子母A地点と仮称)を発見した。当時の表採資料については、その大要を南島文化研究所発行の報告書(註2)に紹介した。

サイクリング道の新設工事は砂丘の後方部つまり陸地側を開削して進められており、高宮らが踏査を行ったころは、たまたま採砂直後のことで、黒色の遺物包含層が数10mにわたって露出し、付近には土器や石器などの先史遺物が散乱していた。遺物は可能なかぎり採集した。

ところで、屋子母の喜美留遺跡採集の土器はいわゆる宇宿上層式に属するもので、縄文晩期の単純遺跡と目された。他方、神野貝塚(当初大津勘長浜貝塚と仮称)の土器には室

川下層式1片のほか、面縄前庭式や嘉徳式土器なども含まれ、縄文後期を主体とする遺跡とみられたが、前期に遡る可能性も秘めていた。また、表採資料の中には伊波式土器の頸部破片も1点含まれ、沖縄との関連をうかがわせた。

沖永良部島における考古学的調査は従来きわめて少く、昭和32年に九学会連合によって知名町住吉貝塚が発掘調査(註3)された以外、今日まで正式な発掘調査は実施されていない。住吉貝塚は縄文晩期を主体とする遺跡で一部に縄文後期の土器を含むが、この遺跡がつい最近まで、同島最古の遺跡であったのである。

ところで、北の奄美本島や南の沖縄諸島では近年、縄文前期や早期初頭(草創期)に遡る遺跡のあることが判明し、類例遺跡も年々増加しつつある。周辺地域のこのような状況から、沖永良部島にも前記両諸島に対比される古い時期の遺跡がなければならないはずである。神野貝塚は前述のような土器資料から従来不明であった同島の縄文後期以前を解明するのに最良の遺跡と考えられた。

今回、文部省科学研究費による鹿児島大学法文学部考古学研究室との共同調査を行うにあたり、上記の目的を達成しうる遺跡として本貝塚が選定されたわけである。

調査に際し、文部省より科学研究費の助成を受けた。また、現地では町長日吉得蔵氏をはじめ、田中実前教育長、平良清義現教育長東條達雄中央公民館長、教育委員会の大当吉

之助、大山倭諸氏のほか多くの方々から物心両面にわたるご援助をいただき、現地では鹿児島県考古学会長河口貞徳氏や北九州市立考古資料館長小田富士雄氏からいろいろご教示をいただいた。現地では日吉センター（日吉西則氏）と知名米穀店にもお世話になった。

B トレンチの獣骨については鹿児島大学農学部教授西中川駿氏に、骨製品の素材については金子浩昌氏に同定をお願いし、石器の石質は沖縄県立教育センターの大城逸朗氏に、貝類については琉球大学大学院生の黒住耐二氏に鑑定をお願いし、人骨については国立科学博物館人類研究部室長佐倉朔氏のご所見をいただくことができた。記してお礼申し上げる次第である。

報告書の作成にあたり、遺物の基本的分類を高宮が行い、実測図の作成および執筆は下記のように分担し、文章は最終的に高宮が補筆した。

A—1区 安里和美、下地傑、大城広江

A—3区 下地傑、大城広江

B—3区 玉城安明、山内盛尚

B—5区 照屋孝、仲村ゆりか

遺物の整理や実測図の作成には下記諸君の協力を得た。

砂辺和正、宮城康則

写真撮影は中村愿氏が担当した。

本遺跡の調査参加者は下記の通りである。

第1次発掘調査(1982年8月4日～同年8月12日)

調査責任者 高宮廣衛

調査主任 知念勇

調査補助員 宮城利旭

実習生

砂辺和正・桃原隆信（以上4年）

新垣憲一・下地傑・玉城安明・照屋孝・

宮城康則（以上3年）

安里和美・大城広江・金城寿久・新里敏明・仲村ゆりか（以上2年）

特別参加

大城剛、島弘（以上4年）

第2次発掘調査（1983年8月2日～同年8月16日）

調査責任者 高宮廣衛

実習生

下地傑・玉城安明（以上4年）

安里和美、大城広江、金城寿久・新里敏明・仲村ゆりか、山内盛尚（以上3年）

古堅宗明、仲宗根求、宮里信勇（以上2年）

特別参加

岸本義彦、盛本勲（以上沖縄県教育委員会文化課）、島袋聖子（OB）、上地千賀子（4年）

なお、今回の調査報告書はA・B両トレンチにおける2年間の調査成果を収録する予定で、原稿・実測図等すべて完了したが、資料が膨大となり、他方、予算に制限があって、今回は止むを得ずAトレンチに限って報告し

Bトレンチを次回にまわすことにした。ご諒承いただきたいと思います。

#### 註

1. 高宮廣衛 「沖永良部島における先史遺跡調査概要」 南島文化研究所所報第9号 沖縄国際大学南島文化研究所 1980

2. 高宮廣衛・島袋洋 「沖永良部島の先史遺物」 『沖永良部島調査報告書〈地域研究シリーズNo.2〉』 沖縄国際大学南島文化研究所 1981

3. 国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三 「奄美諸島の先史時代」 『奄美—自然と文化』 九学会連合奄美大島共同調査委員会編 1959

## Ⅱ 調査経過

調査は1982年と翌83年の2回にわたって実施した。

まず、調査を実施するにあたり、道路開削時に損壊を受けた砂丘後方の黒砂層露頭部の検討からはじめた。黒砂層（遺物包含層）は北で厚く、南へ次第に薄くなり、遺物の散布量も北ほど多い。また、先述の室川下層式の破片も北端部で得たものである。以上の2点から北側が有望とみられ、トレンチを同部へ設定することにした。

トレンチは比較的樹木の少い箇所を選び、道路にそって2ヶ所に設定した。第1図に示すA・Bの両トレンチで、Aは2×6m、Bは2×10mである。両トレンチともそれぞれ南側より1～3および1～5の番号を付した。しかし、発掘要員および調査日数との関係から、第1次調査ではA—2区およびB—4区の試掘調査を保留した。

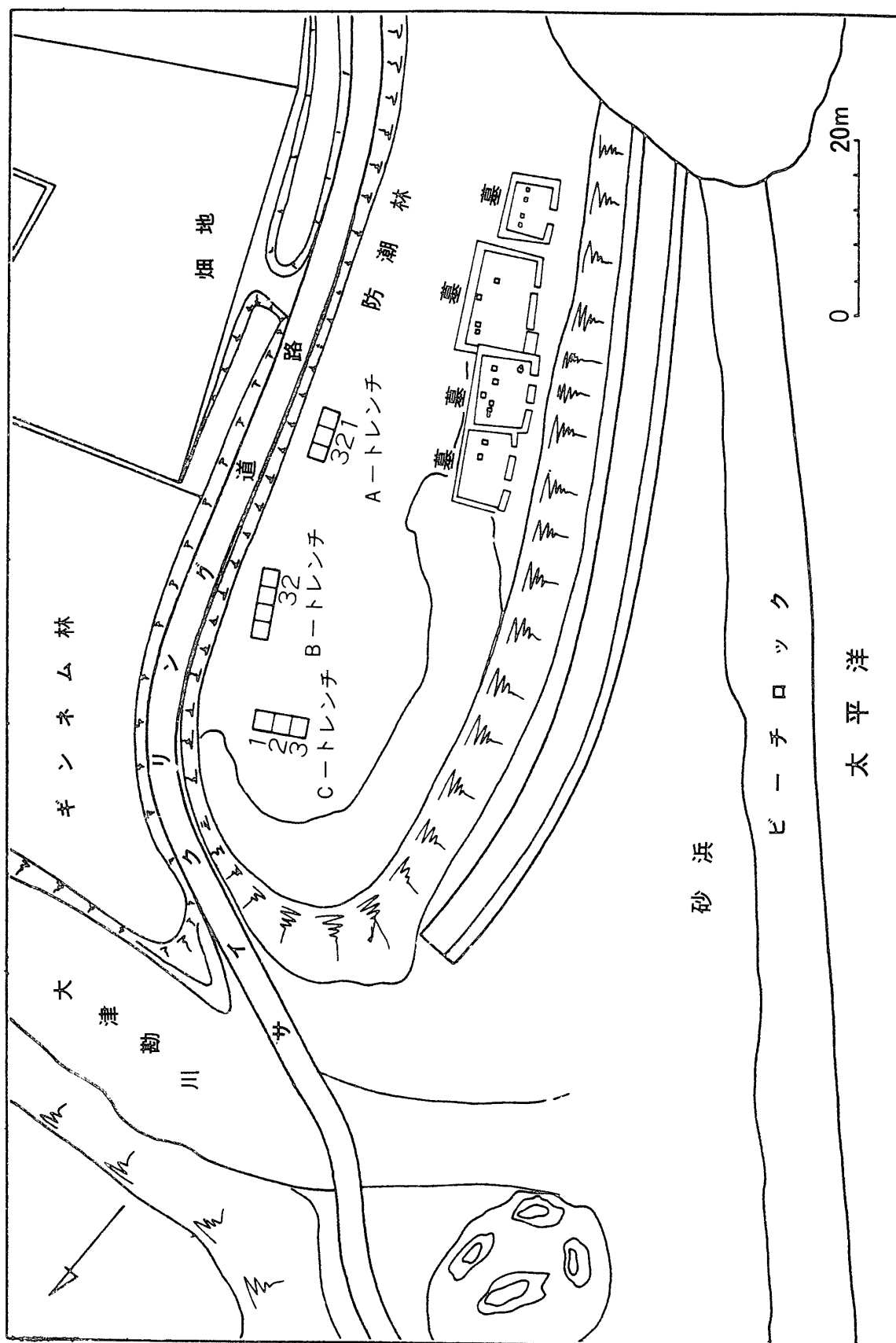
第1次調査は1982年8月5日より開始したが、後半、特に8月9日以降は台風11号の接近・通過により、発掘作業は予定より大幅におくれてしまった。そのため予定の10日間で完了することができず、再三延期して、一応

のメドをつけたのが同月の18日であった。今回の調査で、AトレンチではⅤ層、BトレンチではⅥ層まで確認したが、時間の都合上、同層以下における文化層の存在を確かめることができなかった。

第2次調査は1983年8月2日より同月16日までの15日間実施した。初日はトレンチの設定および昨年埋め戻した部分の露出作業を行ったが、この作業は側壁などを損傷しないよう細心の注意を払いながら進めたため翌3日までかかり、実際に調査を開始したのは2日後の4日からである。

今回の調査により、A・B両トレンチとも昨年掘り残した白砂層の下方にさらに文化層のあることを突き止めた。そこで、今次の調査は新たにトレンチを広げることなく、昨年の発掘坑を地山まで掘り下げることにした。その結果、Bトレンチの第3区ではⅪ層、同第5区ではⅫ層を認めることができた。B—1・2の両区は本年も時間がなく第Ⅲ層で中止せざるを得なかった。この両区については次回の調査で終了させたいと思う。

他方、Aトレンチでは第1区でⅦ層、第3



第2図 神野貝塚の地形図

区でⅧ層まで確認したが、側壁の崩壊が甚しく、きわめて危険な状態にあったので、崩壊部の遺物すら完全に収集できぬまま埋戻す結果となってしまう。したがって、上記両層以下の状況をおさえることができず、その点大変残念に思っている。

果となってしまう。したがって、上記両層以下の状況をおさえることができず、その点大変残念に思っている。

### Ⅲ 層 序

層序はA・B両トレンチにおいて多少異っている。まず、Aトレンチから述べることにする。

Aトレンチは前述のように側壁崩壊のため下部を完掘できず、未発掘の部分を残してしまいが、前記2回の試掘調査で確認できた層序は8枚である。しかし、まだ地山に達したわけではなく、B区の層序からすると、本区でも第Ⅷ層以下にさらに文化層の存することが考えられる。

Aトレンチの第Ⅰ層は黄褐色砂層の表土で厚さは25～50cm、全体的に緩やかに東方に傾斜する。先史遺物がわずかに検出されたが、本来、生活層といふ無縁とみてよい。A—3区の南西部には本層堆積後、大型獣（牛か馬で現在鑑定中）を1匹葬っており、部分的な攪乱を受け、そのため同部では第Ⅱ・Ⅲ層は欠如し、第Ⅰ層の下面は第Ⅳ層に接している。第Ⅰ層は同区西壁で最も厚く、60cm余を計る。

第Ⅱ層は暗黄色の砂層で、厚さは20～25cmとほぼ一定しているが、A—1区南壁側では東壁部へ薄くなり、やがて消滅する。また、A—3区南東部では前述の表層からの掘り込みにより、同層は欠如している。先史遺物が数10点出土し、後世の瓦の破片も2点検出された。

第Ⅲ層は黄褐色の砂層で、西壁側で厚く、最厚部は50cmほどあり、東壁側へ薄くなる。A—3区の東南部は前述のように獣骨を埋め

るために後世に掘り込まれており、同部には第Ⅲ層は存在せず、第Ⅰ層は直に第Ⅳ層に接する。無文口縁の破片が1点検出されたが、本来、無遺物層とみてよい。

第Ⅳ層は黒色砂層でA—1区では60～70cmの厚さを有するが、A—3区では若干薄く30～50cmである。A—1区では部分的に70cmを越す箇所も見受けられた。遺物包含層で、縄文後期に比定される。

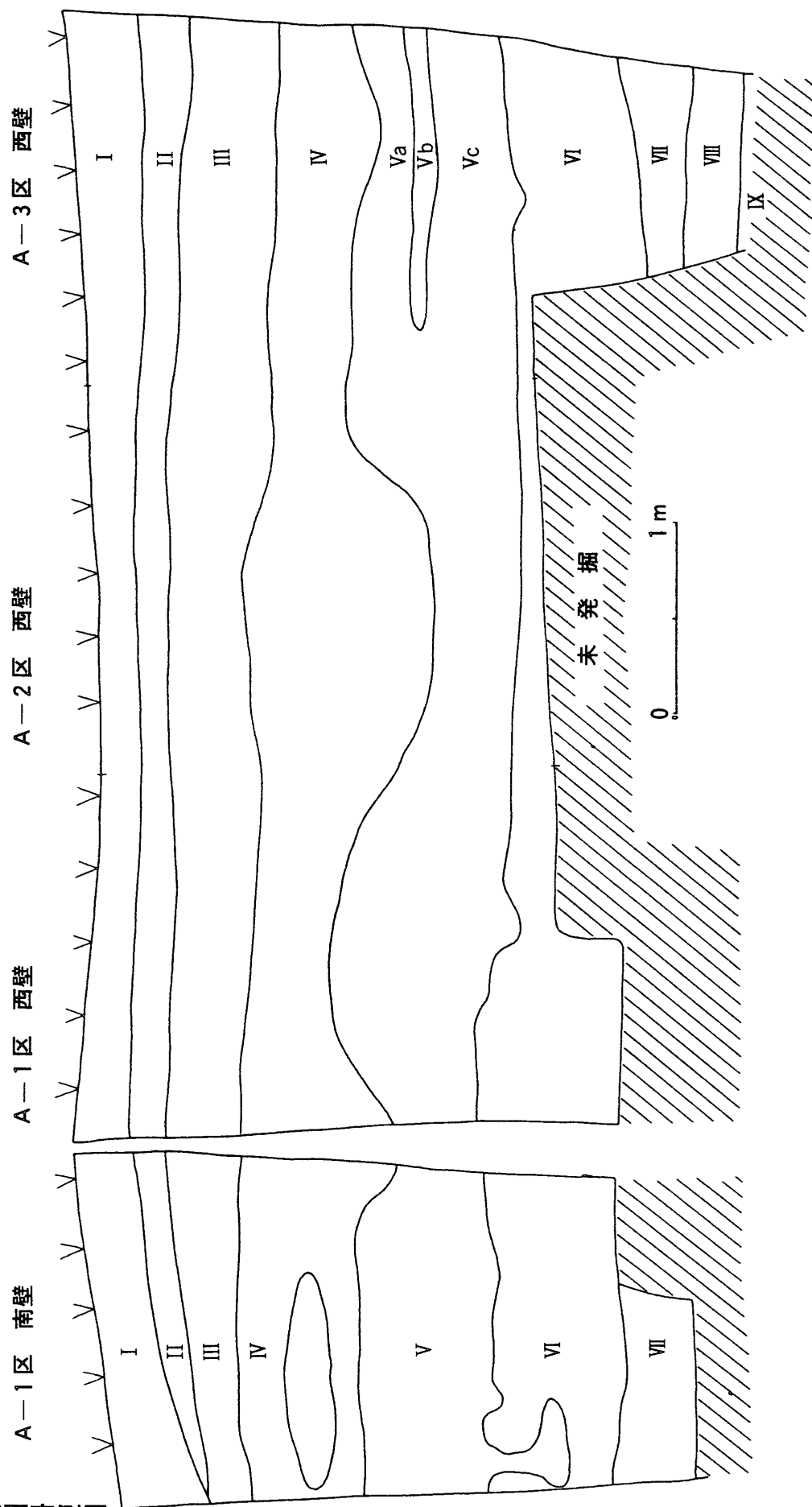
第Ⅴ層は上層よりやや色が浅く、暗褐色を呈する層で、A—3区では中央部に白砂層が介在し、同層を上下に2分する。したがって同区では第Ⅴ層をA～Cの3層に細分した。この白砂層はA—2区で消え、同部以南では1枚の層となる。したがってA—1区では1枚の層として把握される。遺物を包含し、縄文後期に比定される。

以上が1982年度の調査分で、以下は1983年度の発掘に掛るものである。

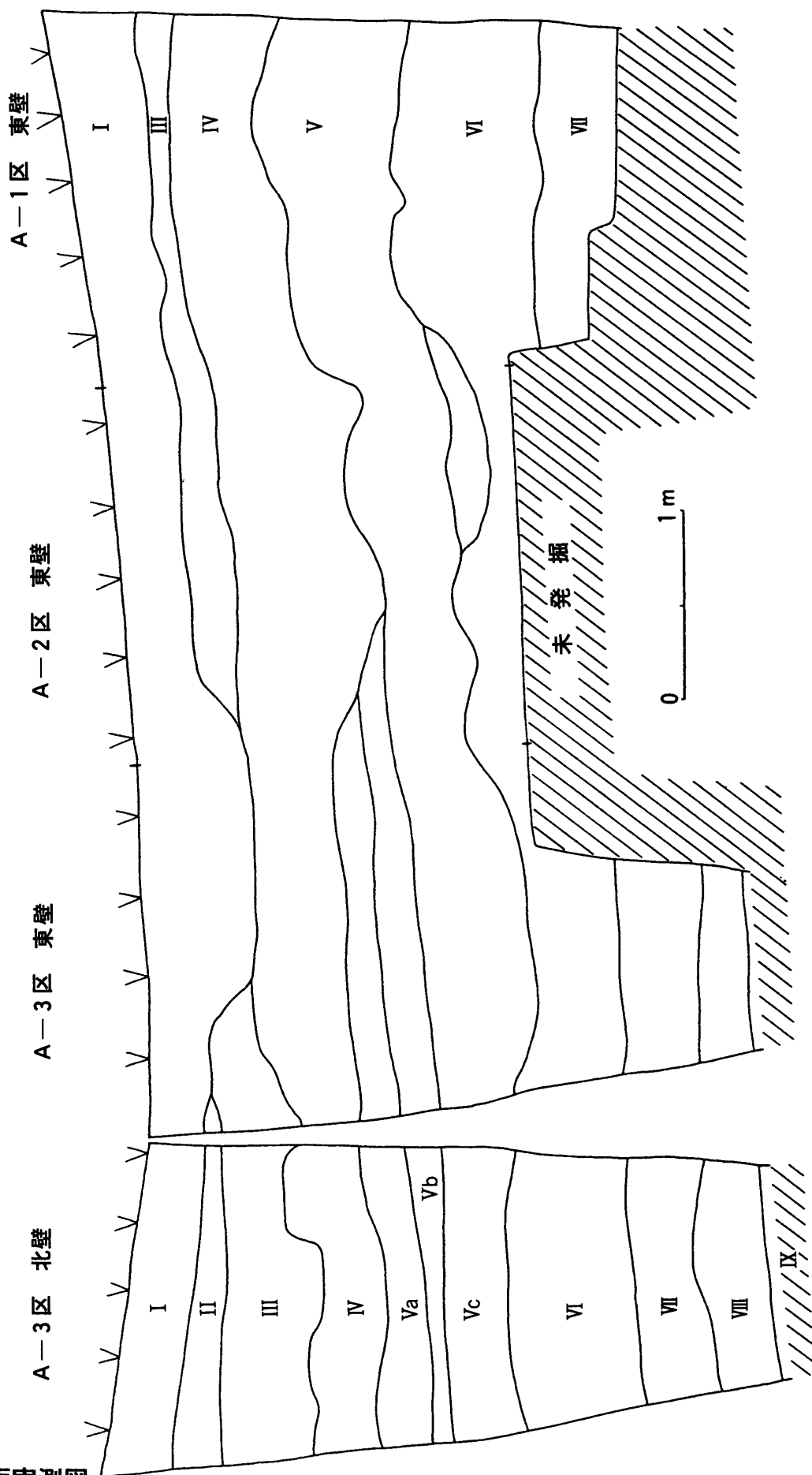
第Ⅵ層は黄白色砂層で厚さは50～70cm。A—1区では一部未発掘部分を残す。無遺物層である。ただし、A—2区と同層では一部に焼けた箇所があり、その近くから室川下層式系の口縁破片が1点検出された。同区については資料整理の都合上、次回に報告することにする。

第Ⅶ層は紅白色砂層で、A—1区では南半部を約40cm掘り下げたが、側壁が何度も大きく崩壊し危険な状態にあったので、それ以下

第3図 壁面実測図



第4図 壁面実測図



の発掘を見合せた。他方、A—3区では側壁の崩壊がA—1区ほどではなかったため、同層を掘り下げることができたが、側壁部の発掘は崩壊を誘発するので、側壁側をさけて試掘を行った。A—1区では轟様式の破片が1点出土しており、縄文前期に比定される。

第Ⅷ層は淡黒色の砂層でA—3区で試掘を試みたが、側壁崩壊の危険が生じたため部分的な調査に終わった。室川下層式の層で、Bトレンチの下部に相当する。

以上がAトレンチにおける両年度にわたる調査の概要である。

## Ⅳ A—1区

### 出土遺物

本区の出土遺物は自然遺物と人工遺物に分けられる。自然遺物は獣魚骨や陸産・海産の貝類など食料残滓を主体とするが、一部未同定のものがあるので、報告は次回にゆずり、本文では人工遺物について紹介したい。人工遺物には、石器、骨牙器、貝製品、土器などがあり、土器が最も多く、他は僅少であった。

### A 石器

石器は第Ⅳ・Ⅴ層及び崩壊土より11点得られた。内訳は磨石が8点、石皿が2点、石斧が1点である。

#### a) 磨石

磨石は第Ⅳ層より3点（第5図1・3、第7図2）、第Ⅴ層より4点（第5図2・4、第6図2・3）、崩壊層より1点（第6図1）得られたが、1点を除いてすべて破損品である。

第5図1は平面と側面の一部を残す磨石の破片である。平面に研磨を施し、側面にはわずかに敲打痕も認められる。現存部の最大長

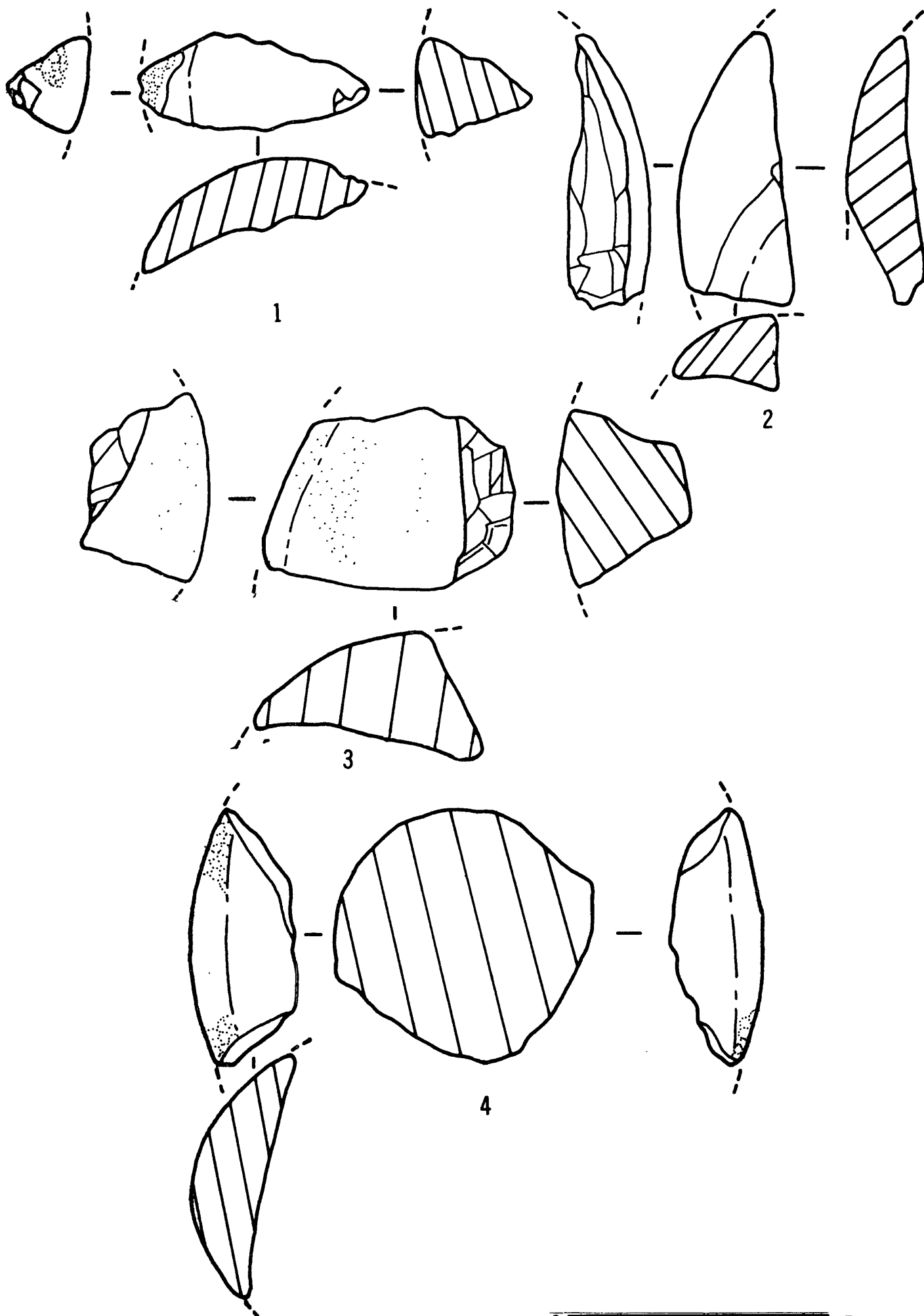
第1表 A—1区における石器の出土状況

層 \ 種類	磨石	石皿	石斧	計
I				
II				
III				
IV	3	2	1	6
V	4			4
VI				
VII				
崩	1			1
計	8	2	1	11

4.2センチ、最大幅1.7センチ、最大の厚さは1.3センチである。重量7.33g。輝緑玢岩製。第Ⅳ層の出土。

同図2は磨石の破片で、平面も側面も砥磨を施す。現存部の最大長5.2センチ、最大幅2.1センチ、最大厚1.3センチ、重量は16.92gで、砂岩製。第Ⅴ層の出土。





第5図 A-1区出土の石器

同図3は比較的大形の磨石の破片で、平面と側面の一部を残す。平面は滑沢を有する。現存部の最大長、最大幅はともに3.7センチで、最大厚2.7センチ、重量37.11g。砂岩製。第Ⅳ層の出土。

同図4も磨石の側面の破片で、全面砥磨が施され、一部に敲打痕も見受けられる。現存部の最大長4.6センチ、最大幅4.8センチ、最大厚1.3センチ、重量34.7g。砂岩製。第Ⅴ層の出土。

第7図2も大型磨石の一部で表面と裏面は研磨が施され滑沢を有する。側面は砥磨仕上げだが、入念に行なわれているため同部も滑面となる。平面形は不明だが、横断面は楕円形である。現存部の最大長9.2センチ、最大幅4.7センチ、最大厚8.2センチで重量は470g。砂岩製。第Ⅳ層の出土。

第6図1は大形磨石の破片で、側面の一部である。側面は研磨が施され、一部に敲打痕も見受けられる。現存部の最大長10.2センチ、最大幅6.1センチ、最大厚5.2センチで重量は290g。砂岩製。崩壊土の出土。

同図2は磨石の破損品で4分の1ほど残存する。全面に研磨が加えられているが雑で、側面の一部には敲打痕も認められる。平面形は恐らく円形であろう。横断面は楕円形である。現存部の最大長5.3センチ、最大幅4センチ、最大厚4.6センチで、重量は110gである。砂岩製。第Ⅴ層の出土。

同図3は磨石の完形品である。平面形は石鱗状を呈し、断面は楕円形である。表裏面とも中央部にのみ研磨を施し、平面の他の部分は砥磨を加え、側面は敲打調整を行っている。全体的に器面調整は丁寧である。最大長7.7センチ、最大幅6.5センチ、最大厚4.7センチである。重量380g。砂岩製。第Ⅴ層の出土。

## b) 石 皿

第Ⅳ層より2点（第8図1・2）得られたが、いずれも破損品である。

第8図1は比較的大きな石皿の中央部の破片で、磨面はなだらかな凹状を呈し、上部には縁辺の一部が残る。底面は若干調整されているが、使用痕は認められない。現存部の最大長15.7センチ、厚さの最大は5.3センチで最小は3.5センチである。重量は1500g。角閃玢岩製。第Ⅳ層の出土。

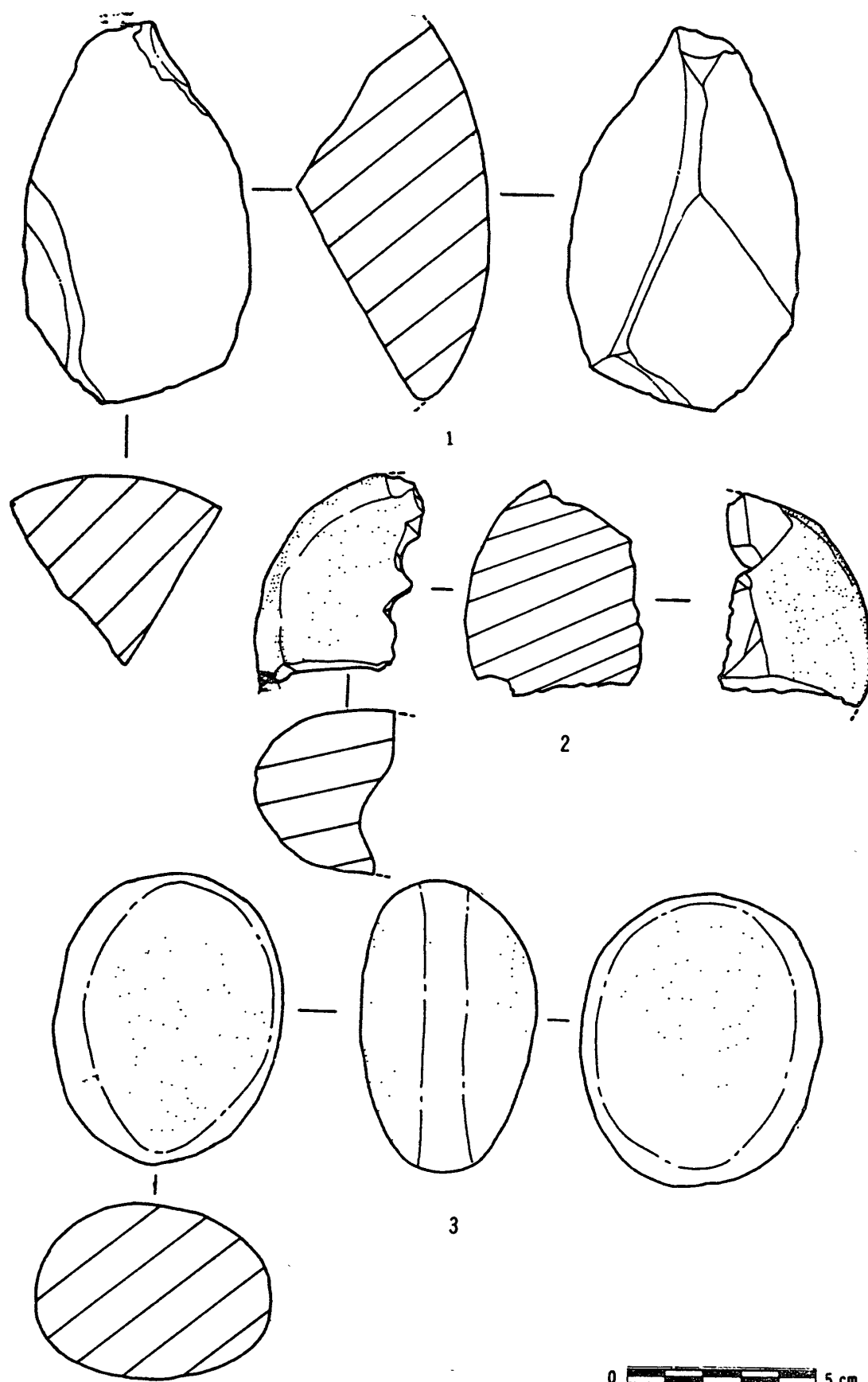
同図2は大破した石器の破片であるが、平坦な磨面が認められることから、石皿の破片とみてよいかと思う。現存部の最大長は13センチ、最大幅は8.5センチ、最大厚は2.7センチである。重量は360gで砂岩製。第Ⅳ層の出土。

## c) 石 斧

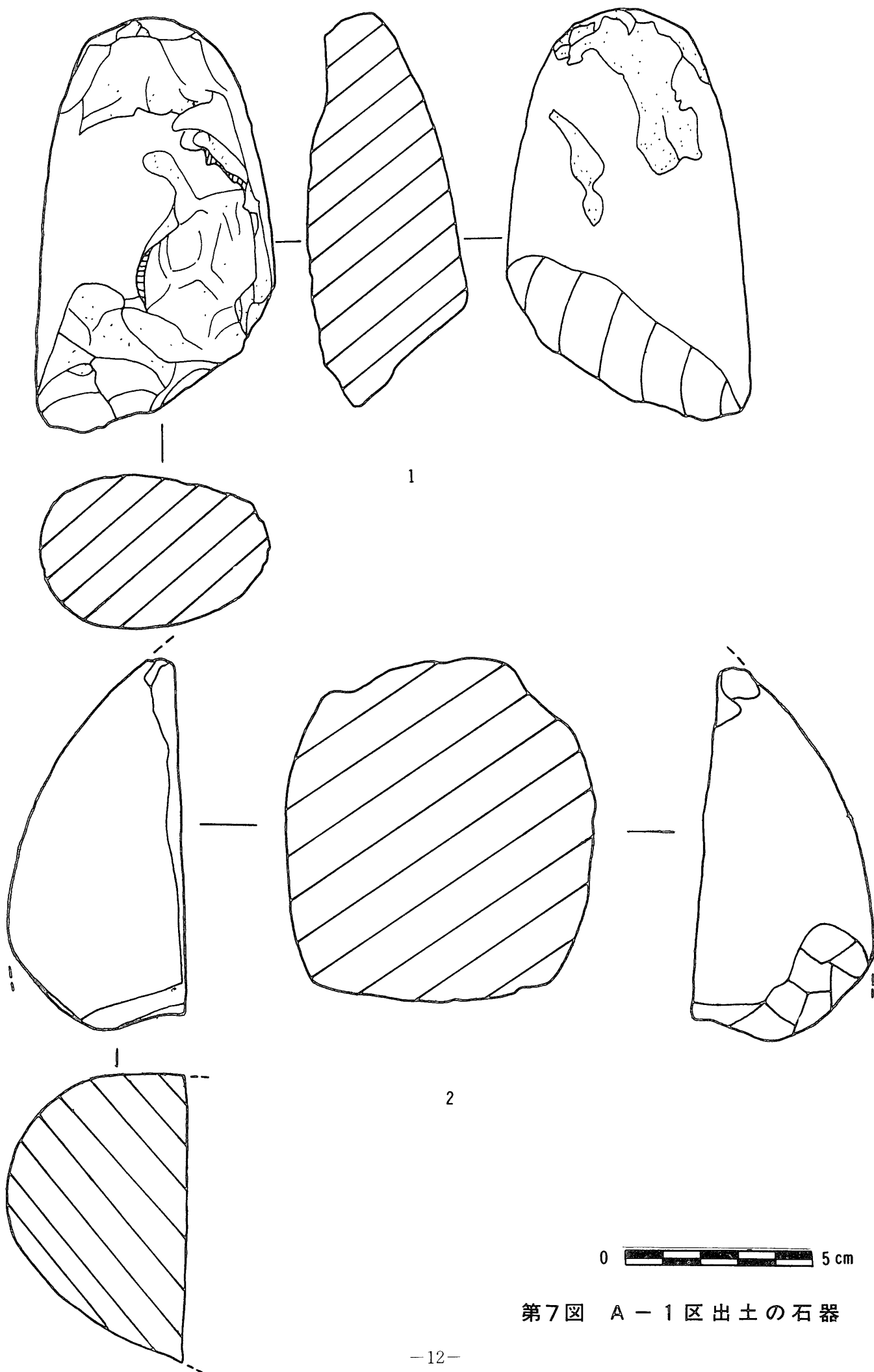
石斧は第Ⅳ層より1点（第7図1）得られた。頭部の破片で研磨は認められず、敲打調整によるものだが、器面は若干破損している。平面形は刃部から頭部へ細くなるタイプで、横断面は扁平な楕円形を呈す。以上の特徴から乳棒状石斧の頭部とみられる。現存部の最大長10.5センチ、最大幅6.3センチ、最大厚は4.1センチである。重量は400gで輝緑岩製。

## B 骨・角・牙製品

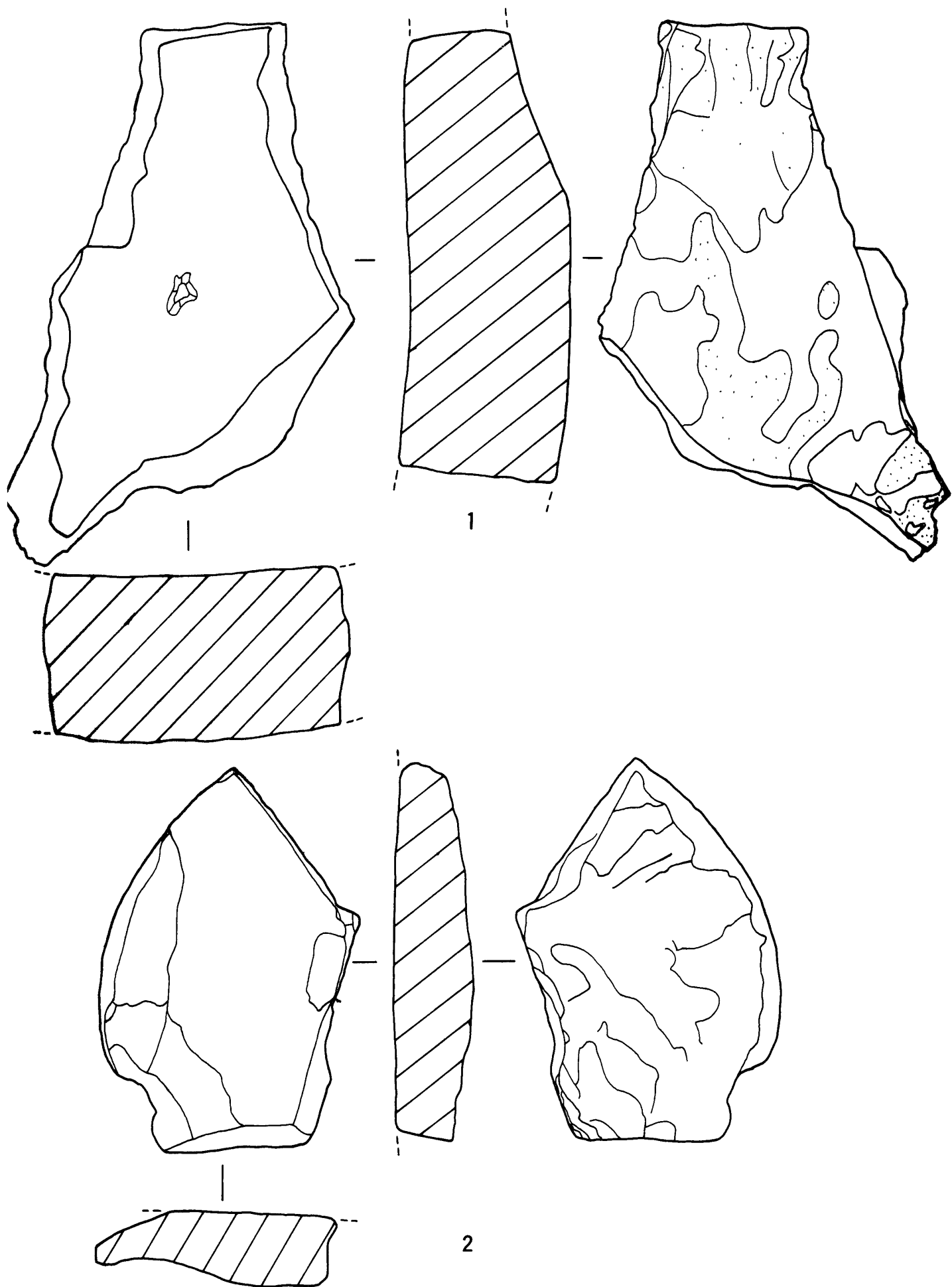
本区では9点の骨牙製品が得られ、実用品と装飾品に大別できるが、用途不明のものも若干ある。以下、実用品、装飾品、用途不明の順に記述する。



第6図 A - 1 区出土の石器



第7図 A-1区出土の石器



第8図 A-1区出土の石器

0 5cm

第2表 A-1区における骨・角・牙製品の  
出土状況

層	種類	装飾品					用途 不明	計
	実用品	弓 筈 状 角 製 品	脊 椎 骨 製 品	有 孔 製 品 (カメの下腹板骨)	牙 製 腕 輪	鳥 骨 加 工 品		
I								
II								
III								
IV				1	1			2
V	1	2				1	2	6
VI								
VII							1	1
崩								
計	1	2	1	1	1	1	3	9

#### a) 実用品

##### 弓筈状角製品

第9図1は鹿角枝を利用した弓筈状の角製品で、下部は一部破損しているが、ほぼ全形の窺える資料である。長さ2.5センチ、全面研磨が施され、底面には径5.4ミリの孔が上方へ穿たれている。上面破損のため、この孔が貫通するかどうかは不明である。また、底面に近い側面の一部にも径4.4ミリの孔を外側から内面へ斜め下方に向けて穿っている。器面には沈線が3条底面に平行に刻まれているが、浅く不明瞭で、部分的に沈線を省略した箇所も見受けられる。側面観は底面で径が大きく、上方へすばまり、上端で若干外へ開く器形をとる。利用された鹿の種類は不明である。最大長2.5センチ、上面の径1.04センチ、底面の径1.14センチ、中央部の最小径

0.96センチ。重量2.17g。第V層の出土。

本標品を金子浩昌氏に見ていただいたところ、弓筈状角器に類するものであろうとのこと教示を得た。

#### b) 装飾品

##### ①脊椎骨製品

第9図2・3の2点はサメの脊椎骨を利用した製品で、臼状凹部の中央にそれぞれ1孔を穿ったものである。2の側面中央部には溝を1条圍繞させるが、製作は雑で、幅や深さはまちまちである。2は直径2.1センチ、高さ0.95センチ、孔径4ミリ、重量2.55g、第V層の出土。3は直径1.9センチ、高さ0.8センチ、孔径2ミリ、重量1.87g。第V層の出土。

##### ②有孔製品（カメの下腹板骨）

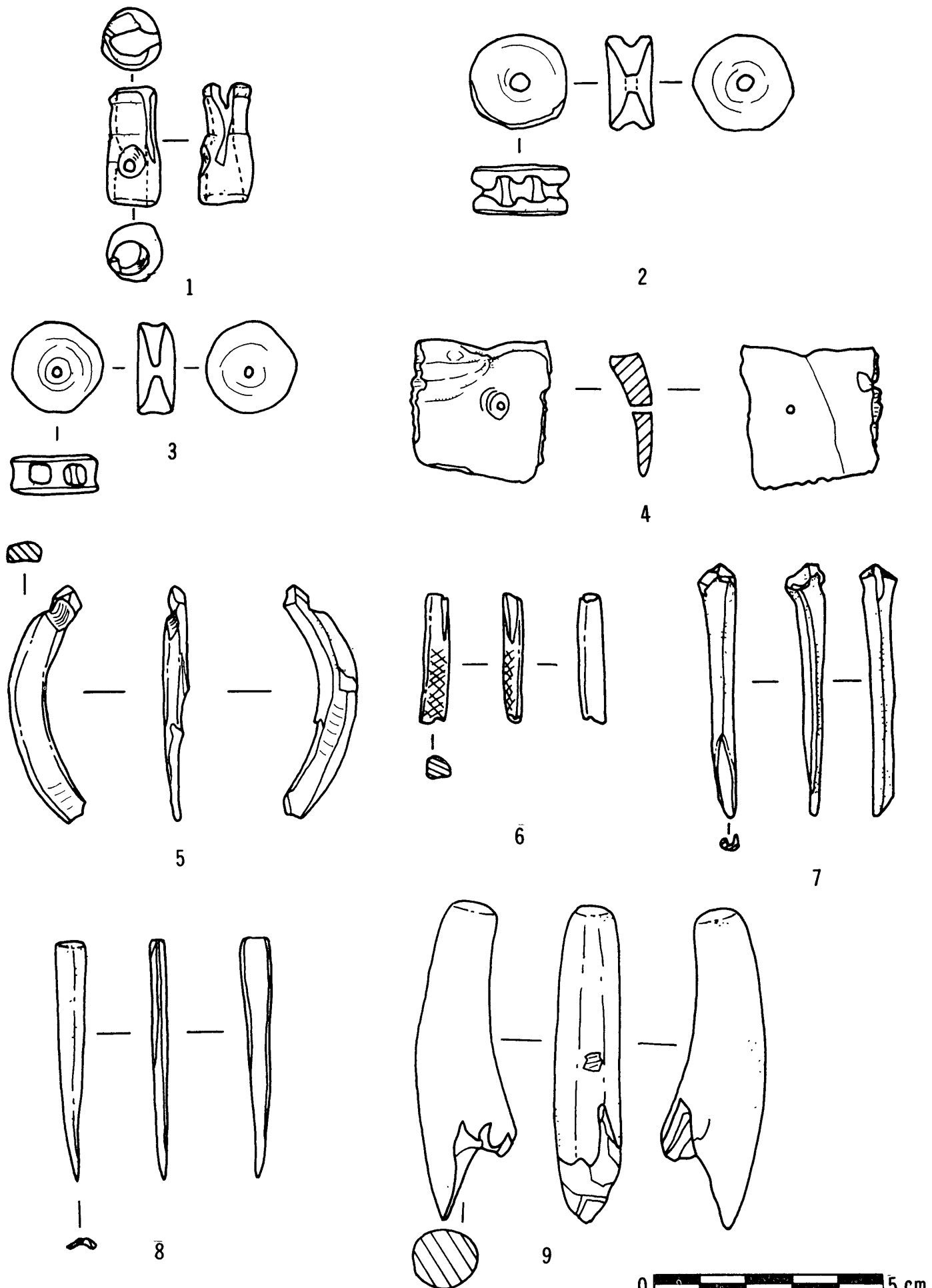
第9図4は陸カメの下腹板骨を利用した有孔製品で、1.6ミリの小孔を表面から内面へ向けて穿っている。本標品の3辺は縫合部で割れており、現存形は正方形に近い。全形は不明だが、装身具の一種かと考えられる。現存長3センチ、現存幅2.8センチ、重量2.2g。第IV層の出土。

##### ③牙製腕輪

第9図5はイノシシの牙を利用した製品で金子浩昌氏によると雄の左側牙齒が使われている。本標品の下端部は欠損しているが、上端の一面には袂りを設けている。最大長4.9センチ、最大幅0.8センチ、重量1.55g。第IV層の出土。

##### ④鳥骨加工品

第9図6は鳥骨（海鳥の橈骨）の平らな面に細沈線を格子状に浅く刻むもので、他の面



第9図 A-1区出土の骨・角・牙製品

は施文の対象となっていない。格子文は若干摩耗している。本標品は上下両端を欠き、したがって全形は不明。装身具か呪具の一種であろう。現存長 2.7センチ、幅0.53センチ、重量 0.3g。第Ⅴ層の出土。

### c) 用途不明

第9図7も鳥骨（海鳥か水なぎ鳥）の右側尺骨を利用したもので、先端部が僅かに破損しているものの完形に近い資料である。遠位端の一面が斜めに切断され、切断面は研磨され滑面を呈する。刺突具か何か実用的機能を有するものであろう。最大長5.36センチ、最大厚0.76センチ、重量0.56g、第Ⅴ層の出土

同図8も鳥骨の上腕骨を利用したもので、著しく破損している。上端の切断面が磨かれ滑かになっている以外、加工面は認められない。下端は尖っているが、破損によるもので

使用痕は見受けられない。本資料から用途の推察は困難である。最大長5.12センチ、最大幅0.62センチ、重量0.36g、第Ⅴ層の出土。

同図9は鹿角枝を利用したもので、下端部は破損しているが、全面磨かれ、先端は丸味をおび若干滑沢を有す。身の部分は虫食い状に大部傷んでいるが、手慣れ様の滑面もみられる。沈線などの加工痕はみられない。用途は不明。最大長7センチ、最大厚 1.9センチ重量12.85 g。第Ⅶ層の出土。

## C 貝 製 品

本区では貝製品が48点得られた。これらは実用品と装飾品に大別されるが、他に用途不明のものもある。出土状況の詳細は第3表の通りである。以下、実用具から述べることにする。

第3表 A—1区における貝製品の出土状況

種 類  層	実用品		装 飾 品								用途 不明	計
	貝 匙	タ カ ラ ガ イ 製 品	貝 輪	イ モ ガ イ 製 ビ ード	イ モ ガ イ 有 孔 製 品	タ ケ ノ コ ガ イ 製 品	チ ヨ ウ セ ン フ デ ガ イ 品	ク 有 孔 製 品	シ ヤ コ ガ イ 有 孔 製 品	そ の 他 の 有 孔 製 品	短 冊 形 製 品	
I												
II												
III												
IV	1		1	2	3							7
V	4		2	4	1	1	1	1	1			15
VI												
VII		7		7								14
崩	2	2	1	4	1					1	1	12
計	7	9	4	17	5	1	1	1	1	1	1	48



## a) 実用品

### ①貝匙

第Ⅳ・Ⅴ層より5点得られた。素材の貝類はヤコウガイ、クモガイ等で、前者を用いるものは比較的大形の貝匙、後者は小形のものが多い。

第10図1はヤコウガイの体層部を利用するもので、今回の採集品の中では、最大のものである。全体的に脆くなっている、周縁部など損傷が著しい。表面は加工の痕跡はなく自然面のままである。未成品かさもなければ、きわめて粗造の製品である。残存部は最大長13.4センチ、最大幅6.7センチ、重量は86.24gである。第Ⅴ層下部の出土。

同図2も同図1と同じくヤコウガイの体層部を素材とするもので、破損品である。本資料の右縁は切断後、若干の砥磨を加えている左辺は破損し、原形をとどめない。残存部は最大長10.6センチ、最大幅6.1センチ、平面観は楕円状を呈し、重量は64.32gを測る。第Ⅴ層40～60センチレベルの出土。

同図3はクモガイの体層を利用したもので前溝部の外唇上面に研磨が認められ、滑面となり、逆の内唇側にも一部磨面が認められる。周縁部は破損のため原形はつかめないが、体層部は全体的に摩耗し乳白色を呈する。匙の一種かと考えられる。最大幅は1.4センチで重量は27.03g、第Ⅴ層20～40センチレベルの出土。

同図4もクモガイを素材とする匙状の製品である。完形で、平面形は三角形というより鋸形を呈し、なかごに当るような小さなつまみが底部についている。粗造で周縁部は軽い波状を呈する。全面摩耗し、周縁部も丸味をおびている。最大長5.9センチ、最大幅3.84センチ、重量16.34gで、第Ⅳ層30～40センチレベルの出土。

第11図1もクモガイの体層部を用いた匙状のもので、周縁加工部は摩耗して滑らかになっているが、加工は粗く凹凸が激しい。周縁部の摩耗が使用によるものであれば、粗造の部類に属する。最大長5.9センチ、最大幅3.94センチ、重量27.03gで第Ⅴ層20～40センチレベルの出土である。類例は津堅島キガ浜貝塚出土のもの（註1）があげられる。

同図2・3はヤコウガイ製匙の可能性のあるものである。2は殻口部を利用するもので大きく破損しているが両側縁は砥磨が加えられ、一応滑らかになっている。外面は自然面のままであるが、側縁にそって一部研磨の加えられた箇所もある。殻口部も自然面のままで加工痕は認められないことから、粗造の貝匙とみてよかろう。3も大部破損しているが底部の2側縁は砥磨が施されている。外面は自然面のままであるから、これも粗製品とみてよいだろう。残存部の重量は同図2が33.38g、同図3は34.58gでいずれも崩壊面からの出土品である。

### ②タカラガイ製品

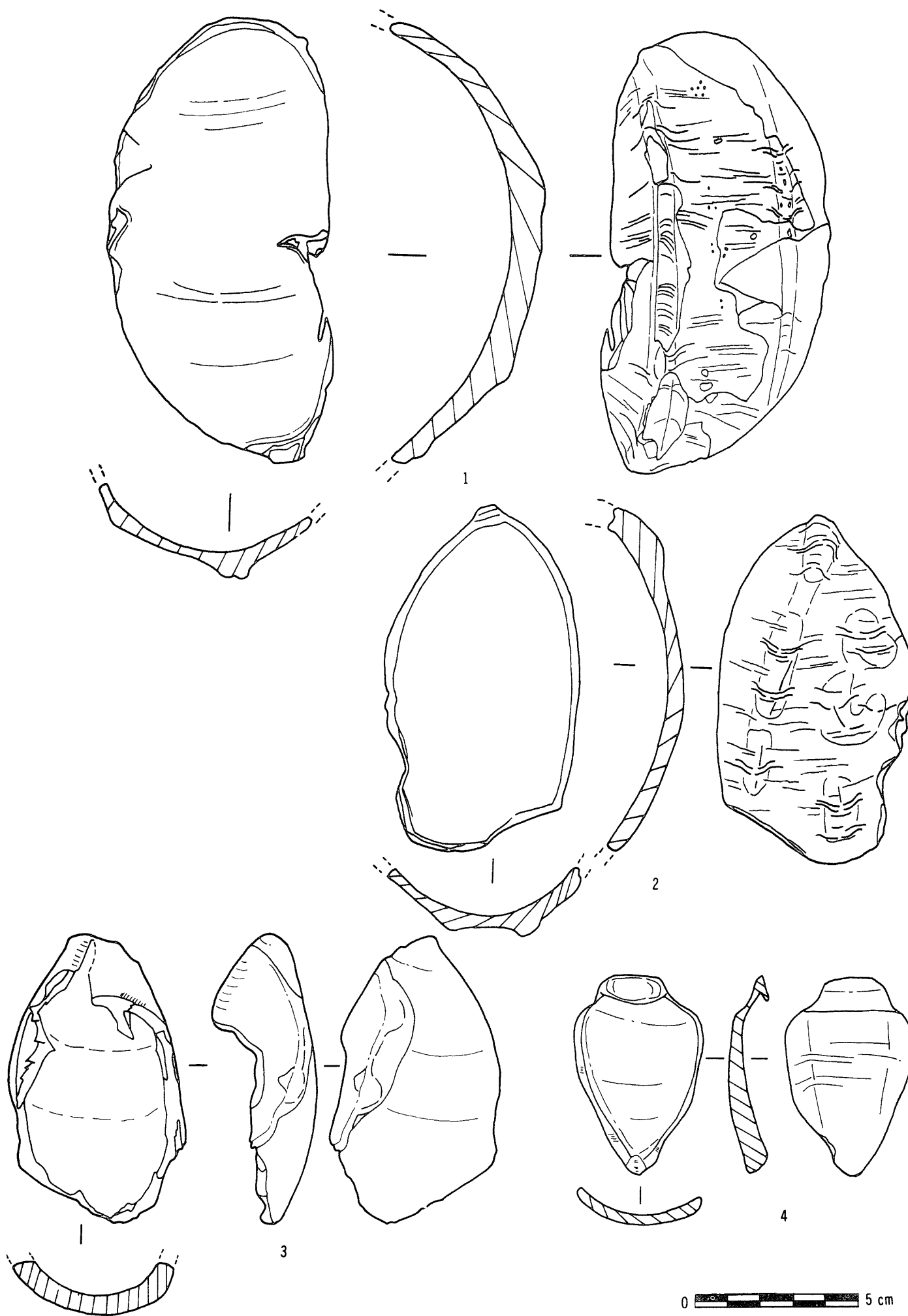
第11図4は崩壊土から得られたもので、タカラガイの背面中央部を除去したものである。孔の周縁部は摩耗し、打欠痕は認められない用途としては網の錘を考えている。孔の大きさは2.2×1.5センチで、殻の最大長2.94センチ、最大幅2.35センチで重量は5.39gである。同種の資料が本区で他に8点（第Ⅶ層から7点、崩壊面から1点）得られている。

## b) 装飾品

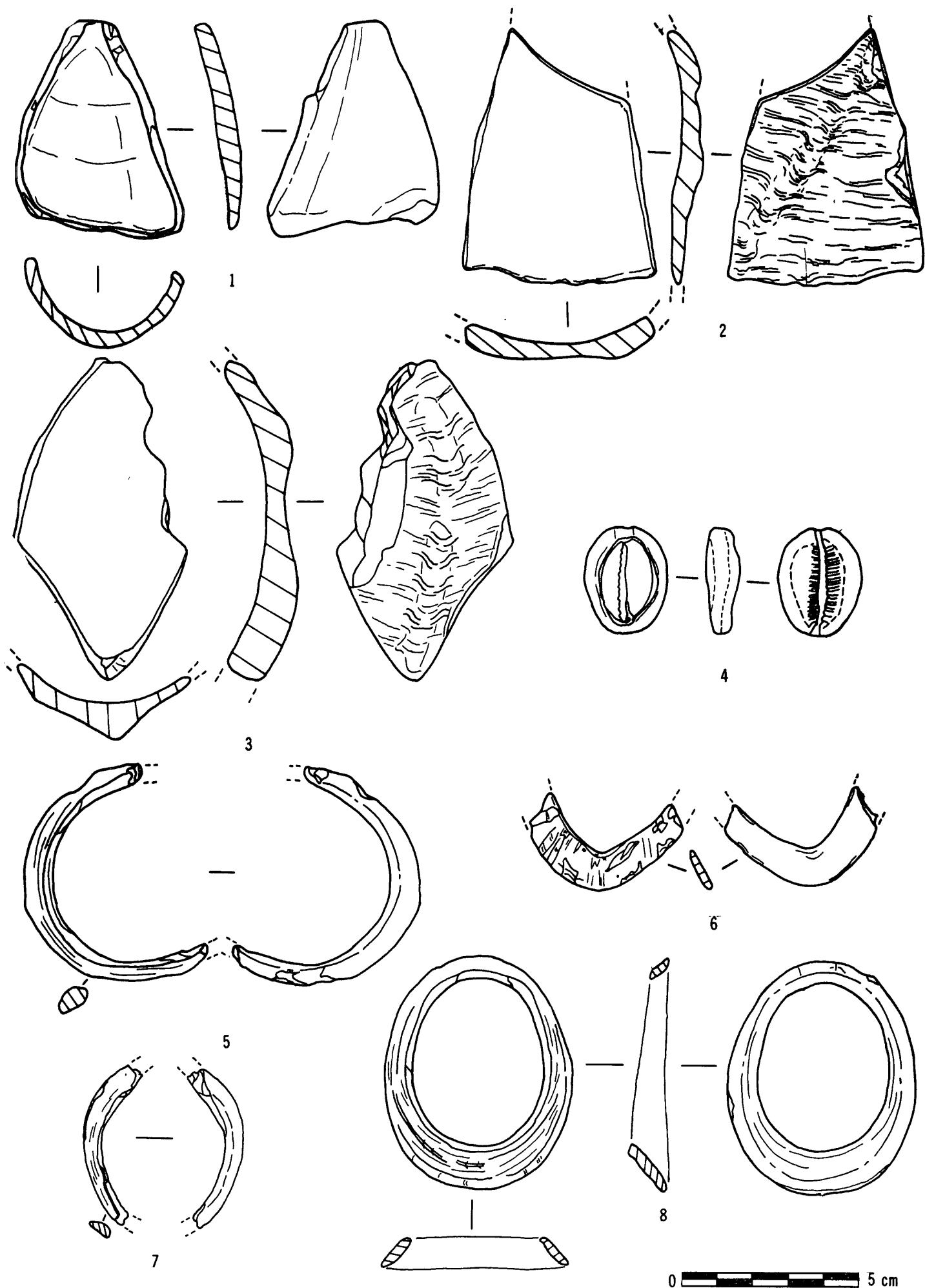
### ①貝輪

4点得られ、素材となった貝はオオベッコウガサとオオツタノハの2種類である。

第11図5・7・8はオオベッコウガサに属



第10図 A - 1 区出土の貝製品



第11図 A - 1 区出土の貝製品

するもので、5・8の2点は輪脈にそって割れているために、人為的か自然破碎によるものか判断がつかねる。7は内縁に沿って敲打痕が認められるものの、研磨は施されておらず未成品とみてよからう。5は幅0.7センチで重量5.19g、第Ⅳ層下部の出土。7は幅0.6センチ、重量1.6g、第Ⅴ層40～60センチレベルの出土。8は孔の長径が4.7センチ短径が3.7センチで幅1センチ、重量9.15g第Ⅴ層40～60センチレベルの出土。

同図6はオオツタノハ製の貝輪で破損品である。内縁および表面に比較的丁寧な研磨が施されているが、表面にはまだ自然の凹部も残っている。外縁部の研磨は徹底せず、まだ鋭さが残る。残存部は全体の $\frac{1}{4}$ 程度で、幅は

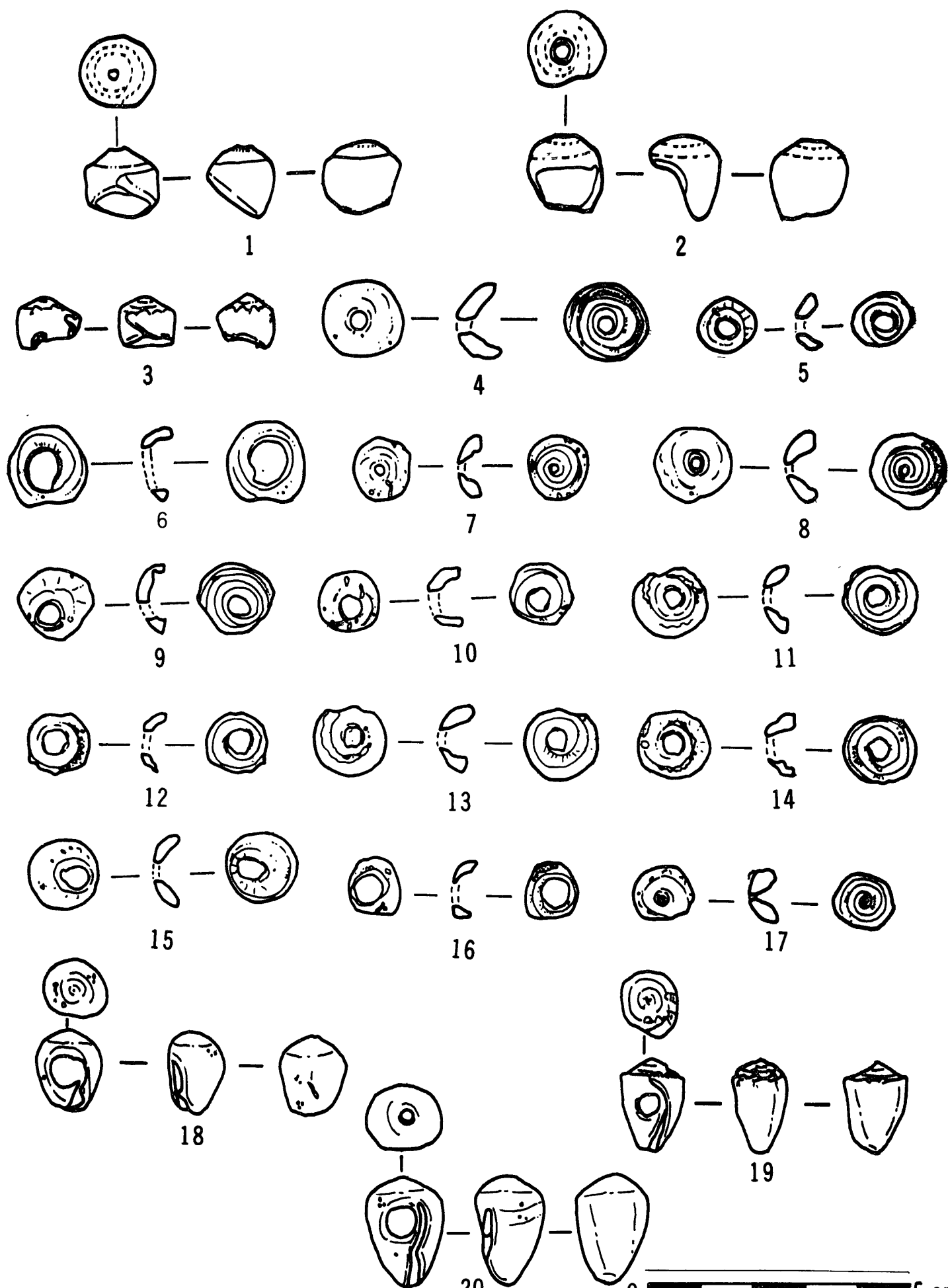
約1センチ、重量は3.23gである。崩壊土からの出土品。

## ②イモガイ製ビード

第12図1～17に示す資料は同図3を除き、巻貝の殻頂部に孔を穿つものであるが、孔径もまちまちで、螺頭部だけのものから体層部にも施すものなど大きさも区々である。内外面および周縁部もすべて摩耗し、孔も人為的か否か判別困難なものが多い。同図3は体層下部に1孔を穿つもので、孔径2.6ミリ、外面から内面へ向かって穿っている。本標品は孔の上半部で破損している。孔周縁に研磨はみられず粗孔である。

第4表 イモガイ製ビードの法量および観察

番号	層 (cm)	法 量				観 察
		高 さ (cm)	殻 径 (cm)	孔 径 (cm)	重 量 (g)	
1	崩壊面	1.3	1.4	0.16	1.93	全体的に摩耗。
2	〃	1.42	1.36	0.32	1.45	〃
3	Ⅳ層20-30	0.95	1.16	0.26	1.1	体層部に1孔を穿つ。
4	50-60	0.72	1.44	0.32	1.47	全体的に摩耗。
5	Ⅶ層10-20	0.46	1.04	0.34	0.46	〃
6	Ⅴ層0-10	0.62	1.45	0.67	1.04	〃
7	Ⅴ 層	0.4	1.1	0.2	0.41	〃
8	50-60	0.62	1.4	0.2	1.35	〃
9	Ⅴ 層	0.74	1.32	0.4	0.8	〃
10	Ⅶ層10-20	0.54	1.12	0.46	0.67	〃
11	〃	0.62	1.33	0.34	0.65	〃
12	〃	0.45	1.14	0.5	0.49	〃
13	〃	0.6	1.33	0.4	0.73	〃
14	〃	0.6	1.2	0.4	0.77	〃
15	〃	0.5	1.33	0.4	0.65	〃
16	崩壊面	0.52	1.0	0.5	0.3	殻頂部の周縁に研磨が認められる。
17	〃	0.46	1.04	0.05	0.53	全体的に摩耗。



第12図 A - 1 区出土の貝製品

### ③イモガイ製品

第Ⅳ・Ⅴ層および崩壊面より5点（第12図18～20、第13図1・2）得られた。これらは体層部のみに孔を有するものと殻頂部および体層部の両面に孔を有するものの2種に分けられ、前者は4点（第12図18・19、第13図1・2）、後者は1点（第12図20）である。以下各製品について略述する。

第12図18は体層部に孔を穿つもので、孔の周辺および外唇部、前溝部に研磨を加えている。体層内部を除去し、空洞化する。孔は円形に近い。崩壊面の出土。

同図19は小形のイモガイを利用したもので体層部に径0.44センチの孔を穿っている。孔はまず打割によって整形し、次に研磨を加えている。研磨は隣接する外唇部にもおよんでいる。第Ⅳ層30～40センチレベルの出土。

第13図1・2はやや大きめのイモガイを利用したもので、1は破損が著しく、加工の状況がつかめない。打割のまま放置されている。2は方形に切りとっているが、研磨は加えられておらず、未製品とみるべきか。いずれも第Ⅳ層60～70センチレベル出土。

第12図20はイモガイの殻頂部と体層部の2ヵ所に孔を穿つもので、孔の周辺および隣接の外唇部、それから前溝部にも研磨が加えられている。また殻頂部も研磨が施され、全体的に丸味をおびて滑らかである。第Ⅴ層の出土。

第5表 イモガイ製品の法量

図板 番号	孔 径		殻 高 (cm)	殻 径 (cm)	重 量 (g)	層
	殻頂部 (cm)	体層部 (cm)				
第12図18		0.6×0.7	1.6	1.2	1.48	崩壊面
〃 19		0.44	1.8	1.22	1.76	第Ⅳ層
〃 20	0.2	0.6×0.5	2.1	1.42	3.0	第Ⅴ層
第13図1		不明	3.8	1.9	7.05	第Ⅳ層
〃 2		1×1(方形)	4.5	2.32	15.73	〃

### ④タケノコガイ製品

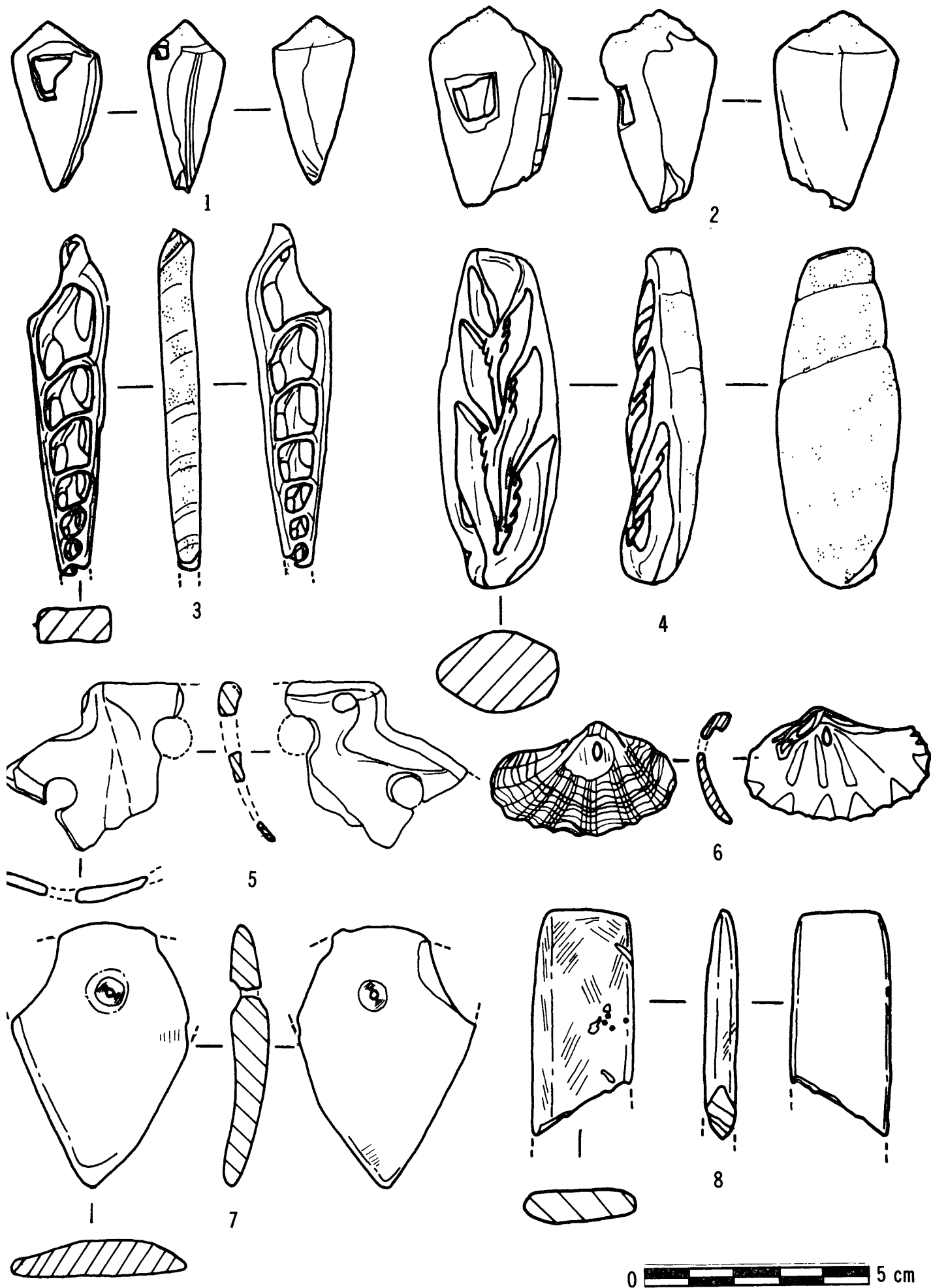
第13図3はベニタケガイを両面から研磨して扁平状に整形したもので、前溝部が平面の中央部にくる。両平面は平行せず、側面で見ると、体層部が厚く、殻頂部へ厚さを減ずる。両面とも研磨は入念で、手触りは滑らかである。殻頂部を欠くが、ほぼ完形。用途としては装身具を考えている。類例は具志川島遺跡群東地点（註2）でも知られている。重量は6.28gで、殻高7.4センチ、厚さ0.8センチである。第Ⅴ層40～60センチレベルの出土。

### ⑤チョウセンフデガイ製品

第13図4はチョウセンフデガイの殻口部を含む3体層を利用したもので、前溝を上面中央にすえて、体層部を左右に傾斜するように研磨する。したがって、横断面は三角形に近い形となる。加工面は周縁部も含め滑面となっている。完形品である。類例はA-3・B-5区でも出土しているが、いずれも加工面は平坦で、本例と形状は若干異っている。用途は同図3と同じく装飾品を考えている。重量24.87g、殻高は7.4センチで第Ⅴ層69センチレベルの出土である。なお本資料は土器の項で述べる復元を試みた嘉徳Ⅱ式土器の破片（第25図）と重なって出土しており、時期の比定できるものである。

### ⑥クロチョウガイ製品

第13図5はクロチョウガイの外殻を除去し孔を穿ったもので、破損品ではあるが2孔認められる。孔は2面から穿っており、主加工面は内面である。孔（径0.75センチ）は円形の精巧なもので、装身具の一種であろう。両面とも真珠光沢を有し、きれいな製品であったと思われる。残存部の重量は5.02gである。



第13図 A - 1 区出土の貝製品

第Ⅴ層の出土。

#### ⑦シャコガイ製品

第13図6は小形のヒメジャコの殻頂部付近に長径0.4センチ、短径0.2センチの粗孔を穿つもので、孔は敲打でなく、研磨によるもので、類例の少い穿孔法を用いている。研磨は殻頂部と腹縁を結ぶ方向、つまり縦位に施されている。孔は放射肋と肋間溝にまたがっている。小形の貝を用いていることおよび穿孔が研磨法によることなどを勘案すると、錘などの実用具というよりペンダントなどの装飾品の可能性が強い。殻高0.7センチ、重量3.19gで、第Ⅴ層20～40センチレベルの出土である。

#### ⑧その他の有孔製品

第13図7は一部欠損しているが、平面形は二等辺三角形を呈していたかと思われる。欠損部は底辺の両端である。長さは約5.7センチ、底辺に近い中央部に両面から小孔を穿つ孔は外面において0.7センチ、中央部にお

いて0.2センチである。両面とも研磨が施されており、器面には横位の擦痕が見受けられる。尖端や両側辺に刃部は形成されていないしたがって、利器というより装飾品の一種であろう。肉厚の貝を使用している。貝種は不明。崩壊土の出土である。

#### c) 用途不明

##### 短冊形製品

第13図8は長方形の製品で、半欠品である横断面は台形となり、研磨の方向もその形状とほぼ一致する。つまり、裏面と表面の両平面は主に縦方向、周縁の傾斜部は斜め方向である。いずれも研磨は入念で、特に裏面は光沢を有する。貝種は不明だが、シャコガイなどの肉厚の貝を利用している。用途は不明。現重量13.05g。最大幅2.1センチ。第Ⅴ層の出土。

## D 土 器

1982年および翌83年の2次にわたる調査で総数1733点の土器片を得た。それらは在地土器と九州からの搬入品とみられる土器からなるが、後者は轟式系が1点得られただけである。在地土器は13型式に分類され、うち神野A式、神野B式、神野C式、神野D式、神野

E式は新型式である。なお、本区では松山式および面縄西洞式は得られておらず、したがって11型式について記述する。

なお、胎土混入物のうち金雲母としたものは、黒雲母の可能性もあり、判別が困難ということで、すべて「？」印を付した。



第6表 A-1区における土器各型式の出土状況

形式別 層	室川下層式	神野A式	神野B式	面縄前庭様式	面縄東洞式	嘉徳Ⅰ式A	嘉徳Ⅰ式B	嘉徳Ⅱ式	神野D式	神野E式	伊波式	伊波不明	有文破片	無文口縁a	無文口縁b	無文胴部	底部	壺形土器	甗式	計
I								1					2			28				31
II				1	1			1					5	1		53	2			64
III																				
IV				19	8	8	2	15		7	5	9	45	3	8	571	18	1		719
V			6	40	9	19		23	4	4	3	3	60	5	5	667	30	6		884
VI																				
VII	12	4	2																1	19
崩			2				1		1		2			1			9			16
計	12	4	10	60	18	27	3	40	5	11	10	12	112	10	13	1319	59	7	1	1733

#### a) 室川下層式土器

本区では、第Ⅶ層より有文の胴部破片が4点、無文の胴部破片が8点の計12点得られた。総て小破片で、全形を窺えるものはない。本区は先述のように完掘することができず、第Ⅶ層以下の状況を知り得ないが、隣接の発掘区における層相および各型式の出土状況から、本区においても室川下層式が最古型式であろうと推察される。

#### 器種・器形

完形の資料が得られなかったため、詳細は提示できないが、本遺跡各区における類例を参考にすると、直口かあるいは口縁がわずかに外反する深鉢形で、尖底か丸底が想定される。

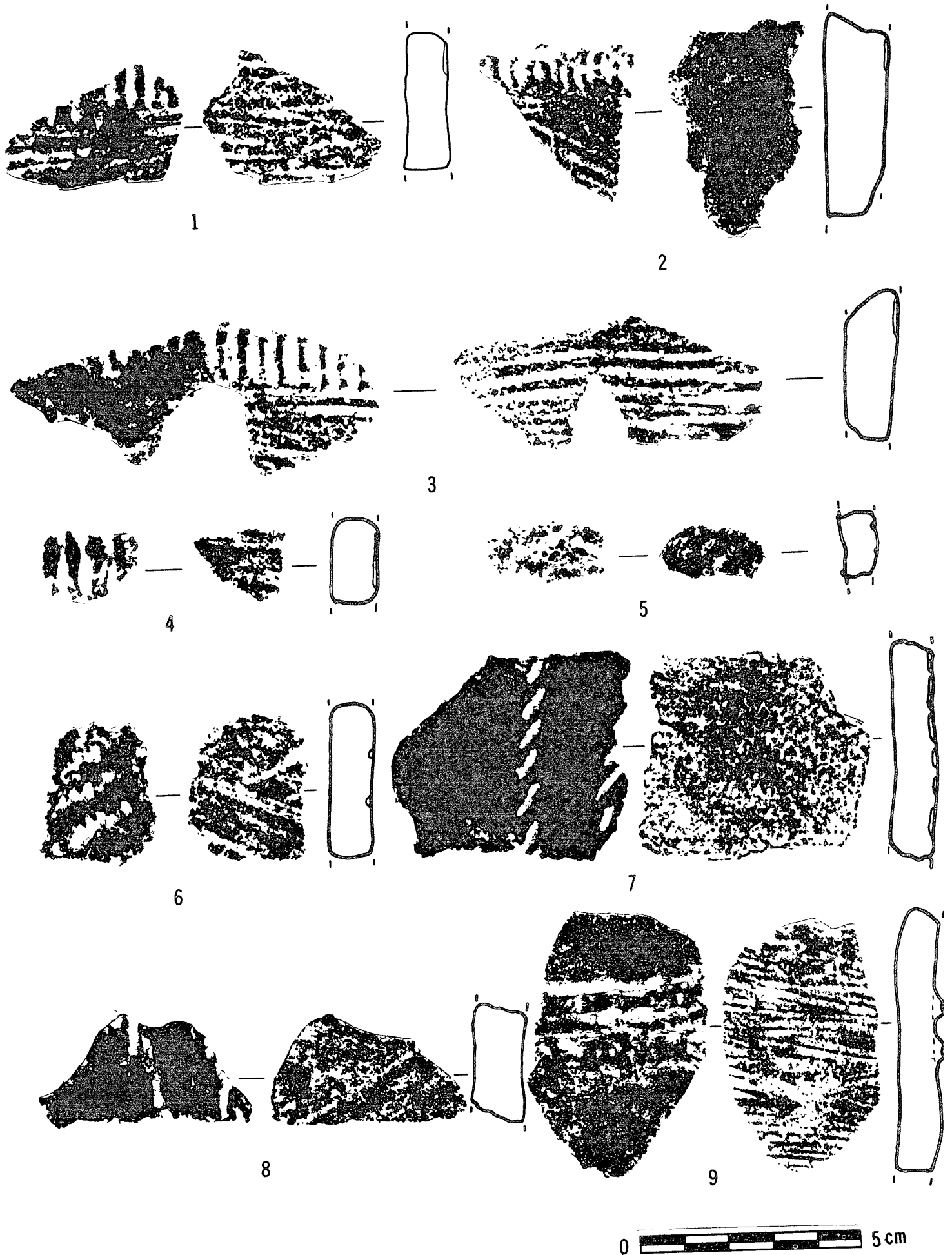
器厚は1センチ前後で、最も厚いものが第14図8の1.06センチ、最も薄いものは同図5の0.92センチである。

胎土に含まれる混入物は石英が最も多く、他に長石、金雲母?等が見受けられる。これらの土器は混入物の組成から次の2種にわけられる。すなわち、石英を多量に含み、長石金雲母?を少量混入するもの（2点、同図5・6）、石英のほか金雲母?を少量含むもの（2点、同図7・8）である。混入物の大きさは1ミリ前後の肉眼でも観察可能なものがほとんどで、2ミリ以上のものは極めて稀である。器色は表裏面とも茶褐色のもの1点（同図5）、表面が暗褐色で裏面が茶褐色のもの2点（同図6・7）、表面が茶褐色で裏面が暗褐色のもの1点（同図8）となっており、暗褐色の部分は火熱によるものであろう。

焼成は悪くて脆いものと良好のもの2種類認められ、出土量はほぼ半々である。

#### 器面調整

器面は条痕で調整した後、撫でによって仕



第14図 A-1区出土の神野A式、室川下層式、轟式土器

上げるのが通例で、条痕は一般に浅く、不明瞭である。条痕は裏面に残るケースが多い。同図5・8は斜め方向、同図7は横方向に施されているが、いずれも不明瞭である。同図6は篋状工具による過擦痕とでもいうべきもので、凹線内に擦痕が多数見受けられる。表面は撫でが徹底して、条痕が完全に消えてしまっている。しかし、同図8は一応表面を撫でているものの、縦方向の条痕が観察できる。

### 文様

施文部位については本区の資料でそれを明示できるものはないが、他の発掘区の資料を参考にすると口縁内面、口唇部および外面の3ヵ所である。外面の文様は胴下半部に及ぶものと思われる。

文様は連点文と刻文の2種類に分けられる。連点文を有するものは同図5と6の2点である。連点文は弧状を呈し、二枚貝の腹縁部を押圧したように思われるが、文様が不鮮明で確言はできない。同図5は連点文が3条認められ、羽状に展開していくようにも見受けられる。同図6は連点文が約5ミリの間隔で上下方向に4つ認められる。連点文の幅は約2センチである。

刻文を有するものは同図7・8の2点で、いずれも単篋工具を用いて施文する。同図7は左下りの刻文（長さ7ミリ前後）が縦位に2条認められ、施文は深く鮮明である。縦位刻文の左右の間隔は1.3センチで2条を1組とする可能性もある。同図8は7と同種の単篋により縦位の刻文（長さ8ミリ前後）を密に斜行させるもので、斜行文の左右の間隔は1～1.2センチである。刻文の左方にはやや広い空間が形成されており、そのことからこの刻文も対をなすものかと思われる。また

同図8の刻文も力強く描かれ、文様の下縁が盛り上がっていることから施文は上から下の方向で刻まれたことが分る。なお、斜行文全体の施文順序も上から下の方向である。

### b) 神野A式土器

新型式の土器で、本区では、有文の胴部破片が第Ⅶ層で4点検出されているが、小破片のため全形の窺えるものはない。室川下層式と類似点が多く、室川下層式の系統に属するものであるが、文様構成において異なることから新型式として把握されるものである。また時期的には第Ⅶ層において室川下層式と一部共伴関係にあることから室川下層式の終末期に比定できるかと考える。

### 器種・器形

完形の資料が得られておらず、詳細は提示できないが、他の発掘区における資料を参考にすると、ほぼ直口の深鉢形で底部は尖底になるものと思われる。

器厚は1センチ前後と一般に厚く、最大が第14図2の1.34センチ、最小は同図1と3の0.9センチである。

胎土に含まれる混入物は室川下層式と同じく石英を主体とし、そのほか長石、角閃石、岩片等を含む。混入量は室川下層式に比べて少ない。

器色は茶褐色を基調とするものが3点（同図1・3・4）で、他の1点はやや黄味をおびた色調（同図2）を有する。前者の3点の裏面は煤けて黒ずんでいる。

焼成はいずれも比較的良好である。

### 器面調整

室川下層式のように、二枚貝の腹縁部を用いて条痕を施すが、室川下層式に比して施文

は深く、したがって明瞭である。条痕は両面に施されるものの、施文部では撫で消されることが普通である。条痕は表裏面とも横方向のものが多い。しかし、同図2の表面のように斜め方向のものも見受けられる。また、同図2と4の裏面はナデが他の資料より徹底していて、条痕はかなり消されている。

### 文様

施文部位については本区の資料でそれを明示できるものはないが、B—3区の例からすると、口縁の内外面と口唇部が施文の対象となっている。胴部についてはどの範囲まで施文が行われたか今のところ不明である。

施文具は平坦な篋状工具を用いて施文（同図1・3・4）するが、同図2は半截竹管状工具を押圧したようにも見受けられる。後者の場合、文様帯の部分もかなり撫でられており、判別は困難である。

文様構図は縦方向の沈線を基調とするという点で4例とも共通するが、文様要素についてみると直線と弧文の2種に分つことができる。同図1・3・4は前者で、同図2は後者である。いずれも施文は密である。

同図1は直線を用いる例で、文様帯の下端を含む資料である。施文は深く、文様は鮮明である。同図3も直線を似て構成する例で、1と同じく文様帯の下端を含む資料である。施文は良好で明瞭である。同図4も直線を用いる例であるが、破片が小さく施文部位の判別は困難である。しかし、施文は深く鮮明である。同図2は前述のように半截竹管状工具を用いたと推察され、文様は弧状を呈する。本標品も文様帯の下端を含む資料である。

近似の資料は、渡嘉敷島の船越原遺跡（註3）でも採集されている。本区の資料が小破片のため、全体的な比較は困難だが、残存部

の文様と比較すると、船越原のものが弧文を基調とするのに対し、本区のは直線を基調とする点で異っている。しかし、同図2は弧文を用いており、巨視的にみれば同類に属するものかと考えられる。

### c) 神野B式土器

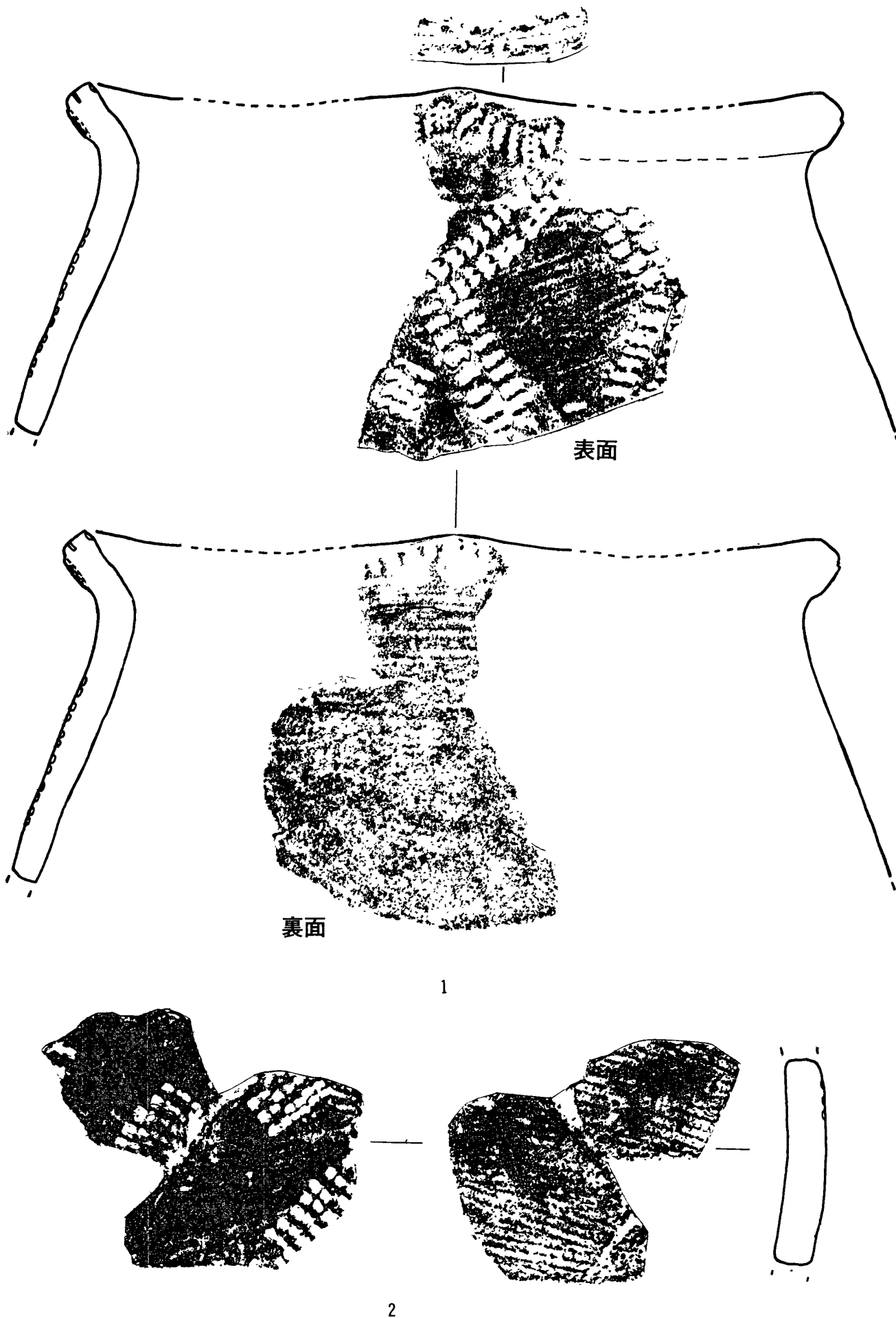
新型式の土器で、Bトレンチでは得られておらず、Aトレンチで検出されたが、同トレンチでもA—1および2区に限られ、A—3区では出土していない。A—1区での出土状況をみると、第V層より6点（口縁部1点有文胴部5点）、第Ⅶ層より2点（口縁部1点有文胴部1点）検出されている。さらに側壁の崩壊土からも2点（有文胴部）得られ、計10点の出土となっている。

### 器種・器形

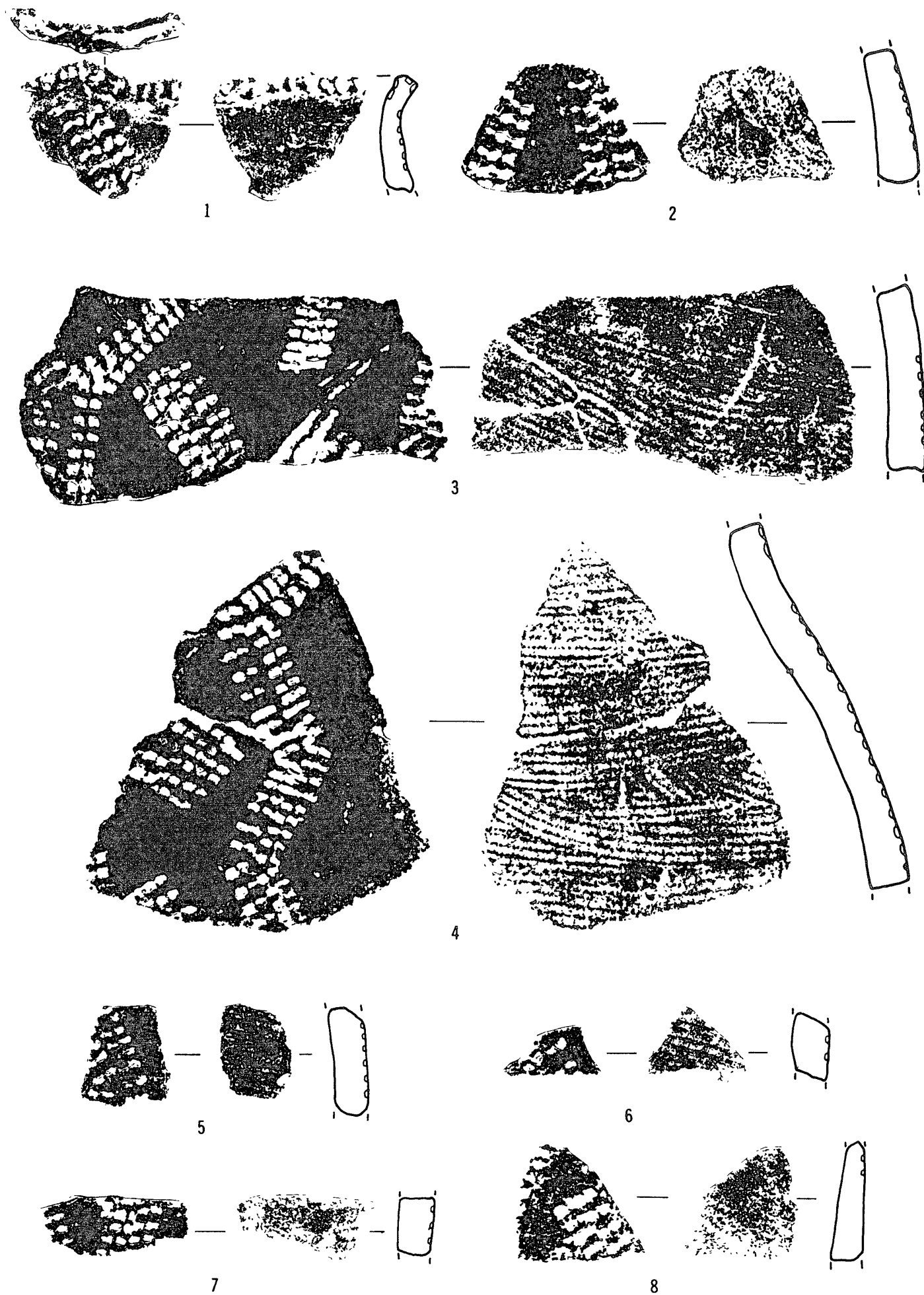
完形の資料が得られておらず、したがって詳細は提示できないが、図上復元を試みた第15図1の口縁部やその他の資料からすると深鉢形である。頸部はしまり、胴の張るタイプで、口縁は外反する。口径は胴の最大径より小さい。口縁は山の低いなだらかな波状の口縁で、底部は今のところ不明であるが、時期的に室川下層式に後続し、面縄前庭様式に先行すると考えられることから、尖底になる可能性が強い。なお、第15図1は、第Ⅶ層出土の口縁と第V層出土の頸胴部を接合したものである。

本型式のサイズは今のところ不明であるが図上復元を試みた第15図1は口径が推算20.8センチあり、南島の先史土器の中では大型の部類に属する。

胎土には石英を多量に混入し、また金雲母？も目立つ。その他、稀にチャートの破片も見受けられる。



第15図 A-1区出土の神野B式土器



第16図 A-1区出土の神野B式土器

0 5 cm

器厚は1センチ前後のやや厚手に属するが第16図1の頸部は0.7センチで胴部に比べると若干薄い。

焼成はすべて良く、堅緻である。

器色は茶褐色を基調とするが、煤けて黒ずんだものも多い。

### 器面調整

器面調整の方法を観察した結果、表裏面とも条痕を施したあと、撫で調整を行っているしかし、撫でが不十分のため、条痕が残る場合が多く、拓影でも明瞭にあらわれている。中には条痕がきれいに消されたものも3点（第16図2・7・8）見受けられた。第15図1の裏面には指頭押圧による凹みが口縁上端に3ヵ所見受けられる。また、第16図2の裏面には篋による斜めの調整痕がわずかに見受けられる。

### 文様

文様はほとんどが先端の分岐した叉状工具を用いて施文しているが、第15図1の口縁内面上端の文様は貝殻文に属する。しかし、使用された貝種は不明。

施文部位は口唇部、土器の外表面、口縁内面の3ヵ所である。外表面における施文範囲は採集資料からすると胴下半部に及ぶものと推察される。

まず、口縁部の文様から記述する。口縁部は2点（第15図1、第16図1）得られた。

両者とも口唇部には山形突起の両側に1条の沈線を深く刻んでいる。第15図1の沈線は両側とも破損しており、本来の長さを知り得ないが、現存部における長さは2.2センチである。また、第16図1の沈線はそれぞれ1.5センチと2センチを測る。この種の沈線が口唇部全体に刻まれていたかどうかは不明である。

る。

口縁内面の文様はそれぞれ異っている。第15図1の内面には楕円形のやや丸味のある列点文を密に刻む。施文具は貝殻であるが、使用された貝種は現在のところ不明。口縁内面の文様は同標品の外面の文様と異っている。第Ⅶ層出土。

第16図1は先端の幅約3ミリの叉状工具を用いて施文している。施文はやや深めで密だが間隔は一定せず雑である。施文具は外面の頸部に用いられたものと同種のものである。第Ⅴ層の出土。

上記2点とも口縁部上端（外面）を肥厚させ、同部に施文するが、肥厚部の幅、文様ともそれぞれ異っている。

第15図1の肥厚部は断面方形を呈し、1センチ前後の幅を有するが、厚さがきわめて薄く、そのためルーズな肥厚となっている。口縁部を肥厚させ、面縄前庭様式に通ずるような雰囲気をかもし出す。この肥厚部に二枚貝の腹縁によって刻文を施す。刻文は若干弧状を呈し、密である。

第16図1の口縁部の肥厚はさらにルーズで一定の形をなさず、口縁上端をわずかに脹らませることによって肥厚帯をつくる。そして同部に先端の分岐した叉状工具を用いて刺突文を1条施す。しかし、肥厚帯がせまいために食い出して刺突文が対にならない箇所も多い。施文は深めで密であるが、やや粗雑である。

次に口縁肥厚部以下の文様について記述する。文様構成がある程度把握できるのは、図上復元を試みた第15図1および第16図3・4などである。

第15図1は先述のように口縁部肥厚帯に貝殻文を施文するもので、それ以下の頸胴部には菱形文を施文する。施文具は先端の分岐し

た工具を用いており、二枚貝の腹縁部を用いた可能性が強い。文様は対の刺突文を2列平行させながら菱形文をつくるもので、やや力強いタッチで描かれている。第Ⅶ層の出土。

第16図3は胴中央部のうち、やや下半に属する資料で菱形文の一部を確認することができる。施文はかなり乱れており、刺突文の並走する箇所は少なく、大部分は重なっている。また、刺突文は2列だけでなく、3列施す箇所も見受けられる。同標品右半の文様からすると菱形文は規則的に配列されるわけではなく、部分的に別の文様に置き換えられる可能性も考えられる。第Ⅴ層出土。

第16図4は上部が若干外反する頸胴部の資料である。叉状工具を用いてジグザグ文を描くが、菱形文くずれの文様のようにも見受けられる。文様は力強く描かれているものの、極めて雑で、2列の刺突文は平行する部分と重なる部分があり、胴下半部にかけて乱れているようである。また、同標品左半部には意味不明の刺突文の一群が見受けられる。菱形文の内部修飾文の一種であろうか。第Ⅴ層の出土。

上記の他に有文胴部が6点（第15図2、第16図2・5～8）検出されているが、小破片のため記述を省略する。

本型式は第Ⅴ・Ⅶ両層で得られたが、第Ⅶ層で出はじめることから初現は縄文前期に遡るとみてよい。

#### d) 面縄前庭様式土器

今回、面縄前庭式とその先駆形態とみられる数型式の土器が得られたので、本項ではそれらを面縄前庭様式として一括して取扱うことにする。本様式は、文様上の特徴から次の3種に大別される。それぞれの出土状況は第7表の通りである。

- (1) 具志川式
- (2) 神野C式
- (3) 面縄前庭式

第7表 A—1区における面縄前庭様式の出土状況

種別 層	具志川式		神野C式		前庭式		型式不明		計
	口	胴	口	胴	口	胴	頸	胴	
I									
II								1	1
III									
IV		1	2				1	15	19
V	5		1		1		4	29	40
VI									
VII									
崩									
計	5	1	3		1		5	45	60

本区において、面縄前庭様式は第Ⅳ・Ⅴ層（縄文後期層）を中心に出土し、そのほか第Ⅱ層でも得られている。前記両層では、先述の各型式と混在しており、型式間の明確な前後関係を把握することはできなかった。以下各型式について述べる。

#### (1) 具志川式土器

具志川島遺跡群岩立地区（註4）下層出土の土器を標式とするもので、新型式と認められるものである。口径が胴の最大径よりも小さく、底部は尖底の深鉢形土器で、口頸部に1～2条の凸帯を繞らすものである。凸帯は波状をなすか、あるいは2条の凸帯のうち下位の凸帯が上昇して何ヵ所かで上位の凸帯と接続するものが多い。本区では第Ⅳ層で1点第Ⅴ層で5点検出された。



## 器種・器形

本区出土の口縁破片 5 点は深鉢形と壺形に分けられ、前者は 4 点で、後者は 1 点である。壺形は第17図 2 の 1 点で、口径は推算 6.5センチ、頸部は全体的にゆるやかな内傾を示すが、口縁上端はわずかに外反する。やや長頸の壺形である。口唇上端は尖っている。器面は両面とも撫でられているが、表面には斜方向の畝状の篋調整痕が明瞭に残る。器厚は約 0.5 センチ、器色は黒褐色を呈し、焼成はきわめて良い。胎土混入物は石英、金雲母? 等である。第 V 層の出土。

他の 4 点は深鉢形の口縁破片で、頸部がしまり口縁部が外反するタイプである。口径は同図16の 1 点は推算不能だが、他の 3 点は同図 1 が約17センチ、同図17と20の 2 点は約16センチである。口唇部は施文部が平坦に整形され、その点ではやや一定している。器厚は最大が 0.8センチ（第17図16）、最小が 0.5センチ（第17図20）で平均は 0.6センチである。胎土には石英を主体に金雲母? などが混入されている。粒子は一般的に細かい。焼成は良好で堅い。色調は表裏面とも茶褐色を基調とするが、赤褐色を呈するもの（第17図 1・17）や、中には煤けて黒ずんでいるもの（第17図20）ある。

本型式の底部は、同層出土の底部資料を参考にすると尖底が想定される。

## 器面調整

器面調整の方法を観察すると、撫で調整で仕上げるのが通例だが、擦痕や篋の調整痕が消えきらず残っているものもある。擦痕を残すものは 2 点（第17図 1・17）で、いずれも表裏面に横方向の擦痕が施され、裏面のものは撫でによりほとんど消えかかっているが、表面のものは粗く、明瞭である。

## 文様

施文は口唇部・口縁部・胴上部を対象としている。

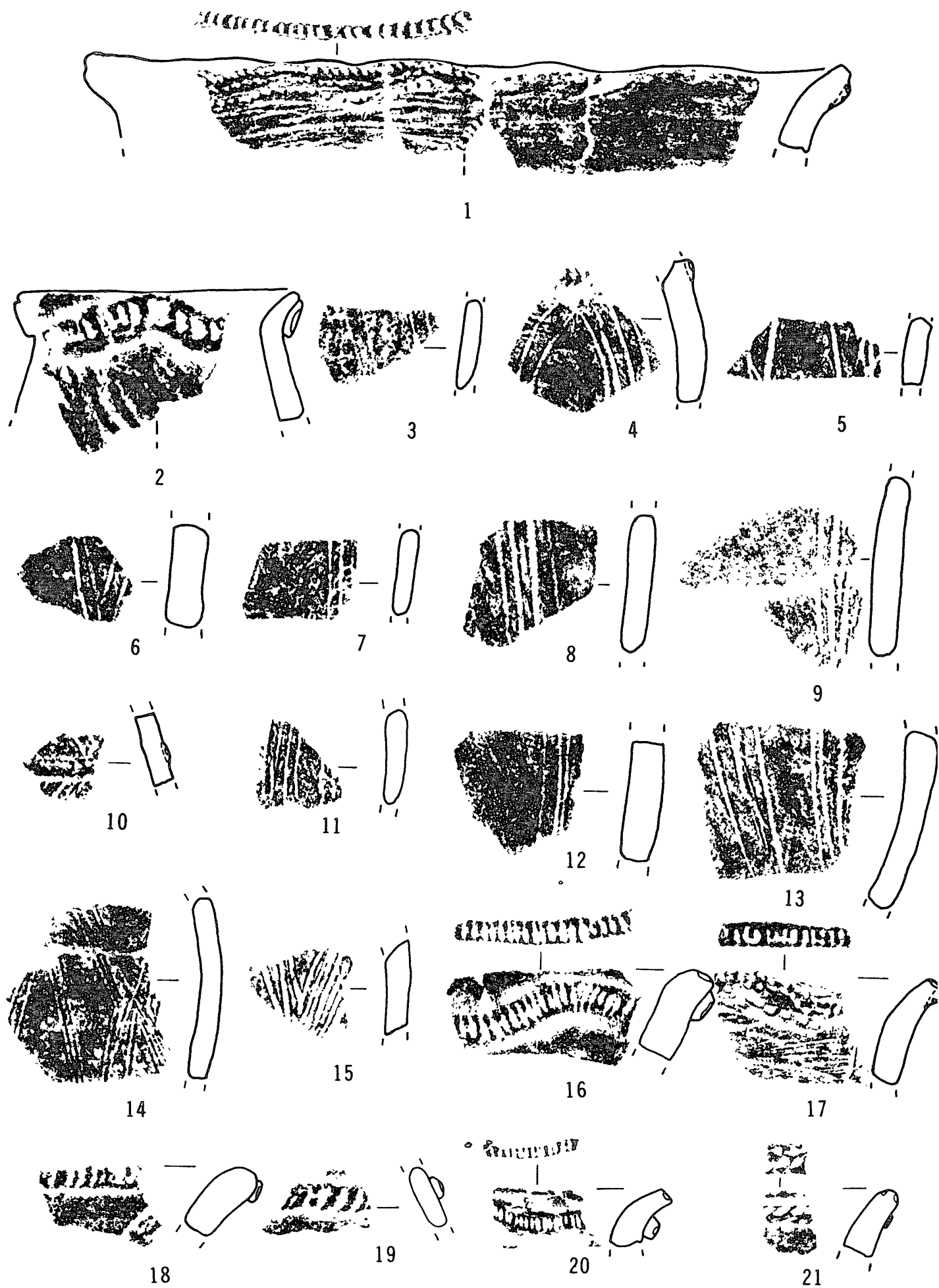
施文具は先端が尖った棒状工具と方形を呈する篋工具の 2 種類を用いている。

文様は凸帯文を中心とするもので、本区のものはすべて波状凸帯に属する。凸帯は断面が方形を呈するもの（同図 2・16・20）とやや丸味をおびるもの（同図 1・17）に分けられ、いずれも扁平であるが、同図20は他に比べやや厚みがある。凸帯上の文様は 2 種に細分される。つまり、上記の施文具から①棒状工具を用いたもの、②篋工具を用いたものの 2 種である。

①に含まれるものは第 V 層で 2 点（第17図 1・17）出土した。両者は器面調整、色調、文様、その他の特徴から同一個体と考えられるものである。口縁上端をみみず脹れ状の細い凸帯で飾るもので、凸帯上には先端の尖った細い棒状工具で刺突文を密に施す。刺突文は 3 列認められる。同図 1 の頸部には斜行の刺突文が見受けられるが、何条施すかは不明である。口唇上には小型の刻文を密に刻む。

②に含まれるものは第 V 層から 3 点（同図 2・16・20）得られた。同図 2 は、先述のように壺形の資料である。口縁上部にほぼ 0.9センチ幅の波状凸帯を貼りつけ、その上面に篋で刻文を密に施文する。刻文は力強く深く刻まれるが、雑で方向や間隔は一定しない。凸帯は断面方形を呈し、0.3センチの厚みを有するが、幅が大きいために全体的には扁平の感じを抱かせる。口唇は尖っていて無文。

同図16は口縁部破片で、口唇部、口縁部に文様を施す。口唇上には刻文を密に施し、口縁外面には波状の刻目凸帯を貼付する。凸帯の幅は約 0.8センチ、厚さは約 0.2センチで断面は方形を呈し、全体的に扁平である。凸



第17図 A-1区出土の面縄前庭様式土器

0 5 cm

帯上には口唇部と同種の文様を密に刻む。施文は深く明瞭である。

同図20も口縁部破片で、口唇部と口縁部に施文する。口唇部には小形の刻文を密に施し口縁外面に貼りつけられた凸帯にも同種の文様を密に刻む。凸帯は幅約 0.5センチ、厚さ約 0.3センチで断面は方形を呈し、やや規格的である。凸帯の貼付はルーズで、下端には亀裂が生じている。

第18図16は胴部破片で、前記のどの凸帯と組み合わせるかは不明である。文様はまず0.2～0.3センチ幅の平行沈線を斜行させ、その間を横位の刻文で埋めるものだが、刻文の長さが0.5センチ前後あって沈線の枠より食み出している。この文様は上部で左側に向きを変えるように見受けられる。また、土器の右端にも走向を異にする同種の刻文が密に施されているが、平行沈線は見当らない。具志川式における特殊の施文例かもしれない。沈線は細く浅めだが、刻文はやや深く刻まれている。第Ⅳ層下部の出土である。

## (2)神野C式土器

面縄前庭様式に先行するとみられる新型式の土器で、今回第Ⅳ・Ⅴ層から口縁部が3点得られた。出土状況は第7表の通りである。本区においては、他の2型式との先後関係を見出すことが出来なかった。

### 器種・器形

器種は口縁部の形状から判断すると、すべて深鉢形である。ただし、第18図2は口径が推算 7.6センチで、壺形になる可能性もある同図3の口径は推算12センチである。器形は①頸部が彎曲して口縁部が外反するものと②頸部から直線的に開くものの2種に分類できる。①に含まれるものは2点(第18図3・17)、

②に含まれるものは1点(同図2)で、後者の口径と胴径の比は不明であるが、前者については口径よりも胴の最大径が大きくなると思われる。口唇部の断面形状は、若干の相違はみられるものの、いずれも丸味をおびている。

器厚は最大が 0.9センチ、最小が 0.4センチで薄いものや厚いものが認められる。胎土には石英を主体に、長石などが少量含まれている。焼成はすべて良好で、器色は表裏面とも茶褐色を呈している。

### 文様

器面は撫で調整を行うが、1点(第18図3)だけ裏面に篋による横方向の調整痕を施すものがみられる。

施文部位は、ふつう口唇部、口縁部、胴部の3ヵ所であるが、本区では胴部資料が得られていない。

施文具は叉状工具と単篋工具の2種類の工具を用いている。

口頸部の文様は、他の発掘区出土のものも含めると次の4種に大別される。なお、本区においては4種すべてが出土したわけではない。

#### 第1種

1条の貼付け凸帯をめぐるもので、次の2タイプに細分される。

A：凸帯が波状に器面をめぐるもの。

B：凸帯が直線的に器面をめぐるもの。

#### 第2種

2条の貼付け凸帯をめぐるもので、次の2タイプに細分される。

A：凸帯上に刻文を施すもの。

B：凸帯上無文のもの。

### 第3種

3条の貼付け凸帯をめぐるもの。

### 第4種

凸帯のかわりに刻文を施すもの。

本区出土のものは第1種B、第2種A・Bの3種だけである。

### 第1種B

1条の貼付け凸帯を水平にめぐらすもので凸帯上には刻文を施す。本区では第V層から1点(第18図17)出土した。凸帯は口唇下約2.7センチのところ(頸部)に1条貼付けられるもので、その下端で欠損している。凸帯は幅約0.5センチ、厚さ約0.3センチの比較的小型の凸帯である。断面は半円状を呈するが、上面に軽い凹凸があり、形状は一定しない。刻文は本資料では凸帯上面に施すのではなく、凸帯と器面との境目あたりに施文され先端が方形の篋工具により深めに刻まれている。口唇部の文様は叉状工具によるハの字状の刺突文である。刺突文の1列は外面側に、他の1列は内面側に施され、後者は刺突が微弱なため不明瞭。具志川式との関連で観察してみると、凸帯の位置が本型式のものは具志川式より若干下位にずれるようである。

### 第2種A

第18図3は刻目凸帯を2条施す例である。凸帯は幅約0.3センチ、厚さ約0.2センチの細型凸帯で、断面は半円状を呈する。凸帯貼付後に上から引くように沈線を刻むので、篋が滑り、沈線は凸帯を越えて下方に延びている。沈線は浅めだがシャープである。凸帯間は無文である。第IV層の出土。

### 第2種B

第2種Bは①上下凸帯間が無文空白のもの  
②上下凸帯が何ヵ所かで縦位の凸帯によって結ばれるものの2タイプに細分される。

本区では第2種Bに含まれるものが1点(第18図2)得られているが、厳密にはこのグループの変形とみた方がよいだろう。すなわち凸帯は無文で頸部の上下端にそれぞれ1条貼り付けているものの、両者は平行でなく、いずれか一方が曲線を描き、その点で典型的なものと若干異っている。凸帯の幅は0.5～0.7センチ、厚さは0.2～0.4センチで上端の方が幅は広く、厚さは薄い。凸帯間は無文で凸帯の断面は楕円状を呈している。もし、下段の凸帯が波状を呈するのであれば、具志川式に分類すべきものかもしれない。第IV層の出土。

### (3)面縄前庭式土器

徳之島伊仙町面縄第IV貝塚(註5)前庭部出土の土器を標式とするもので、本区では第V層から口縁部が1点得られた。本型式は具志川式や神野C式に後続するものとみられ、面縄前庭様式の中では終末期のものと考えられる。

### 器種・器形

第17図18に示す1点で、小破片のため詳細は不明であるが、口縁部の形状から恐らく深鉢形になるであろう。口径は推算10センチ、小ぶりの土器で、口縁は外反し、口唇の断面形状は舌状を呈する。

器厚は0.8センチで、胎土には石英を主体に長石、金雲母?などを少量混入する。焼成は良好で堅く、色調は茶褐色を呈す。

## 文様

器面は両面とも撫でられ、擦痕や条痕は見当らない。

文様は口縁外面のみに施され、浮文と沈文とを組み合わせている。浮文の凸帯は、口縁に沿って1条認められ、その上面に叉状工具で刺突文を密に施す。凸帯は断面半円状を呈し、幅は約5ミリ、扁平の小型の凸帯である。頸部右端では2条の斜沈線が確認でき、左端も沈線に沿って破損していることから、頸部の文様は鋸歯文とみられる。沈線は深く明瞭である。

### (4)型式不明

面縄前庭様式に含められるものであるが、小破片のため文様構成の詳細がつかめず、分類不能のものを型式不明として本項にまとめた。まず、頸部と胴部に分けて記述する。前者は第Ⅳ・Ⅴ層から5点検出された。

#### ①頸部

##### 器種・器形

ここにまとめた資料の器種・器形については資料の制約上明示できないが、大部分は深鉢形のものであろう。器厚は0.5センチ前後で、胎土混入物は石英を主体に金雲母?などが観察される。

焼成はすべて良好で堅い。色調は両面とも茶褐色を呈するものが3点、黄褐色、暗褐色を呈するものはそれぞれ1点で、茶褐色の中には煤けて黒ずんだものもある。

## 文様

文様はすべて浮文と沈文を組み合わせで飾っている。以下、番号順に文様及び器面調整等について記述する。

第18図4は頸部の破片で、上部に幅0.6セ

ンチ、厚さ0.3センチの凸帯を1条めぐらしその上面に半截竹管状工具で刺突文を施している。凸帯の断面形状は楕円状を呈し、扁平である。凸帯下には数条の縦位沈線文が認められるが、施文は浅めで不明瞭。器面は両面とも撫でられており、擦痕や条痕は残っていない。第Ⅳ層の出土。

第17図4は頸胴部の資料で、破片の上部にわずかに凸帯が認められる。幅や厚さは不明。断面は半円状。凸帯には叉状工具による刺突文が施され、凸帯下では3～4条単位の沈線を左右に分岐して垂下させている。施文は浅めだが文様は明瞭。器面調整は表裏面とも撫でによって仕上げられているが、表面では部分的に斜位の擦痕も認められる。第Ⅴ層の出土。

同図10は頸胴部の破片で、面縄前庭式の可能性のある資料である。破片の中央部には幅約0.3センチ、厚さ約0.1センチの比較的小型の凸帯を1条めぐらし、その両端を刺突文で飾っている。凸帯の断面形状は半円形だが側縁の一つに刺突文を施している関係上、一見方形にみえる。凸帯両縁の刺突文は小形の棒状工具によるもので密に施されている。凸帯の上下の空間にはいずれも斜行の沈線文が描かれており、それからすると頸部文様は鋸歯文となる公算が大で、面縄前庭式の範疇に含まれる可能性が強い。器面は両面とも撫でられているが、裏面では横方向の条痕も認められる。第Ⅴ層の出土。

同図19は頸部の資料で、刻目凸帯の部分だけの資料である。凸帯はほぼ楕円状の断面を有し、幅約0.5センチ、厚さ約0.3センチでやや大型に属する。刻文は篋状工具で力強く施文されており、明瞭である。表面の凸帯下で横方向の擦痕がわずかに認められるほかは一様に撫でられている。第Ⅴ層の出土。

同図21は口縁部破片で、文様は口唇部と口縁部に施されており、口唇上は叉状工具による刺突文が密である。口縁外面には幅約 0.4センチ、厚さ約 0.1センチの、断面がほぼ楕円状の凸帯を 1 条めぐらす。凸帯は小形で扁平である。凸帯上面には刺突文が 1 列施されているが、口唇部の文様と形態が似ており、同種工具の片側使用による施文であろう。施文は深めである。器面は両面とも撫でられており、擦痕、条痕は残っていない。第 V 層の出土。

## ② 胴部

胴部は総数 45 点得られ、23 点を図示（第 17 図 3・5～9・11～15、第 18 図 1・5～15）した。

胴部文様は概ね次の 3 種に大別される。

### 第 1 種

数条を単位とする縦位沈線文によって構成されるもので、面縄前庭様式に普遍的にみられる文様パターンである。通常、口頸部下端の凸帯直下を起点として底部ちかくまで施すものを基本とし、その展開の仕方により、さらに次の 2 種に細分される。

A：起点で左右に分岐する数条単位の沈線群を垂下させるもので、起点から逆 V 字に展開するもの。

B：沈線群による、いわゆる Y 字状文と前記 A とを組み合わせるもの。

### 第 2 種

沈線群が X 状に交わるもの。

### 第 3 種

雷文状のもの。

本区出土のものは第 1 種 A と第 2 種に限られる。

### 第 1 種 A

起点で左右に分岐するいわゆる逆 V 字状のパターンではじまり、以下底部へ垂下するので、左右で対をなす。沈線の展開の状況により次の 2 種に細分される。

①左右の縦位沈線群がほぼ直線的に延びるもの。

②垂下沈線群が途中で屈折するもの。

本区では①の資料は得られていない。

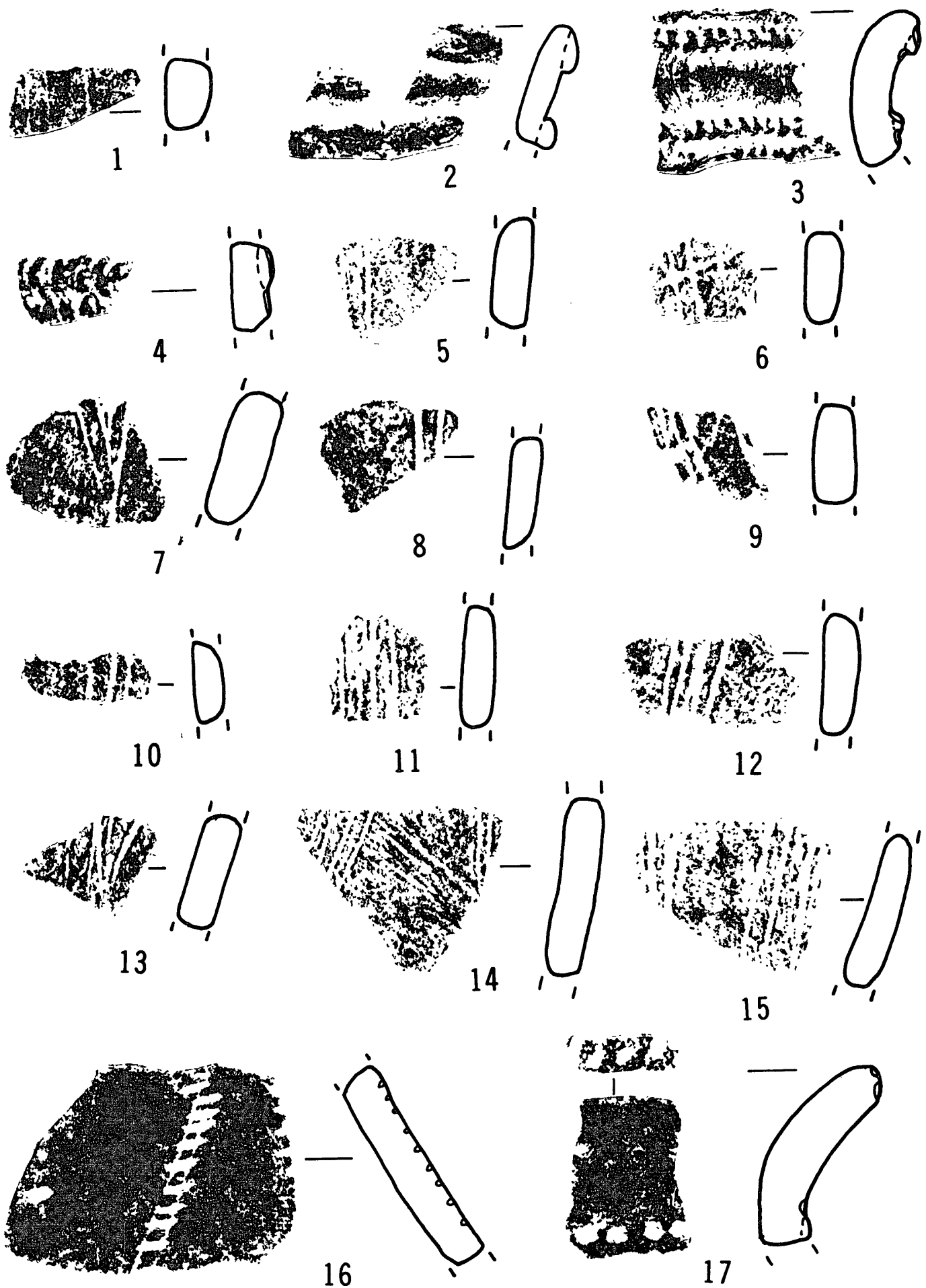
第 17 図 9 は②に含まれる可能性がある。すなわち破片の右端に施されている数条の沈線が下端においてわずかに屈折しているのである。縦位沈線群を下端で一旦とめ、次に左方向に新たに沈線を加えている。第 V 層の出土

### 第 2 種

第 1 種の左右に分岐する沈線群が垂直方向に展開せず、斜め方向へ延びるために、隣接する沈線群が X 状に交差するもの。

本区では第 17 図 14 がこれに分類される。破片の右側に 3 条 1 組の沈線を X 状に描いている。X 状の沈線はまず、左側上部の右下りのものから描いているが、沈線は 3 条とも同方向に延びるのではなく、左端の沈線は逆くの字状に屈折させ、右端の沈線は交差部を越えて下方に延びている。この文様の次に X 状の右上方の左下りの沈線を描くが、この方は交差部で一旦、竄をとめている。この文様は X 状文というより菱形文の可能性もある。第 V 層の出土。

以上の文様の他に、垂下沈線群の末端の状況が窺える資料があり、本貝塚のものでは次



第18図 A-1区出土の面縄前庭様式土器

0 5 cm

の2通りの収束の方法が知られている。

- ①垂下沈線群の末端が平行に終るもの。
- ②末端がV字状に交差するもの。

本区では②に含まれるものが第Ⅳ・Ⅴ層から2点(18図7・13)得られただけで①の確実な資料は未発見である。

次に胴部に施された縦位沈線の数であるが1組は2～6本から構成され、その中では4本を単位とするものが最も多かった。

次に前記胴部破片のその他の特徴について記す。

器厚は最大が0.7センチ、最小が0.4センチで、0.5センチ前後のものが最も多い。胎土には石英を主体に金雲母?などが含まれており、混入量は比較的多めである。焼成は極めて良く、器色は表裏面とも茶褐色を呈すのが一般的で、他に黄褐色、赤褐色を呈すものもある。

器面調整について若干記すと、撫で調整を行うのが通例で、擦痕や条痕を残すものは少ない。擦痕が見受けられるものは9点(第17図5・7・11・12・14・15、第18図7・13・14)で、そのうち表面だけに擦痕を施すものは第17図5と第18図7の2点である。いずれも縦方向の擦痕であるが不明瞭。また裏面のみに擦痕が観察できるのは6点(第17図7・11・12・14・15、第18図13)で、第18図13以外はすべて横方向の擦痕である。第18図13は斜方向の擦痕を施すが不明瞭。横方向の擦痕は比較的明瞭なものが多く、特に第17図14の裏面は粗く明瞭である。表裏面とも擦痕が観察されるのは第18図14の1点で、表面は斜方向、裏面は横方向である。条痕を施すものは第18図15の1点で裏面に横方向に施され、ほぼ全面に広がっている。

## e) 面縄東洞式土器

本区では第Ⅱ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層より計18点検出され、そのうち14点を図示した(第19図1～14)。第Ⅱ層以外はいずれも縄文後期層である。出土資料のうち、口縁部は4点だがすべて小破片で復元可能なものはない。図示した14点の層位別出土状況は第8表の通りである。

第8表 A—1区における面縄東洞式の出土状況

種別 層位 破片 順序	1種		2種		3種		不明		計
	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	
I									
II									
III									
IV			4	1					5
V	1		4	1			1	2	9
VI									
VII									
計	1		8	2			1	2	14

## 器種・器形

本区の資料は小破片のため、器種・器形について詳細に記述することは出来ないが、類例を参考にするとすべて深鉢形とみてよいと思われる。口縁は直口のもの(第19図7)や外反するもの(同図5・10)などが見受けられるものの、大半は形状が不明である。

また、本型式の口縁は平口縁と波状口縁の2種に大別され、本区のものについてみると同図7は波状口縁に分類できるが、他は不明である。また、口縁資料のうち肥厚しているものが5点(第19図5・6・8・9・11)認められ、そのうち肥厚帯の幅のうかがえるものは同図5(約2.6センチ)の1点だけである。口唇部の形状をみると、尖るものと平



坦に形成されるものの2種が認められ、本区では前者が2点（第19図5・6）、後者が2点（同図7・10）となっている。

底部については明確な資料は得られておらず、同層出土の底部がすべて平底であることから一応平底とみている。

胎土には石英を主体に少量の金雲母？を加えるものが一般的である。しかし、第19図3は金雲母も比較的多く、また、同図4・9の2点はほんのわずかではあるが長石を含んでいる。

器厚（胴部）は5ミリ前後の薄手のものが一般的である。焼成は良好で、脆いものは見受けられない。器色は茶褐色を基調とするが暗褐色を呈するものも数点ある。

## 文様

器面調整の方法を観察した結果、一般的に撫で調整をおこなっているが、撫でが不十分のため擦痕や条痕をわずかに残すものも3点（第19図1・10・13）見受けられた。

第19図1の裏面は一応撫で調整をおこなっているが、撫でが不十分のため横位の細い条痕がやや明瞭に残っている。同図10の両面には、横位・斜位の擦痕がごく一部に見受けられる。同図13は表面に横位、裏面には縦位の擦痕がわずかに残っている。また、同図5の裏面にも斜めの篋調整痕が浅く残っている。

施文具は先端が槍先状に尖ったものや、方形をなすもの、丸味をおびたものなど3種が認められるが、後2者の使用例は少ない。

施文部位は口唇部と口縁部で、稀に肥厚帯直下に施文するものもある。

本貝塚の東洞式の文様は下記の3種に大別される。

第1種…籠目文を構成するもの。

第2種…横位押し引き文を主体とするもの。

第3種…その他。

本区では第1種と第2種が得られ、第3種は得られていない。

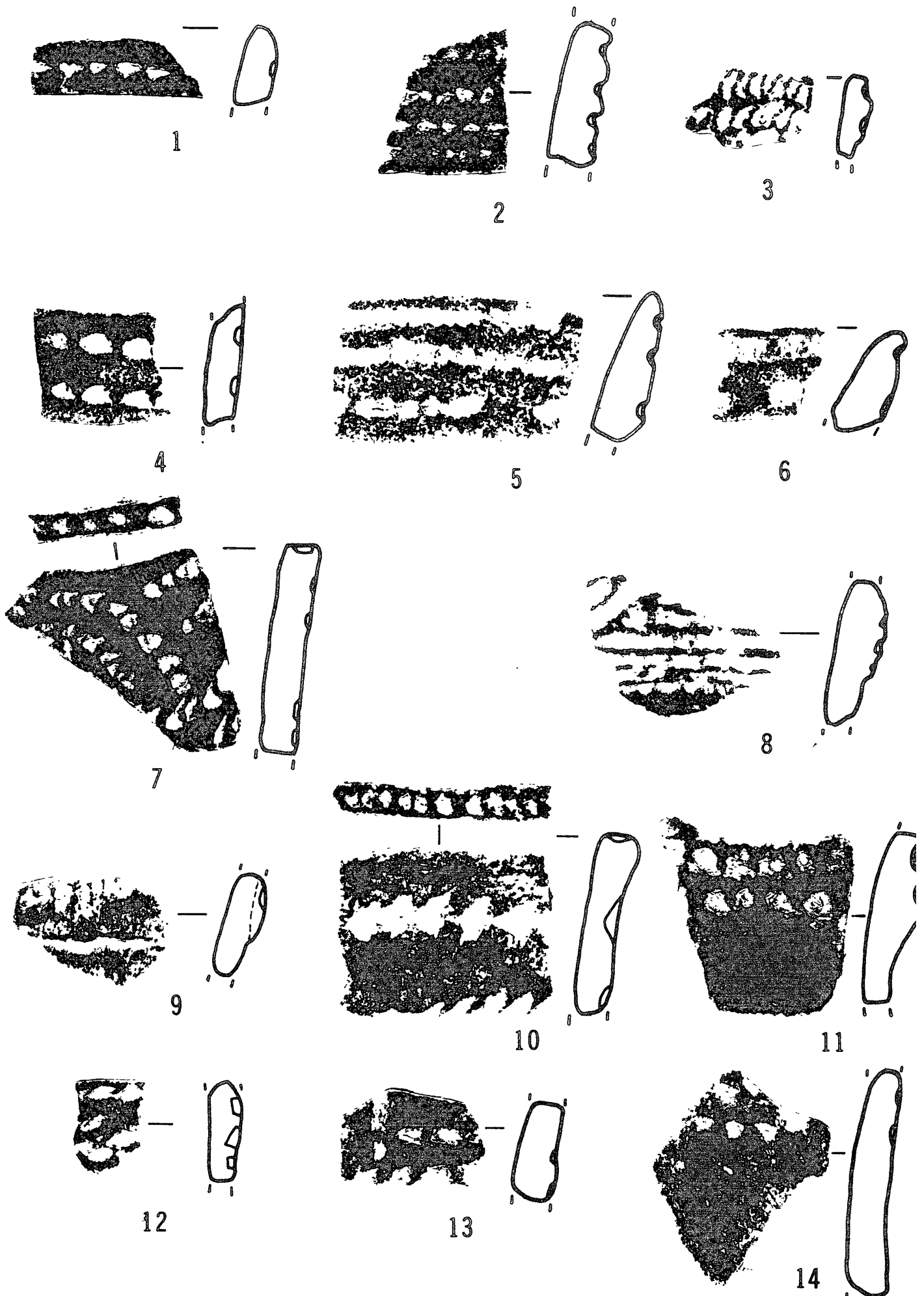
第1種に属するものは1点（第19図7）である。器面に残る文様構図からみて籠目文に含めてよいと思われる。口唇部、口縁部の2ヵ所が施文の対象となっている。口唇部には三角形刺突文を浅く押し引きしている。刺突文の先端は尖らずにやや丸味をおびている。口縁部にも同種の工具を用いて上から下へ、また、左から右の方向へ刺突文を押し引きしながら籠目状の文様を施文する。施文はやや深く、鮮明である。第Ⅴ層の出土。

第2種に属するとみられるものは10点（第19図1～6、9～11、14）である。これを施文具別に分類すると次の3種となる。

- (イ)先端が弧状を呈するもの。
- (ロ)先端が方形をなすもの。
- (ハ)先端が鋭角に尖るもの(三角形刺突文)

(イ)に属するものは同図3の1点である。本標品は口縁破片で、左から右の方向へ横位に弧文を押し引きするもので、2条認められる。弧文の内側中央部には稜線状の微隆線が1本横位に延びており、草茎様工具を使用したものと察せられる。施文はやや深く、連続的に施されたために上下の文様間は若干盛り上がり稜線をつくり出す。第Ⅳ層の出土。

(ロ)に属するものも1点（同図6）である。口縁部資料で、肥厚帯下部で破損している。先端が方形の工具を用いて肥厚部に2条の横位文様を施文する。上方の文様は連続的に押し引き文を施すもので、施文部は凹線となっ



第19図 A-1区出土の面縄東洞式土器

ている。凹線部は摩耗のため押し引き文は不明瞭。押し引きの方向は左から右である。下方の文様は横捺刻文に属し、押し引き手法は認められない。上方の押し引き文は口縁を囲繞すると考えられるが、下方のものは断続的である。口唇上は無文。第Ⅳ層の出土。

(イ)に属するものは8点(第19図1・2・4・5・9～11・14)である。三角形刺突文を連続して押し引きしながら施文するものと、一つひとつ孤立的に施すものがあり、後者は3点(同図1・4・14)である。後者より記述する。

第19図1は口縁の破片で三角形刺突文が横位に1条認められる。三角形の尖端の方向からすると施文は右から左の方へ移動している刺突文は孤立的に施され、やや深く刻まれている。口唇上は無文。第Ⅳ層の出土。

同図4は第Ⅳ層出土の胴部である。左から右の方向へ三角形刺突文を横位に孤立的に刻むもので、2列認められる。施文は深く鮮明である。

同図14は第Ⅴ層出土の胴部である。右から左の方向へ横位に三角形刺突文を孤立的に施すもので、2列認められる。下位の刺突文列において右端の刺突文は上方に向きを変えており、ステップ状の文様を構成する可能性もある。施文は鮮明である。

次に三角形刺突文を連続して押し引きする5点について記述する。

第19図2は第Ⅳ層出土の口縁部破片である。口唇部を欠き、下方は肥厚帯下端で破損している。文様は右から左の方向へ施文され、本標品では4条認められる。押し引き手法が用いられているために、凹線の中に刺突文を施しているように見える。

同図5は口縁部で、肥厚帯直下で破損している。横位に3条の小型の刺突文を左から右の

方向へ押し引きしているが、下位の刺突文は途中で切れ、約1センチの間隔をおいて再び施文する。文様は深く鮮明である。口唇上は無文。第Ⅴ層出土。

同図9は口縁部下端の資料で、肥厚帯下部に右から左の方向へ三角形刺突文を横位に押し引きするもので、本標品には1条見受けられる。施文は密である。第Ⅴ層の出土。

同図10は口縁部の資料で、口唇部と口縁部に施文する。口唇部には小型の三角形刺突文を密に押し引きする。施文は浅いが文様は鮮明である。口縁部には大型の三角形刺突文を深く横位に施文する。本標品には2条認められるが、下端は文様の部分で破損している。施文の方向は左から右である。第Ⅴ層の出土。

同図11は肥厚部を有する口縁下端の資料で肥厚部に左から右の方向へ横位に押し引き文を施文している。文様は深く鮮明である。第Ⅴ層の出土。

次に文様の展開状況が把握できなかったものの3点(同図8・12・13)について述べる。

同図8は口縁部下端の資料で、肥厚部に左から右の方向へ横位に三角形刺突文を押し引きしている。刺突文は小型で、深く押し引きしているために、施文部は凹線を形成する。また、同文様の左側上方には単篋工具を用いて左傾の押し引き文を施している。押し引きは微弱であるが一応凹線様の文様となっている。なお、本標品は肥厚帯直下にも押し引き文を1条施すが、浅くて不鮮明。第Ⅴ層の出土。

同図12は第Ⅴ層出土の胴部である。先端が鋭角に尖った工具を用いて、上部には左から右の方向へ横位に刺突文を施し、下方では斜位に施されている。また、中央部にも横位の刺突文が1個見受けられる。本標品の文様は横位と斜位のものを組み合わせるもので、刺突文はいずれも左から右の方向へ施されている。

第2種の可能性のある資料である。刺突文は深めで鮮明である。

同図13は第V層出土の胴部で、左側に上から下の方向へ、また、右側には横位に三角形刺突文を施文する。現標品の文様は縦・横の組み合わせである。第2種の変形文とも考えられる。施文は深く鮮明である。

#### f) 嘉徳I式A土器

本区では有文破片が第IV・V層から27点得られ、うち20点を図示（第20図1～3、第21図1～17）した。口縁部は9点で、なかには図上復元可能なものも2点検出されている。図示したものの層位別出土状況は第9表の通りである。

第9表 A-1区における嘉徳I式Aの層位別出土状況

層序	種別 部位	1 種		2 種		3 種						4 種						不 明		計
		口	胴	口	胴	イ		ロ		ハ		イ		ロ		ハ		口	胴	
						口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴			
I																				
II																				
III																				
IV													2		3	2			7	
V		1		2			1	2			1				1	2	1	2	13	
VI																				
VII																				
計		1		2			1	2			1		2		4	4	1	2	20	

#### 器種・器形

本区出土の資料についてみると、ほとんどが深鉢形で、胴部から口縁部にかけてやや直線的に開く器形である。口径は推算可能なものについてみると15～20センチを測り、中に1点（第21図2）9センチ前後の小型のものもあるが、深鉢形とするか壺形とみなすべきか器形が今一つはっきりしない。本型式の底部は未発見だが、平底とみていいだろう。

深鉢形の口縁部は肥厚するものと、しないものがあり、本区では両者出土している。口縁形態は山形が一般的で、確実な平口縁は今のところ未発見である。また、山形口縁は頂部付近で段を形成するものと、しないものがあり、前者は第20図3と第21図7、後者は第20図2などである。

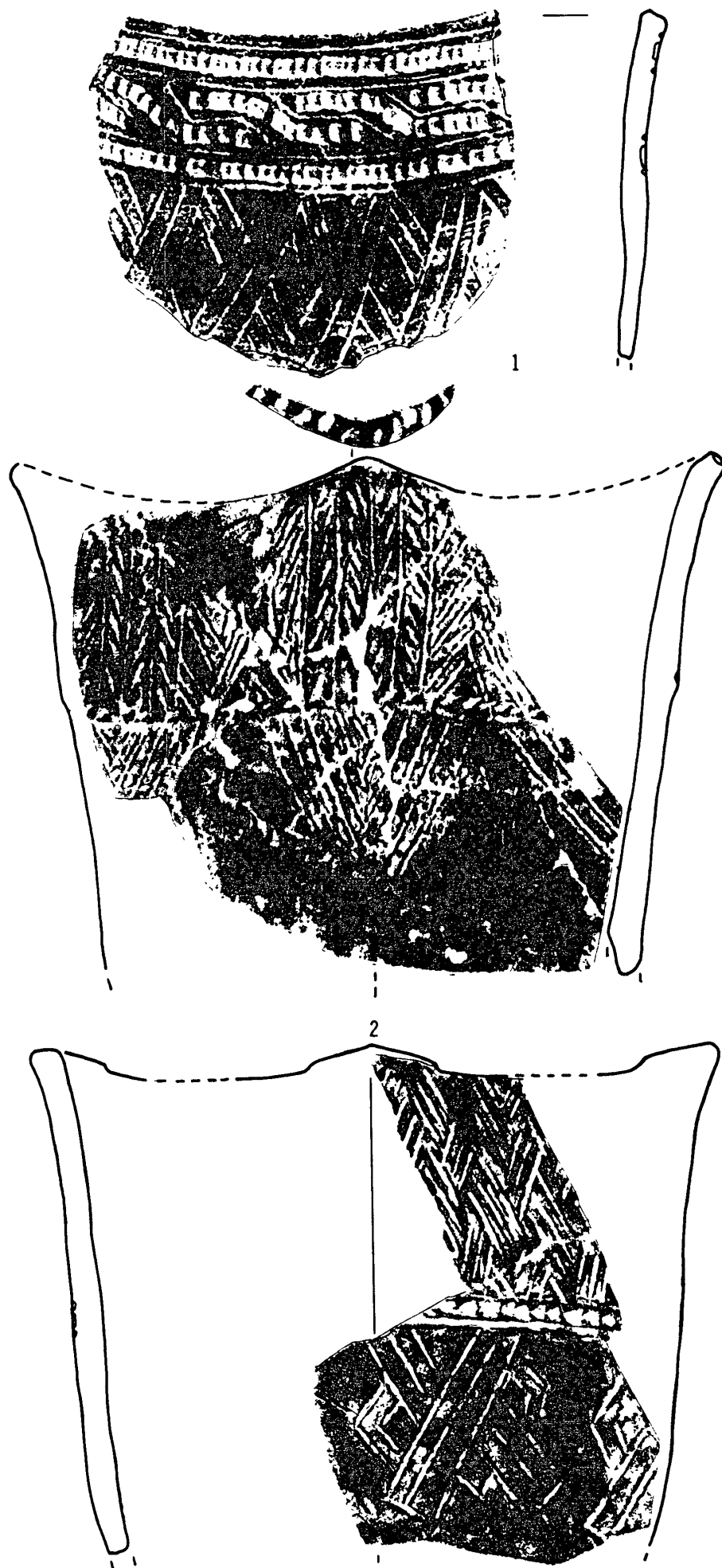
口径は第20図1が推算20センチ、同図2が約16センチ、同図3が約15.4センチで推算可能なものについてみると15～20センチを測り中型の土器に属するようである。同図2の口縁破片は山形頂部を含む資料で、頂部ではコーナーを形成することから、上面観は方形に近い形になる。

本型式の器厚は0.6センチ前後が一般的で全体的に薄手の土器である。

胎土には石英を主体に金雲母？などを含むが、粒子は細かく、肉眼での観察は容易でない。しかし、稀に2ミリ程の石英片を混入しているのもあり、特に第20図2は全体的に粒子が粗い。

焼成はすべて良好で堅い。

器色は表裏面とも茶褐色を基調とするもの



第20図 A-1区出土の嘉徳I式A土器

3

0 5cm

が大半を占め、他に暗褐色を呈するものがわずかにみられた。また、前者の中には煤けて黒ずんでいるものもある。

## 文様

器面調整についてみるとほとんどが撫で調整を行っており、条痕や擦痕を残すものは少い。条痕や擦痕の残存状況は第10表の通りで、調整方向は縦位、横位、斜位の3種あり、縦位のものは2点（第21図5・11）、横位のものは4点（第20図1、第21図1・8・13）、斜位のものは3点（第21図14～16）で、観察しにくいものが多い。第20図1は表裏面とも横位の条痕で調整されており、特に表面は文様の部分にも条痕が消えきらないで残っている。第21図5は口頸部の資料で、口縁部近くは撫でが徹底していて擦痕は見受けられないが、胴上部には表裏面に縦位の擦痕が消え切らず残っている。同図16は表面全体に斜位の条痕が施され、明瞭である。

第10表 嘉徳Ⅰ式Aの条痕・擦痕の残存状況

種別	条痕・擦痕の残存状況	条 痕			擦 痕			両面無し	計
		両面有り	表面のみ有り	裏面のみ有り	両面有り	表面のみ有り	裏面のみ有り		
1				1					1
2		1						1	2
3	イ								
	ロ				1			2	3
	ハ								
4	イ							1	1
	ロ					1		1	2
	ハ	1			1	1	1	4	8
不 明			1					2	3
計		2	1	1	2	2	1	11	20

施文部位は口唇部、口縁部および胴上部の3ヵ所である。

施文具は先端が方形状のもの、三角形に尖ったものや丸味をおびたもの、半截竹管状の工具など4種類認められる。

表面の文様は口頸部の第1文様帯と胴上部の第2文様帯に区分される。前者が一般的に密であるのに対し、後者は沈線のみを組み合わせた簡素な文様になる傾向が強い。文様は他の発掘区出土のものも含め下記の4種にわけられる。

①押し引き文を主体とするが、部分的に沈線を加えるもの。

②第1文様帯に数条の平行沈線を施し、沈線間を三角形刺突文で飾るもので、横位文様を主体とするが、部分的にステップ文を加える点に特徴がある。第2文様帯は沈線による鋸歯文を基本とする。しかし、中には平行沈線による鋸歯文を施した後、沈線間に三角形刺突文を加えるものもある。

③本型式の盛期の特徴の一部を示すとみられるもので、第1文様帯は横位文様を主体とするが、山形口縁下で縦位文様を加えるものを本項にまとめた。第2文様帯には複数の沈線による鋸歯文を加える場合もある。

④前項の③が簡略化を進めたもので、本型式の主文様要素（沈線＋三角形刺突文）が部分的に残存するものである。つまり、主要文様が山形突起下や第1文様帯の上下の部分にのみ施され、他を別の文様要素で飾るか、あるいは無文空白のまま放置するか本型式の終末期を代表するものと考えられる。第2文様帯は複数の沈線による鋸歯文や網代状の文様

あるいは平行沈線を三角形状に配し、その後、沈線間を三角形刺突文で埋めるものなどがある。

①の資料は第21図1の1点である。口縁部の資料だが、口縁上端を欠く。文様帯の部分は肥厚している。先の尖った篋を力強く押し引きしながら三角形刺突文を密に施す。文様は下から上へ描くものと、逆に上から下へ描く2方向が認められ、その間に部分的に沈線を加えているが、三角形刺突文の施文方向を示すために、つまり、その区画として沈線が用いられているわけではない。三角形刺突文を主体とするところから面縄東洞式に後続する、嘉徳Ⅰ式Aの初期の資料とみられる。第Ⅴ層の出土。

②は2点（第20図1、第21図2）で、いずれも第Ⅴ層出土の口縁部資料である。

第20図1は山形口縁部の資料だが、波状部欠失のため、同部における文様の詳細を知り得ない。しかし、第1文様帯についてみると②の部類に含まれるもので、文様は押し引き文と沈線文の組み合わせによって構成される。押し引き文は、先端が方形を呈する篋で描かれており、その点三角形刺突文を主体とする本型式の文様からやや外れる感じの資料である。同部の文様は、まず沈線で区画をつくりあとで内部を押し引き文で埋める。第1文様帯は上・中・下の3段にわかれ、上段と下段は口縁に沿う水平方向の文様からなり、中段は同種の文様をステップ状に配する。押し引き文は浅いが密で、沈線はシャープである。第2文様帯は3本1組の斜沈線を用いて、網代状の文様を描くもので、右傾の沈線が掻い潜る形をとる。この土器は第1文様帯の押し引き文が方形状工具によって描かれていることから文様効果としては嘉徳Ⅰ式Bに通ずるものがあり、嘉徳Ⅰ式Bとの接点にある資料

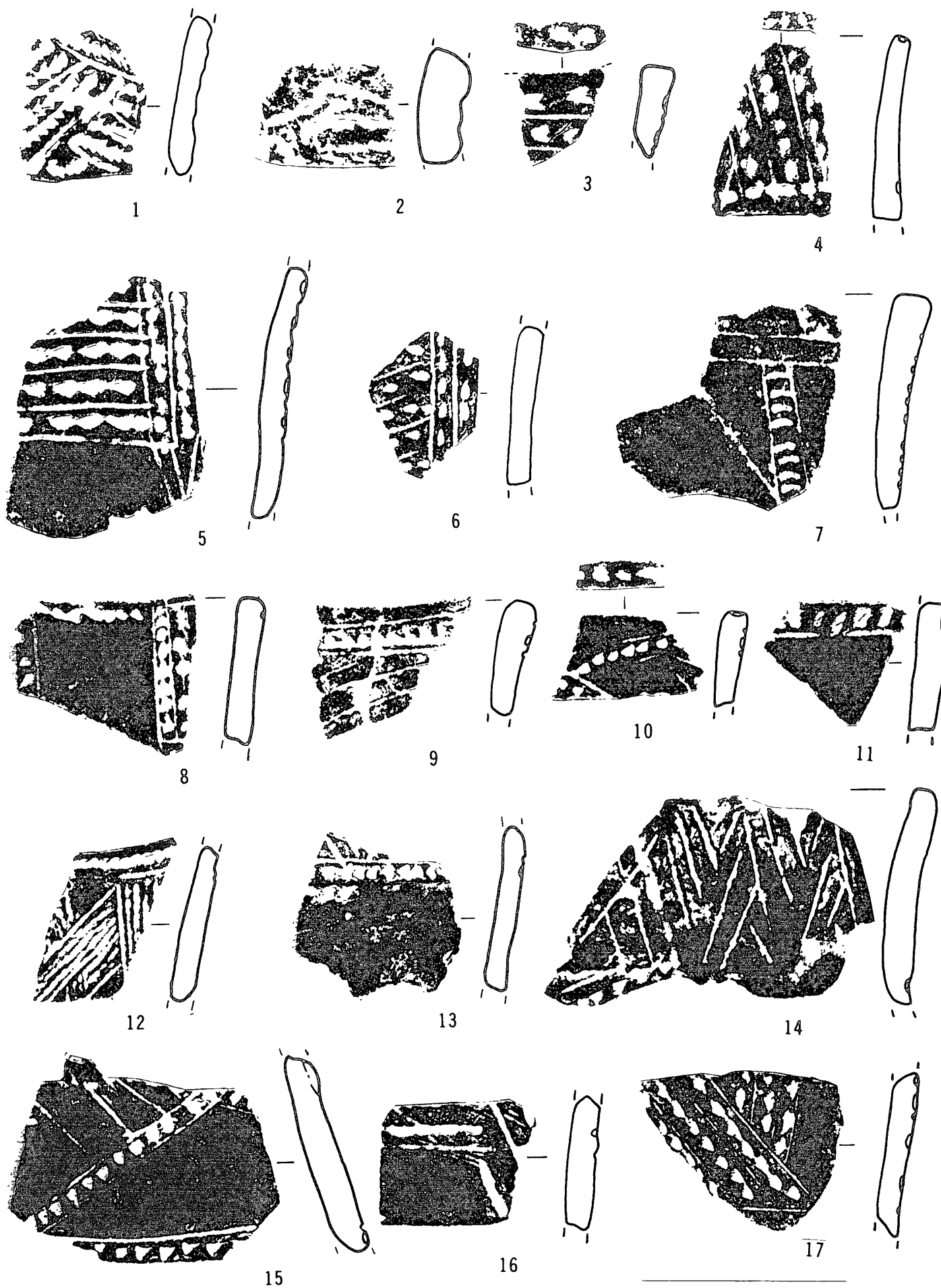
ではないかと推察される。第Ⅴ層の出土。

第21図2は山形口縁の資料とみられるが、口唇部欠損のため、正確な形状は不明。先述のように口径は推算9センチで、壺形の可能性も考えられる資料である。文様は三角形刺突文を沈線で縁取る形で施文される。三角形刺突文は途中で折れており、それに合わせて上部の沈線も屈折する。文様のこのような屈折をステップ文の一種と解すれば、本項に分類されるものである。三角形刺突文は右から左の方向へ描かれている。施文は深めだが、器面の凹凸が激しいため、拓影による文様は不明瞭である。上下の沈線間は1～1.3センチである。第Ⅴ層の出土。

③に相当するものは3点得られ、いずれも第Ⅴ層の出土である。第1文様帯の三角形刺突文と沈線の施文順序についてみると、沈線でまず区画をつくり、次に三角形刺突文を施す例と、逆の施文例が観察されるが、大部分は前者の方法に倣っている。また本項の第1文様帯については②の文様形態を部分的に残すものや簡略化が進んで所々空白部を形成するものもあることから、次のように3種に細分した。ただし、本区では3種のうち、次の(ロ)のみが出土した。

(イ)第1文様帯にステップを部分的に加えるもので、前項②の文様形態をわずかに残すものである。山形突起下には縦位文様を加える第2文様帯には複数の沈線による鋸歯文を付加する。

(ロ)第1文様帯は山形突起下に縦位沈線を施し、沈線間を横位文で埋めるが、前項の(イ)と違ってステップ文は施文されない。また、縦位文が山形突起下から外れる場合もある。第2文様帯に複数の沈線による鋸歯文を加える



第21図 A-1区出土の嘉徳I式A土器



場合もあるが無文のものもある。

(イ)横位文様を一段ごしに間引きするグループで第1文様帯が簡略化される。今のところ第2文様帯は不明。

本区第V層で得られた3点(第21図4～6)とも(ロ)に含まれる。

第21図4の口縁破片は口唇部、口縁部の2ヵ所に文様が施されている。文様は三角形刺突文と沈線の組み合わせからなる。口唇部の三角形刺突文は浅く不明瞭である。口縁部には右下りの沈線内に三角形刺突文が描かれているが、破片の左端には左下りの沈線文が認められ、方向の異なる文様を施文したようにも見受けられる。いずれにしても、文様の特徵から本項に分類してよい資料とみられる。また、第1文様帯の下端には小型の押し引き文を左から右へ描いているが、上位の斜沈線との関係でみると、斜沈線より先にこの押し引き文を描いている。沈線の間隔は0.8～0.9センチである。第V層の出土。

同図5は口頸部の資料で、沈線＋三角形刺突文を縦位と横位に配するが、施文順序は、まず前者を施し、次に後者を描いている。沈線の間隔は0.6～0.9センチで縦位より横位の方が幅が広い。三角形刺突文も沈線も鋭いタッチで描かれている。縦位文様は口縁部における器形との関係から山形口縁下に施されたものとみてよい。第2文様帯は縦位文様の下方にのみ施されている。したがって、かなり簡略化された文様となっている。この文様は逆三角形を呈するものとみられ、内部を斜辺と同方向の沈線で埋めている。施文は深めで明瞭である。第V層の出土。

同図6も口頸部の資料で、沈線＋三角形刺突文が縦位と横位に配され、前者は山形口縁

下に施されたものであろう。これも縦位の文様を施した後、横位文様を描いている。文様はいずれも鮮明である。第V層の出土。

④に相当するものは11点得られ、本区では最も出土量が多かった。第IV・V層で得られたが、そのうち第IV層は④に限られていることから本型式の中では最も若い種類かと考えられる。また、文様構成もバラエティーにとみ、下記のように3種に細分した。

(イ)第1文様帯のうち山形突起下に縦位の主要文様を配し、他を鋸歯文、網代文、その他の文様で飾るもの。

(ロ)第1文様帯に部分的に主要文様を残すもので、他の部分に装飾を加えず、無文部を作り出すもの。

(ハ)第1文様帯の上下端の部分に主要文様(沈線＋三角形刺突文)を施し、中央部を別の文様で飾るもの。

(イ)に含まれるものは、第20図2の1点(第V層出土)である。推定復元を試みたもので波状口縁の深鉢形である。施文部位は口唇部口縁部、胴上部の3ヵ所で、口縁部の第1文様帯は肥厚帯を形成する。口唇部は先端が方形の篋を用い、刺突文を深くかつ密に施す。口縁部の文様は縦位に展開しており、沈線＋刺突文は山形口縁直下だけでなく、一定の間隔をおいて断続的に施されるもののようである。この土器の刺突文は、今までの典型的なものと違い、三角形刺突文を採用せず、刻文を施している。刻文は有軸羽状の形をとる。また、第1文様帯の下端にも同種の刻文を1条圍繞させる。第1文様帯の他の部分を縦位の羽状文で埋める。第2文様帯は5～6本の

沈線を単位として逆三角形を描く。逆三角形は一定の間隔で描かれ、連続しない。

(ロ)に含まれるものは2点で、いずれも第Ⅳ層の出土である(第21図7・8)。

同図7は、有段の山形口縁の破片である。口縁部に沿って2条の平行沈線を横走させる間隔は約0.7センチである。山形口縁直下に沈線+刺突文を1条斜行させる。刺突文は弧状を呈する。斜行文の左右は無文である。沈線内の刺突文が三角形文とならず、半截竹管状工具による弧文となっていることから、本型式の変形文とみなされ、また斜行文の左右が無文化していることは文様の簡略化を意味するものと解される。以上から本型式における後出の形態かとも考えられる。施文は比較的浅めである。第Ⅳ層の出土。

同図8の口縁破片は、山形口縁の一部で、山形口縁直下に沈線+三角形刺突文を縦走させ、同種文様を一定の間隔において施文する本資料右端の沈線+三角形刺突文からすると三角形刺突文は沈線による長方形内部の文様と解することもできる。口縁上端にそって三角形刺突文を1列配するが、沈線は加えられていない。その下方は無文空白部を形成する。本資料も簡略化の進行した資料とみなすことができる。口唇上は無文。第Ⅳ層の出土。

(ハ)に含まれるものは8点で第Ⅳ層から5点(第20図3、第21図9~12)、第Ⅴ層から3点(第21図13~15)得られている。

第20図3は推定復元を試みた土器である。山形口縁で、頂部近くで段を形成する。この土器の最も大きな特徴は第1文様帯下端に沈線+三角形刺突文を1条描いていることである。つまり、沈線+三角形刺突文が極端に省略され、わずかに第1文様帯の下部に残存するという形態をとり、そして第1文様帯の残りの部分を網代文で埋めている。網代文は、

3本1組の斜沈線で描かれており、規格的である。第2文様帯も網代手法を採用し、中心部はX字状を呈し、その左右および下部にくの字状文を加える。前者は3本を単位とし、後者は1~2本からなる。この種の文様を一定の間隔において幾つか配したものと思われる文様は第1文様帯も第2文様帯も丁寧にシャープに描かれている。第Ⅳ層の出土。

第21図9は、口縁に沿って沈線+刺突文を一条圍繞させ、その下を斜沈線文で飾る。刺突文は先端が方形の篋を用いている点で、典型的な沈線+三角形刺突文から外れるものである。その点、後出の形態かと考えられる。全体的に施文は深めで明瞭である。第Ⅳ層の出土。

同図10は、口唇部、口縁部の2ヵ所に施文されており、口唇部には三角形刺突文のみを施文する。口縁部は沈線+三角形刺突文を鋸歯状に描いているが、左端の文様からすると菱形になる可能性もある。いずれにしても無文部の形成されていることから、文様の簡略化はいなめない。第Ⅳ層の出土。

同図11は胴部破片で、沈線+刺突文が横位に1条認められ、上端はちょうど沈線の部分で欠けている。三角形刺突文の代りに方形文を採用している点、前節の資料に通ずるものがあり、後出の形態とみられる。また、施文順序についてみると、まず沈線を描き、次に刺突文を施文している。施文は深く、明瞭である。第Ⅳ層の出土。

同図12は口頸部の資料で、沈線+三角形刺突文を1条上部に施す例である。篋は小型のものを使用しており、三角形刺突文も繊細である。上位文様の下方、つまり、頸部の文様は、方向の異なる沈線でもって大きく区画し、その内部をさらに二分し、そして同部を先述の三角形刺突文で埋める。三角形刺突文

は超小形で拓影では一見沈線にみえる。三角形刺突文は上から描く場合と、下から描く場合の2種認められる。刺突文は押し引きによって描かれ、密である。また区画内に小さな無文空白部をつくることもある。文様全体は規格的で緻密である。第Ⅳ層の出土。

同図13は頸胴部の資料で、文様帯はわずかに肥厚している。先端の尖った竈で沈線＋三角形刺突文を下端に配し、その上部に斜沈線を描いている。斜沈線文は前者の次に描いている。施文は深く明瞭である。第Ⅴ層の出土。

同図14は口縁部の資料で、直接接続はできないが、後述する同図15と同一個体に属するものである。第1文様帯は肥厚帯を形成し、その直下、つまり第2文様帯に沈線＋刺突文を施す。その点、第1文様帯に同文様を施す前記諸例と異なる。つまり、例外に属するものである。刺突文は方形を呈しており、前述した資料のように後出の形態とみられる。肥厚帯には斜沈線で鋸歯状文様を描く。施文はシャープである。また、第2文様帯の沈線＋刺突文の一部は第1文様帯におよんでおり、第1文様帯の次に描いたことがわかる。口唇部は無文。第Ⅴ層の出土。

同図15は前述したように、同図14の胴部にあたるとみられるものである。破片の左上端に肥厚部がわずかに残っており、その下の第2文様帯は沈線文と沈線＋刺突文の2種からなる。沈線文は斜行の方形文を形づくり、シャープな沈線で描かれている。沈線＋刺突文は現存部から推察すると三角形文を構成するようで、内部は無文空白部を形成する。施文順序についてみると先に沈線による方形文を描き次に沈線＋刺突文を描いている。また、後者の沈線＋刺突文についてみると、下部の文様の両端は破損のため確認できないが、上方の2つの沈線＋刺突文は上部で切り合い関係が

認められ、右側を先に描いたことがわかる。沈線＋刺突文を第2文様帯に描いていることおよび無文部の形成されていることから本標品も後出の形態とみられる。第Ⅴ層の出土。

### 不明

第21図3・16・17は、上記4種のいずれに分類すべきか、不明のものである。しかし、同図16・17は無文部が形成されることから第4種に含めることも可能であるが、今回は一応不明に分類することにした。

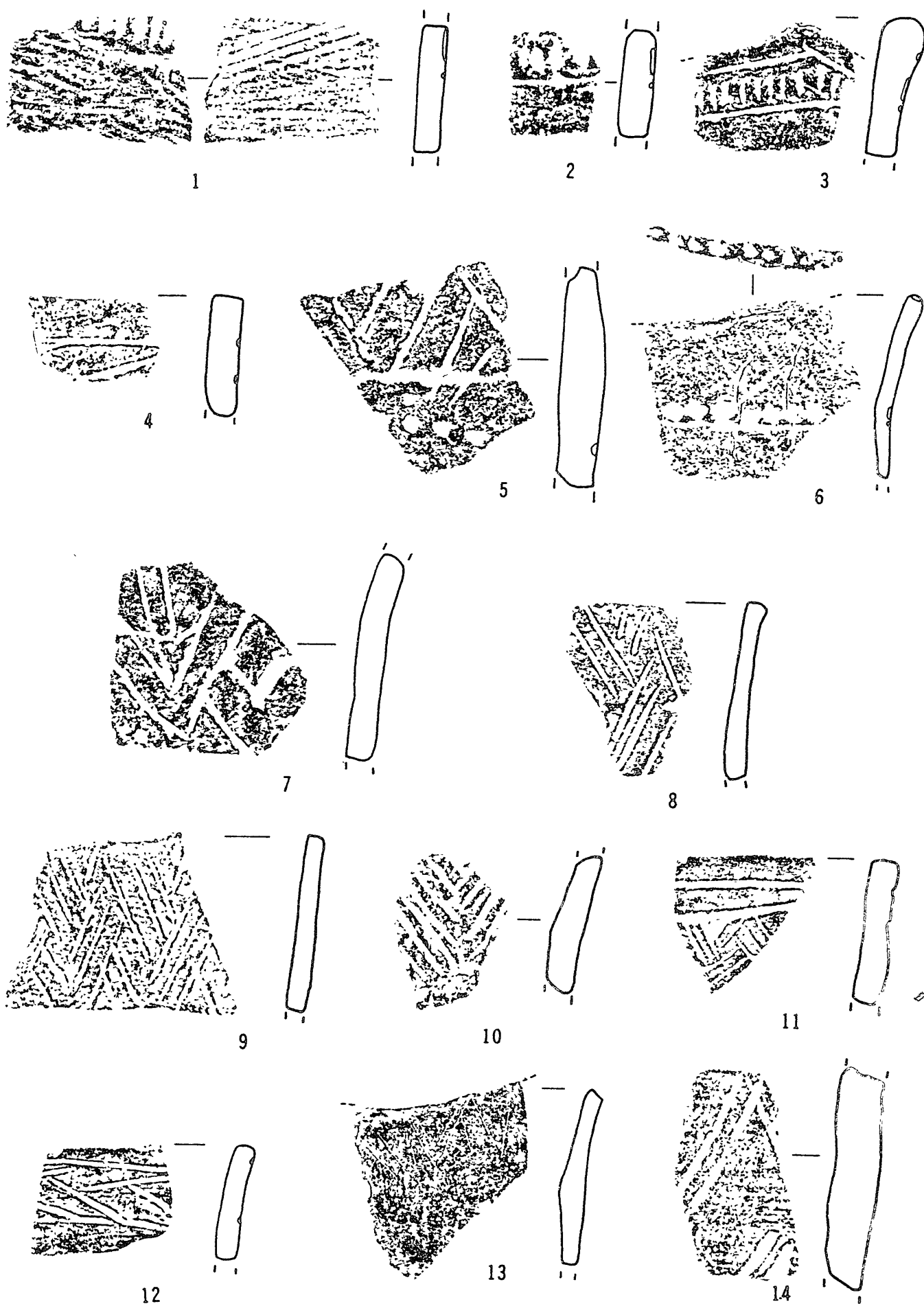
同図3は口縁部破片で、文様は口唇部と口縁外面に施されている。小破片のため、文様の全体像がつかめず本項に含めるものである。口唇部には先端がやや丸味をおびた竈を用いて刺突文を描き、口縁部を同種の刺突文と沈線文を組み合わせた文様で飾る。沈線は深めだが、刺突文は浅く不明瞭。第2文様帯は不明。第Ⅴ層の出土。

同図16は口頸部の破片で、横位に先の尖った竈で沈線＋三角形刺突文を施し、その右端を閉じる形で沈線を斜行させ、それと平行して三角形刺突文を描いている。文様全体の構図はつかめないが、簡略化の進行した資料とみなすことができる。三角形刺突文は押し引きによって描かれ、連続文となる。施文は深く、明瞭。第Ⅴ層の出土。

同図17は沈線＋三角形刺突文を交互に斜行させるもので、下端には1条の横位沈線が認められる。また、破片の右端は空白になっており、本標品も簡略化の進んだ資料とみることができる。施文は浅めであるが、文様は明瞭である。第Ⅴ層の出土。

### g) 嘉徳Ⅰ式B土器

本区では第Ⅳ層より2点、第Ⅰ～Ⅴ層の崩壊砂より1点の出土があり、うち1点は口縁



第22図 A-1区出土の嘉徳Ⅰ式B、嘉徳Ⅱ式土器

0 5 cm

部である。すべて小破片である。

### 器種・器形

本区出土の口縁破片および他区の類例を参考にすると、器種は深鉢形である。器形は口縁部の外反する形態に属し、底部は未発見だが平底とみてよい。口縁形態は山形口縁と平口縁があり、本区では前者が1点得られている。

器厚は 0.6～0.7 センチで一般に薄手の土器である。

胎土に含まれる混入物は、石英を主体に金雲母？などであるが、一般的に微細で、肉眼での観察は容易でない。しかし、稀に2ミリ程の石英片を混入するものもあり、特に第22図2は全体的に粒が粗い。

焼成は良好のものとやや悪いものの2種認められ、前者は2点（同図1・3）、後者は1点（同図2）である。

器色は茶褐色を基調とするが、同図2は両面とも暗褐色を呈する。

### 文様

器面調整は同図2・3についてみると、撫でが比較的徹底しているが、同図1は両面に条痕を残しており、特に裏面は著しい。

施文部位は、本区出土の資料では不明だが他の発掘区の資料を参考にすると、口唇部、口縁部、胴上部の3ヵ所である。

施文具は幅の広い単篋工具に属し、先端が方形のものと半截竹管状の2種類認められる

文様は横位の沈線が直線をなすものと曲線をなすものがあり、沈線間の刻文も真すぐなものや弧状のものが見受けられる。

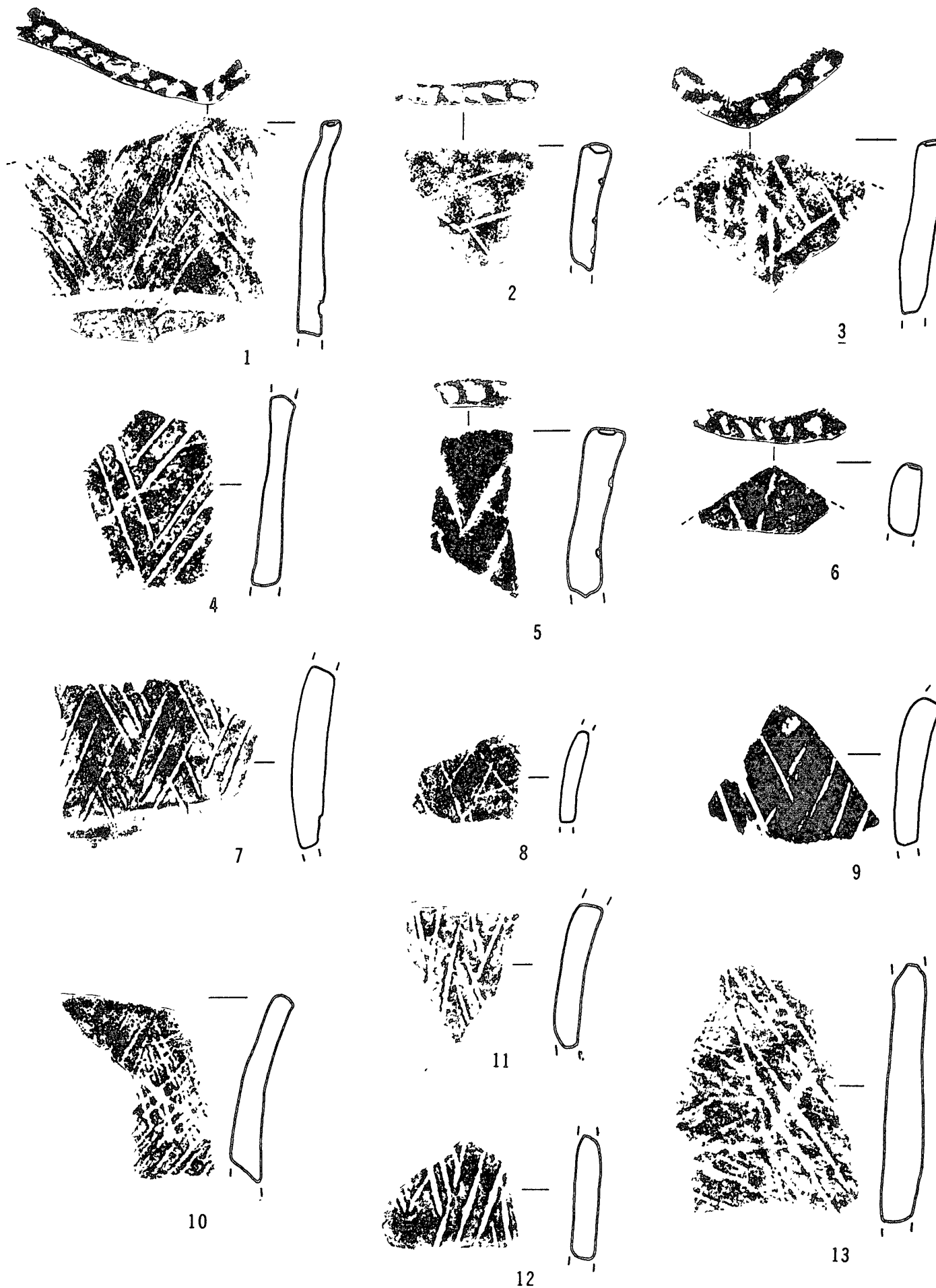
同図1（第Ⅳ層の出土）は頸胴部の破片で文様帯の下端部の資料である。沈線で弧を描き、上部に縦位の刻文を密に施す。刻文は右から左の方向へ移動しながら施文される。

同図2も頸胴部の資料で、沈線を横位に施し、その上部を刻文で飾っている。刻文は太めで、本区の他の2例に比べると施文はやや雑である。しかし、沈線も刻文も深めで明瞭である。第Ⅳ層の出土。

同図3は山形口縁の破片で、第Ⅰ～Ⅴ層の崩壊部での採集品である。文様はまず、口縁に沿って平行沈線を描き、その内部を弧文で埋めている。平行沈線の上方のものは、山形口縁下で右側のものが左側のものを切る形になっており、施文順序は前者が後者に先行している。弧文は 0.3～0.55センチの長さで約 0.2 センチ間隔で密に施されている。それ以下における文様の有無については不明。施文はシャープで、明瞭である。

### h) 嘉徳Ⅱ式土器

本区では総数40点得られ、うち28点を図示（第22図4～14、第23図1～13、第24図1～3、第25図）した。口縁部は17点検出され、復元可能な土器も4点得られた。図示した28点の層位別出土状況は第11表の通りで、第Ⅳ・Ⅴ層を中心に出土するが、第Ⅰ層でも得られ、また、崩壊層からも若干検出された。



第23図 A-1区出土の嘉徳II式土器

0 5cm

第11表 A—1 区における嘉徳Ⅱ式の層位別出土状況

種別 層序	1				2						3						4		不明		計
	イ		ロ		イ		ロ		ハ		イ		ロ		ハ						
	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴	口	胴			
I																		1		1	
II																					
III																					
IV	2	1		1		1			1				2		1					9	
V	1	1	1	3	2		1				1					2	1			14	
VI																					
VII																					
崩	2														1				1	4	
計	5	2	1	4	2	1	1		1		1		2		2	2	1		2	1	28

## 器種・器形

本区出土の復元土器および他の口縁資料から判断すると深鉢形に限られ、他の器種は見当らない。深鉢形の器形は口縁部が直口するものと外反するものの2種認められる。前者に含まれるものが2点(第22図9、第24図3)で、後者に含まれるものは12点(第22図6・8・12・13、第23図1～3・5・10、第24図1・2、第25図)、そのほか不明が3点(第22図4・11、第23図6)ある。

深鉢形の口縁部はほとんどが山形口縁であるが、平口縁も明確な資料が2点(第24図3第25図)得られている。また、口縁部は肥厚するものとしなないものがあり、本区では両者得られているが、後者が大半を占る。

嘉徳Ⅱ式のサイズは口径を基準にすると次の3種に大別される。

- ①大型＝口径が20センチ前後のもの。
- ②中型＝口径が15センチ前後のもの。
- ③小型＝口径が10センチ前後のもの。

前述の復元土器は、推算口径・器高とも第12表の通りで、第25図以外は中型の土器に属

する。第25図は第12表のように口径が32センチもあり、南島の土器の中ではきわめて大型の土器に属する。

第12表 嘉徳Ⅱ式の推算口径・器高

図版番号	種類	推算口径	推算器高	層
第24図1	1口	16.3cm	21.9cm	V
〃 2	1イ	16.7cm	22.1cm	〃
〃 3	2口	13.3cm	21.7cm	〃
第25図	3イ	32cm	23.7cm	〃

第24図1・2は山形口縁の土器で、上面観は山形頂部でコーナーを形成し、ほぼ方形に近い形となる。また同図3と第25図の平口縁土器は上面観が円形で、2種の形態が認められる。

底部は、第24図2の復元土器と同層出土の底部資料から平底と推定される。

器厚は0.3～1.5センチで、薄いものから厚いものまであり、0.7センチ前後のものが一般的である。

胎土には石英を主体に金雲母?などが少量

含まれ、粒が細かいのが一般的である。しかし、2ミリ程のやや大粒の石英や金雲母？も稀に見受けられる。

焼成はすべて良く、特に復元を試みた第24図3や第22図5・9・12・13、第23図7は良好で堅い。

器色は表裏面とも茶褐色を基調とするが、橙褐色や灰褐色を呈するものも少量みられた茶褐色を呈するものの中には煤けて黒ずんだものもある。

## 文様

器面調整は撫で仕上げが普通で、条痕や擦

痕を残すものは少ない。条痕や擦痕の残存状況は第13表の通りであるが、条痕を施すのはわずかに3例、他はすべて擦痕である。

表面に条痕を残すものは1点（第24図2）で、胴部から底部付近へかけて施されており胴部では横方向、底部直上では斜め方向である。全面撫でられているために条痕はやや浅めである。条痕を裏面に残すものは2点である。第22図14は横方向の条痕を施す。しかし大部分撫でられ消えかかっている。第23図13も横方向の条痕を施すが、比較的細かく擦痕に近い条線である。

第13表 嘉徳Ⅱ式の条痕・擦痕の残存状況

種別 条痕・擦痕 の残存状況		1 種		2 種			3 種			4 種	不明	計
		イ	ロ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ			
表 面	裏 面											
条 痕	条 痕											
条 痕	擦 痕											
擦 痕	条 痕			1					1			2
条 痕	無 し	1										1
無 し	条 痕											
擦 痕	擦 痕				1		1					2
擦 痕	無 し	2	2					1	1			6
無 し	擦 痕	1									1	2
無 し	無 し	3	3	2		1		1	2	1	2	15
計		7	5	3	1	1	1	2	4	1	3	28

擦痕は横位、縦位、斜位が認められ、表面についてみると横位が8点（第22図8・9・12・14、第23図11・13、第24図3、第25図）、斜位が2点（第23図1・8）である。表面の擦痕は第24図3のように器面全体に施す例もみられるが大部分はごく一部に残存し、したがって見逃しがちである。裏面についてみると横位が1点（第25図）で、縦位2点（第24図2・3）、斜位が1点（第22図7）である。

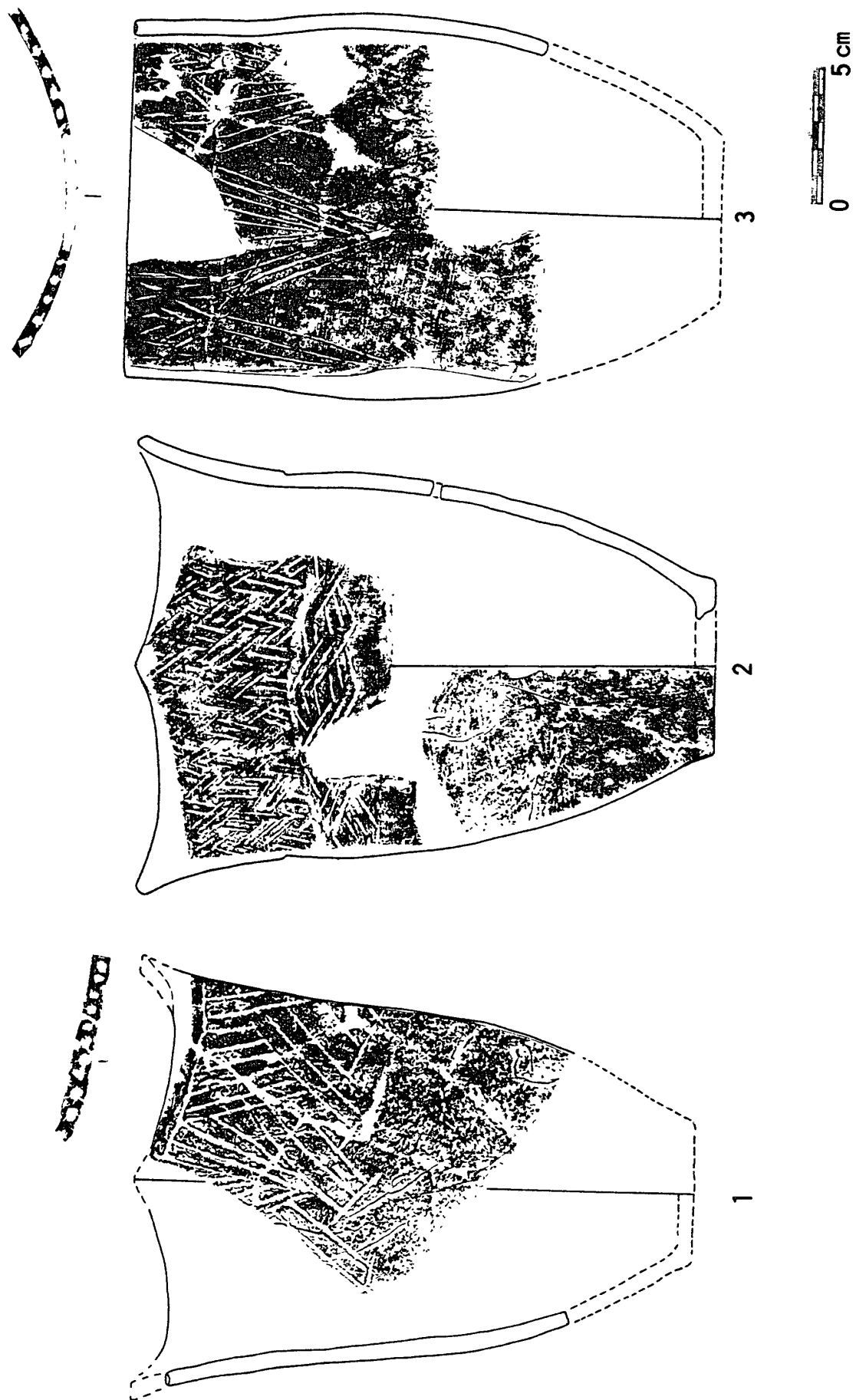
裏面は撫でが徹底し、擦痕はごく一部に見られる程度である。

施文部位は口唇部、口縁部、胴上部の3ヵ所である。

施文具は、先端が尖ったものや丸味をおびた2種の棒状工具と先端が方形を呈するものなど3種類の工具を用いている。

表面の文様は口頸部の第1文様帯と胴上部の第2文様帯に区分できる。他の発掘区出土





第24図 A－1区出土の嘉徳Ⅱ式土器



第25図 A - 1 区出土の嘉徳Ⅱ式土器

のものを含めると、文様は次の4種に分類される。

①第1文様帯に籠目状文を配置するもので第2文様帯は無文かさもなければ菱形文で飾るもの。

②第1文様帯に鋸歯文を密に施すもので、第2文様帯には尖端を下に向けた逆三角形文を配し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるものや、他方、全く無文のものもある。

③羽状文または有軸羽状文で第1文様帯を飾るもので、第2文様帯には逆三角形文を施し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるものや、全く施文しない例もある。

④第1文様帯に斜沈線を用いて格子状文を施文するもので、第2文様帯は資料がなく現在のところ不明である。

①に属するものは第Ⅳ・Ⅴ層、崩壊土から12点得られた。第1文様帯の籠目文は変形文を含め次の2種に細分される。

(イ)規格籠目文

(ロ)変形籠目文

(イ)に含まれるものは第Ⅳ層から3点、第Ⅴ層から2点、崩壊層から2点得られた。

第22図11は口縁部破片で、まず口縁部に沿って2本の平行沈線を施し、その下部を籠目文で飾る。籠目文は3本1組の沈線で描かれており、沈線の長さは1センチ前後である。現存部からみて、おそらく密に施す例であろう。施文順序の全体的方向は右から左への移

動とみられるが、部分的に右へ移動する箇所も見受けられる。施文順序は籠目文の次に上部の横位沈線を引いたとみられる。籠目文は細く、横位沈線はやや太目である。文様はきわめて明瞭。第Ⅳ層の出土。

第23図3は山形口縁の破片で、口唇部、口縁部に文様を施している。口唇部は三角形刺突文をやや間隔をおいて深く施文し、口縁部は2～3本1組の沈線で籠目文を描いている。沈線はシャープであるが、間隔は一定せず、多少雑な感じを与える。第Ⅳ層の出土。

同図4は口頸部資料で、3本1組の斜沈線文で籠目文を描く。沈線はシャープだが、間隔は一定せず、空間の広い部分も見受けられる。沈線の長さからすると大ぶりの文様に分類してもよいであろう。第Ⅳ層の出土。

同図7は口頸部の資料で、第1文様帯は肥厚している。籠目文は3本1組の沈線で描かれているが、文様帯下端では2本の部分も見受けられる。沈線の長さは2センチ前後で、文様はやや大ぶりの方に入る。また、力強く施文され、かつ規格的である。文様は左から右の方向へ移動しながら施されている。

第24図2は復元土器で、第1文様帯は肥厚しており、同部に典型的な籠目文を施文する。沈線の長さは約1.5センチで、3本を1組とするが、空間のせまいところでは2本のケースも見受けられる。施文は全体的に左から右へ移動しながら行なわれている。肥厚帯直下を飾る第2文様帯も3本1組の沈線を組み合わせながら菱形文を描く。菱形文は右下りの沈線を先に描き、次に左下りの沈線を加え、菱形文を作るが、施文は左から右へと移動する。第1文様帯の沈線も第2文様帯の沈線もシャープである。口唇部は施文されていない。第Ⅴ層の出土。

第22図8は口縁部破片で、3本1組の沈線

で籠目文を描く。沈線の長さは約 2.5センチで、施文具は先端がやや丸味をおびた工具を用いており、沈線に鋭さが無い。しかし、施文は明瞭である。崩壊土からの出土である。

同図9の口縁部破片も崩壊土からの出土で籠目文は大ぶりに属する。沈線はシャープで3本を1組とするが、部分的に1本の箇所も見受けられる。施文は左から右へ移動している。

(ロ)に含まれるものは、第Ⅳ層から1点、第Ⅴ層から4点の計5点得られた。

第22図5は頸部の破片で、第1文様帯の下半部を含む資料である。下端に変形の三角形刺突文を1条横走させ、その上方に籠目文を配する。沈線の間隔はやや開き気味で、大型の籠目文に属するものであろう。沈線の施文順序は左から右へ移動している。第Ⅳ層の出土。

第23図8は頸部の資料で、外面に方向の異なる斜沈線を刻むが、文様の全体像は明らかでない。しかし、中央の左傾の斜沈線は途中で止っており、籠目文の可能性が考えられる。沈線は細くシャープで、施文順序は右傾の沈線を施した後、左傾の沈線を描いている。第Ⅴ層の出土。

同図11・12はいずれも口頸部資料で、斜沈線を用いて変形籠目文を描く。11の沈線は2本を単位としているようであるが、多少方向がずれたり、規格性に欠けている。同図12も前者の部類に属するものとみられる。部分的に施文順序のおさえられる資料である。いずれも沈線はシャープで、第Ⅴ層の出土である。

第24図1は復元を試みた土器で、文様は口唇部、口頸部の2ヵ所に描かれている。口唇部は三角形刺突文が施され、口縁外面を籠目文で飾っている。施文は胴上部におよぶ。外

面はまず、口縁に沿って一条沈線を施し、その下に2～6本の沈線を組み合わせて籠目類似文を描く。山形口縁下は放射線状の文様となっている。また、左下りの沈線は下端を右傾の斜行沈線で締め括っている。施文の順序は右から左の方向である。文様は雑で、沈線の間隔は一定せず、施文も部分的に浅くなっている。しかし、沈線は一般にシャープである。第Ⅴ層の出土。

②に属するものは第Ⅳ・Ⅴ層から5点得られた。②の鋸歯文を次のように3種に細分した。

(イ)横位に連続した鋸歯文を施すもの。

(ロ)横位にハの字状の断続する鋸歯文を施すもの。

(ハ)変形した鋸歯文を施すもの。

(イ)に含まれるものは、第Ⅳ層から1点、第Ⅴ層から2点出土した。

第22図14は口頸部資料で、2本1組の平行沈線で連続鋸歯文を描く。現資料では上下に2組認められる。上方の鋸歯文からすると施文は右から左へ移動するようである。鋸歯文は大型の部類に属する。沈線は先端が幅2ミリ程の丸味をおびた叉状工具を使っており、したがって、沈線はやや太めである。第Ⅳ層の出土。

第23図5は口縁破片で、文様は口唇部と口縁部の2ヵ所に施文されている。口唇部には三角形刺突文を深く施文する。口縁外面には単沈線で連続した鋸歯文を描く。本標品では上下に2列確認でき、沈線はシャープで施文は深い。施文順序は左側の沈線の次に右側のものを描いている。つまり、施文は左から右へ移動しているのである。第Ⅴ層の出土。

同図6も山形口縁部の破片で、口唇部、口

縁部の2ヵ所に文様を施している。口唇上はやや深めの三角形刺突文を施文しており、口縁外面を連続した鋸歯文で飾っている。鋸歯文は1本単位の沈線で描いており、施文方向は右から左である。第Ⅴ層の出土。

(ロ)に含まれるものは、第24図3の1点のみである。文様は口唇部、口縁部、胴上部の3ヵ所に施されている。口唇上には三角形刺突文を施し、口縁部の第1文様帯をハの字状の断続した鋸歯文で飾る。鋸歯文は上下に2段施されている。沈線は0.8～1センチの長さで、細くシャープに描かれており、大部分は対になっているが、対にならない箇所もある。施文方向および順序は文様が連続していないために確かめ得ない。第2文様帯には、先端を下に向けた縦長の逆三角形を配し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるもので、連続する形で描かれ、施文範囲は胴中央におよぶ。沈線は第1文様帯と同様に細くシャープである。第Ⅴ層の出土。

(イ)に含まれるものは、第22図13の1点のみである。文様は口縁部だけに限られ、それ以下は無文である。斜沈線を雑に配するため部分的に鋸歯文ができる。したがって、変形鋸歯文の部類に含めることにした。沈線は繊細で、浅く、したがって文様は目立たない。第Ⅳ層の出土。

③に属するものは第Ⅳ・Ⅴ層を中心に第Ⅰ層、崩壊土からも得られた。出土数量は7点である。文様は次の3種に細分される。

(イ)上段に羽状文を施し、下段には別の文様を配するもの。

(ロ)横位に羽状文だけを施すもの。

(ハ)有軸羽状文、またはその変形に分類できるもの。

(イ)に含まれるものは、第25図の1点のみである。本資料は口径約32センチの大型の土器で、文様は口唇部と口頸部に施されている。口唇上は三角形刺突文を施文するが、雑で不鮮明な部分もある。第1文様帯は1段の横位羽状文からなる。羽状文の施文順序は上を先に描き、次に下を描いている。第2文様帯は三角形刺突文を2列横走させ、両者の間に連続鋸歯文を配する。施文順序は三角形刺突文を施し、その後鋸歯文を描くが部分的に重なるところもある。施文は全体的に浅めであるが、文様は明瞭である。第Ⅴ層の出土。

(ロ)に含まれるものは、第Ⅳ層から2点得られた。

第22図12は口縁部破片で、口縁外面にまず2本の平行沈線を横走させ、次にその内部を羽状文で埋める。羽状文の施文順序は右傾の下方の沈線を施してから上方の左傾の沈線を施している。施文具は先端が丸味をおびた工具を用いており、施文は浅めだが、文様は明瞭である。口唇上は無文。第Ⅳ層の出土。

第23図2は口縁部資料で、文様は口唇部、口縁部の2ヵ所に施文される。口唇上には三角形刺突文を深く施し、口縁部には羽状文を描く。右向きの変形羽状文で、施文順序は下を先に描き、次に上方の沈線を描いている。沈線はシャープで、文様は明瞭。第Ⅳ層の出土。

(ハ)に含まれるものは、第Ⅳ層から1点、第Ⅴ層から2点、崩壊土から1点の計4点得られた。

第23図1は山形口縁の破片で、文様は口唇部と口縁部の2ヵ所に施されている。口唇部の文様は三角形刺突文で、密である。外面の文様はまず、頸部下端に幅のある沈線を横走させ、この沈線がやや深めに刻まれたために、沈線の上端は段を形成し、疑似肥厚帯をつく

る。この肥厚帯が文様帯となる。文様は方向の異なる沈線を組み合わせながら羽状文を描く。したがって、羽状文の方向も一つごとに異なっている。羽状文をつくる細沈線はシャープである。文様はまず、頸部下端の幅のある沈線を先に描き、次に上方の羽状文を描く。羽状文は左から右へ移動しながら描かれている第Ⅳ層の出土。

第22図10の口頸部資料は方向の異なる数条の斜沈線を組み合わせるもので、第23図1類似的の羽状文を構成するものと思われる。施文は左から右へ移動している。沈線はやや太目で浅く、間隔も一定せず、雑である。第Ⅴ層の出土。

第23図9は頸部の資料で、右傾と左傾の斜沈線を組み合わせるもので、同図1と同じく羽状文を構成するものであろう。沈線は浅めで、間隔も一定せず、施文も雑である。沈線の切り合い関係からすると施文は右から左へ移動している。第Ⅴ層の出土。

同図13は頸部の破片で、外面をまず、縦位で区切り、その左側に横位の有軸羽状文を配し、右側を斜沈線で埋めている。施文順序はまず、縦位沈線を施し、次に右側の斜沈線を描き、その後、左側の有軸羽状文を描いている。有軸羽状文は上から下に施文する。左右とも文様は違うが有軸羽状文が認められることから、本項に含めた。文様は力強く描かれているが、全体的に雑である。崩壊砂層からの出土である。

④に属するものは、第23図10の1点のみである。同資料は口縁部の破片で、口縁外面に細かい斜沈線を方向を変えながら無造作に刻む。基本的には羽状文の一種かと考えられるが、部分的に格子文となるところもあり、とりあえず本項を設けたが、不明の部に移すべき資料かもしれない。格子文部の施文順序は

右傾のものが左傾のものに先行する。沈線はシャープである。第Ⅴ層の出土。

次に分類不能のもの3点について述べる。

第22図4は口縁部破片で、口縁外面にまず横位の沈線を施し、下方に斜沈線を描いている。以上からどういう文様に属するか不明であるが、羽状文の可能性も考えられる。沈線はやや太めである。第Ⅰ層下部の出土。口唇上は無文。

同図6は口縁部の資料で、頸部やや下方に三角形刺突文を1条横走させ、その上部が文様帯となる。文様帯には方向の異なる斜沈線を刻むが規則性がなく、かつ、まばらで文様のイメージが出てこない。沈線は浅めである。しかし、三角形刺突文は力強く描かれ、直下に横線を加えているが、この沈線のせいで上部はわずかに肥厚しているかに見え、いわゆる疑似肥厚帯をつくる。口唇部にも三角形刺突文を施す。崩壊砂層からの出土である。

同図7は口頸部の資料で、一部に鋸歯文も認められるが、鋸歯文の中央に2本の縦沈線が加えられ、放射状文に類似するところもある。沈線の交わる部分についていえば、右を先に描き、次に左の沈線を描いている。施文は雑であるが、文様は明瞭である。第Ⅴ層の出土。

#### i) 神野D式土器

伊波式土器の祖型の一つと考えられるもので、新型式に属し、これを神野D式と仮称する。本区では5点（第26図1～5）得られ、その内2点の口縁破片については図上復元を試みた。出土層は1～4が第Ⅴ層下部、5は壁面崩壊砂層より得られたものである。

#### 器種・器形

現在までのところ壺形と確認できるものは

なく、すべて深鉢形である。深鉢形は図上復元を試みたもの（第26図1・2）を参考にすると、口径が胴の最大径よりも大きく、口縁部が外反し、頸部でしまり胴上部がわずかにふくらむ平底の器形である。口縁部は4個の山形突起をもち、同部でコーナーを作る。そのため上面観は丸味のある方形を呈する。また、口縁部を肥厚させ文様帯とする。肥厚帯の上下の幅は6センチ前後である。肥厚は面縄束洞式などとは異なり、微弱でかろうじて認められる程度である。サイズは第26図1が口径推算22.4センチ、器高約23.7センチ、同図2が口径推算18.2センチ、器高は約19.8センチである。またA—3区では口径約32センチ、器高推定28センチの大型のものが1点得られており、本型式のバリエーションを窺うことができる。ただ、資料が少なく、一般的なサイズを抽出するところまでは至っていない。

焼成は良い部類に属するが、第26図2のように脆いものもある。色調は同図1・3～5は茶褐色、同図2は赤褐色で、いずれも煤けて暗褐色をおびる箇所がある。器厚は6ミリ前後である。胎土混入物には石英とチャートがあり、1～4は両者を含むが、量的には石英が圧倒的に多い。5も両者を含むものと考えるが。器面ではチャートは観察できない混入物の大きさは1ミリ前後のものが一般的である。

### 文様

器面調整は最終的に撫で消し手法を行なうが、徹底していないため、ほとんどのものに擦痕が観察できる。擦痕は横方向の細いものが多い。ただし、第26図1の表面は胴部が斜め方向、口頸部から胴上部にかけては横方向で、施文順序は前者が先行している。また同

図2の裏面は縦位に近い斜め方向の擦痕が胴下半部に施されている。

施文具はすべて叉状工具を使用しており、工具幅は6ミリ前後であるが、2は幅4.5ミリと小型である。

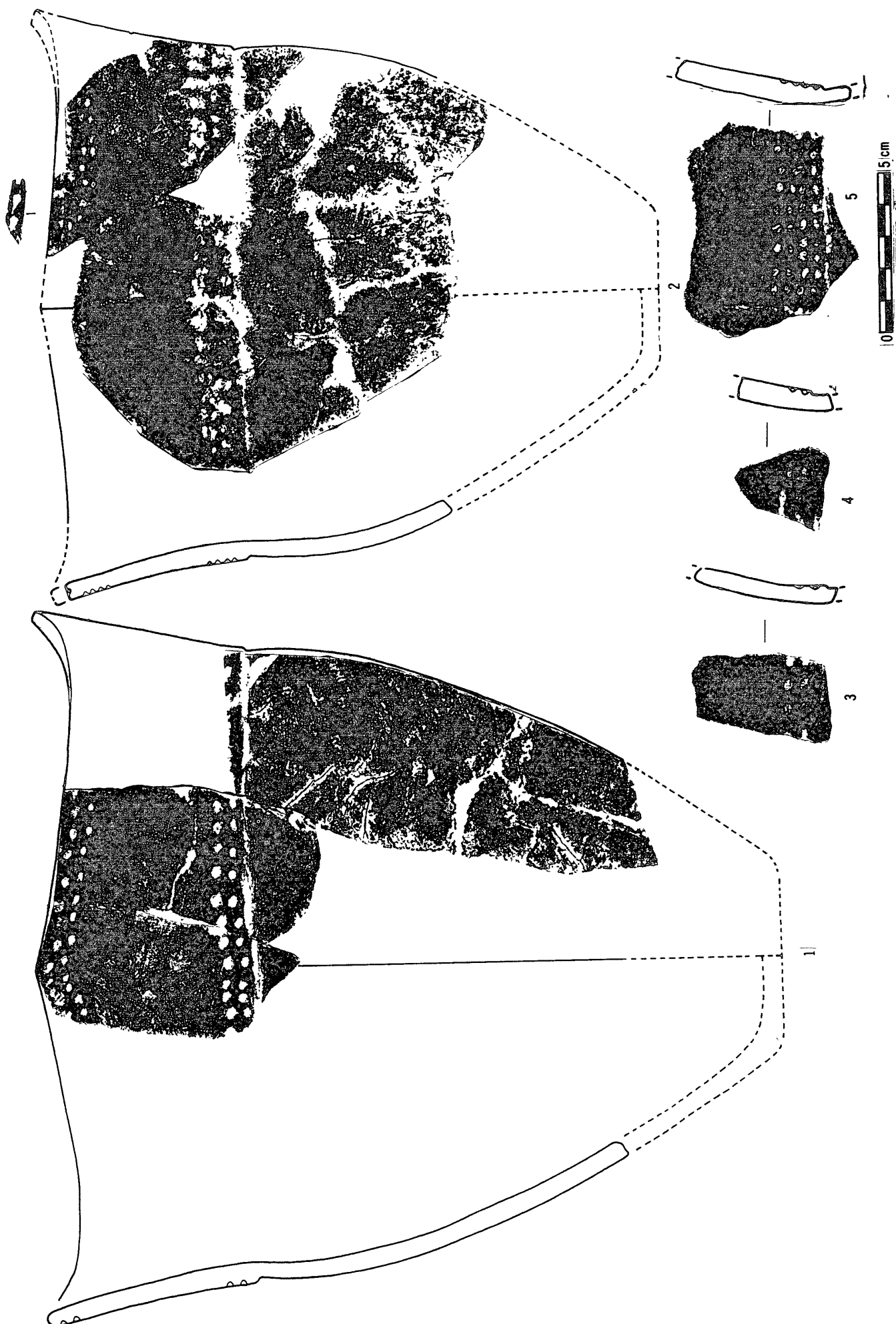
施文部位は口縁肥厚帯と口唇部であるが、口唇部を施文の対象としないもの（第26図1）もある。口唇部に文様の認められるものは、第26図2で文様は先端三角形状の単寛工具により刺突文を施文する。

口縁部の文様は先述した口縁部肥厚帯の上端（第1文様帯）と下帯（第3文様帯）に点刻文を施し、両者の中間（第2文様帯）は無文部を形成する。

点刻文は叉状工具による2点1組のものをそれぞれ1組、あるいは2組配する。1組配するものは次項の神野E式、2組配するものは伊波式に特徴的な文様である。ここでは前者をaタイプ、後者をbタイプと仮称することにする。

aタイプに属するものは第26図1・3・4で、1と3は同一個体のものと思われる。1・3は工具の先端がやや丸味をおびたものを用いており、4は方形を呈する工具により施文されるが、文様が小さく、ほとんど目立たない。bタイプに属するものは同図2・5で2は叉状の両先端がやや鋭い工具、5はハの字状を呈するが、実験の結果、両者とも半截竹管状工具による施文が可能である。文様はともにかなり密に施文され、2はやや繊細である。

前述したように1～4は第V層40～60センチレベルでの出土で、同層は60センチ前後の厚さを有し、40～60センチレベルはA—3区の第V層cに対比される。



第26図 A - 1 区出土の神野D式土器



## じ) 神野E式土器

伊波式土器の先行型式と考えられるもので新形式に属し、これを神野E式と仮称する。本区では11点出土しており、第27図1～11に図示した。完形品はなく、すべて破片であるそのため中には前項で述べた神野D式との区別が困難なものがあり、不明の項を設けるべきかと考えたが、とりあえず本項にまとめた出土層は第27図1～7は第Ⅳ層、8～11は第Ⅴ層である。

### 器種・器形

器種はすべて深鉢形に属し、壺形や他の器種は現在のところ確認されていない。深鉢形は本区および他区の復元資料を参考にすると口縁がゆるやかに外反し、頸部でややしまり胴部がわずかに脹らむ平底の器形である。口縁形態としては山形口縁は認められるものの平口縁の有無については現段階では不明である。山形口縁は4個の山形突起を持ち、同部において若干角張るため、上面観は脹らんだような方形となる。

器厚は6ミリ前後を通例とするが、第27図1のように頸部で約8.5ミリと厚く、口唇部へ次第に薄くなるもの(約5ミリ)や、同図6のように約4ミリと非常に薄手のものもある。胎土混入物には1ミリ前後の石英、金雲母?、チャートが認められる。第27図1・3・5は石英を多量に含み、特に3は著しい同図2・4・6・7・10は石英と金雲母?を含むもので、一般に前者が多く、後者は比較的少ない。ただし10は多少異っており、金雲母?もかなり目立つ。9は石英とチャートをほぼ同量混入するものである。8は他と異なり、石英よりもチャートが目立ち、かつ著量である。

焼成は良好だが、3・10のように脆いもの

もある。器色は茶褐色を基調とする。しかし3・6・10のように煤けて暗褐色を呈するものもある。

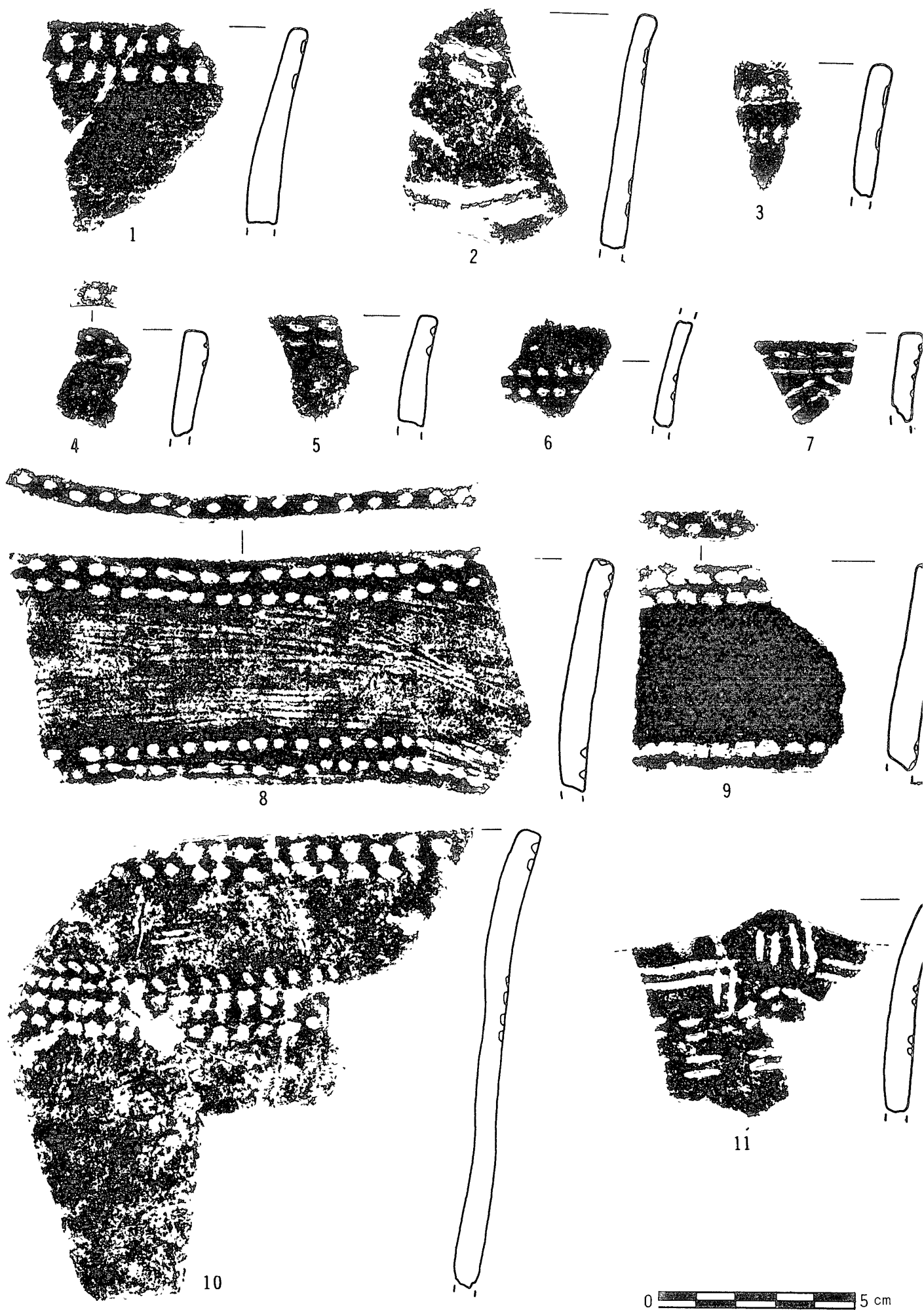
### 文様

器面調整の方法としては、最終的に撫で消し手法を用いるが撫でが徹底せず、擦痕を残すケースが多い。擦痕は第27図1・2・4・5・8～10のように横方向あるいはそれに近いものが多く、縦方向のものは同図6の1点である。また、擦痕は一般的に細いが1・8は比較的粗く条痕に近い。

施文工具には叉状工具と単篋工具があり、前者が第27図2・4～7・10の6点で、後者は1・3・8・9の4点である。叉状工具の先端の幅は6ミリ前後が普通だが、2のように約8ミリと幅広のものもある。単篋工具には先端が1のように方形のもの、3のように丸味を帯びたもの、8のように三角形状のものがあり、工具幅はそれぞれ3.5ミリ、5.5ミリ、2.5ミリである。

施文部位は、口縁部と口唇部に限られるが口唇部に施文しないものもある。口唇部に施文するものは、第27図4・8・9の3点である。文様は3点とも列点文を施しており、施文は密であるが、9は浅めで不明瞭。

次に本型式で最も重要な特徴である口頸部の文様について述べる。口頸部の文様は3段認められ、口縁上段を第1文様帯、中段を第2文様帯、下段を第3文様帯と呼称することにする。第1文様帯と第3文様帯には点刻文刺突文、あるいは押し引き文など同種の文様を施し、第2文様帯を無文空白とするかあるいは沈線文や押し引き文など数種の文様で埋める。第1・第3文様帯の文様は叉状工具による2点1組のもの、または単篋工具による2条1組のものをそれぞれ1組ずつ配



第27図 A-1区出土の神野E式土器

する。このような文様構成の相違により下記の3種に細分した。

第1種 第2文様帯を無文空白とするもの

第2種 第2文様帯を数種の文様で埋めるもの。

第3種 変形文様を施すもの。

第1種は第27図1～6・8～10の9点で、ほとんどのものがこれに属する。このグループは叉状工具を用いるものと単篋工具を用いるものの2種に細分され、前者は2・4・5・6・10で、後者は1・3・8・9である。

イ) 叉状工具を使用するもの

2は粗悪な作りの土器で文様も雑である。

第1文様帯には、やや太めの幅広の叉状工具による点刻文類似の文様を斜行させる。第3文様帯には同工具による短沈線を斜行させる。短沈線の長さは2センチ程あり、伊波式でいう中沈線に相当する。この沈線は途中でくの字形に屈折する。浅めの施文である。4・5は点刻文を施すもので、文様は比較的整然としている。6は連点文を施すが、これも丁寧に施文されている。施文は左から右へ方向である。10は点刻文を第1文様帯に1組、第3文様帯に2組施すもので、本型式の概念から若干外れるものであるが、本型式の変形文とみてよいであろう。叉状工具は半截竹管状のものを用いており、そのため施文された文様は、ハの字状を呈する。施文方向は第1・第3文様帯ともに左から右へ行なうが、第3文様帯の施文に際しては、工具を表裏逆に持ち変えており、そのためハの字文の向きは上下逆になっている。施文は雑で、第3文様

帯では重なる部分も見受けられる。

ロ) 単篋工具を使用するもの

1は口縁破片で、横捺刻文を2条施す。文様は比較的深く、整然としているが、単篋によるため上下の刻文は対にならない。3・9は幅広の工具により、押し引き文を施文するもので、連続して施文するために施文部は凹線状を呈する。施文は浅い。8は刺突文を施文するもので先端の尖った工具を使用するために文様は三角形を呈する。口唇部もともに文様は右から左へと施文されており、本項における右から左への唯一の施文例である。

第2種に属するものは同図7の1点だけである。第1文様帯に叉状工具による連点文を施し、第2文様帯には同種文様を鋸歯状に展開させる。文様は密で、かつ整然と施文されている。

第3種は同図11で、山形頂部がコーナーを形成する口縁部破片である。口縁部には、叉状工具により横位文様を3条施すが、それぞれ文様は異なっている。最上段は長沈線を施し、沈線は山形直下で、いったん途切れ、同部に縦長の刻文を2組配する。中段の文様は同工具により、点刻文を左から右へと施文し山形直下で小さな曲線を描く。最下段は同工具により、約1センチの短沈線を水平に圍繞させるもので、このように3種の文様を併用する例は、神野E式としては特殊なものである。

以上、略記したように本型式の口縁部の文様は次項で述べる伊波式に通ずるものであるが、伊波式が第1・第3文様帯に2点1組の文様をそれぞれ2組ずつ施すのに対し、本型式は1組ずつ施すもので、その点に本型式の最大の特徴を見いだすことができる。

## k) 伊波式土器

伊波貝塚（註6）出土の土器を標式とするもので、本区では10点得られ、第28図に図示した。すべて破片で、完形品あるいは全形の窺える資料はない。そのため、神野D式を含む可能性もあるが、その点ご了解を得たい。出土層は第28図1～5は第Ⅳ層、6～8は第Ⅴ層、9・10は壁面崩壊砂層より得られたものである。

### 器種・器形

すべて深鉢形に属し、他の器種は確認されていない。小破片のため器形全体の窺えるものはないが、口縁部についてみると外反するタイプに属する。口縁形態については山形口縁が5点確認できるが、確実に平口縁と認定できる資料は含まれていない。山形口縁は4個の山形突起を有するものと思われる。

器厚は6ミリ前後のものが最も多く、第28図8・10の2点は厚さが約7ミリで、どちらかというと厚手の部類に属し、同図2・6は薄手（約5ミリ）に属する。胎土混入物は1ミリ前後の石英、チャート、金雲母？などからなり、同図1・2・5～8・10の7点は石英を、3・9は石英と金雲母？を、4は石英とチャートを含むものである。金雲母？の混入量は少ないが、石英あるいはチャートの量は概して多く、なかでも8は石英を著量含む焼成は一般的に良好であるが、8のように脆いものもある。器色は茶褐色を基調とし、2・4のように煤けて暗褐色を呈するものや、5のように横褐色を呈するものもある。

### 文様

器面調整の方法として、最終的に撫で消し手法を行なっているが、表裏両面あるいはどちらかに擦痕の残る場合がある。第28図4・6

・7・10は表裏両面に、同図2・5は表面のみに、同図3・9は裏面にのみ擦痕を残すもので、同図1・2は表裏いずれにも擦痕は見受けられない。擦痕は横方向あるいは、それに近いものであり、縦方向に類するものは3だけである。しかし全体的に撫では良好で、両面とも滑沢を有するものが多い。

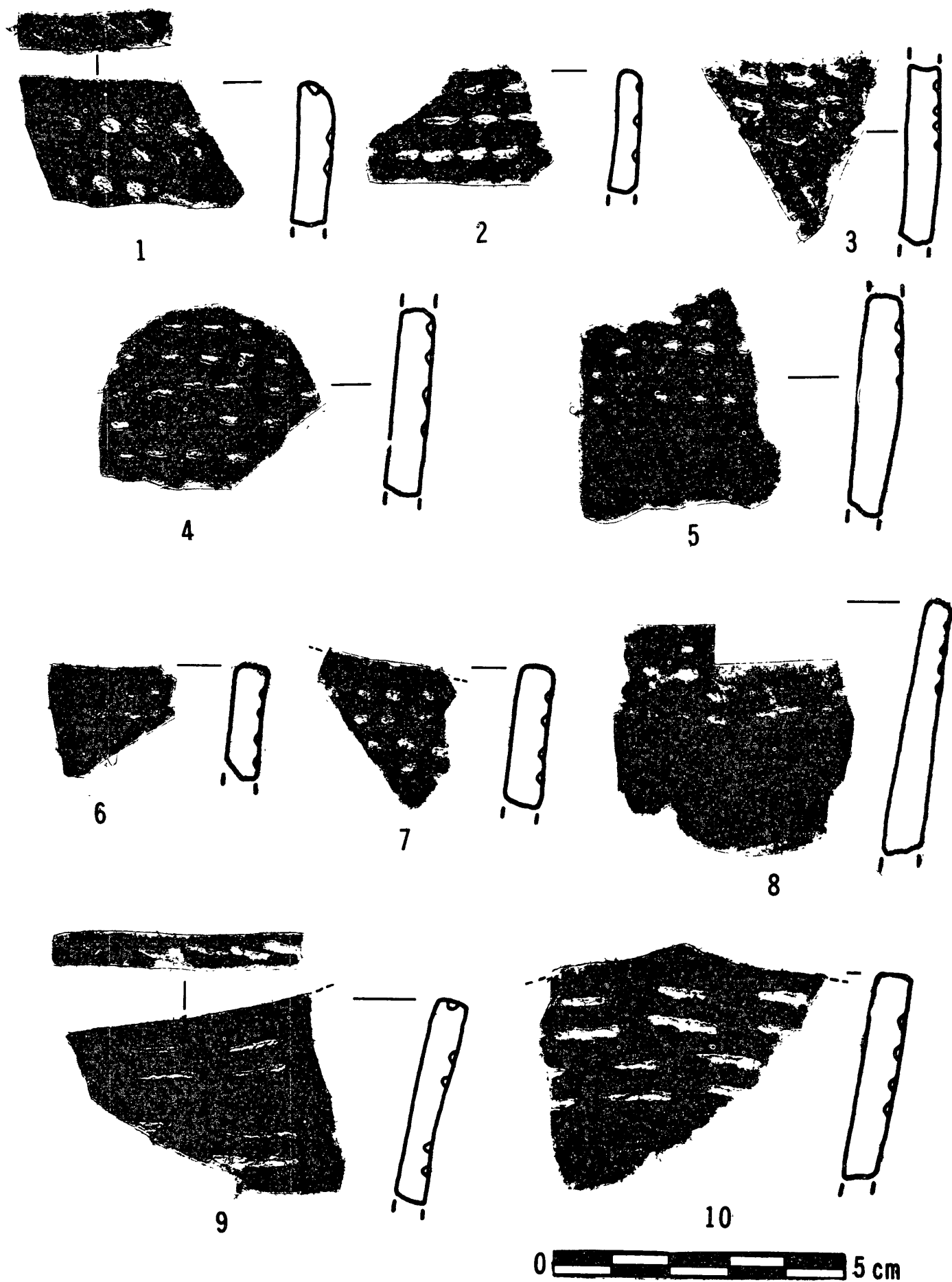
施文具は叉状工具だけで、その他の工具は見受けられない。叉状工具の先端の幅は小さいもので約4.5ミリ、大きいものは約7.5ミリを測るが、6ミリ前後のものが最も多い。

施文部位は口唇部と口頸部であるが、口唇部に施文しない例も多い。口縁破片は同図1・2・6～10の7点で、その内、口唇部に文様が確認できるものは1・9の2点だけである。しかし伊波式は必ずしも口唇全体に施文するとは限らないので、無文としたものの中には完形において有文口唇の一部であった可能性もある。上記した1・9の口唇部文様は斜め気味の刺突文で、施文は深めである。

次に口頸部の文様であるが、本型式の文様は普通3段からなり、口縁上段を第1文様帯中段を第2文様帯、下段を第3文様帯とすると、第1・第3文様帯には、叉状工具による2点1組の点刻文・連点文あるいは短沈線文などを、それぞれ2組施し、第2文様帯は無文空白とするものと、数種の文様で埋めるものがある。このような文様構成の違いにより、本区のものの下記の2種に大別した。なお、第1文様帯の文様は点刻文（3点）、連点文（5点）、短沈線文（2点）の3種である

第1種 第2文様帯を無文空白とするもの

第2種 第2文様帯を数種の文様で埋めるもの。



第28図 A-1区出土の伊波式土器

第1種に属するものは、第28図5・8・10の3点である。5・8は叉状工具による連点文を施すが、8は連続性が強く、5は一見点刻文に類似する。10は1.5センチ前後の短沈線文を施すもので、典型的な伊波式の文様である。

第2種に属するものは同図3の1点のみである。第1文様帯には点刻文を2組施し、第2文様帯には、斜行文を施すが、鋸歯文に属するものか、羽状文を構成するものか詳細は不明。

種不明。小破片のため細分の不可能なものは同図1・2・4・6・7・9の6点である。1・7は叉状工具による点刻文を、2・4・6は同種工具による連点文を施すもので、文様は密である。4は上記工具による2点1組の文様を3組配するもので、伊波式としては例外に属する。9は山形頂部に近い口縁部破片で叉状工具による短沈線を2組施すものである。第1文様帯の上段の文様は口唇に沿って施文され、下段の文様は口唇と関係なく、ほぼ水平に施されている。そのため両者は平行にならない。また、上段の短沈線は約1.1センチ、下段のものは約1.7センチと後者が長めである。

### 1) 伊波系不明土器

文様形態は伊波系土器（神野D式、神野E式、伊波式）の範疇にあるが、小破片のため上記3型式のいずれに属するか不明のものである。出土層は第29図1～9は第IV層、10～12は第V層である。

焼成は一般に良好で、器色は茶褐色を基調とするが、3・10のように煤けて黒ずんだものや、2・3のように橙褐色を呈するものもある。器厚は6ミリ前後のものが多く、4の約8ミリや10の約9ミリは厚い方に属し、特

に後者は伊波系土器としては厚手に属する。

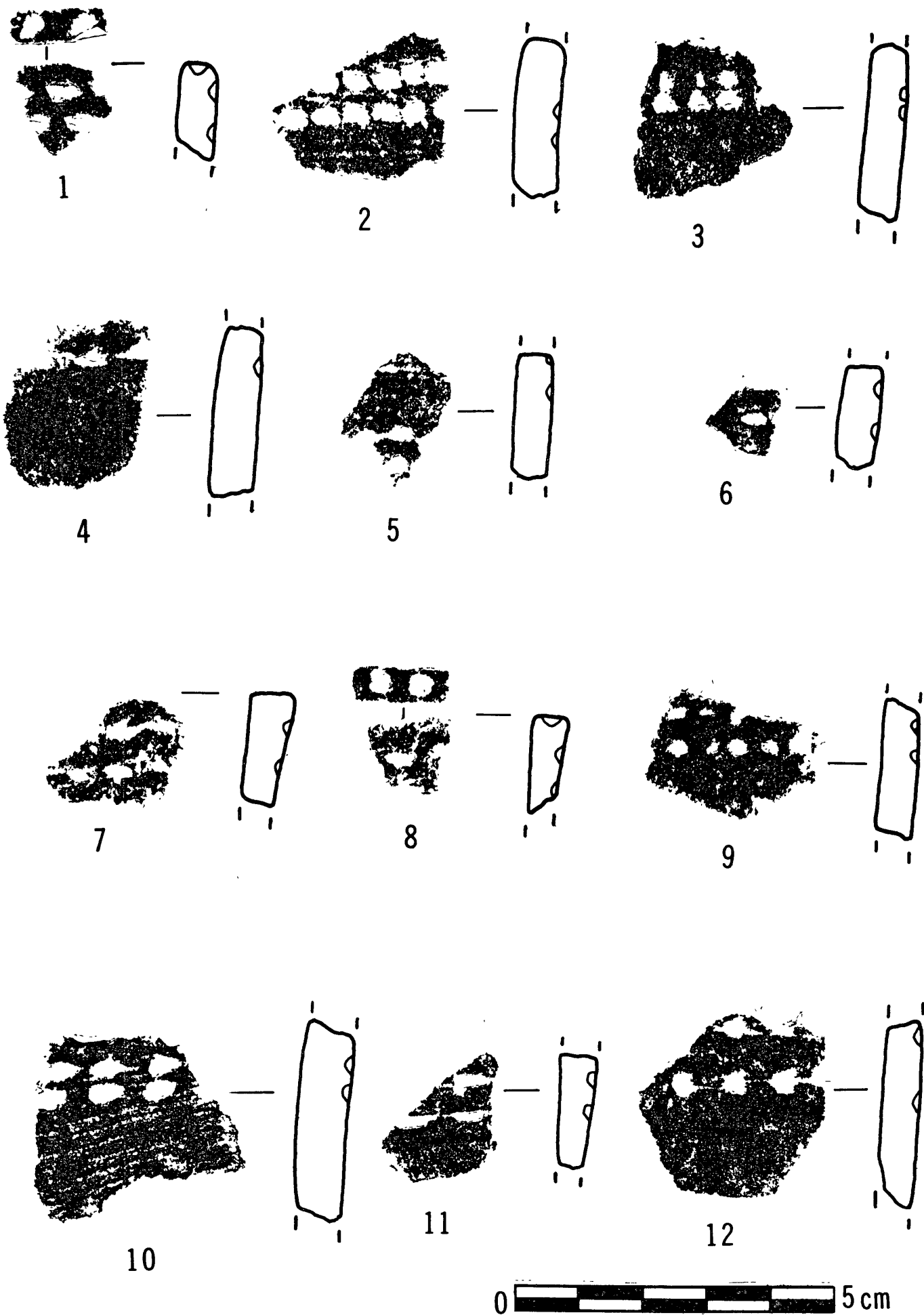
胎土混入物には1ミリ前後の石英、チャート、金雲母？がある。石英とチャートを併用するものは、1・2・4・5・7・9・10の7点と多く、両者を同量あるいはどちらか一方を若干多めに含むが、いずれにしても混入量は多い。3・6・11は石英を多量に混入する。逆にチャートのみのものは8の1点で、これも混入量は多い。12は石英と金雲母？をともに多く含み、特に後者は微細である。

器面調整の方法としては、擦痕と撫での2技法が認められ、最終的には撫で仕上げを行う。擦痕を残すものについて見ると2・3・10は表裏両面に、4・5は表面に、12は裏面にのみ擦痕が残っている。擦痕は横方向あるいは、それに近いものが多く、縦位に近いものは3の1点だけである。また擦痕は弱く細いものであるが、10は表裏面ともに強く残っている。全体的に入念に撫でられており、器面はほとんどが滑沢を有する。

施文工具には叉状工具と棒状工具があり、前者は1～3・5～11の10点で、後者は4と12の2点だけである。叉状工具の工具幅は6ミリ前後のものがほとんどであるが1は約8.5ミリとやや幅広である。

施文部位は口唇部と口縁部であるが、口唇部に文様の確認できるものは1・8の2点だけであり、7は無文である。1・8の口唇文様は、すべて先端が三角形に尖った工具による刺突文を比較的密に施文するもので、施文方向は8が左から右へ、1は右から左へと移行する。

次に口頸部の文様であるが、口頸部には伊波系土器の特徴である2点1組の点刻文あるいは刺突文を横走させるが、破片のため何組施すかは不明である。点刻文、刺突文は比較



第29図 A-1区出土の伊波系不明土器

的深く、鮮明なものが多いが、7は施文が浅く不明瞭である。施文方向は左から右が普通であるが、1は口唇同様右から左へと施文されている。

#### m) 有文破片

小破片のため型式を明示できないものを本項にまとめる。本区では第Ⅰ層より2点、第Ⅱ層より5点、第Ⅳ層より45点、第Ⅴ層より60点の計112点出土しており、その中から代表的なものを第30図1～18に図示した。同図1は第Ⅱ層、2～5は第Ⅳ層、6～18は第Ⅴ層である。

#### 器種・器形

器種はほとんどが深鉢形に属し、壺形とみられるものは1点だけで、これについては壺形土器の項にゆずることとし、本項では深鉢形について述べることにする。器形の窺える資料は同図16の1点だけで、口縁部がかかる外反する器形である。器厚は最も厚いもので約8.5ミリ、最も薄いものは約3.5ミリであるが、6ミリ前後のものが最も多い。

混入物は石英を主体に、金雲母？を混ぜるものが多く（60点）、石英のみのもの（31点）がこれに次ぐ。他には石英と岩片を含むもの（14点）、岩片だけのもの（2点）がある。石英の混入量は概して多い。

焼成は良好で、特に悪いというものは見あたらない。器色は茶褐色のものがほとんどで他に橙褐色のものや、黄褐色のもの、あるいは煤けて黒ずんだものなども散見される。

器面は撫で技法によって調整されるが、撫での弱い部分では擦痕が観察される。擦痕の認められるのは34点で、表面にのみ残るケースが多い。また、擦痕は横方向か、それに近い細いものがほとんどである。

文様については沈線文を施すものが圧倒的に多く75点、沈線＋刻文は18点、刻文のみのものは18点であるが、完形時において他の文様と組み合わせられていた可能性も考えなくてはならない。

第30図1は口縁破片で、口唇部には先端が方形を呈する単刃工具により刻文を施す。工具の先端の幅は約4ミリ、口縁部にも同種の文様を横走させ、3条認められるが整然としていない。文様自体は沖縄の大山式に類似する。

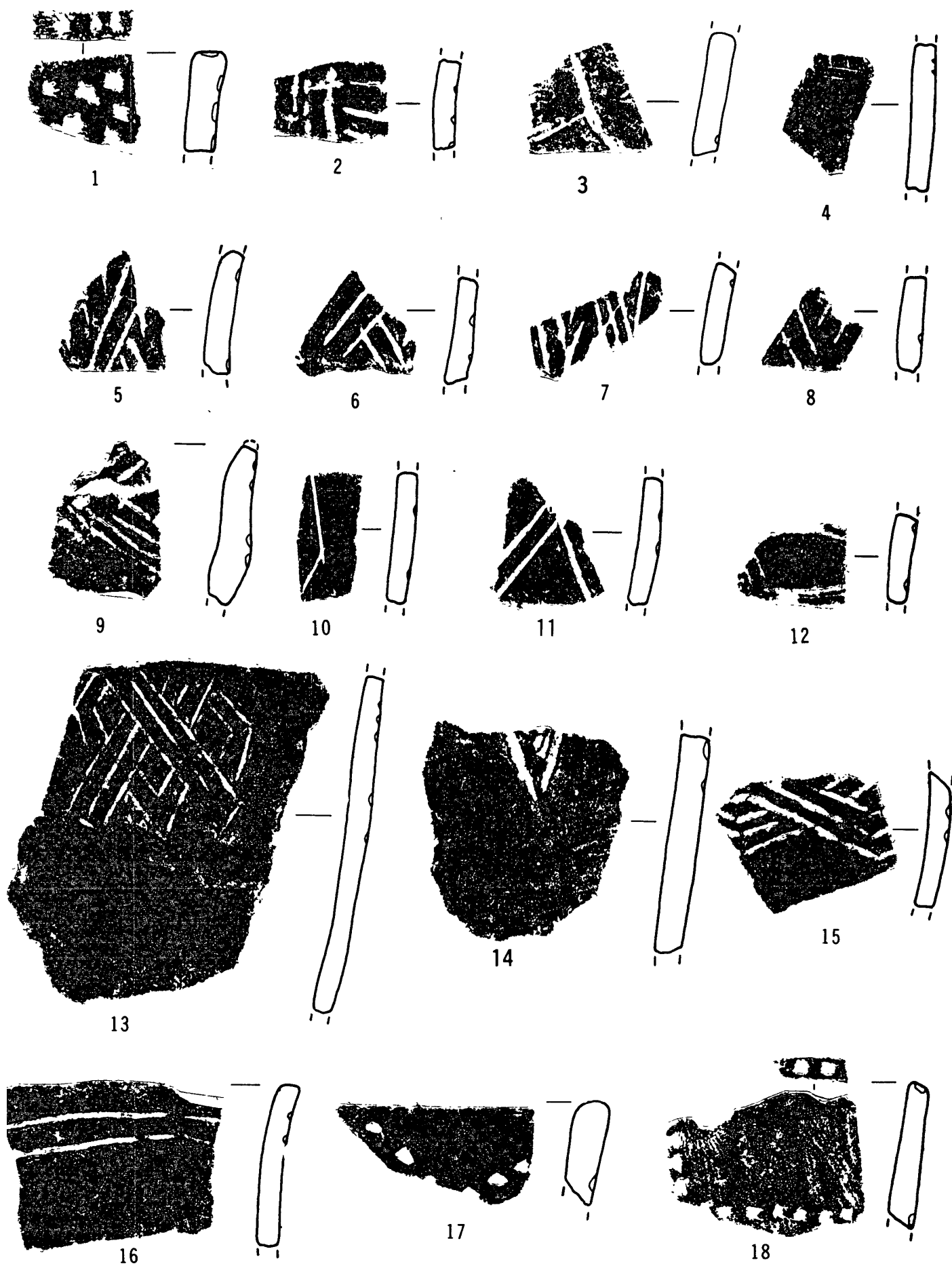
同図2は縦・横の沈線を組み合わせるもので、沈線の間を棒状工具による細い押引文で埋める。施文は雑で、押引文は一見沈線状を呈する。嘉徳Ⅰ式Aに分類してよい資料である。

同図3は斜行沈線を交互に組み合わせるもので、同図4は平行沈線と斜行沈線を組み合わせるものである。3の沈線は太めであるが4は細くシャープである。

同図5～8は籠目文あるいは鋸歯文ないしは方向の異なる斜沈線を組み合わせるもので、この種の文様を有するものが、他に17点得られている。文様は比較的密で、沈線はシャープである。嘉徳Ⅱ式あるいは、嘉徳Ⅰ式Aの第4種（山形直下にのみ縦位の刺突文を施し外は沈線文で埋める）に特徴的な文様である9は横位の羽状文を施すもので、同一文様を施文するものが他に10点得られており、同一個体に属するものと思われる。10～12は方向の異なる斜行沈線を組み合わせるもので、沈線は10・12は細くシャープであるが、11はやや太めで浅い。

同図13～15は嘉徳Ⅰ式あるいは嘉徳Ⅱ式の胴部文様である。13は平行沈線をクロスさせ、それに菱形文を加えるもので、籠目の施文手法をとる。本区の嘉徳Ⅰ式に同種の文様を有





第30図 A-1区出土の有文破片

0 5cm

するものがあるが接合はできない。14は逆三角形文の一部で、15は鋸歯文を交互に重ねるものである。

同図16は口縁部の破片で、口唇部は無文である。口縁部には沈線文を2条横走させるが完全に平行ではなく、狭くなる部分も見られる。文様構成上からすると伊波系の可能性のある資料である。17は口縁部の破片で、方向の違う斜行刺突文を施し、それに沿って沈線文を施すが、沈線の部分で割れており、全体的構図は不明である。口唇部は無文。18は口唇部に、先端が方形を呈する篋状工具により刻文を施し、口縁部にも同種の文様を横走させる。口縁部の文様は口唇下約3センチの位置にあり、この種の施文例は少ない。また同種の文様を縦走させる部分も見受けられる。縦位文様と横位文様を組み合わせる例は嘉徳Ⅰ式Aや、伊波式にも見られ、普通、縦位文様帯の上部には山形突起がくる。

#### n) 無文口縁

本項では、口縁部に文様を施さないものを一括して記述する。つまり、無文口縁として分類されるものである。これらの土器は胎土混入物、焼成、器面調整、その他の特徴から同層出土の先述のいずれかの型式に随伴するものと思われるが、共伴関係を捉えることは困難である。本区出土の無文口縁は23点である。

器種はすべて深鉢形で、口唇部文様の有無によって2種に細分し、文様を有するものをa、他をbとした。

##### (1) 無文口縁 a

第Ⅱ層から1点(第31図1)、第Ⅳ層から3点(同図2～4)、第Ⅴ層から5点(同図5～8・10)、崩壊層から1点(同図9)得られ、

うち1点(同図10)は口縁部の大型破片であり、図上復元を試みた。

器形は図上復元を試みた資料やその他の口縁部破片から、口縁部は外反するものや直口状のものに分類される。量的には前者が多い口縁形態は山形口縁が数点含まれているものの、平口縁の明確な資料は得られていない。口径が推算可能な土器は1点(同図10)で約19.5センチを測る。底部は同層出土の底部資料から平底を想定する。

器厚は最も薄いものが0.3センチ、最も厚いものは0.6センチで一般に薄手である。

胎土には石英を主体に金雲母?などを混入する。粒は細かく、肉眼での観察は困難であるが、混入量は多い。

焼成はすべて良好で堅い。器色は表裏面とも総て茶褐色であるが、中には煤けて黒ずんでいるものもある。

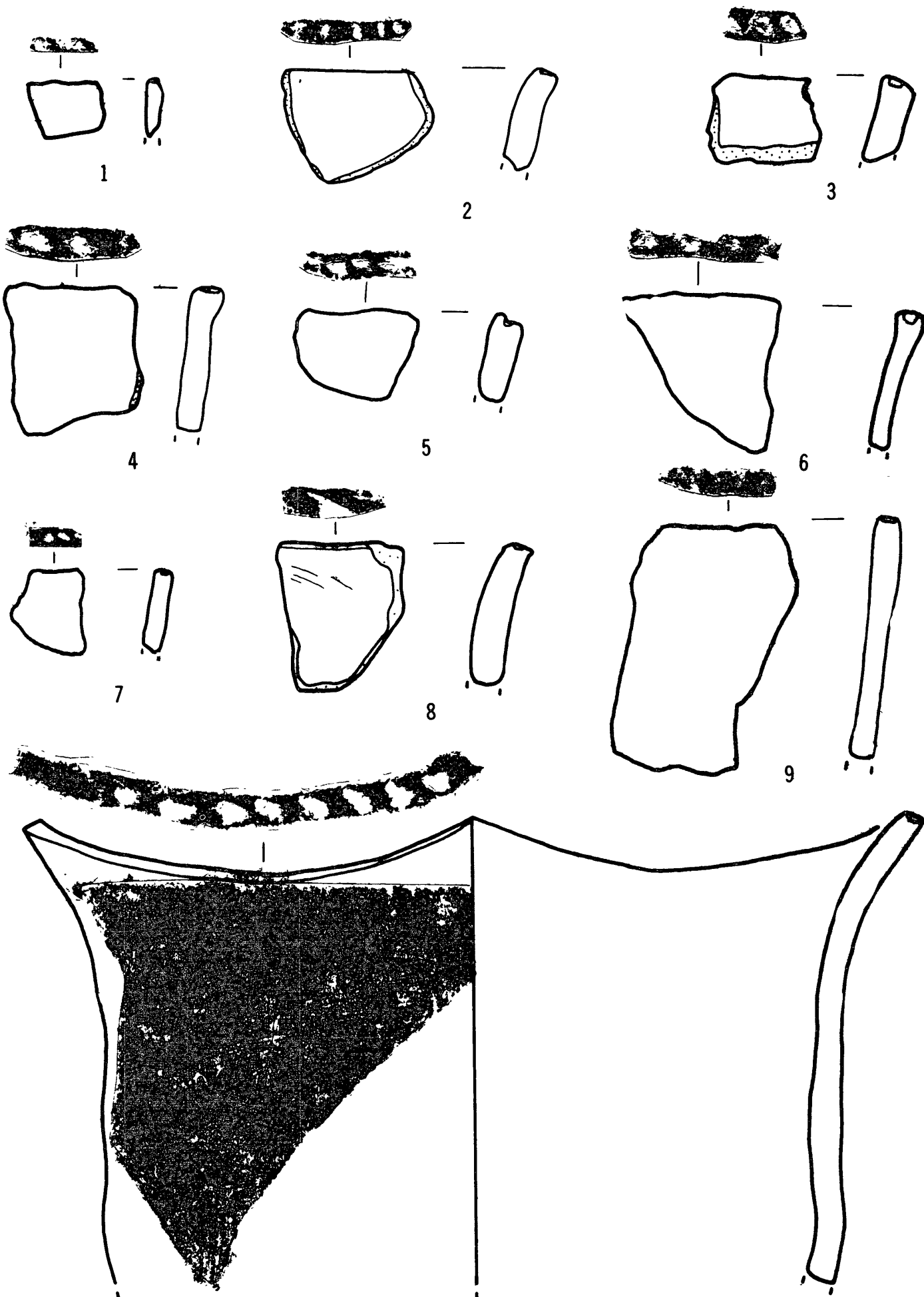
器面調整の手法を観察してみると、撫で調整を行なうのが多く、条痕または擦痕を残すものは少ない。擦痕が観察されるのは3点である。第31図3は裏面に横方向の擦痕、同図8は口縁外面に斜め方向、同図10は頸部では斜方向、胴上部では斜方向や縦方向の不規則な擦痕を施すが、最終的には撫で調整を行っている。

文様は前述したように口唇部にのみ施されるもので、施文具は先端が三角形に尖っている篋や方形のものなどを用いる。次に口唇上の文様について略述する。

第31図1は左から右の方向に三角形刺突文を深く刻むもので、第Ⅱ層の出土。

同図2は先端が方形の篋工具で刺突文を左から右の方向に施す。間隔は5ミリ前後であるが一定せず、やや雑である。第Ⅳ層の出土。

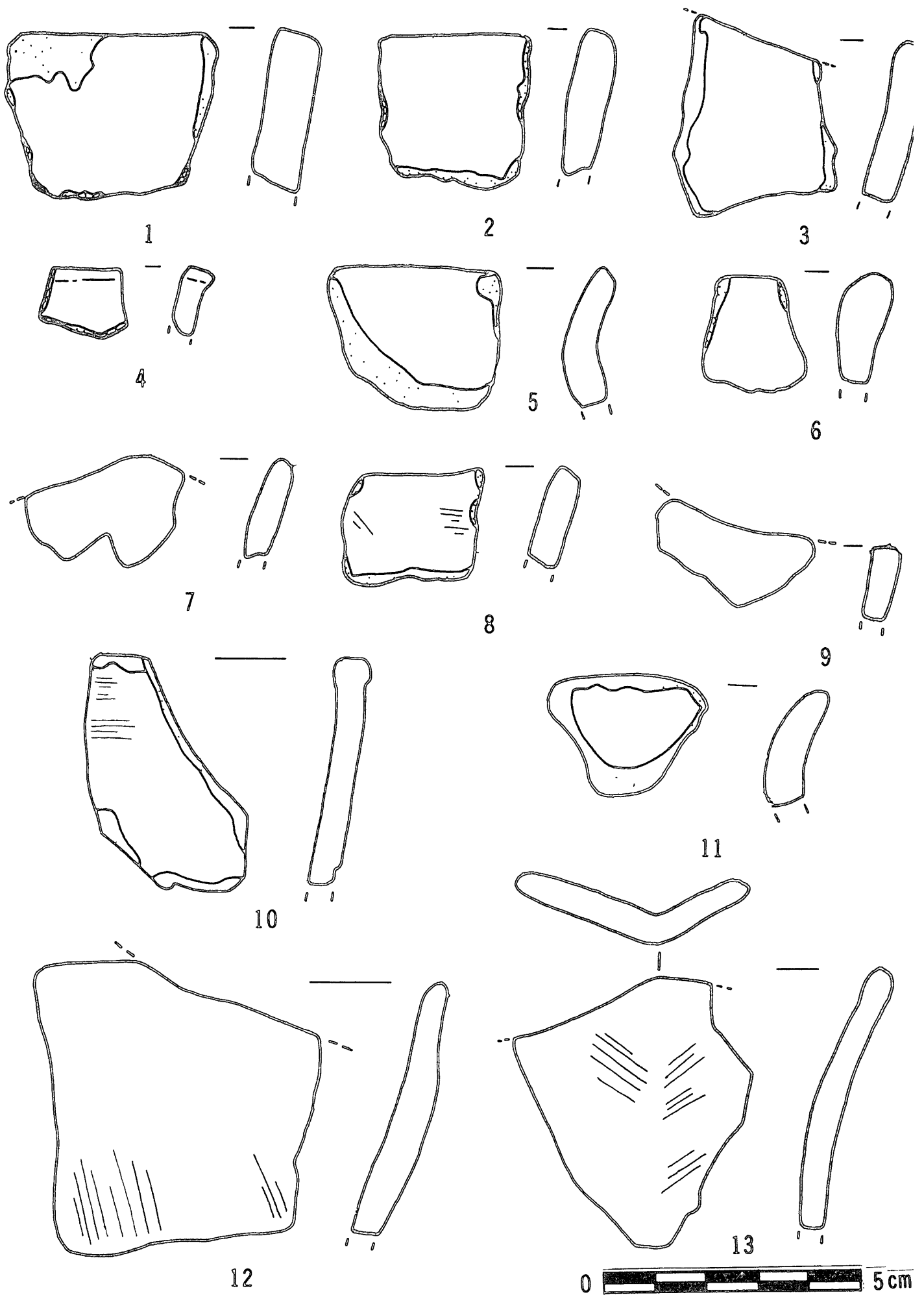
同図3は三角形刺突文を施すが、先端は若干丸味をおびている。施文に強弱の差はある



第31図 A-1区出土の無文口縁a

10

0 5 cm



第32図 A-1区出土の無文口縁b

が、一般的に深めである。施文方向は左から右。第Ⅳ層の出土。

同図4は浅めの三角形刺突文で、1センチ前後の間隔で施され、他のものに比べると、やや間の開く方である。施文は左から右方向である。第Ⅳ層の出土。

同図5も三角形刺突文を施すもので、強く押し引きしたために、施文部は凹線状を呈している。文様は明瞭。施文方向は左から右で第Ⅴ層の出土。

同図6も左から右の方向に三角形刺突文を深く施すもので、文様は明瞭。第Ⅴ層の出土

同図7は細い棒状工具で刺突文を施すもので、比較的密である。施文方向は不明。第Ⅴ層の出土。

同図8は短沈線を斜めに刻むもので、沈線はシャープである。施文方向は不明。第Ⅴ層の出土。

同図9は左から右の方向に三角形刺突文を施すもので、施文は深く、やや密である。崩壊土からの採集品である。

同図10は山形口縁の深鉢形で、先端の尖った**竈**で三角形刺突文を施すが、口唇部の左端では無文部も見受けられる。刺突文は大型で**竈**を強く押しつけながら施文するが、全般的に雑で三角形の形も一定しない。施文方向は左から右である。第Ⅴ層の出土。

## (2)無文口縁 b

前述したように口唇部の無文のものである第Ⅳ層から8点(第32図1～8)、第Ⅴ層から5点(同図9～13)得られた。

器形は口縁部の外反するものと直口状の2種が見受けられる。口縁形態は前項aと同様に山形口縁が一般的と思われ、平口縁については明確な資料は得られていない。また口唇部の器面調整の際、**竈**で押したために粘土の

食み出しが認められるものも2点(第32図4・10)あり、それぞれの上面は同図4は平坦同図10は丸味をおびている。土器のサイズは推定可能なものがなく不明。底部は無文口縁aと同じく平底であろう。

器厚は最小が0.5センチ、最大が0.9センチで、0.6センチ前後のものが一般的である

胎土混入物は石英、金雲母?などで、石英が最も多い。粒は細かい。

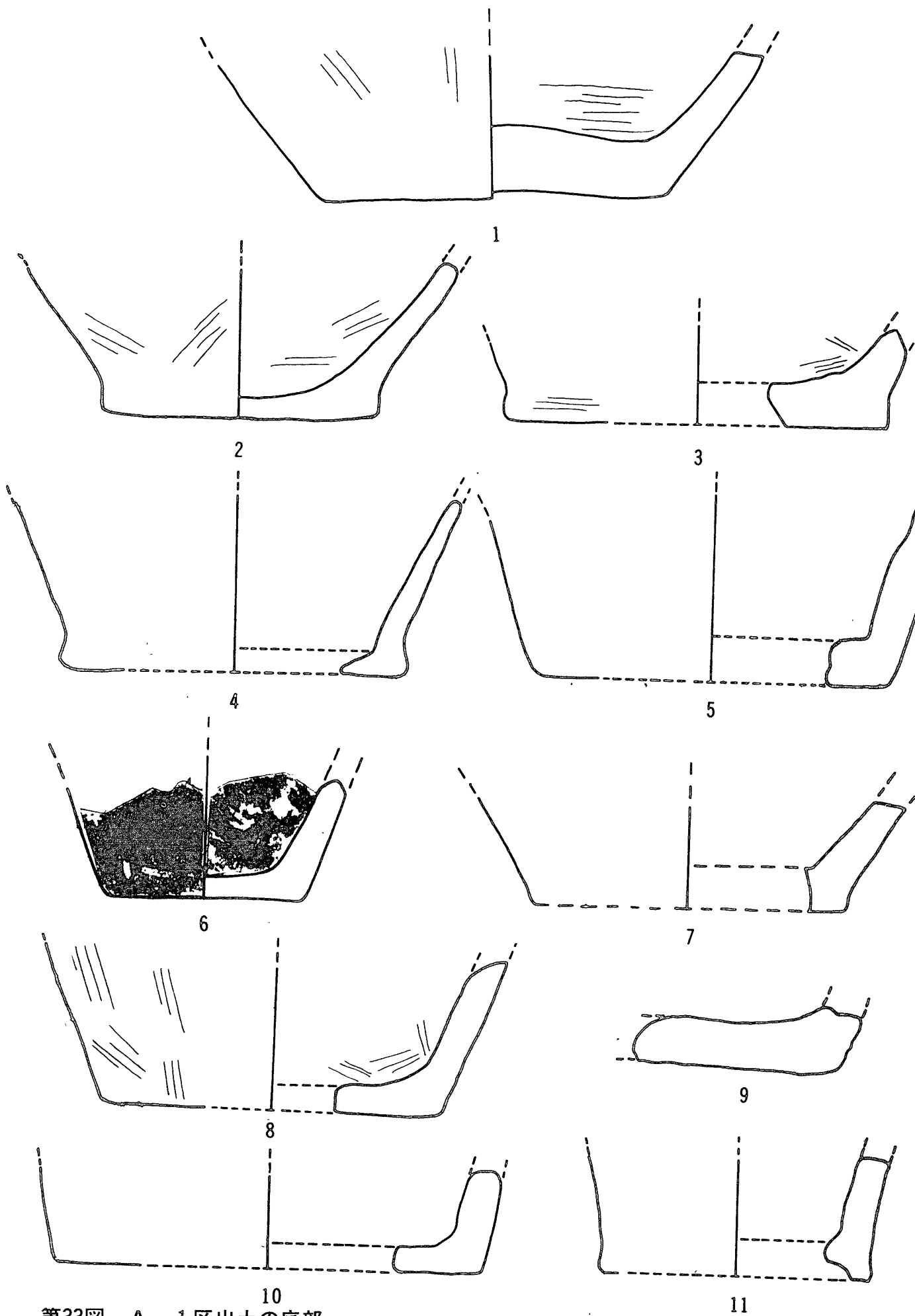
焼成はほとんどが良好で堅緻である。器色は茶褐色を基調としているが、黄褐色や灰褐色を呈するものもあり、また、中には煤けて黒ずんでいるものもある。

器面調整は撫で調整で仕上げるのが普通で条痕や擦痕を残す例は少い。条痕を残すのは1点(第32図12)で、表裏面とも胴上部に縦位の細い条痕を施している。条痕は下から上の方向に施されており、比較的明瞭な部分もある。

擦痕を残すのは3点(第32図8・10・13)である。同図8は表裏面に擦痕が観察され、調整方向は表面が横位や斜位、裏面は横位である。いずれも撫でられたために不明瞭。同図10は表面に横方向の擦痕が部分的に見受けられ、器面は一応撫でられているものの比較的明瞭である。同図13の表面には山形頂部に合わせたように羽状の擦痕が縦位に施されている。擦痕は粗く、一見条痕のようにみえる部分もある。

## o) 底部

底部は59点検出された。第Ⅱ層、第Ⅳ層、第Ⅴ層および崩壊土よりの出土で、うち45点を図示した(第33図1～第35図)。本貝塚の底部は平底、丸底、尖底の3種に大別され、本区では平底と尖底の2種が得られたが、前者が圧倒的に多く、後者はわずかに2点(第35



第33図 A-1区出土の底部

0 5 cm

図15・16)の出土であった。図示した45点の層位別出土状況は第14表の通りで、本文では器形別に説明する。

## 平底

平底は形状により下記の4種に分類できる。

- (A)立ち上がり部分が若干外彎状に脹らむもの。
- (B)立ち上がり部分が若干くびれ、それから外彎状に張らむもの。
- (C)立ち上がり部分が胴部へやや直線的に開くもの。
- (D)立ち上がり部分が内彎状のカーブを示すもの。

第14表 A—1区における底部の層位別出土状況

種別 層	平 底					丸 底	尖 底	計
	A	B	C	D	不明			
I								
II					1			1
III								
IV			3	8	1	2		14
V	1	3	5	4	4	4		21
VI								
VII								
崩壊層			5	2			2	9
計	1	3	13	14	5	7	2	45

(A)に属するものは第V層より1点(第33図1)得られた。  
第33図1は底径が推算8センチで、底部の厚さは約1.2センチと厚い。底中央部は下から突き上げたように内面は盛り上がり、外面は凹面を形成する。胎土に含まれる混入物は、石英を主体に少量の金雲母?を加えている。混入物は1ミリ前後の粒子がほとんどである

が、中には5ミリ前後の石英粒も見受けられる。器面は全体的に撫で仕上げであるが、両面に若干擦痕も観察され、特に内面のものは明瞭で、横位に施されている。両面とも若干手ざわりがザラザラしている。焼成は良好で器色は両面とも橙褐色を呈する。

(B)に属するものは第V層より3点(第33図2～4)得られた。3点とも底径が推算可能で、最大は同図3の約9センチ、最小は同図2の約6.4センチである。詳細は第15表に示した。底部の厚さは同図2が約0.5センチと薄く、同図3は約1センチを測る。同図4は内面破損の為、計測不能である。いずれも立ち上がり部分は若干くびれているが、くびれは一様でなく、くびれない部分も見受けられる。胎土には3点とも石英を主体に少量の金雲母?を混入する。器面は撫で調整を行っているが、同図2・3の2点には、両面ともわずかに擦痕が見受けられる。しかし、いずれも撫でられており、不明瞭である。また、焼成はすべて良好で、器色は同図2・3の両者が茶褐色を呈するのに対し、同図4は灰褐色を呈する。

(C)に属するものは13点で、底部からの開きは大きく65度前後である。第IV層より3点(第33図5～7)、第V層より5点(第33図8～11、第34図1)、崩壊土より5点(第34図2～6)の出土である。そのうち底径の推算可能なものは8点で、最大は第33図10の約10センチ、最小は同図6の推算4.4センチである。詳細は第15表の通りである。底部の厚さは0.7センチ前後のものと1センチ前後のものとが半々あり、最小は第33図10で約0.6センチ、最大は第34図5で約1.5センチを測る。混入物は石英を主体に少量の金雲母?を含むもの

や、石英だけを混入するものがある。全体的に砂粒は細かい。器面調整は両面とも撫で調整を行うものが一般的で、全体的に入念であるが、中には撫で調整が不十分の為、擦痕が消えずに残っているものも2点（第33図8、第34図4）見受けられる。第33図8は表面に縦位と斜位、裏面に横位の擦痕が残っている第34図4は表面に斜位の擦痕が見受けられる。なお、第33図6の両面には**筧**調整痕と思われる凹線がいくつか見受けられる。焼成はすべて良好である。器色は茶褐色を基調とするが、第34図1の1点は暗褐色を呈する。

(D)に属するものは19点で、本区のものは2種に細分される。

①底面から内彎状のカーブを描きながら立ち上がるもの。

㊦㊧と同形だが、下端が若干くびれるもの。

①は第Ⅳ層より8点（第34図7～14）、第Ⅴ層より4点（第34図15～18）、崩壊土より2点（第35図1、2）の計14点が検出された。そのうち、底径の推算可能なものは9点で、最大は第35図2の推算11センチ、最小は第34図8の推算5.4センチである。詳細を第15表に示す。底部の厚さは0.6センチ～1センチのものが一般的であるが、第34図8は約0.4センチと薄く、同図7は約1.5センチ、同図13は約1.2センチと厚い。混入物は石英だけを含むもの、石英を主体に少量の金雲母？を混入するものが一般的であるが、第34図8・12の2点にはわずかながら長石も混入されている。器面は撫で調整を行うものがほとんどで、擦痕が観察できるものは2点（第34図11・13）である。同図11は両面に縦位の擦痕が見受けられるが、表面は裏面に比べて粗い。同図13も裏面に縦位の擦痕を施す。第35図1

の裏面の一部には指頭痕も見受けられる。焼成はすべて良好で、器色は茶褐色を基調とする。

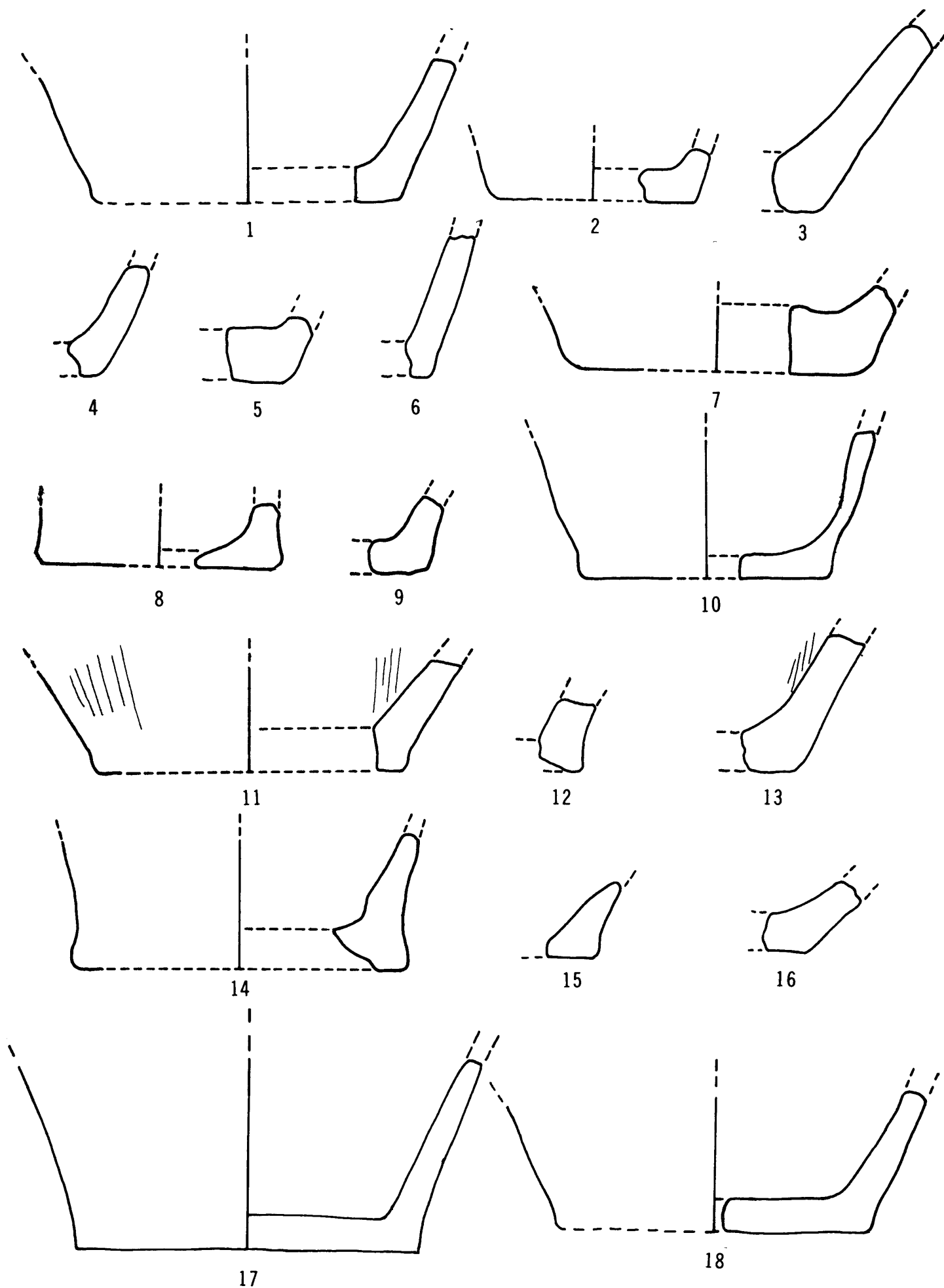
㊦は第Ⅳ層より1点（第35図3）、第Ⅴ層より4点（第35図4～7）の計5点の出土である。そのうち底径の推算可能なものは3点で最大は同図7の推算7.6センチ、最小は同図3の推算6.8センチである。詳細は第15表に示す。底部の厚さは計測可能なものが3点しかなく、最大は同図7の約1センチ、最小は同図3の約0.6センチである。胎土には石英を主体に少量の金雲母？を混入する。全体的に粒子は細かく、混入量は少ない。器面調整をみると、撫で調整を行っているものがほとんどだが、第35図6の内面には縦位の擦痕が部分的に残っている。焼成はすべて良好で、器色は茶褐色を呈するものが3点（同図4～6）、橙褐色、灰褐色を呈するものがそれぞれ1点である。

第15表 推算底径

タイプ 底径	A	B	C	D		不明	計
				イ	ロ		
4 cm～ 4.9cm			2				2
5 cm～ 5.9cm				2			2
6 cm～ 6.9cm		1	1	2	1	1	6
7 cm～ 7.9cm			2	2	2	1	7
8 cm～ 8.9cm	1	1	2	2		1	7
9 cm～ 9.9cm		1				1	2
10cm～10.9cm			1				1
11cm～11.9cm				1			1
計	1	3	8	9	3	4	28

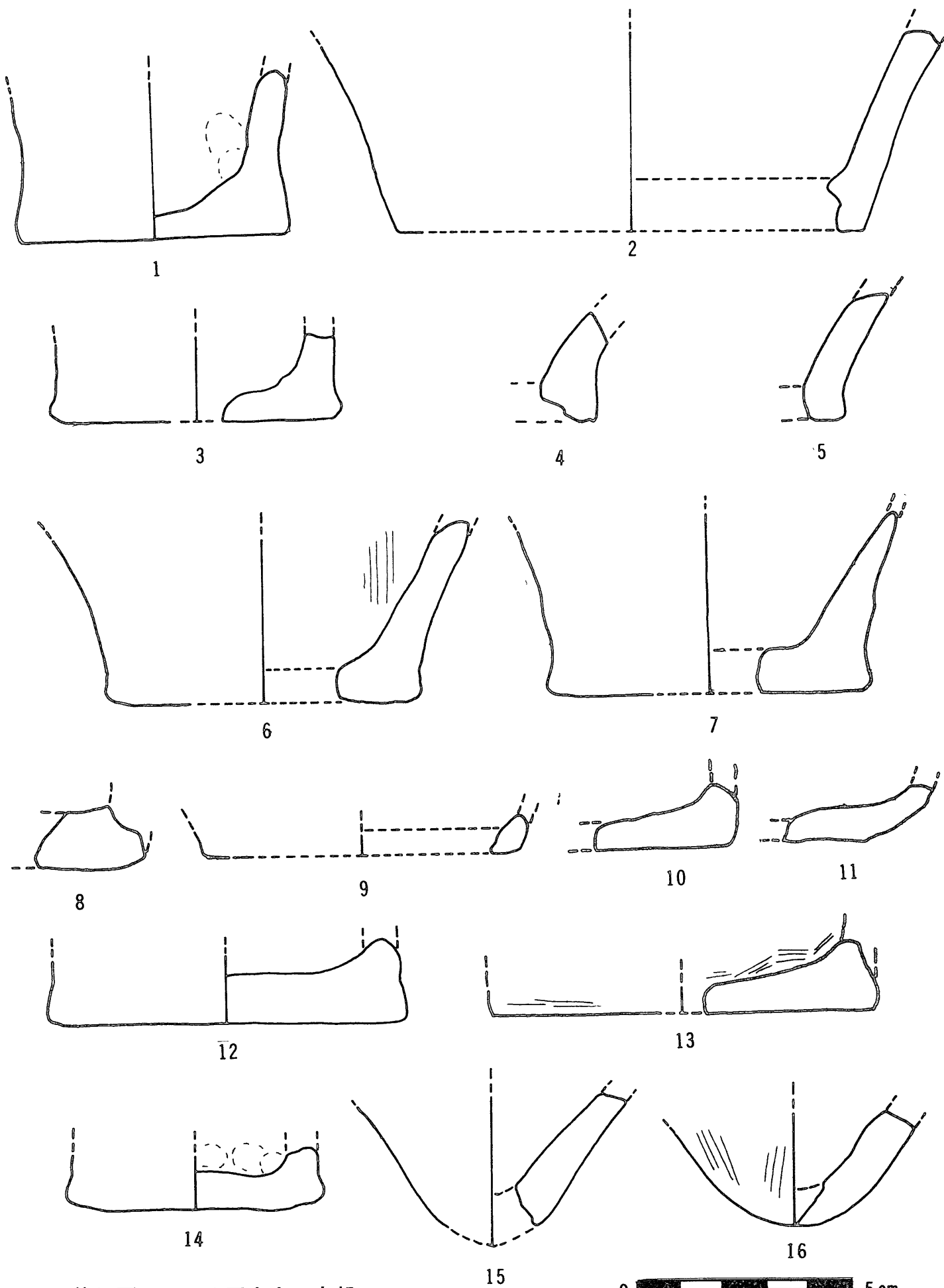
次に、分類不可能なものを一括して説明する。すべて小破片で、立ち上がりの形状が把握できないものである。第Ⅱ層より1点（第35図8）、第Ⅳ層より2点（同図9・10）、第Ⅴ層より4点（同図11～14）の計7点の出土で





第34図 A-1区出土の底部破片

0 5 cm



第35図 A-1区出土の底部

ある。そのうち底径が推算可能なものは4点で、最大は第35図13の推算9センチ、最小は同図14の推算6センチである。詳細を第15表に示す。底部の厚さは0.9センチ前後を測るものが多い。胎土には石英を主体に少量の金雲母<sup>?</sup>を加えるものが一般的である。第35図8は石英のみを混入している。器面調整をみると、一般的に撫でによるものであるが、中には同図13のように、一応撫でられてはいるものの両面に擦痕が残っているものも見受けられる。同図14の内面周縁部には指頭圧痕も数ヶ所見受けられる。焼成はほとんどが良好で、器色は茶褐色を基調とするが、黄褐色を呈するものも1点(同図10)ある。

### 尖底

崩壊土より尖底の破片が2点(第35図15・16)得られた。いずれも底面は破損しており立ち上がり部の資料である。本区で検出された土器の中で、底部が尖底をなすものは面縄前庭式土器や室川下層式土器などであり、上記の2点もいずれかの型式に属するものであろう。両者とも石英粒を含む。器面は撫で調整を行っており、外面は入念に仕上げている。また、同図16の外面は撫でられてはいるものの、部分的に擦痕が残っている。焼成は両者とも良好で堅緻である。器色は茶褐色を呈する。

### p) 壺形土器

壺形土器は7点(第36図1～7)得られ、そのうち、5点(同図1～5)は図上復元を試みた。出土層は1～6が第V層、7が第IV層である。

器形については完形品がないため全形を明示できないが、口縁部から漸次頸胴部へ移行するタイプに属し、同図1のように直線的に

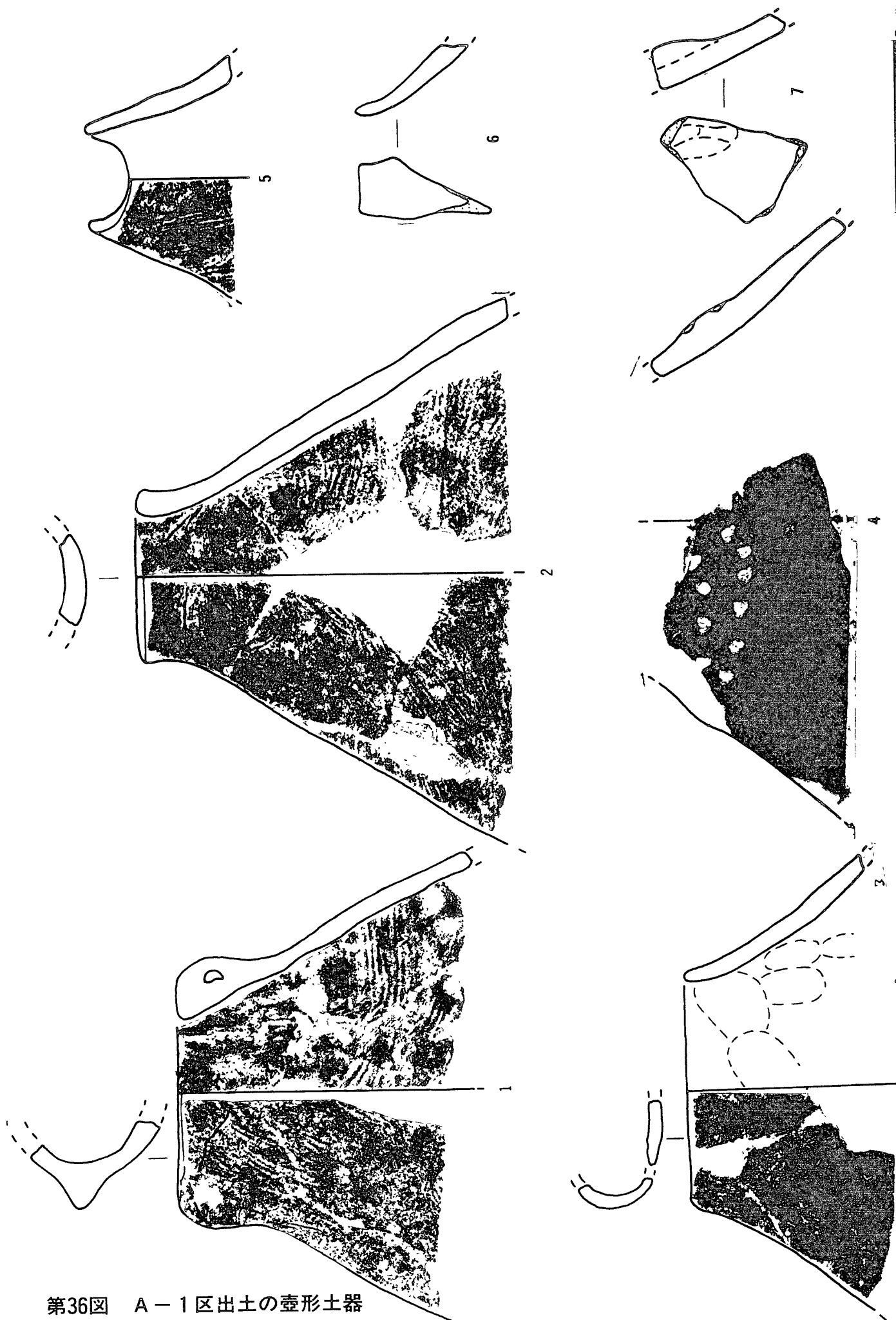
胴部へ開くものと、2や3のように頸部が若干内彎するタイプが見られる。口唇部は平坦に整形されるもの(同図1)と丸味を帯びるもの(同図2・3・5)のほか若干尖り気味のもの(同図6)も認められる。底部は平底であろう。口縁部には、同図1、7のような縦形の耳状把手をつけるものがある。1は相対して1対施すもので、把手には左右に貫通する孔が設けられている。孔は径約4ミリで半截竹管状工具による穿孔である。7は小破片のため、把手の個数や孔の有無など確認できない。

口縁形態は同図1、2、3のような平口縁と5のような山形口縁があり、後者は口径などから2個対峙するタイプと推察される。口径は1が推定5.2センチ、2は推定5センチ3は上面観が長楕円形を呈しており、長径が推定7センチ、短径が推定3.4センチ、5は約3.2センチである。3は上面観が特殊な形状に属し、特殊な用途を考えるべきかもしれない。

器厚は5～7ミリである。胎土混入物は1ミリ前後の石英、金雲母<sup>?</sup>、岩片などである。6・7は石英と金雲母<sup>?</sup>、3・5は石英、4は石英と岩片を含む。石英の混入量が最も多く、金雲母<sup>?</sup>も比較的目立つ。

器面調整は撫で調整を行うが、表裏面に擦痕や条痕も観察される。表面は撫でが徹底していて、ごく一部に擦痕を認めうる程度であるが、1・2の裏面下半部には横・斜め方向の条痕がはっきりと残っている。1～5は裏面に成形時の指頭圧痕を残しており、特に1に顕著である。

次に文様であるが、文様を施すものは4の1点のみである。頸胴部の境目を僅かに肥厚させ、同部に文様を施す。肥厚部の上下の幅は2センチ前後で、一見輪積痕を呈し、肥厚



第36図 A-1区出土の壺形土器

部と器面の境目は不明瞭である。施文具は先端部が尖り気味の単篋工具を用いており、篋幅は約5ミリである。文様は肥厚帯上に刺突文を2列施すが、上下対になることはない。施文は比較的深い。

上記壺形土器は前述した諸型式のいずれかに伴うものと考えられるから、特に型式設定はしなかった。

#### q) 轟式土器 (26頁)

轟式に含めうる土器が第Ⅶ層より1点(第14図9)得られた。本区の第Ⅶ層は室川下層式および神野A式の出土層である。室川下層式は先述したように本貝塚における最古型式であり、神野A式はその終末期に位置付けうると考えられることから、本型式も神野A式の時期に比定できるかと考える。

轟式土器は、熊本県轟貝塚出土の土器を標式とするもので、鹿児島県片野貝塚(註7)ではこれを片野1～4式の4つに分類している。本区出土の土器は刻目のある、断面ほぼ三角形の凸帯を有し、河口貞徳氏によると片野3式に近似するという。

#### 器種・器形

片野3式は口縁部の外反する丸底の深鉢形で、胴部が若干張るといわれる(註7)。本区出土の土器は頸胴部の破片で、全形を窺うことはできないが、頸胴部の形状は片野3式の範疇に含めてよいと思われる。

器厚は約0.8センチで、胎土に含まれる混入物は室川下層式、神野A式と同様石英を主体とし、ほかに長石、岩片などを含む。混入量は室川下層式や神野A式に比べやや少い。

器色は表裏面とも暗褐色を呈する。焼成は良好で堅い。

#### 文様

器面調整は、表裏面ともに横位の条痕を施すが、表面はかなり撫でられ大部消えている。しかし、裏面には明瞭に残る。

文様は頸胴部の境に刻目凸帯を2条横走させるもので、刻目の間隔は一定せず疎らなところや密なところなどが見受けられる。刻目は浅く、あまり目立たない。凸帯の断面は三角形を基本とするが、部分的に方形になったり、やや丸味を帯びる箇所などもある。凸帯は上下両端を押しつけて貼付するもので押し付けの弱い部分があり、全体的に脆弱である。上下の凸帯の間隔は凸帯中央の陵線間で約1.0センチである。

#### 註

1. 沖縄県教育委員会 「津堅島キガ浜貝塚発掘調査報告書」沖縄県文化財調査報告書 第17集 1978
2. 沖縄県伊是名村教育委員会 「具志川島遺跡群 第一次発掘調査報告書」伊是名村文化財調査報告書第1集 1977
3. 宮城朝光「渡嘉敷島船越原遺跡の土器」花綵 創刊号 沖縄国際大学考古学研究會OB会 1979
4. 沖縄県伊是名村教育委員会 「具志川島遺跡群 第四次発掘調査報告書」伊是名村文化財調査報告書・第6集 1981
5. 河口貞徳 「奄美における土器文化の編年について」鹿児島考古第9号 鹿児島県考古学会 1974
6. 多和田真淳「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」文化財要覧1956年版 琉球政府文化財保護委員会 1956(昭31)年
7. 河口貞徳 「鹿児島県片野洞穴」河口貞徳先生古稀記念著作集 上巻 1981

## V A—3区

### 出土遺物

本区出土の遺物は自然遺物と人工遺物に分けられる。前者は獣魚骨のほか陸産や海産の貝などの食料残滓を主体とし、自然礫や木炭片なども少量検出された。自然遺物については一部金子浩昌氏に同定していただいたのでその範囲で概述したい。

獣骨の出土量は少なく、ネズミや鳥、イノシシなどの陸棲のものと海ガメ、ジュゴンのような海棲のものなどが検出されている。ネズミは縄文後期層（第Ⅳ・Ⅴ層）に顕著で、イノシシおよび海棲動物は縄文前期層（第Ⅶ・Ⅷ層）に多い。魚骨はブダイ、ベラ、ハタ類が目立ち、前期層と後期層の違いはあまり見られない。

貝類は陸産マイマイ、シャコ貝、チョウセンサザエ、サラサバティなどが目立ち、二枚貝は少なかった。陸産マイマイは縄文後期層において多量に出土したが、前期層では僅少であった。

人工遺物は土器が最も多く、次いで貝製品、骨製品、石器の順であるが、骨製品と石器はきわめて少なかった。

以下、石器、骨製品、貝製品、土器の順に記述する。

### A 石 器

石器および石製品が第Ⅳ層および第Ⅴ層cより4点検出された。石器は3点で、他の1点は石製装身具である。石器は磨石、石皿、石斧がそれぞれ1点ずつ得られた。

第1表 石器・石製品の層位別出土状況

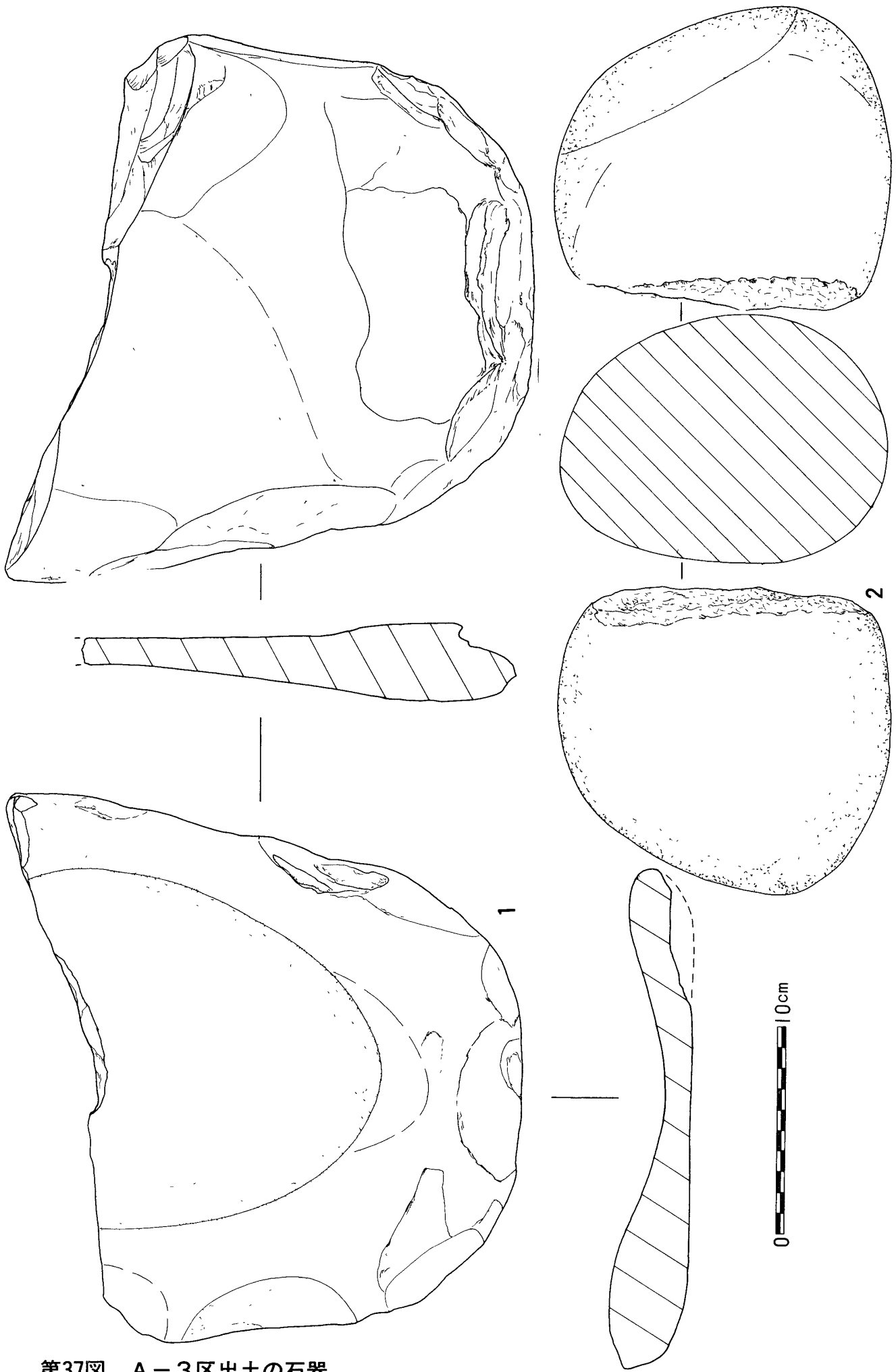
層序	製品名	磨石	石皿	石斧	サンゴ石製品
I					
II					
III					
IV				1	1
V	a				
	b				
	c	1	1		
VI					
VII					
VIII					
計		1	1	1	1

#### a) 石 皿

第37図1は石皿の半欠品で砂岩を素材とする。平面は楕円形を呈していたとみられる。側縁部は調整剝離を加えている。表面は中央へ著しく凹んでおり、使用頻度を示すものであろう。背面は凹面を持たず、粗面である。そのことから表面のみを使用したものと言える。厚さは側縁部で約3.5センチと最も厚く中央の凹みの部分は約1.3センチと最も薄い。現存長約21センチ、幅25.5センチ、重量約3kg。第Ⅴ層cの出土。

#### b) 磨 石

第37図2は磨石の一種とみられるもので、側面の一部に砥磨面を残す。他は自然面である。本標品は半欠品であるが、完形において



第37図 A-3区出土の石器

平面は楕円形を呈していたと思われ、横断面は楕円形である。破損面の周縁部は敲打調整を行っており、敲打痕がかなり見受けられる。したがって破損後も引続き敲打などの用途に使用されたとみられる。砥磨面は破損部の反対側にあり、立てて使用したものであろう。大型の磨石で重量は約 4.1kg である。砂岩製、長径16センチ、短径14.5センチ、第Ⅴ層cの出土。

### c) 石 斧

第38図2は磨製石斧の刃部破片で、表面の一部のみ残存し、したがって具体的な形状は不明である。表面の研磨は入念で滑沢を有する。素材は輝緑岩である。現重量10.91 g、第Ⅳ層の出土。

### d) 石 製 品

第38図1はサンゴ石を素材とする有孔製品で、平面は楕円形、断面は長楕円形である。平面には両面から2孔を穿っている。孔は中心部を外れ、若干右側に寄り、たがいに隣接して穿たれている。口径は表面 0.7センチ、中央部で3ミリである。孔の周辺に特に紐ズレの跡は見受けられない。器面はすべて自然面と解され、研磨面は認められない。装身具の一種であろう。この種の石製品がB-5区においても1点出土している。長径約 3.5センチ、短径約 2.5センチ、最大厚0.9センチ、重量6.6g。第Ⅳ層の出土。

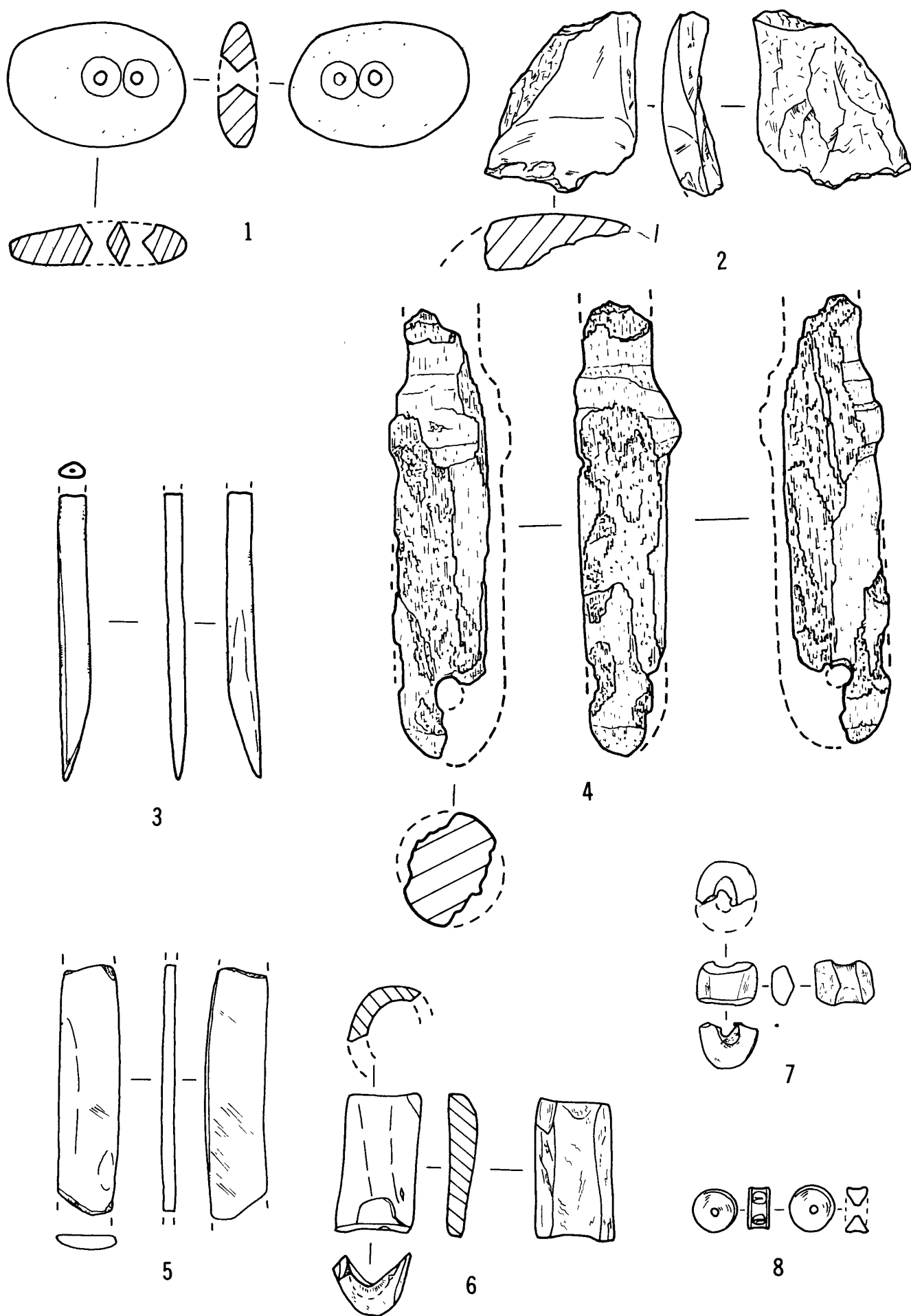
### B 骨・角製品

骨製品は少なく僅かに6点の出土で、装飾品が主体をなし、実用品は骨針の1点のみである。

第2表 骨製品層位別出土状況

層位	製品名	サメの脊椎 骨製ビード	鹿角製ビード	鯨骨製品	ヘラ状骨製品	長管骨加工品	骨 針
I							
II							
III							
IV					1		1
V	a						
	b						
	c	1	1	1		1	
VI							
VII							
VIII							
計		1	1	1	1	1	1





第38図 A-3区出土の石器、骨・角製品

0 5 cm

## a) 実用品

### ①骨針 (第38図3)

イノシシの腓骨を利用するもので、先端の一側面のみを加工して尖らせる。先端部は使用のため摩耗し、滑面となる。擦痕などの使用痕は認められない。先端は鋭利である。横断面は扁円形で頭部を欠く。現存部の長さ56ミリ、幅6ミリ、断面5.3ミリ×3.4ミリ、重量1.03gである。第Ⅳ層0～10センチレベルの出土。

## b) 装飾品

### ①ヘラ状骨製品

第38図5の1点で、ジュゴンの骨をヘラ状に薄く研磨加工したもので、両端を欠く。緻密な骨で、左右の側面と裏面を加工するが、研磨は入念で、全面滑沢を有する。確かな用途は不明だが、きわめて薄く扁平であることから、装身具の一種かと考えられる。現存部の長さ5.0センチ、幅1.2センチ、厚さ2.3ミリ、重さ1.86g。第Ⅳ層下部の出土。

### ②鯨骨製品

第38図4は剣のような概形を有するもので保存状態はきわめて悪く完形時の器面を残す箇所は少ない。本来、全面研磨したものであろう。先端部は丸みを帯び同部に近く1孔を表裏両面より穿っているが、大破して原形をとどめない。用途は不明であるが実用具とは考えがたく、装身具か呪具の一種であろう。現存部の長さ8.9センチ、断面径推定2.2センチ、孔径推定6ミリで、第Ⅴ層c30～40センチレベルの出土である。

### ③長管骨加工品

第38図6はイノシシの長管骨を2.8センチの長さに切りとり切断面に研磨を施したもので、それ以外の加工は見られない。縦に割れた半欠品である。現存部の長さ2.8センチ、断面径推定2センチ、重さ4.10gで第Ⅴ層c0～10センチレベルの出土。

### ④鹿角製ビード

第38図7は鹿角を素材とし、切断面の中央部に両側より1孔を穿つもので、半欠品である。切断面および側面の一部に研磨が施され、かつ全面手なれ様の滑沢を有する。平面形は楕円形を呈していたかと思われる。高さ8.1ミリ、幅16ミリ、重さ1.00g。第Ⅴ層c0～10センチレベルの出土。

### ⑤サメの脊椎骨製ビード

第38図8はサメの脊椎骨を利用したもので中央に1孔を穿つ。小型の製品である。高さ4.4ミリ、径9.1ミリ、孔径2.2ミリ、重さ1.20g。第Ⅴ層c0～10センチレベルの出土。

骨製品は貝製品に比べて著しく少ないが、このことは他の発掘区とも共通する。骨製品の中では、先述のように装身具とみられるものが若干多かった。

## C 貝製品

本区では第Ⅳ～第Ⅴ層より計56点の貝製品が得られ、実用品と装飾品に大別されるが、用途不明のものもある。種類および出土層は第3表の通りである。まず、実用品から記述する。

第3表 貝製品の層位別出土状況

層序	製品名	装飾品					実用品					計	
		イビ モノ 貝製ド	イ有 モ孔 製貝品	円盤 状イ モノ 貝品	垂 飾 品	貝 輪	キ製 バフ デ貝品	二有 孔製 貝品	ヤ貝 コウ 貝製匙	ヤ蓋 コウ 製貝品	貝 刃		スイジ 貝製品
I													
II													
III													
IV		3	1	1	1	2	1	1			1		11
V	a					1		1				1	3
	b			無	遺	物	層						
	c	27				4		1	3	3		4	42
VI													
VII													
VIII													
計		30	1	1	1	7	1	3	3	3	1	5	56

a) 実用品

① 貝刃

シレナシジミを利用したものが1点（第39図5）得られ、腹縁部に押圧剥離を加え、刃部をつくる。刃部は細かな鋸歯状を呈し、ほぼ腹縁全辺におよんでいる。また、刃部は摩耗しているが、まだ光沢もみられる。大きさは殻長 5.8センチ、殻高 5.3センチ、重量 16.46 g で、第IV層10～20センチレベルの出土。

② ヤコウガイ蓋製品

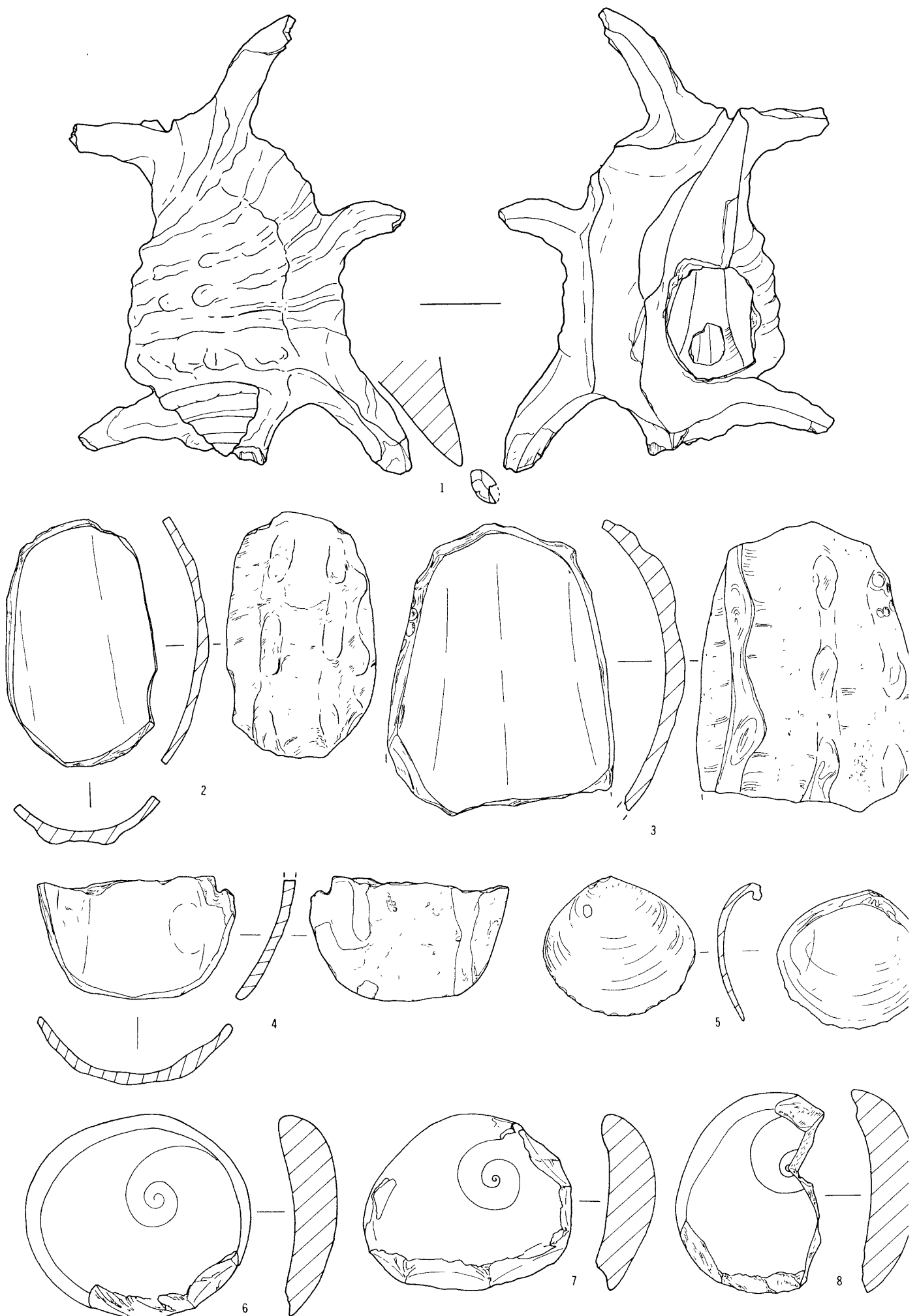
第39図6～8の3点で、従来、貝刀と呼ばれていたものである。三島格氏の螺蓋製貝斧（註1）に当るもので、蓋の腹縁部を加工附刃したものである。附刃の範囲は同図6は円周の約 $\frac{1}{4}$ 、7は約 $\frac{2}{3}$ 、8は一部欠損するが約 $\frac{1}{3}$ 程度と察せられる。6・8の刃部はまだ若干鋭さを残しているものの、7はやや摩滅し

ている。大きさは6が 8.7センチ×7.9センチ、194.87g、7は 7.9センチ×6.8センチ 158.43g で、8は幅は不明だが、長さは 1.5センチ、重量は133.68g。出土層は3点ともに第V層cである。

③ ヤコウガイ製貝匙

第39図2～4の3点で、ヤコウガイの体層部を利用して匙状に加工したものである。同図2は加工部左右長辺の一部に砥磨が加えられ、滑面を有する部分もあるが、大部分は打欠のまま放置され、打割面は粗さを残す。内外両とも自然面のままで、加工はみられない。

同図3は半欠品で、周縁加工部は一部摩耗した箇所が認められるものの、他は打欠のまま放置されている。外面の結節肋が部分的に研磨されている以外、内外面とも自然面のままである。匙の未成品であろう。同図4は先端部の破片で、採集資料3点の中では最も手



第39図 A-3区出土の貝製品

0 5cm

が加えられ、周縁部および殻表面のコブは研磨され、結節は完全に消えている。ただし、それ以外の外面および内面は自然面のままである。現存部の大きさは2が9.3センチ×5.6センチで、51.71 g、3は10.8センチ×8.9センチで、102.09g、4は7.6センチ×5.1センチで、41.32 g。3点とも第V層cの出土。

#### ④二枚貝有孔製品

二枚貝の背面部に粗孔を穿つもので、3点（第41図1・3、第42図5）の出土である。いずれも貝種はエガイで、類例の少ない資料である。二枚貝の有孔製品としてはリュウキュウサルボウ、カワラガイ、シラトリガイ、ヒメジャコなどが知られており、後者の中には貝錘とみられるものもある。本標品を貝錘とみるには多少の疑問もあるが、他方、装飾品とするには孔の整形に難点があり、どちらかといえば実用具の方に可能性があるのではなかろうか。

第42図5は殻長4.5センチ、殻高2.8センチ、重さ4.48gで、孔径は2.0×1.4センチである。孔の周縁はシャープな割れ面を残す。第IV層の出土。第41図1は殻長5.0センチ、

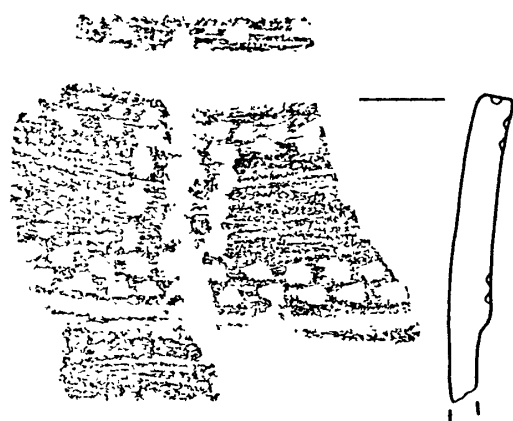
殻高2.9センチ、重さ5.41g。孔径は2.2センチ×1.3センチで、孔の周縁は割合シャープである。第V層aの出土。

同図3は殻長3.5センチ、殻高2.3センチ、重さ3.62g、孔径1.2センチ×0.7センチで孔の周縁はシャープである。第V層cの出土。

#### ⑤スイジガイ製品

第39図1および第40図1～4の5点である第39図1は管状突起のひとつを表裏両面より研磨附刃したものである。他は管状突起が破損あるいは欠落しているため、附刃の有無を確かめ得ない。腹部の孔は主として採肉のためであろうが、中には第39図1や第40図1のように穿孔が内部の螺階の奥にまでおよぶものもあり、採肉以外の用途を暗示しているようにも見受けられる。

各管状突起の保存状況については第4表に示したように、ほぼ全形を保つものは稀少で先端部を欠くものがほとんどである。しかしながら各標品の第2管状突起は僅に基部を残すだけで、大部分欠損しており、それが偶然によるものか、あるいはある目的によるものか、目下のところ不明である。



#### 万屋下山田遺跡の神野D式土器

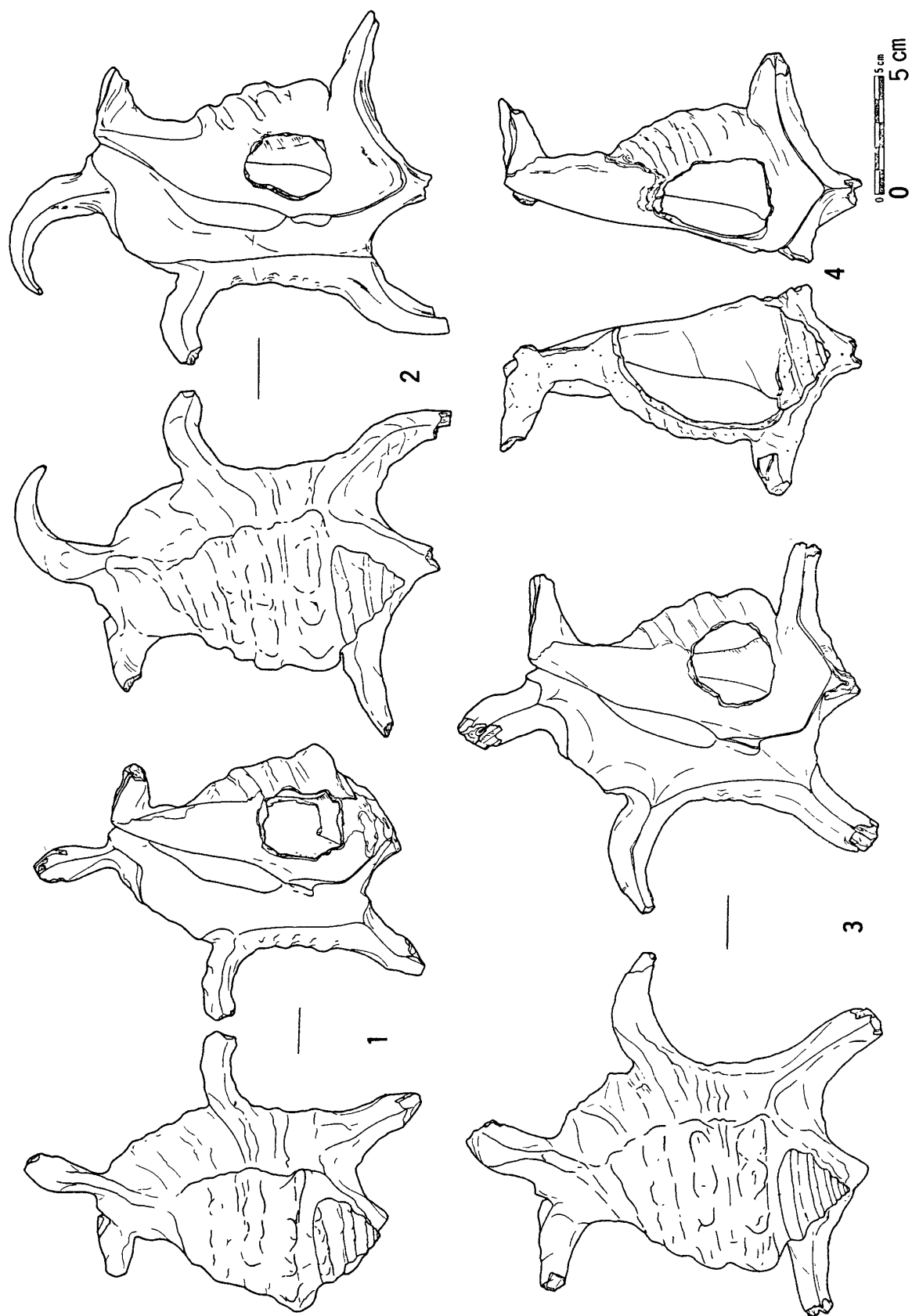
左図は奄美大島笠利町万屋下山田遺跡表採の神野D式である。島弘氏によって表採（1982年8月2日）され、本誌への掲載を許可された。ご厚意に感謝したい。本資料は山形口縁の破片で、口縁部は微弱な肥厚を示し、同部および口唇部に施文する。口唇上は列点文。肥厚部外面には第1および第3文様帯に横位の点刻文をそれぞれ1組配し、第2文様帯には縦位の点刻文を部分的に配している。

第4表 スイジガイの保存状況

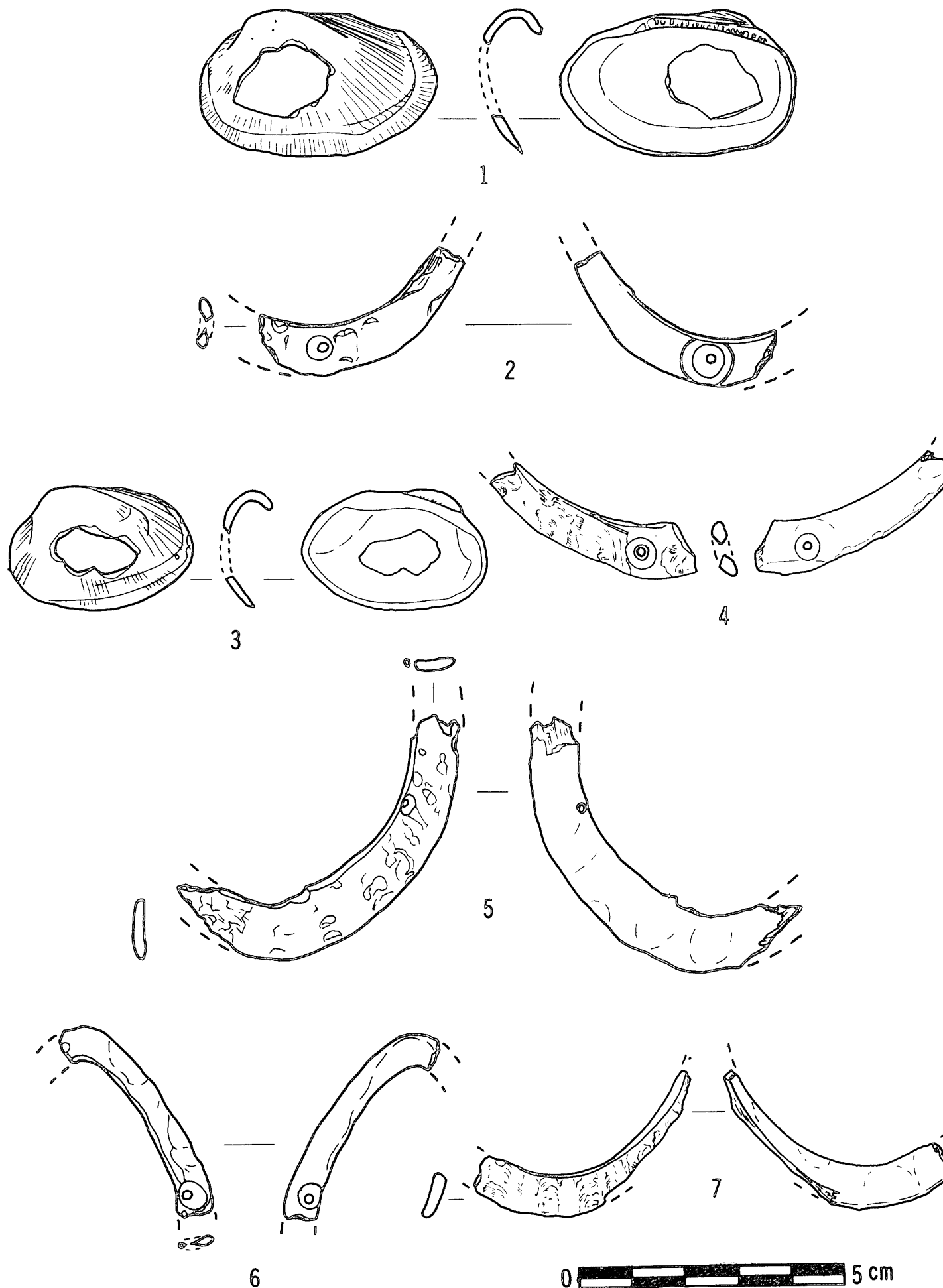
図番号	管状突起の保存状況						刃部形状		各部の量				出土層	観察
	管状突起の保存状況						刃部形状		各部の量					
	1	2	3	4	5	6	平面	側面	A	B	C	重量(g)		

第39図 図1	●	×	△	△	△	△	平面	両刃	1.5 ≡ リ	131 ≡ リ	92 ≡ リ	424	V層 a 30 ~ 40 cm	第1管状突起を表裏両面より研磨し、附刃。ただし裏面の右半部欠損。腹部の孔は楕円形の粗孔で、大きさは42×35ミリ。内部の螺階にも15×14ミリの粗孔。
第40図 図1	△	×	×	△	△	△	—	—	123 ≡ リ	84 ≡ リ	290	V層 c 10 ~ 20 cm	管状突起欠損のため附刃の有無は不明。腹部の孔は円形（30×31）に近く、螺階にもおよぶが、孔径は不明。いずれも粗孔で研磨は認められない。	
第40図 図2	△	×	△	△	○	△	—	—	130 ≡ リ	88 ≡ リ	469	V層 c 10 ~ 20 cm	管状突起欠損のため附刃の有無は不明。腹部の孔は楕円形（35×31）で研磨認められず。	
第40図 図3	△	×	△	△	△	○	—	—	133 ≡ リ	94 ≡ リ	419	V層 c 10 ~ 20 cm	管状突起欠損のため附刃の有無は不明。腹部の孔は円形（36×37）を呈し、研磨は認められない。	
第40図 図4	×	×	△	△	×	×	—	—	134 ≡ リ	—	243	V層 c 10 ~ 20 cm	管状突起欠損のため附刃の有無は不明。腹部の孔は楕円形（45×37）を呈し、研磨は認められない。	

● 附刃    △ 半欠突起    ○ 完全突起    × 全欠損



第40図 A-3区出土の貝製品



第41図 A-3区出土の貝製品



## b) 装飾品

### ① キバフデガイ製品

第42図1はニシキノキバフデ貝を縦に半截して研磨を加えたもので、加工面は平坦で、かつ、滑沢を有する。また、その裏側の殻口部の一部および螺塔部にも研磨を加え、そのため前面部同様内部が露呈している。この部分の横断面は台形状を呈する。殻頂部と外唇部を欠くが完形に近く、用途としては垂飾品の可能性を考えている。現存部の大きさは殻

高 5.5センチ、殻径 2.6センチ、重量14.64g  
第Ⅳ層 0～10センチレベルの出土。

### ② 貝輪

オオツタノハを利用したもので、第41図2・4～7、第42図3・4の7点得られておりすべて破損品である。貝の周縁を貝輪に利用するもので、表面、両周縁部を研磨するものや、孔を穿つものなどがあり、詳細は第5表の通りである。

第5表 貝 輪

図 番号		各部の法量				研磨の程度				穿孔方法及び孔径		出土層
		長さ (mm)	最幅	厚さ	重量 (g)	表面	裏面	外縁	内縁	穿孔方法	孔径 (mm)	
第 41 図	2	40	9.5	3	2.40	△	—	△	○	表裏両面より穿孔。 裏著しい。	2	V層 a 0～10
	4	42	10	3.5	2.47	△	—	△	○	表裏両面より穿孔。裏より 2度にわたり穿孔。	2	V層 c 10～20
	5	62	12	2.5	4.64	△	—	△	—	表面からのみ穿孔。	1.5	V層 c 10～20
	6	43	7	3.5	1.66	×	—	×	○	表裏両面より穿孔。	2	V層 c 10～20
	7	41	8	2.5	1.67	△	—	△	○	—	—	V層 c 10～20
第 42 図	3	54	13	3	3.58	△	—	△	○	—	—	Ⅵ層 0～10
	4	39	9	3.5	1.39	△	—	△	○	—	—	Ⅵ層 30～40

研磨の程度 ○全面、△部分的、×不明瞭、—無し（上表は現存部についての観察）

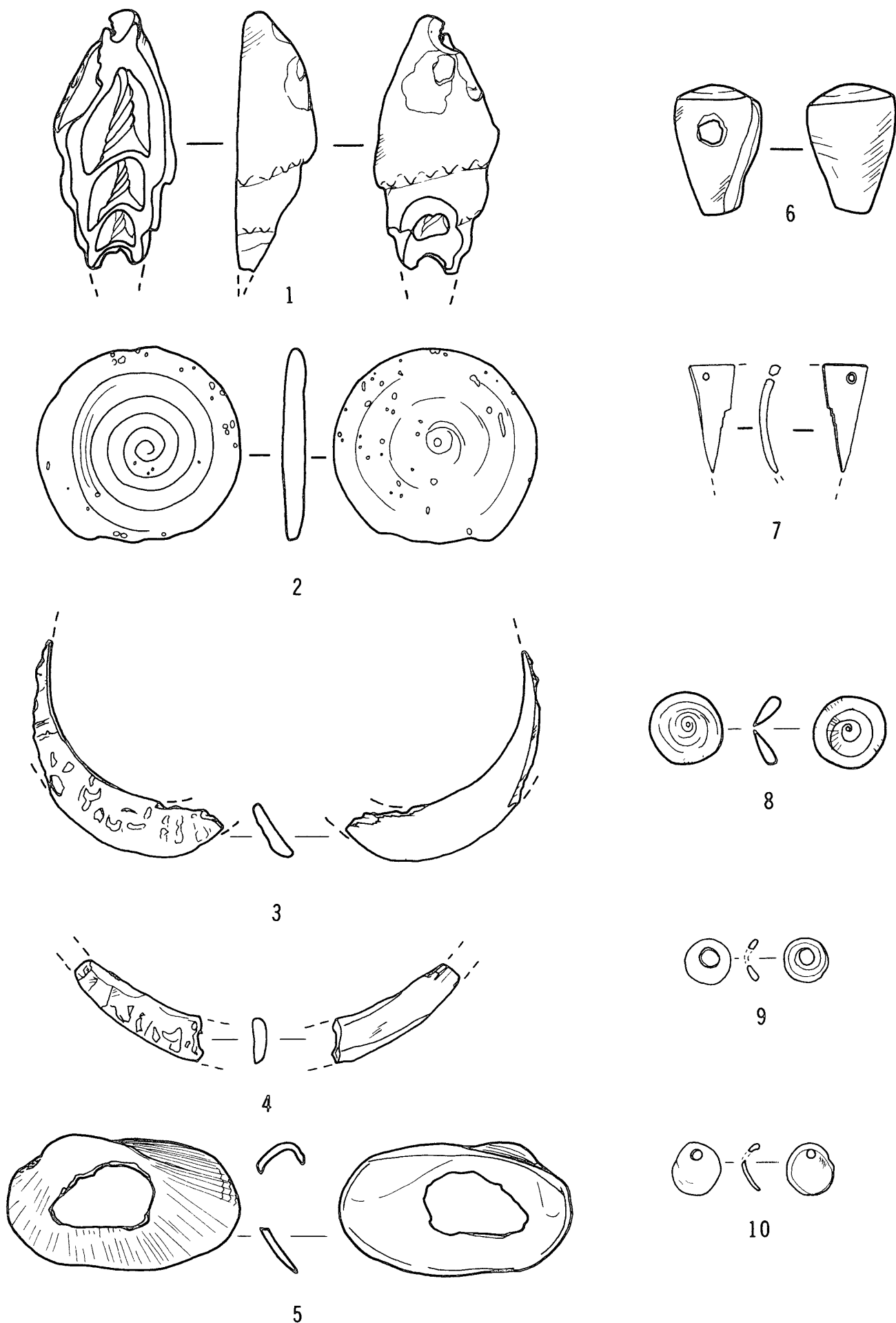
### ③ 垂飾品

第42図7は巻貝（種不明）の体層部を利用するもので、半欠品だが、残存部より方形あるいは三角形を呈していたものと推察される。隅の方に表裏両面より穿孔された径 1.5ミリの小孔を有し、周縁は丁寧に研磨される。現存部の大きさは長さ13ミリ、幅9ミリで重さ

は0.49g。第Ⅳ層 0～10センチレベルの出土

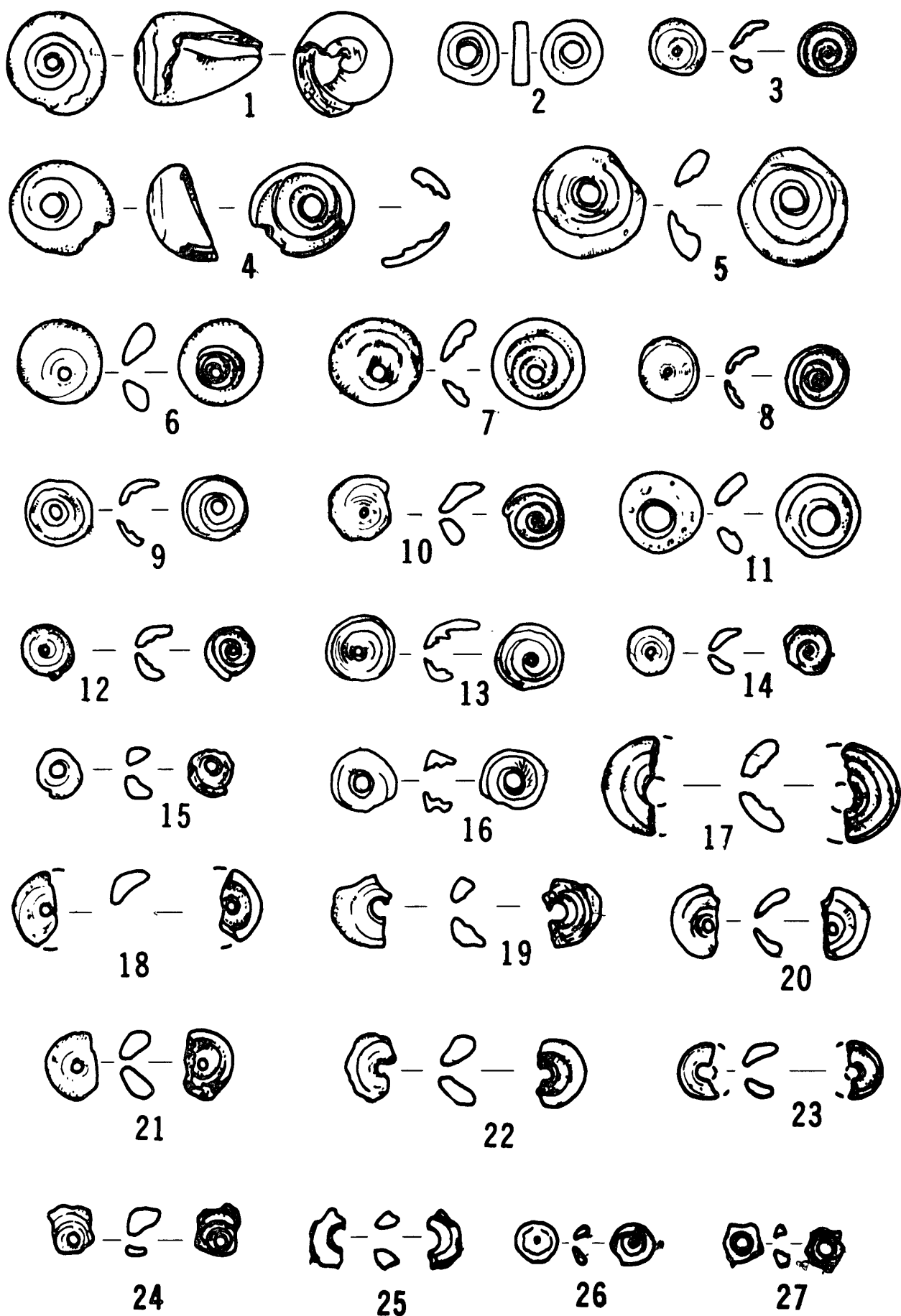
### ④ 円盤状イモ貝製品

第42図2は大型のイモ貝の螺塔部を円盤状に加工したものである。貝種は不明だが、アンボンクロザメやクロフモドキ等の大型で螺塔部の平らな貝を利用したもので、その形状



第42図 A-3区出土の貝製品

0 5 cm



第43図 A-3区出土の貝製品

0 5 cm

第6表 イモ貝製ビード

図 番 号		法 量				観 察
		高 さ	殻 径	孔 径 (殻頂部)	重 量 (g)	
第 42 図	8	6.2	15.8	1.0	1.85	全体的に摩滅。
	9	3.1	9.5	3.9	0.25	〃
	10	4.5	10.9	2.5	0.30	〃
第 43 図	1	19.3	14.1	2.1	3.15	殻口に研磨を認める。
	2	2.4	9.1	3.3	0.25	円盤状に整形され、研磨は良好。中央の孔は研磨によって生じたもの。
	3	6.2	9.0	0.8	0.33	全体的に摩滅。
	4	11.9	14.5	3.1	1.52	〃
	5	8.0	15.5	4.3	1.63	〃
	6	4.7	13.0	1.9	1.04	〃
	7	7.3	13.5	2.3	1.17	〃
	8	9.0	11.1	1.5	0.81	〃
	9	11.5	10.3	2.3	0.44	〃
	10	4.3	9.4	1.0	0.35	〃
	11	4.9	12.6	4.8	0.47	〃
	12	5.4	7.9	1.5	0.27	〃
	13	8.3	9.9	0.9	0.68	〃
	14	4.8	6.8	0.9	0.19	〃
	15	3.0	6.7	2.1	0.15	〃
	16	5.0	9.5	2.8	0.43	〃
第 43 図	17	7.5	14.2	—	0.77	殻長より左右2つに割れているため孔径不明。全面摩耗。
	18	4.7	—	2.0	0.29	左右2つに割れ、孔径は不明。
	19	5.2	—	3.0	0.29	殻孔はほぼ残るが、大部欠損。
	20	4.4	10.0	1.8	0.28	半欠に近いが、孔は完全。
	21	15.0	10.0	1.7	0.36	同 上
	22	9.2	—	2.0	0.39	半 欠
	23	4.0	2.8	2.0	0.13	半 欠
	24	5.2	—	2.1	0.17	半 欠
	25	3.8	—	3.5	0.12	半 欠
	26	2.9	2.6	1.0	0.08	全体的に摩滅。
	27	3.0	—	3.1	0.07	周縁が欠けているため殻径不明
平 均		6.8	10.36	2.47	0.65	

より実用品とは考えがたい。また、B-5区においてもこの種の有孔製品が出土しており本区のものはその未製品とも考えられる。大きさは4.3センチ×4.1センチ、重さ15.29 g 第Ⅳ層0～10センチレベルの出土である。

#### ⑤ イモ貝有孔製品

第42図6は小型のイモ貝の体層部側面に径5ミリの粗孔をもつものである。また、前溝部に若干の研磨が認められる。実用品とは考えがたいので、一応装飾品を想定している。殻高2.8センチ、殻径1.9センチ、重量6.50 gで第Ⅳ層30～40センチレベルの出土。

#### ⑥ イモ貝製ビード

第42図8～10、第43図1～27の30点であるイモ貝の螺塔部を利用したもので、殻頂部に一孔を有するものである。ほとんどが全面摩耗しており、人工品か否かの判定が困難である。また、中には海棲動物などの穿孔による非人為的なものを、後に装飾品に利用したものも含まれるかと考えるが、これも判別が困難である。

採集資料は殻全体を残すものと螺塔部のみを残すものの2種に大別され、前者は1点のみの出土（第43図1）であった。したがって

後者は29点となるが、これも2種に細分される。すなわち、螺塔部を円形平盤状に加工するものと螺塔部があまり変形せず、原形をとどめるものである。前者は1点（第43図2）の出土で、他は後者に属するが、その中に先述の人為的か非人為的か判断のつきかねるものが多い。しかし、仔細に観察すると、穿孔の仕方や穿孔部を研磨するものなど判別の根拠の得られるものもある。詳細は第6表の通りである。

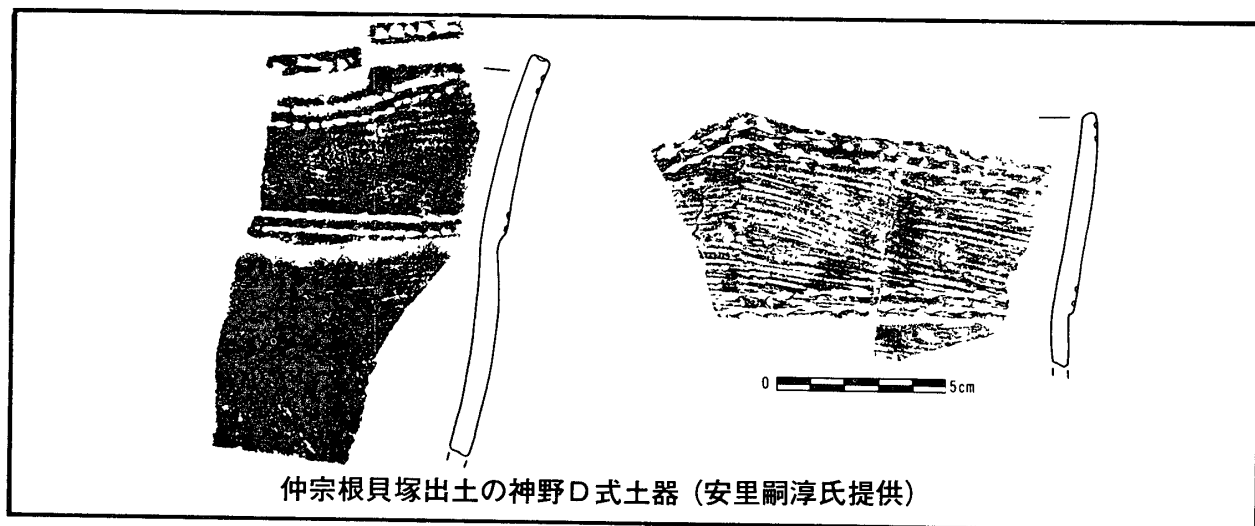
註1 三島格 「螺蓋製貝斧」『賀川光夫先生還暦記念論集』 1982年12月

#### D 土 器

1982年および翌83年の2次にわたる調査で総数1130点の土器片を採集した。それらは在地土器と九州からの搬入品とみられる土器からなるが、後者は稀少である。在地土器は13型式に分類され、新型式も若干含まれる。

なお、本区では神野B式、松山式、面縄東洞式、面縄西洞式は得られておらず、したがって9型式について記述する。

なお、胎土混入物の金雲母は黒雲母の可能性もあり、そのため本文では金雲母の後に「？」印を付した。



第7表 各型式の出土状況

層序	型式名	第一類	第二類	第四類	第七類	第八類	第九類	第十一類	第十二類	第十三類								
		室川下層式	神野A式	面縄前庭様式	嘉徳I式A	嘉徳I式B	嘉徳II式	神野D式	神野E式	伊波式	伊波系不明	有文破片	無文口縁	無文胴部	底部	春日類似土器	疑縄文土器	計
I														2	1			3
II											1							1
III																		
IV				8	1	2	3	1	3	6	5	31	5	431	12			508
V	a			9	3		1	2	3	2	3	5	2	129	1			160
	b																	
	c			26	6	1	9	1	3	3	5	29	5	326	14			428
VI																		
VII		7	1												1	1	1	11
VIII		19																19
計		26	1	43	10	3	13	4	9	11	14	65	12	888	29	1	1	1130

#### a) 室川下層式土器

本区においては本型式が第Ⅶ層より7点、第Ⅷ層より19点の計26点出土した。本区は側壁が軟弱で壁面崩壊が著しく、そのため今回は第Ⅶ層まで掘り下げ、同層以下の調査を断念したが、隣のBトレンチにおける層位的出土状況を参考にすると、本区においても室川下層式土器が最古型式になるものと思われる。出土量は口縁部が4点（いずれも有文）、胴部が22点（うち8点は有文）で底部は検出されていない。そのうち、第44図・第45図1～9の25点を図示したが、1点は小破片のため省略した。口縁部破片の中には口径の推算可能なものが1点含まれている。

#### 器種・器形

器種は口縁部破片で判断すると、いずれも深鉢形である。口縁4点のうち2点（第44図

1・8）は直口に属するが、他の2点は小破片のため不明。同図1の口径は推算14.6センチである。

胴部については形状を示しうる資料がなく詳細を提示できないが、底部に近い資料は数点あり、それからすると尖底か、尖底的丸底であろう。

口縁形態はすべて平口縁に属し、波状口縁は検出されていない。口唇部は第44図8の1点は上面がほぼ平坦に整形され、他の3点は断面形態が舌状をなす。

胎土混入物をみると石英を主体としておりそれに金雲母？などをわずかに含む。混入物は一般的に粗く、肉眼での観察が可能であるしかし、第44図10・11の2点は混入物が細かく混入量も少ない。

器厚は0.8～1センチのものが一般的で、最も厚いものは第44図6の1.24センチ、最も

薄いものは同図10の 0.6センチである。焼成は良好なものから粗悪なものまであり、前者が若干多い。器色は茶褐色と暗褐色を呈するものに分類され、後者が一般的である。両面とも同色を呈するものや、表面が茶褐色、裏面が暗褐色を呈するもの、あるいはその逆といったように表裏で器色を異にするものも見受けられる。

### 器面調整

施文前の器面調整の方法を見ると、ナデ調整をおこなうものが一般的であるが、その他条痕を施すもの、篋調整を行うもの、擦痕を施すものなどが見受けられる。条痕を施したあと、それをナデ消すのが一般的である。しかし、中にはナデが徹底せず条痕の残る場合も見受けられる。両面に条痕を施すものは4点（第44図4・8、第45図5・9）である。第44図4は外面に縦位、内面に横位の条痕を施している。同図8は両面とも横位の条痕である。第45図5は表面に斜位、裏面に横位の条痕、同図9は表面に縦位、裏面に斜位の条痕が見受けられる。外面にだけ条痕を残すものは2点（第44図3・6）で、2点とも縦位の条痕である。また、外面に擦痕を残すものは第44図14の1点である。外面を篋で調整するものは2点（第44図7・9）である。内面にのみ条痕を施すものは2点（第44図5、第45図8）で、両者とも横位に条痕を施している。他はすべてナデ調整を行っている。条痕、擦痕、篋調整痕などの調整痕はいずれも浅目である。

### 文様

施文部位は口唇部、器の内外両面の3ヶ所で、内面の場合は口縁内面に限られる。外面における施文範囲の下限を示す資料は得られ

ていない。

施文具の種類は単篋工具と二枚貝の腹縁を用いた2種が認められ、単篋工具を利用したものが多い。二枚貝の腹縁を利用したものは第44図12の1点だけで、同図8の口縁部第2文様帯の斜行文もその可能性があるが、破損部の文様のため判断が困難である。

口縁部の文様は第2文様帯まで確認できる。本型式の第1文様帯は①横位文様で始まるものと②斜行列点文で始まるものの2種に大別される。口縁部破片4点のうち、第1文様帯が明確なのは第44図1・8・15の3点で、いずれも①に属する。

同図1は第2文様帯まで確認できる。口唇部、口縁内面にも施文する。

第1文様帯は斜位の刻文を口唇にそって1列施すもので、刻文の長さは約0.6センチと短い。いずれも施文は深く鮮明である。

第2文様帯は斜行列点文で、斜度は緩急認められ、左端の1列は前者、右側の2列は後者である。後者の方が若干施文は深めで、この2組の斜行文は下方で交わる可能性も考えられる。なお、右側2列の斜行文間には幅約0.2センチの斜沈線が2条施されている。

口縁内面にも外面の第1文様帯と同様の刻文が1列施されている。内面の刻文は外面に比べて幅は狭いが、長さは約1センチと長くなっている。左半分は摩耗が著しく、不明瞭である。

口唇部には2点1組の刻文を施す。特に、外面側の刻文は深く鮮明だが、内面側のものは部分的に浅いものや消えかかっているものもある。

同図8も第2文様帯まで確認でき、口唇部口縁内面にも施文する。

第1文様帯は斜行列点文で始まるもので、

第2文様帯との関係でみると例外に属する資料である。斜行列点文で始まる場合、普通第2文様帯は横位文様となるが、本標品の場合この列点文の下にさらに斜行文を刻んでいるつまり、厳密にはいずれも斜行列点文なのである。しかし、最上段の斜行列点文は長さが短く、その点では刻文に近い形状となっている。この斜行列点文を一種の刻文（あるいは変形刻文）と解すなら、第2文様帯は通常の斜行列点文でよいわけである。本例をそのように解すれば①の範疇におくことができる。したがって、本文では①に分類した。

第2文様帯は斜行列点文であり、二枚貝の復縁によるものと思われる。左下りの斜行文が1列認められるが、破損部に施文されているため長さははっきりしないが、1.2センチ前後であろう。斜行文の間隔は約0.5センチとほぼ一定している。この斜行文の両側には無文空白部が形成され、斜行文は一定の間隔において施文されたものであろう。

口縁内面の文様は外面と異り、斜沈線で、長さは約1.2センチである。斜沈線の間隔は外面の斜行列点文の間隔と同じく約0.2センチである。

口唇部は刻文を約0.3センチ間隔で施文しているが、途中で施文方向が変わっている。施文は深く鮮明である。

同図15は第1文様帯のみ確認でき、口唇部・口縁内面にも施文する。

第1文様帯は刻文を用いて羽状文を描いている。刻文の長さは0.4～0.8センチと区々であるが、いずれも施文は深く、鮮明である。

口縁内面の文様は外面と異なり、斜行細沈線を1段刻むもので、沈線の長さは1.9センチ前後である。さらにその下端に1条の細沈線を横走させている。

口唇部にも細沈線が浅く施され、その間隔

は0.1センチ～0.5センチと一定しない。細沈線を用いていることは他の3点と異っている。

同図12は小破片のため文様構成がはっきりしない。

口縁外面には二枚貝の腹縁によると思われる浅い弧文が2個認められ、両者の間隔は約0.5センチである。弧文は2個とも約1.4センチの長さである。

口縁内面にも外面と同様の文様が施文されている。長さは約1.4センチで、弧文の間隔は両面ともあまり差異はない。

口唇部には2個の浅い刻文が認められ、両者の間隔は約0.7センチである。

次に、胴部の文様について記述する。

有文胴部は第Ⅶ層より3点、第Ⅷ層より5点の計8点得られているが、施文方向の明確なものは下記の1種類だけである。

#### ①斜行ないしは縦位文様

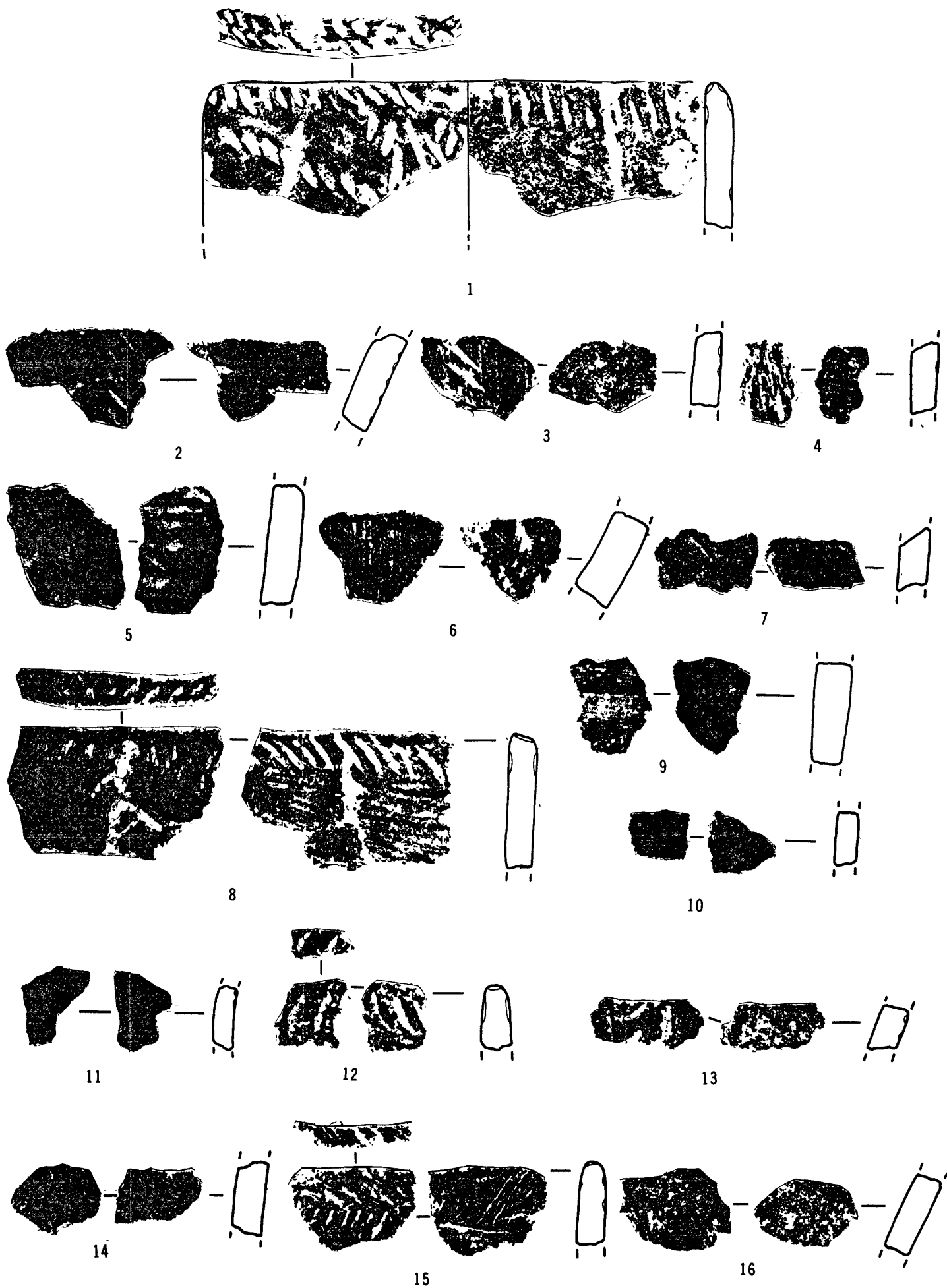
有文胴部8点のうち、①に属するものは6点（第44図2・3・13・14、第45図2・3）である。第44図2は有軸羽状文となっているが、軸は右寄りである。文様は軸がかなり浅目であるのに対して羽状文の方はやや深い。

同図3は右下りの斜行文が約0.3センチ間隔で3個見られるが、最下の斜行文は不明瞭で、拓影にはあらわれていない。

同図13は左下りの刻文が縦位に2個認められ、その右方に幅約0.3センチの沈線が縦位に1条施されている。刻文も沈線も深く鮮明である。本標品は同図2のように有軸羽状文を施していた可能性も考えられる。

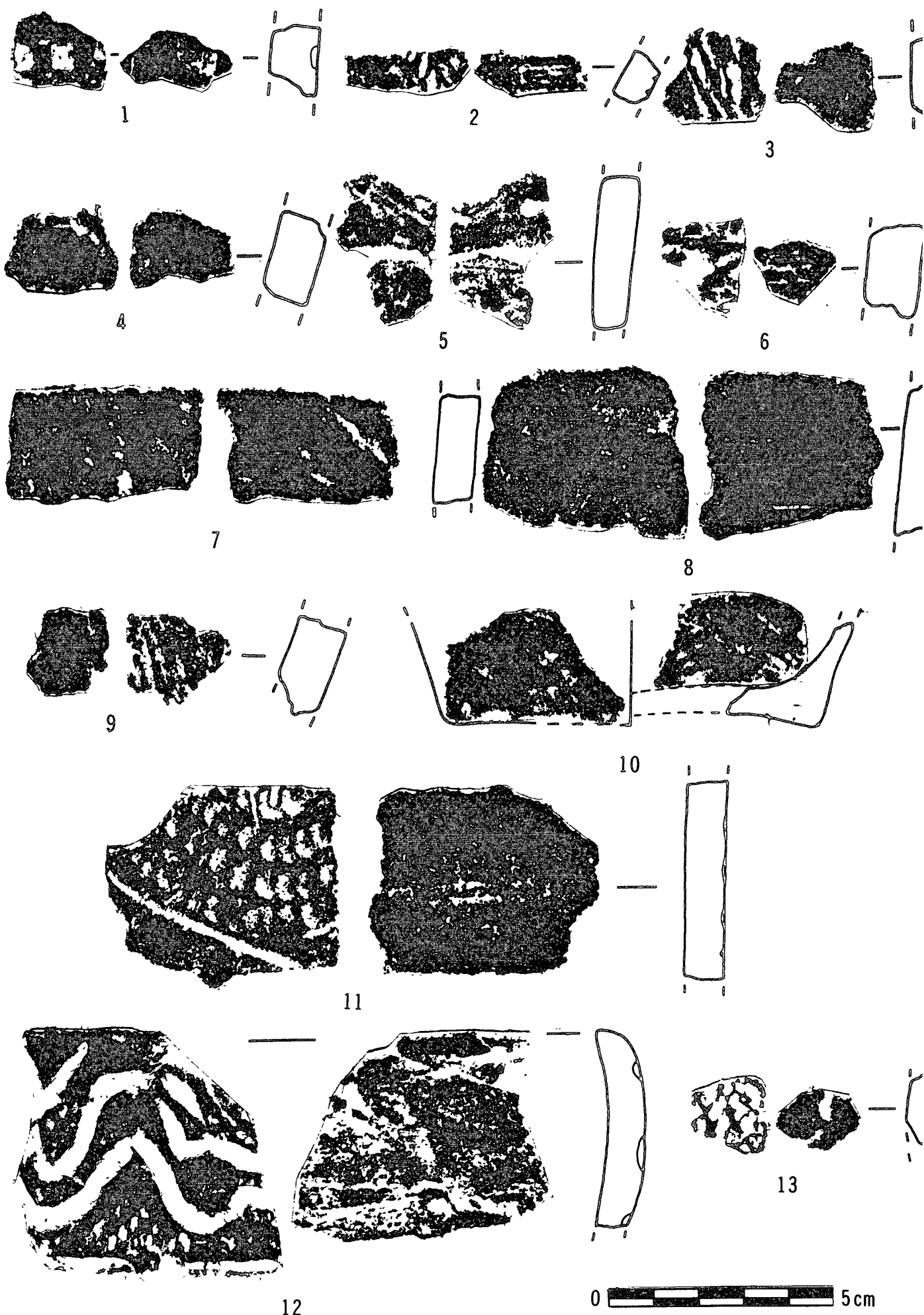
同図14は左下りの刻文が縦位に2個見受けられ、やや深めでシャープである。下位の刻文はほとんど破損しており、一部わずかに認めうる程度である。





第44図 A-3区出土の室川下層式土器

0 5cm



第45図 A—3区第Ⅶ層出の室川下層式、神野A式、春日類似土器および底部

第45図2は左下りの斜行文が2個見受けられ、間隔は約0.1センチで、施文はやや深く鮮明である。同図3は右下りの斜行文を深く刻むが、施文は不規則である。長さも一定しない。

第44図11は上方へ器壁が若干反っており、頸部あたりの資料かとみられる。文様は小さな列点文を横位に密に施す。施文は浅めである。他の土器片に比べて器厚も約0.5センチと薄く、文様も他のものと異っている。

第45図1は竅を用いて横位に列点文を施文するもので、現存部に3個認められるが、小破片のためどういう構図をしていたか全体像はつかめない。施文はやや深めで鮮明である。文様の間隔は約0.4センチで、器厚は約1センチである。

#### b) 神野A式土器

室川下層式の系統に属するものであるが、文様構成が室川下層式と異なり、新型式と認められるものである。本遺跡における層位的見地からすると室川下層式の終末期に比定されるかと思う。

第Ⅶ層上部より胴部片が1点得られた（第45図11）。色調は茶褐色を呈し、焼成は比較的良い。器厚は約8ミリで室川下層式ほどではないが、厚手の部類に属する。混入物として1ミリ前後の岩片を多量に含有する。裏面に条痕を有するが、かなり撫で消されている。

文様は指頭押圧のような凹文を弧状に配列するもので、本資料では4段認められる。施文は極めて浅く観察しにくい。文様帯の下端を沈線で締め括っている。

今のところ、施文部位を明示することはできないが、本貝塚出土の類例を参考にすると本標品は頸部あたりの資料かとみられる。

器形についても不明な点が多いが、他の類例資料からすると、尖底の深鉢形が想定される。なお、同層より平底が1点出土しているが、器質、器面調整、その他の特徴が異っており、別型式のものと思われる。

ところで、本区の神野A式は凹文を基調とし、かつ、それらを弧状に配列し、また文様帯下方に沈線を加えるなど本遺跡の第2類土器とはかなり様相が異なっている。胎土や色調等においても差異が認められる。しかしながら浅く施文する点、文様を数列横走させる点および器面調整としてナデ調整を行うが徹底せず条痕を残す点など、共通点もみられる。また、B-3区出土の資料には、文様帯下端に曲線を加えるものがあり、これも共通点の一つと言える。

本資料は第Ⅶ層上部で出土したが、第2類土器はA-1区では同層下部でも出土している。しかし、本区では第Ⅷ層以下では検出されておらず、そのような出土状況から、本資料のような凹文を基調とするものは、類例の中では後出のものかと推察される。しかし、確かなことは今後の資料を待つことにする。

#### c) 面縄前庭様式土器

具志川式、神野C式、面縄前庭式土器を面縄前庭様式と総称することにする。各型式の概念については次号の「まとめ」をご参照いただきたい。本様式は胴部破片を含めて43点得られ、第46・47図に図示した。復元可能なもの（第47図1）が1点あるほかは、すべて小破片である。そのため上記3型式のうちどれに属するか不明のものが多い。出土層は第46図1～8が第Ⅳ層、同図10～18が第Ⅴ層a、第47図1～26が第Ⅴ層cで、下層に行くに従い増加する傾向にあるが、前記3型式とも他の各型式と混在しており、型式間の明確な前

後関係は捉えられなかった。なお、第Ⅳ～第Ⅴ層は縄文後期の層である。以下、本区出土のものについて記述する。

### (1)具志川式

具志川式に属するものは第47図4の1点だけである。口縁部の外反は微弱で、口縁上部に1条の波状凸帯を貼付する。凸帯は幅が約1センチの大型のもので、断面は方形に近く全体的に扁平である。器厚は約8.5ミリと厚手のもので、1ミリ前後の石英を多量に混入し、金雲母？も目立つ。焼成は良好で、器色は茶褐色を呈する。

器表面に斜め方向の寛調整痕が見受けられるが、かなりナデ消されている。裏面は器面磨耗のため不明。

文様は先述した凸帯と口唇部にみられ、又状工具による刺突文を密に施文する。又状工具は二枚貝の復縁部のようにも見受けられる。

### (2)神野C式

本型式に属するものは第46図10、第47図1・2・5・6・8の6点である。器種は6点とも深鉢形に属する。深鉢形の器形は二種に大別され、そのうち一つ（第47図1）は復元を試みた。本資料は最大径が胴中央よりやや下方にあり、口縁上部は僅に外反し、胴部はゆるやかに脹らみながら底部へ移行するもので、細長の器形が想定される。底部は尖底かそれに近い丸底であろう。しかしながら本標品のような器形は稀で、後述のようになお検討が必要かと思う。他の一つは第46図10のように口縁部が大きく外反し、胴部が脹らむタイプで、第47図2・8も同タイプと考えられる。

サイズについては第47図1は口径が推定9センチ、器高推定16センチ。第46図10は口縁部の図上復元を試みたもので、口径は推定12

センチである。

器厚は最大7.5ミリ（第47図1）、最小約5ミリ（同図2）で、他は6ミリ前後である。

胎土混入物には石英、岩片、長石がある。第46図10は石英を多く含み、第47図1・2・8は岩片を多量に石英を少量含むものである。第47図5は石英と長石を含むが、両者とも混入量は少なく、特に長石は散見できる程度である。焼成は良好で、特に第46図10は堅緻である。器色は茶褐色を基調とするが、多少煤けてくすんだもの（第47図2）もある。

### 文様

器面調整としてナデ技法を用いるが、ナデの弱い部分では擦痕を残すものもある。擦痕の認められるものは第46図10、第47図2の2点で、両者とも表裏面に見受けられ、横方向のものである。

施文具は又状工具を用いており、先端の幅は最大約6ミリ、最小約3ミリである。

次に文様であるが、口頸部は他の発掘区出土のものも含め次の4種に大別される。

#### 第1種

1条の貼付凸帯をめぐるもので、次の2タイプに細分される。

A：凸帯が波状に器面をめぐるもの。

B：凸帯が水平方向に器面をめぐるもの。

#### 第2種

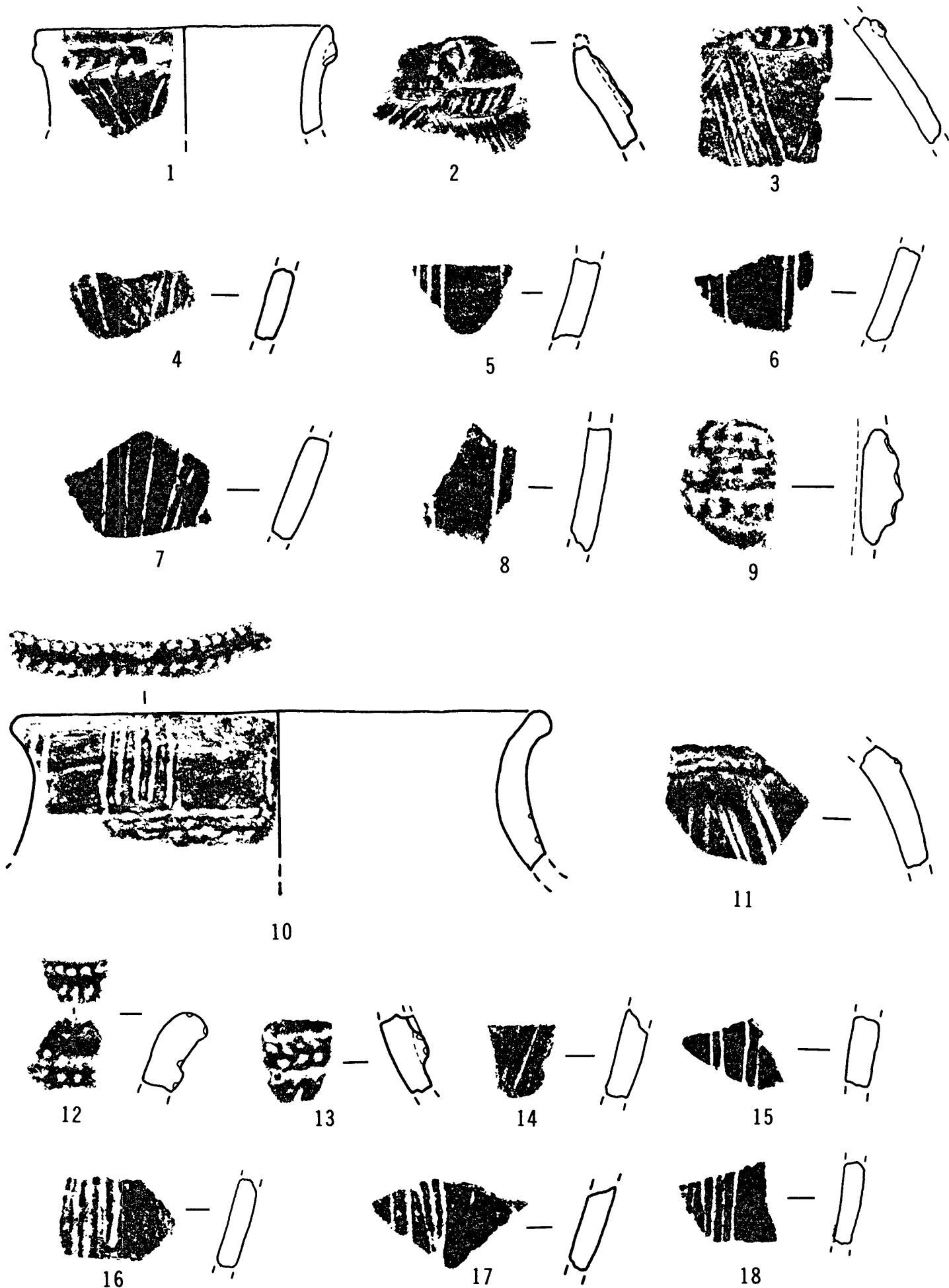
2条の貼付凸帯をめぐるもので、次の2タイプに細分される。

A：凸帯上に刻文を施すもの。

B：凸帯上無文のもの。

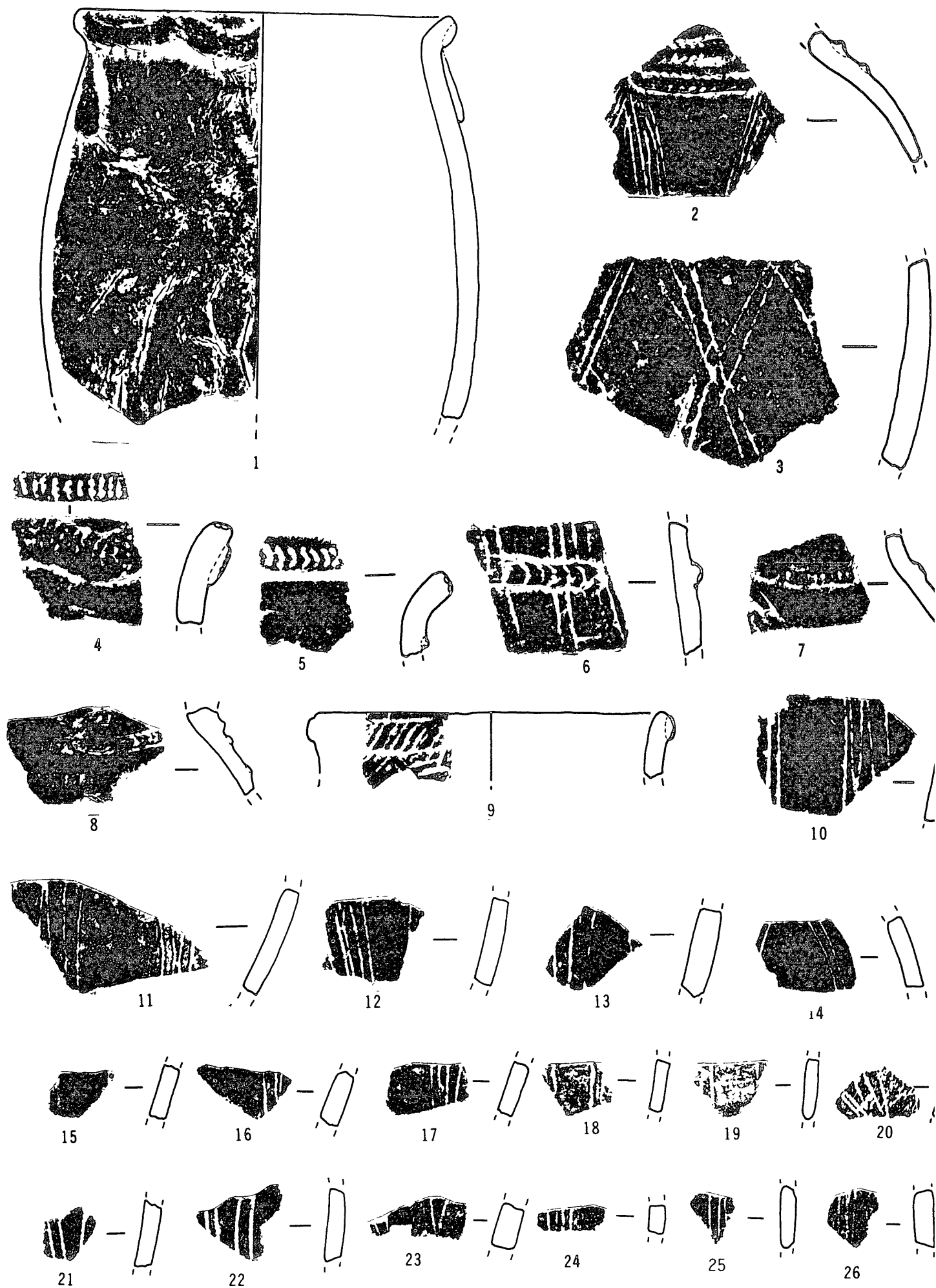
#### 第3種

3条の貼付凸帯をめぐるもの。



第46図 A-3区出土の面縄前庭様式土器

0 5 cm



第47図 A-3区出土の面縄前庭様式土器

#### 第4種

凸帯のかわりに刻文などを施すもの。

本区出土のものは第1種A、第3種、第4種に属するものである。

##### 第1種A

第1種Aは第47図1の1点だけである。口縁上端を僅に外反させ、同部に波状凸帯を貼付する。また、その直下に垂れ下がるような凸帯、つまり水滴状の浮文（長さ約2.5センチ）が認められるが、波状凸帯との接点部で破損し、そのため両者の具体的な関係はつかめない。波状凸帯の起伏は小さく、山と山の間隔は約3センチである。凸帯の幅は約6.5ミリと大きく、その断面は半楕円形を呈するこの土器は先述のように器形が典型的な面縄前庭様式と著しく異なっており、出土層も縄文後期の第V層cであることから、別型式かとも考えられるが、口径より胴径が大きいことおよび波状凸帯を貼付する点を考慮すると、基本的には本様式の範疇におさまる器型とも考えられ、本項で取り扱ったが、最終的には今後の類例をまって決定すべきかと考える。

##### 第3種

第3種は第47図8の1点である。頸部に3条の凸帯を配するが、最上段の凸帯は波状を呈し、下の2本はほぼ水平に施される。しかし、本標品は口縁部を欠損しており凸帯全体の詳細な展開状況は不明であるが、凸帯は3本とも幅約3ミリの小型のもので、断面は半円状を呈し扁平である。凸帯上には小型の叉状工具により、ハの字状の刺突文を密に施文する。各凸帯間は無文であるが、最下段の凸帯下端より胴部へ延びる斜行沈線が3本確認できる。沈線は浅く不明瞭である。第V層c

の出土。

##### 第4種

第4種に属するものは第46図10の1点で、口唇部には叉状工具による刺突文、頸部にも同工具による連点文を1組横走させる。連点文は凸帯に代るものとみてよい。また、口唇部と頸部連点文との間には5条1組の縦位沈線を間隔を置いて施文し、文様間の間隔は1.3センチ～2センチである。沈線文は比較的深い。第V層aの出土。

##### 種不明

破片が小さく、細分不能のものを本項にまとめた。第47図2は頸胴部に凸帯を水平方向に配するもので、2本認められ、凸帯上には叉状工具によりハの字状の刺突文を密に施文する。横位凸帯が2本に終始したかどうか不明であるが、もし、2本であれば第2種Aに属し、もし、3本であれば第3種の資料となる。凸帯は幅約4ミリ、断面は三角形を呈する。凸帯は小型の部類に属する。凸帯の間隔は約5ミリで、頸部に凸帯以外の文様は見られない。胴部の文様は5条1組の沈線により逆V字状の文様を描くもので、最下段の凸帯直下を起点とする。第V層cの出土。

同図5は口唇部や外面に半截竹管状工具により弧文を刺突するもので、弧文の両端は深く突きささり、刺突文状となる。頸部に凸帯の一端が窺え、波状を呈するようであるが、詳細は不明。また、凸帯上には刺突文が認められる。頸部に凸帯以外の文様は見られない第V層cの出土。

同図6は数条1組の縦位沈線を間隔を置いて施文するもので、その後で沈線を横切るように幅5ミリの、断面三角形の凸帯を貼付する。沈線上に凸帯を貼付する例は稀である。

凸帯上には叉状工具により、弧文を斜め方向から施文し、工具幅が若干広いため文様は器面にまでおよんでいる。上記1組の沈線の本数は不明だが、5本までは数えられる。

### (3)面縄前庭式

面縄前庭式に属するものは第46図1・第47図9の2点で、口縁部の図上復元を試みたものである。口径は第46図1が推定6.6センチ第47図9は推定10センチで、後者は小型の深鉢形に属し、前者は壺形の可能性も考えられる。口縁部の外反は両者ともゆるやかで、口唇形態はともに断面舌状を呈する。

器厚は第46図1が約4ミリ、第47図9が約4.5ミリで両者とも薄手である。

胎土には石英を主体に微小の金雲母？を混入するが、後者も比較的多い。焼成は良好で器色は第46図1が明褐色、第47図9は煤けて暗褐色を呈する。

器面はナデ調整を行っているが、第47図9の裏面には斜め方向の擦痕が不明瞭ながら残る。

文様は口頸部に施文され、口唇部は無文である。口頸部の文様は刻目凸帯と沈線文からなる。口唇直下の凸帯の幅は第46図1は約4ミリ、第47図9は約6ミリで、断面形態は両者とも半円形を呈するが、第47図9は扁平で方形に近い。凸帯の文様は第46図1は叉状工具による弧文で、工具幅が広いため文様は凸帯外にあふれ、しかも下端は深くつきささって刺突文となる。第47図9は斜行沈線を刻んでおり、施文は比較的密で深い。

凸帯下の頸部文様は前述したように数条1組の沈線により、鋸歯文を描くもので、沈線の本数は第46図1は4本まで数えられ、第47図9は3本確認できる。沈線はいずれも細くシャープである。

### (4)型式分類不能の面縄前庭様式土器

面縄前庭様式ではあるが、破片が小さく型式分類ができないもので、第46図2・3・11～13、第47図7がこれにあたる。

### 器種・器形

器種はほとんどが深鉢形と考えられ、他の器種は確認できない。

器厚は最大約7ミリ、最小4ミリで、5ミリ前後のものが多い。胎土混入物には石英、金雲母？、岩片、長石がある。第46図2・3は石英を主体に金雲母？を少量含む。岩片と石英を含むものは第46図12・13、第47図7で混入量が多いものの石英は比較的少ない。第46図11は岩片と長石を含み、量的には前者は多く、後者は散見できる程度である。

焼成は普通か良い部類に属し、特に悪いものはない。

器色は茶褐色のものがほとんどである。

口頸部には面縄前庭様式の特徴である凸帯を貼付するが、破片のため本数および全体像がつかめない。第46図2・13は横方向の凸帯と縦位凸帯を組み合わせるもので、13は垂直に交り、2は横位凸帯の一端を上方へ折り、移行部は曲線を描く。凸帯上には2は斜沈線文、13は叉状工具による刺突文を施す。凸帯の幅は両者ともに約6ミリで、断面形は方形を呈する。凸帯下の沈線は2は8条を1組とする逆V字状文を展開させ、13は斜行沈線が2本までは数えられるが、詳細は不明。両者とも凸帯の特徴から神野C式の可能性が高い。

同図3は頸胴部の破片で、幅約5ミリ、断面方形（やや扁平）の凸帯を貼付する。凸帯上には半截竹管状工具による刺突文を施す。施文は浅い。凸帯下、つまり胴上部には4条1組の沈線で、いわゆる逆V字状の文様を描く。本標品も凸帯の特徴から神野C式の可能



性が強い。

同図11は幅 3.5ミリの凸帯を貼付し、凸帯上に小型の棒状工具により刺突文を施す。凸帯の断面は方形できわめて扁平で、施文時の押圧により凸帯は部分的につぶれており、文様は不明瞭である。胴部には4条1組の沈線文で、逆V字状の文様を刻む。沈線は浅く鈍い。凸帯の特徴から神野C式の可能性が強い

同図12は口縁部の小破片で、口唇下約1センチの位置に断面方形の凸帯を貼付し、凸帯下部で破損している。口唇部および凸帯上には叉状工具により、ハの字状の刺突文を施す。凸帯上の文様は上部では外器面にあふれている。凸帯の位置が下方にずれており、本標品も神野C式の可能性が濃い。

第47図7は頸部破片で、凸帯上を棒状工具による刻文で飾るが、刻文は凸帯に対してほぼ直角に施文される。凸帯は幅約4ミリ、厚さ約1ミリ、断面は方形を呈し、かなり扁平である。凸帯下を起点とする数条1組の斜行沈線が見受けられ、逆V字状の文様を構成するものと思われる。凸帯の特徴から神野C式の可能性が強い。

#### (5)胴部資料

面縄前庭様式の胴部破片を一括して述べることにする。本区のものは文様の相違により2種に大別される。

#### 第1種

第1種は数条を1組とする縦位沈線文によって構成されるもので、面縄前庭様式に普遍的に見られる文様パターンである。本貝塚の他の資料を見ると展開の仕方にA・B2タイプが認められるが、本区のものは破片が小さく細分不能である。第46図～第47図に図示した胴部破片のうち、第47図3を除くものがこ

れにあたる。1組の沈線の本数が判明するものは3点で、うち2点は4本、他1点は5本である。中には6本まで数えられるものもあるが、破片のため6本とみるべきか、それ以上におよぶのか判断できない資料もある。

次に他の特徴について述べる。器厚は最大約8ミリ（1点）、最小約3.5ミリ（1点）で5ミリ前後のものがほとんどである。胎土混入物には石英、金雲母？、岩片、長石が認められ、それらの組み合わせは石英と岩片を含むものが最も多く（21点）、次いで石英のみを含むもの（10点）である。他には石英＋金雲母？（6点）、岩片のみ（4点）、石英＋金雲母？＋岩片と、石英＋長石がそれぞれ1点ずつある。石英と岩片の混入量は概して多く、金雲母？、長石は少量である。焼成はほとんどが良好で、悪いものは見当たらない。器色は茶褐色を示すものが大多数で、黄褐色のものや、煤けて黒ずんだものも散見される。

#### 第2種

第2種に属するものは第47図3の1点だけである。2条1組の平行沈線をX状に交叉させるもので、交叉沈線は3ヶ所認められる。この文様を全器面に展開していたとすれば、菱形文になる。平行沈線は完全に平行とはいえないが、幅はほぼ一定しており、両者の間隔は約4ミリである。

本標品の器面調整はナデ技法によるが、ナデの弱い部分では篋調整痕が残り、特に内面は明瞭である。器厚は約8ミリと厚手の部類に属し、胎土には岩片を多量含む。焼成は良く堅緻で、器色は茶褐色を基調とするが、器表面は煤けて黒褐色を呈する。

本標品のような文様は具志川式や面縄前庭式にはみられないので、神野C式に属する資料と見ていいかと思う。

#### d) 嘉徳Ⅰ式A土器

本区においては第Ⅳ層・第Ⅴ層aおよび同層cより10点（第48図1～4、第49図1・4～8）検出され、うち口縁部は9点で、推定復元可能な破片も4点（第48図1～4）得られている。層位別出土状況は第8表の通りである。

第8表 嘉徳Ⅰ式A土器層位別出土状況

層序	種類	口 縁 部							胴部	計	
		1種	2種	3種			4種				不明
				イ	ロ	ハ	イ	ロ			
I											
II											
III								1		1	
IV									2	1 3	
V	a										
	b										
	c			2		1 2			1	6	
VI											
VII											
VIII											
計				2		1 2		1 3	1	10	

#### 器種・器形

器種は口縁部破片で判断すると、すべて深鉢形である。器形は下記のように3種に分類できる。

(イ)頸部が若干しまり、口縁部が外反するもの。

(ロ)胴部から口縁部へ直線的に開くもの。

(ハ)前項(ロ)のうち、頸胴部の境が若干屈折するもの。

口縁部9点のうち、(イ)に属するものは3点（第48図1・2、第49図1）、(ロ)に属するものは2点（第48図4、第49図8）、(ハ)に属するものは1点（第48図3）である。第49図4・5

・7の3点は小破片のため、細別は不能。

口縁部は山形口縁がほとんどで、確実に平口縁と判断できる資料は得られていない。また、口縁部が肥厚するものとししないものがあり、本区出土のものはすべて後者である。

本型式のサイズは推定復元を試みた4点についてみると口径・器高ともそれぞれ第9表の通りで、第48図1は大型に属する。前記4点とも上面観は山形頂部においてコーナーをつくり、やや方形に近い形となる。

第9表 推算口径と器高

図版番号	種 類	推算口径	推算器高	出 土 層
第48図1	3の㊶	29.2cm	32 cm	第Ⅴ層c
第48図2	3の㊷	23.1cm	25.1cm	第Ⅴ層c
第48図3	4の㊸	11.2cm	16 cm	第Ⅴ層c
第48図4	4の㊹	21.7cm	22.6cm	第Ⅴ層c

底部については確実な資料は得られていないが、同層出土の資料がすべて平底であることから一応平底を想定している。

胎土に含まれる混入物を観察すると石英を主体に少量の雲母が見受けられる。第49図4にはほんのわずかだが石灰質砂粒も含まれている。第48図4は石英粒が他に比べてやや粗く、肉眼での観察は容易である。

器厚は0.6センチ～0.8センチと薄手のものが一般的であり、1センチをこす厚手のものは見受けられない。

焼成は一般的に良好で、特に不良というようなものは見当たらない。

器色を出土資料10点についてみると、両面とも茶褐色を呈するものが最も多く、他に暗褐色、黄褐色、橙褐色を呈するものが少量検出されている。

## 器面調整

施文前の器面調整の方法を調べた結果、ナデ調整を行うものが若干多かった。擦痕はナデ調整が不徹底のために残る現象とみてよい擦痕の残存状況は第10表の通りである。

第10表 擦痕の残存状況

擦痕 有無	種類	口 縁 部								胴 部	計	
		1 種	2 種	3 種			4 種					不 明
				イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ			
両 面 有				1			2		1		1	5
両 面 無												
外面のみ有												
内面のみ有												
計				1			2		1		1	5

両面に擦痕が施されているのは5点（第48図1・3・4、第49図1・6）である。

第48図1の外面には斜位の擦痕が胴部まで内面では縦位の擦痕が口縁内面に限って見られるが、いずれもナデが徹底しており、わずかに確認できる程度である。

同図3の外面では文様帯やそれ以下の胴部において擦痕が観察され、内面では口縁部付近に縦位の擦痕が認められるが、いずれも微弱で注意しないと見逃すような残り方である

同図4の土器は両面に認められるが、内面は口縁内面に限ってわずかに認められ、外面は文様帯も含め比較的全面的に残っている。しかし、いずれの場合も最終的にはナデ調整を行っており、表面の場合は調整が内面ほど徹底していない例とみてよい。

第49図1の外面には斜位の擦痕、内面には縦位の微弱な擦痕がわずかに見受けられる。

同図6の外面には斜位の擦痕、内面には縦位の擦痕が見受けられるが、ナデが徹底しており、不明瞭である。

## 文様

施文部位は口唇上と口頸部に集約される傾向にあるが、第48図1のように胴上部に及ぶものもある。胴下半部や口縁内面に施文するものは見受けられない。

施文具の種類は先端が方形をなす単刃工具と、先端が鋭角をなす棒状工具の2種を利用しており、ほとんどが両者を併用している。

文様は前述のように3ヵ所に施文される。外面の文様は口頸部を第1文様帯、胴上部を第2文様帯とすると、前者が一般的に複雑であるのに対し、後者は沈線のみを組み合わせた簡素な文様になる傾向が強い。

本型式の文様を他の発掘区出土のものも含め、下記の4種に大別する。

### 第1種

面縄束洞式の押し引き文を主体とするが、部分的に沈線を加えるもの。

### 第2種

第1文様帯に数条の平行沈線を施し、沈線間を三角形刺突文で飾るもので、横位文様を主体とするが、部分的にステップ文を加えることを原則とする。第2文様帯は沈線による鋸歯文を基本とする。しかし、中には平行沈線による鋸歯文を施したあと、沈線間に三角形刺突文を加えるものもある。

### 第3種

本型式の盛期の一つを示すとみられるもので、第1文様帯は横位文様を主体とするが、山形口縁下では縦位文様を加えるものを本項にまとめた。第2文様帯には複数の沈線による鋸歯文を施す場合もある。

#### 第4種

前項の第3種が簡略化を進めたもので、本型式の主要文様（沈線＋三角形刺突文）が部分的に残存するものである。つまり、主要文様が山形突起下や第1文様帯の上下の部分にのみ施され、他を別の文様要素で飾るか、あるいは無文空白のまま放置するか、本型式の終末期を代表するものと考えられる。第2文様帯は複数の沈線による鋸歯文や網代状の文様、また、平行沈線を三角形状に描き、その後、沈線間を三角形刺突文で埋めるものなどがある。

以上の4種であるが、本区では第1種・第2種は出土していない。

第3種に属するものは第V層cより3点（第48図1・2、第49図8）出土している。本項の第1文様帯は文様の種類や簡略化の様相により、次の3種に細分される。

(イ)第1文様帯にステップ文を部分的に加えるもので、前項第2種の文様形態をわずかに残すものである。山形突起下には縦位文様を施す。第2文様帯には複数の沈線による鋸歯文を配する。

(ロ)第1文様帯は山形突起下に縦位文を施しその周辺に横位文を配するが、前項の(イ)と違ってステップ文は施文されない。また、縦位文が山形突起下から外れる場合もある。第2文様帯に複数の沈線による鋸歯文を加える場合もあるが、無文のものもある。

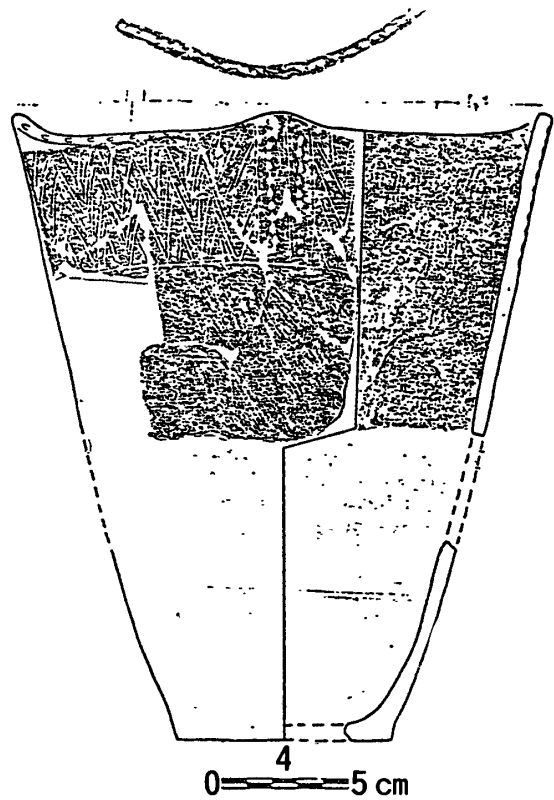
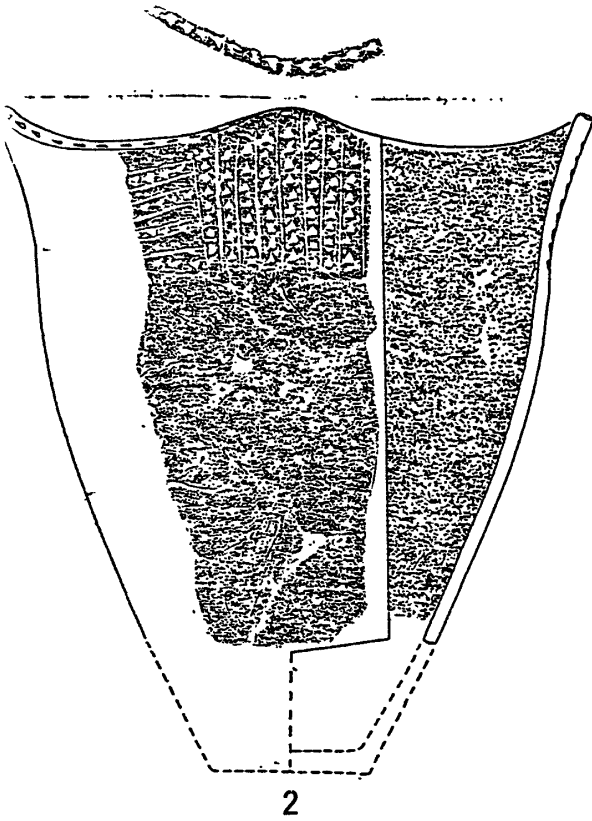
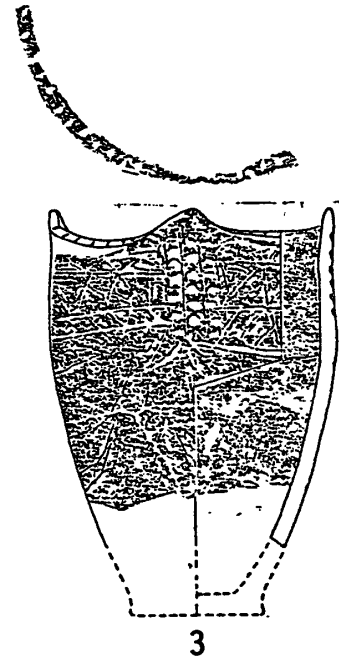
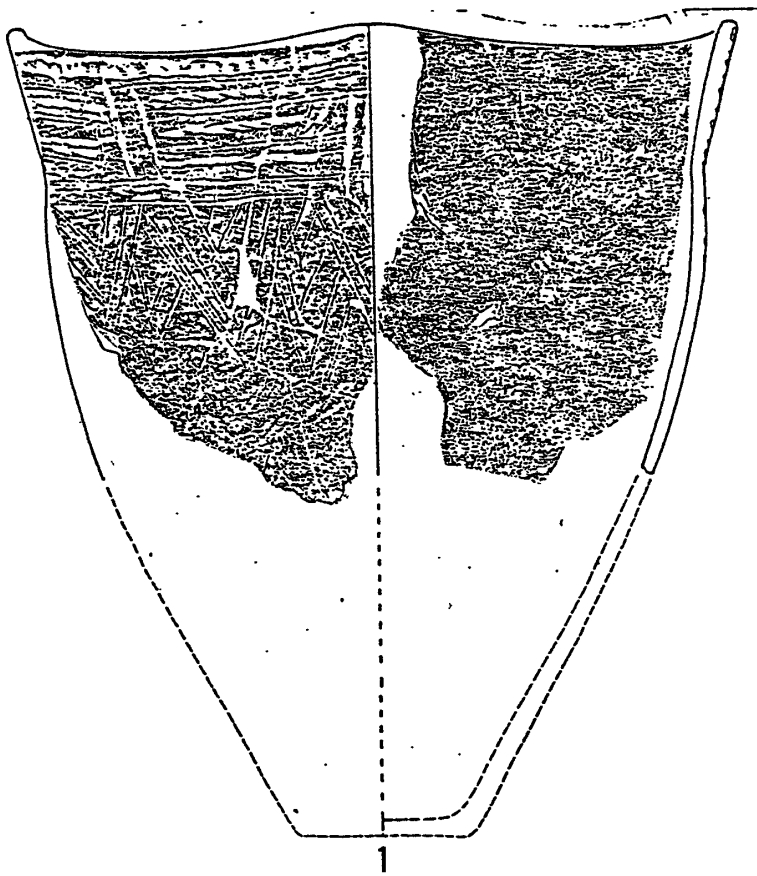
(ハ)第1文様帯は前項(ロ)と同じ文様構成をなすが、横位文様を一つおきに間引きするもので、簡略化した文様となる。今のところ、第2文様帯は不明。

本区で得られた3点は(イ)に属するものが2点（第48図1、第49図8）、(ハ)に属するものが1点（第48図2）である。

第48図1は推定復元を試みた土器で、口頸部、胴上部の2ヶ所に施文されている。第1文様帯は山形頂部下方にシャープな三角形刺突文を縦位に施文するが、同部が大分破損しているため、何条施されていたかはっきりしない。縦位文様に沈線を加えていない点は他と異なる。縦位文様の左右に展開する横位文様は2種の文様に細分される。その1つは最上段の文様で、幅約7ミリの単篋工具を用いて押し引き文を1条横走させる。その下方には沈線を5条横位に施し、その内部を三角形刺突文で埋める。三角形刺突文はやや長めでシャープであるが、下方では施文が浅くなり最下段では三角形の輪郭を失って線状のルーズな文様となっている。横位沈線はいずれもシャープであるが、間隔は一定せず、約7ミリ幅のものや約1.3センチ幅のものなど区々である。また、この横位文様帯の部分に斜め方向の三角形刺突文や沈線＋三角形刺突文を部分的に加える箇所も見受けられる。ステップ文の変形とみてよいだろう。

第2文様帯は2種の鋸歯文を組み合わせるもので、主要文様と補助文様に分けることができる。主要文様は第1文様帯下端に発する縦長の三角形文で、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋める。補助文様は主要文様の空白部を埋めるもので、三角形になりえず底辺を欠くものである。施文はいずれもシャープである。口唇部は無文。

第49図8の第1文様帯は山形頂部下方に縦位の沈線＋三角形刺突文を複数列施すもので頂部直下のもの（3本）が最も長く、その左右は次第に短小化する。また、縦位文が短くなった分、横位文様が長く延び、空白部を生じない。この部分はステップ文の1種とみることも可能であろう。沈線も三角形刺突文も深く描かれ、鮮明である。三角形刺突文は縦



第48図 A-3区出土の嘉徳I式A土器

位のものは上から下へ、横位のものは左から右へ描いている。また、本標品左方の横位文には内部の三角形刺突文を省略したものも見受けられる。沈線は 0.5センチ～1センチの間隔で施され、一定しない。第2文様帯の存在については不明。

次に(イ)に属する1点について記述する。

第48図2は推定復元を試みた土器で、口唇部、口頸部が施文の対象となっている。

口唇部には約 0.3センチ間隔で三角形刺突文が施されている。文様は浅いが鮮明である

第1文様帯では山形口縁下に縦位の沈線＋三角形刺突文を9列施している。その左右には横位の沈線をそれぞれ8条施し、ひとつ越しにその内部を三角形刺突文で埋める。三角形刺突文は小型であるが、整然と密に施されやや規格的である。ただし、厳密には沈線の間隔は一定しておらず、0.3センチ～0.8センチと区々である。第2文様帯は認められない。

第4種に属するものは3点得られた。本類になると簡略化した文様が目立ち、文様構成もバラエティに富み、下記のように3種に細分した。

(イ)第1文様帯のうち、山形突起下を数条の縦位文で飾り、他を鋸歯文、網代文、その他の文様で飾るもの

(ロ)第1文様帯に部分的に主要文様を残すもので、残りの部分を施文の対象とせず無文部を作り出すもの

(ハ)第1文様帯の上下端の部分に主要文様（沈線＋三角形刺突文）を施し、中央部を別の文様で飾るもの。

本区では(イ)、(ハ)の2種が得られた。(イ)に属するものは第Ⅴ層cより2点（第48図3・4）出土しており、両者とも推定復元が可能である。

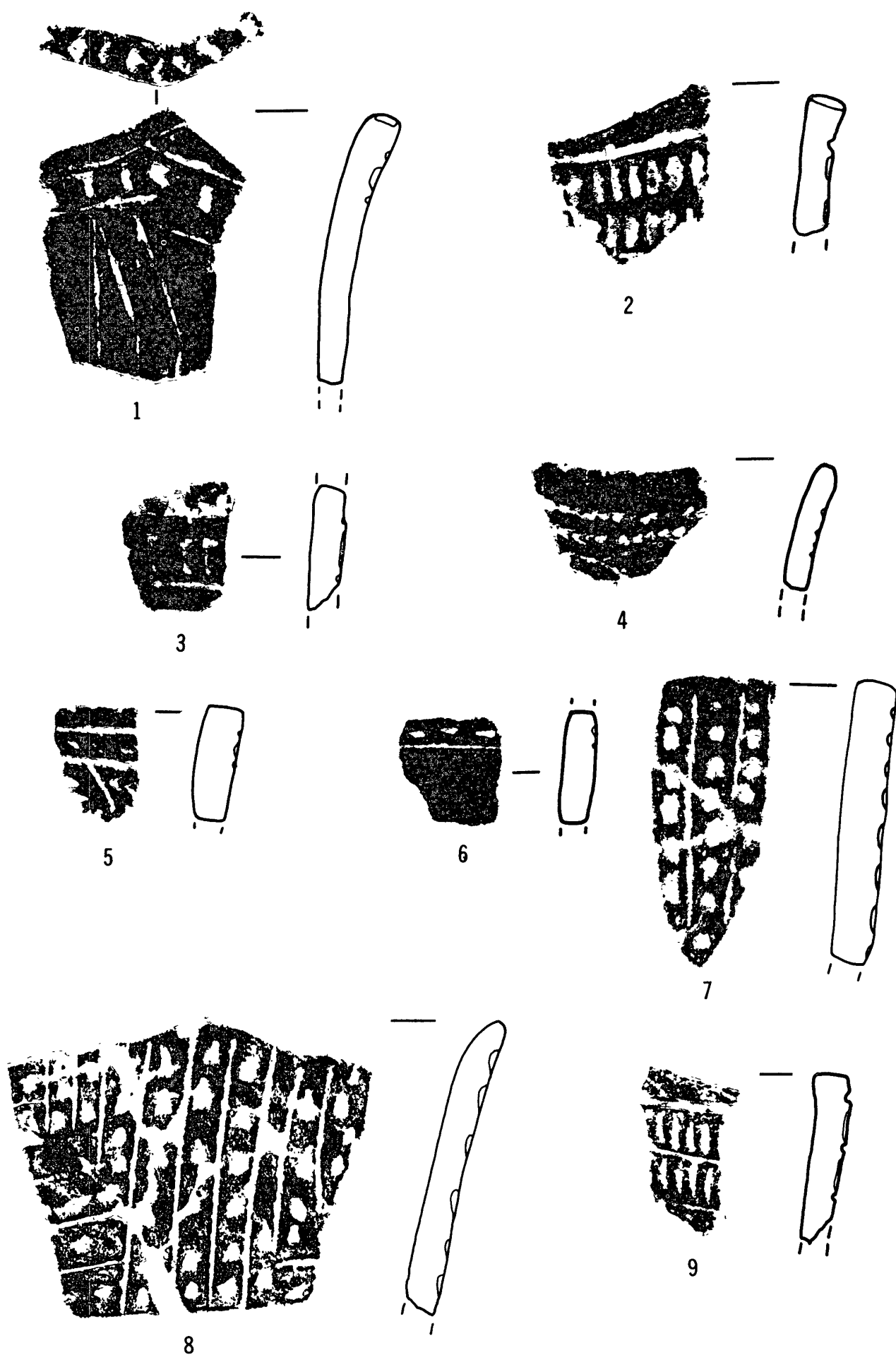
第48図3は口唇部、口頸部、胴上部の3ヶ所に施文する。

口唇部は約 0.5センチ間隔で刻文を深く刻む。ただし、山形頂部の左右は文様が省略されている。

第1文様帯では、山形口縁下に4本の沈線を施し、その内部にやや深目の刻文を雑に施文する。縦位文様は3列の場合と4列の場合がある。山形口縁下の左右に展開する文様も雑で、それぞれ異なる文様を施すが、詳細に観察すると共通点も抽出できる。つまり、横位文様帯を上・中・下の3段に分けているのである。

まず、左側をみると上段は約 0.6センチの間隔で横位に沈線を2本施し、その内部を単線の鋸歯文で埋めている。中段はやや幅広で、1.3センチ～2センチの間隔がある。大小の鋸歯文を施し、下端に刻文を加えるため複雑な文様となっている。下段は上段と同じく約 0.6センチの間隔で沈線を2本横走させ、その内部に右下りの斜沈線を約 0.6センチ間隔で配列している。

右側をみると上段は左側と同種の文様を施文するが、上下の幅は若干広く、約 0.8センチである。最上段の横位沈線は中央部にのみ若干残り、左端（山形口縁下）に及んでいない。施文が雑なせいであろう。また、鋸歯文の頂部下に縦位沈線を加えることもある。中段は 1.7センチ～1.9センチと若干幅が広くなり、変形鋸歯文を施文する。下段は 1.4センチ～1.6センチの幅を有し、方向の異なる斜沈線を組み合わせており、左下りのものが3本、右下りのものが1本認められる。施文は左から右の方へ移動している。全体的に右側の文様帯は左側に比べて約1センチも下方にずれている。施文順序は山形頂部下の縦位文様を先に描き、その次に横位の沈線を施し



第49図 A-3区出土の嘉徳Ⅰ式A・嘉徳Ⅰ式B土器 0 5 cm

最後に横位沈線間に文様を施文する。

第2文様帯は山形頂部直下にのみ施され、著しく簡略化されている。第2文様帯はハの字状の沈線で構成されるが、線の数や斜度は一定せず、極めてラフである。

第48図4は口唇部、口頸部の2ヶ所に施文する。

口唇部には浅目の三角形刺突文が密に押し引きされている。三角形刺突文は山形口縁下のものと同様、先端は丸味を帯びている。

第1文様帯は山形頂部直下に3条の縦位沈線を1.0～1.2センチ間隔で施文し、その内部を浅目の三角形刺突文で埋めている。刺突文の先端はやや丸味を帯びている。この縦位文の左右にはラフな鋸歯文を縦に密に重ねながら力強く施文する。そして第1文様帯の下端に浅い沈線を1条横走させ、文様帯を締め括る。施文の方向は左から右に移動しており最初に縦位沈線を施し、次に最下段の横位の沈線、最後に鋸歯文を施している。

第2文様帯は認められない。

次に、(ハ)について記述する。本区では第4層より1点(第49図1)出土した。

本標品は口頸部の小破片で、口唇部、口頸部の2ヶ所に施文されている。

口唇部には刻文を深く刻むが、山形頂部に境に施文方向は異なっている。刻文の間隔は0.3センチ～0.8センチと一定しない。

第1文様帯では口縁にそって2条の沈線を施し、その内部を刻文で飾る。沈線の描き順は左から右の方向である。この文様の下方には斜め気味の鋸歯文を配する。鋸歯文の施文順序は右から左となっている。施文は全体的に深く、鮮明である。この土器の文様構図は前項第48図3と同じく伊波式に通ずるものがあり、中央の鋸歯文の下方には上段と同種の横位文様を施すものと思われる。

第2文様帯の存在については不明。

第49図4・5・7の3点は小破片のためどのタイプに属するか不明であるが、同図4は三角形刺突文と沈線の様子から第1種に属する可能性もある。

同図5は横位の2条の沈線間に三角形刺突文を浅く施し、その下方に沈線を斜行させ、その左右に三角形刺突文を施文する。以上の文様構図から本標品は第3種の可能性の強いものである。

同図7は山形口縁の左半部の資料である。現存部を見ると縦位の沈線+三角形刺突文が3列認められる。刺突文は先端が多少丸味を帯びた施文具を用い、やや深めに施文している。現存部からすると第3種、第4種のいずれかに属するものであろう。

最後に、第V層a出土の胴部1点について記述する。

第49図6は小型の三角形刺突文がやや深目に横位に施されており、その下に横位の沈線を施している。以上の文様構成から本標品は第1文様帯下端の資料と目され、第3種に分類できるものと考えられる。

#### e) 嘉徳I式B土器

本区では第IV層より2点(第49図2・3)、第V層cより1点(同図9)の計3点得られた。いずれも縄文後期層の出土である。完形品はなく、3点とも小破片で、そのうち2点は口縁部、他の1点は頸部の破片である。

#### 器種・器形

3点とも深鉢形に属し、壺形は得られていない。口縁には山形口縁と平口縁があり、本区のものとは2点とも前者に属し、やや直線的に開く器形であるが、同図9は口縁上端が若干内彎する。同図2は山形突起頂部にきざみ



を入れ、凹部を形成した跡が見受けられる。底部については確実な資料はないが、同層出土の底部がすべて平底であることから一応平底とみてよいと思われる。

胎土は細かく、混入物は石英を主体に金雲母を少量加えるが、同図2は金雲母？も比較的多い。両者とも微小のものが一般的で、稀に2ミリ前後のものも見受けられる。

器厚は3点ともほぼ同じで、7ミリ前後である。

焼成は同図3はやや悪く、他の2点は良好である。

器色をみると同図2・3の2点は両面とも茶褐色を呈するが、同図9は両面とも橙褐色である。

## 文様

器面調整の方法を観察すると、同図3の表面は摩耗していて不明だが、他はすべてナデ調整を行っており、同図2の裏面には指頭圧痕様の凹部も見受けられる。

施文部位は小破片のためはっきりしないが他区出土の類例を参考にすると、胴上部も施文範囲に含まれる。本区出土のものは口頸部に限られ、胴上部の資料は出土していない。

施文具は幅広の単篋工具を使用し、2種の文様を施文する。

口頸部の文様は縦位の刻文と横位の沈線の組み合わせからなる。

同図2は口縁部にそって横位の沈線を2条施し、その間に2列の縦位刻文を配する。沈線は幅約1.5ミリで施文も深い。刻文の長さは約7ミリで個々の文様から判断すると左から右へ移動しながら施文を行っている。本標品は横位沈線の間に刻文を2段施すところに特徴がある。

同図9は前項と異なり、1列ごとに刻文を沈

線で区切っている。沈線の間隔は約9ミリである。刻文も沈線も繊細で深く刻まれ、シャープである。本標品の第1文様帯はこの2段に限られるようで、第2文様帯については不明である。

次に口唇部であるが、2点とも無文であり平坦に形成されている。

同図3は頸部の資料で、2条の横位沈線の間に縦位刻文を施しており、文様の配置は前項（同図9）のパターンに属する。沈線の間隔は約1.3センチで、沈線は深く施文されるが、刻文は浅い。後者の文様も施文の移動の方向は左から右である。

## f) 嘉徳Ⅱ式土器

本区では第Ⅳ層、第Ⅴ層aおよび同層cより13点（第50図1・2、第51図1～4、第52図1～7）検出された。いずれも縄文後期層の出土である。そのうち8点は口縁部で、中には推定復元の可能な破片も2点（第50図1・2）含まれている。層位別出土状況は第11表の通りである。

第11表 嘉徳Ⅱ式層位別出土状況

層序	種類	口 縁 部									胴部	計	
		1 種		2 種			3 種			4 種			不明
		イ	ロ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ				
I													
II													
III													
IV							1				2	3	
V	a		1									1	
	b												
	c			1				1	1	1	3	2	9
VI													
VII													
VIII													
計			1	1				2	1	1	3	4	13

## 器種・器形

器種は口縁部破片で判断するとすべて深鉢形で、器形は下記のように2種に分類できる。

- (イ)頸部が若干しまり、口縁部が僅かに外反するもの。
- (ロ)胴部から口縁部へかけて直線的に開くもの。

口縁部8点のうち、(イ)に属するものは6点(第50図1・2、第51図1、第52図1・2・4)、(ロ)に属するものは1点(第51図4)である。他の1点(第52図7)は小破片のため明言はできないが、山形口縁であるから第50図1・2のように(イ)になる可能性が強い。

口縁形態は山形口縁がほとんどで、平口縁の確実な資料は1点(第52図1)だけである。また、口縁部が肥厚するものとしなないものがあり、前者は1点(第52図1)で、他はすべて後者である。

本型式のサイズは口径を基準にすると次の3種に大別できる。

- ①大型＝20センチ前後のもの。
- ②中型＝15センチ前後のもの。
- ③小型＝10センチ前後のもの。

口径の推算可能な4点についてみると第50図2、第51図4の2点はそれぞれ16.8センチと15センチで中型に属し、第50図1、第52図1はそれぞれ27.7センチと22センチで大型に属する。器高は第50図1は推定27.7センチ、同図2は推定20.6センチである。

底部は同層出土の底部資料がすべて平底であることから本型式の底部も平底とみてよい。なお、第50図2の復元土器は口縁部から底部まで接合可能なもので、底部は隣接のA—2区第Ⅴ層下部出土のものである。

胎土に含まれる混入物を観察すると、石英を主体に金雲母?、石灰質砂粒を少量含んでいる。推定復元した第50図1は他に比べると

石英の粗い粒子(2ミリ以上)が目立つ。

器厚は一般的に薄く、4～7ミリである。

焼成は良好で、特に脆いものは見られない。

器色をみると明褐色のものが1点(第50図1)で、他は茶褐色を基調とするが、煤けて黒ずんだのも多い。

## 器面調整

施文前の器面調整の方法を観察すると、一般的にナデ調整を行っているが、中にはナデが不十分のため擦痕や条痕を部分的に残すものも見受けられる。

両面に擦痕が残っているものは4点(第50図1、第51図1、第52図2・5)である。

第50図1は両面とも胴部まで横位の擦痕を施すが、特に内面は顕著である。

第51図は外面に横位、内面に縦位の擦痕がわずかに残っているが、ナデが徹底しているため、余程注意しないと見逃すほどである。

第52図2は表面の文様帯の部分に横位の擦痕、その下方に斜位の擦痕を施している。裏面には縦位の擦痕が施され、一応ナデられてはいるものの、容易に観察できる。

同図5は表面に斜位、裏面に横位の擦痕がわずかに残っているが、大部分はナデられ不明瞭である。

外面にのみ擦痕が残るものは1点(第52図6)である。本標品は縦位の擦痕をわずかに残す。

内面にのみ擦痕が残るのは第51図3の1点である。内面左端に縦位の擦痕、右半部に横位の擦痕がわずかに残っているが、一応ナデられていて不明瞭である。

また、擦痕とは別だが、第52図1の内面下方に斜め方向の窠調整痕が数ヶ所認められる。

## 文様

施文部位は口唇部、口頸部、胴上部の3ヶ所だが、口唇部および胴上部が無文のものもある。

施文具は先端が鋭く尖ったものや、やや丸味を帯びた2種類の工具を用いている。

表面の文様は口頸部の第1文様帯と胴上部の第2文様帯に区分される。しかし、第1文様帯に終始するものが多い。文様は他の発掘区のものを含めると4種に分類できる。

### 第1種

第1文様帯に籠目状文を配置するもので、第2文様帯は無文か、さもなければ菱形状文で飾るもの。

### 第2種

第1文様帯に鋸歯文を密に施すもので、第2文様帯には先端を下に向けた逆三角形文を施し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるものや、他方、まったく無文のものもある。

### 第3種

羽状文または有軸羽状で第1文様帯を飾るもので、第2文様帯には逆三角形文を施し、その内部を斜辺と同方向の数本の沈線で埋めるものや、まったく施文しない例もある。

### 第4種

第1文様帯に斜沈線を用いて格子状文を描くもので、第2文様帯は資料がなく、不明である。

第1種に属する資料は1点得られた。第1種はさらに次の2種に細分される。

#### (イ)規格的な籠目文

#### (ロ)変形した籠目文

本区において得られた1点(第51図4)は(ロ)に属するもので、第V層aの出土である。本標品は口径の推算可能な土器片で、径約15センチである。外面の沈線による籠目文は不規則、かつ雑で、変形籠目文に分類できる。沈線はシャープで、施文順序は右から左の方向である。第2文様帯はない。口唇上は無文。

第2種の鋸歯文は次の3種に細分される。

(イ)横位に連続した鋸歯文を施すもの。

(ロ)ハの字状の断続する鋸歯文を横位に施すもの。

(ハ)変形鋸歯文を施すもの

本区では(イ)に属するものが1点(第50図1)得られ、器形は推定復元が可能である。本区出土のものはこの1点だけである。本標品はやや縦長の鋸歯文が浅く横位に連続して施されている。鋸歯文は3段認められる。施文が全体的に浅く、文様は不明瞭である。ただし拓影では明瞭。施文順序は上から下へ描きながら左から右へと移動する。第2文様帯は存在しない。口唇上は無文。第V層cの出土。

第3種に属するものは3点得られた。本貝塚のものは変形羽状文も含め、下記の3種に細分される。

(イ)上段に羽状文を施し、下段に別の文様を配するもの。

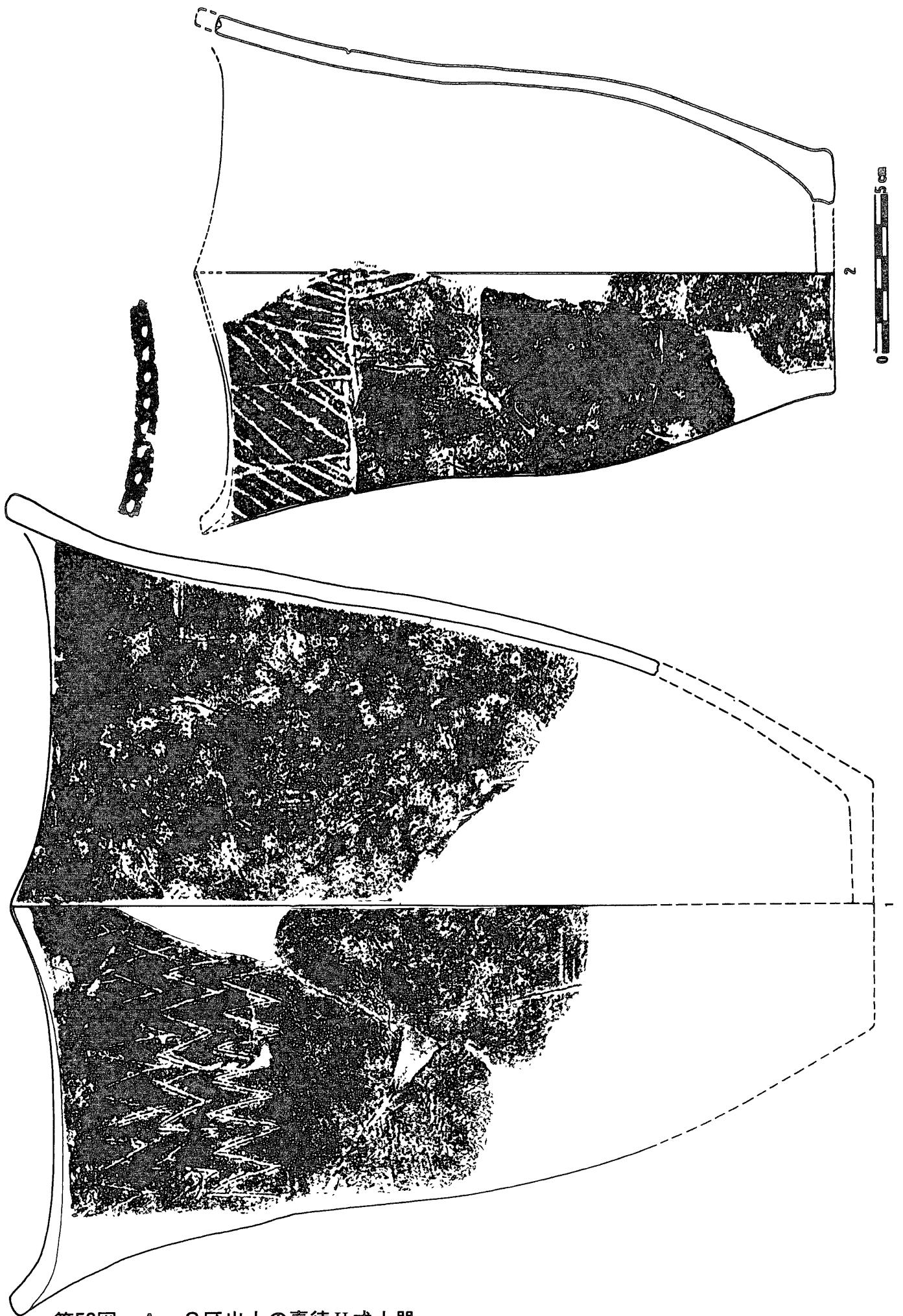
(ロ)横位に羽状文だけを施すもの。

(ハ)有軸羽状文またはその変形に分類できるもの。

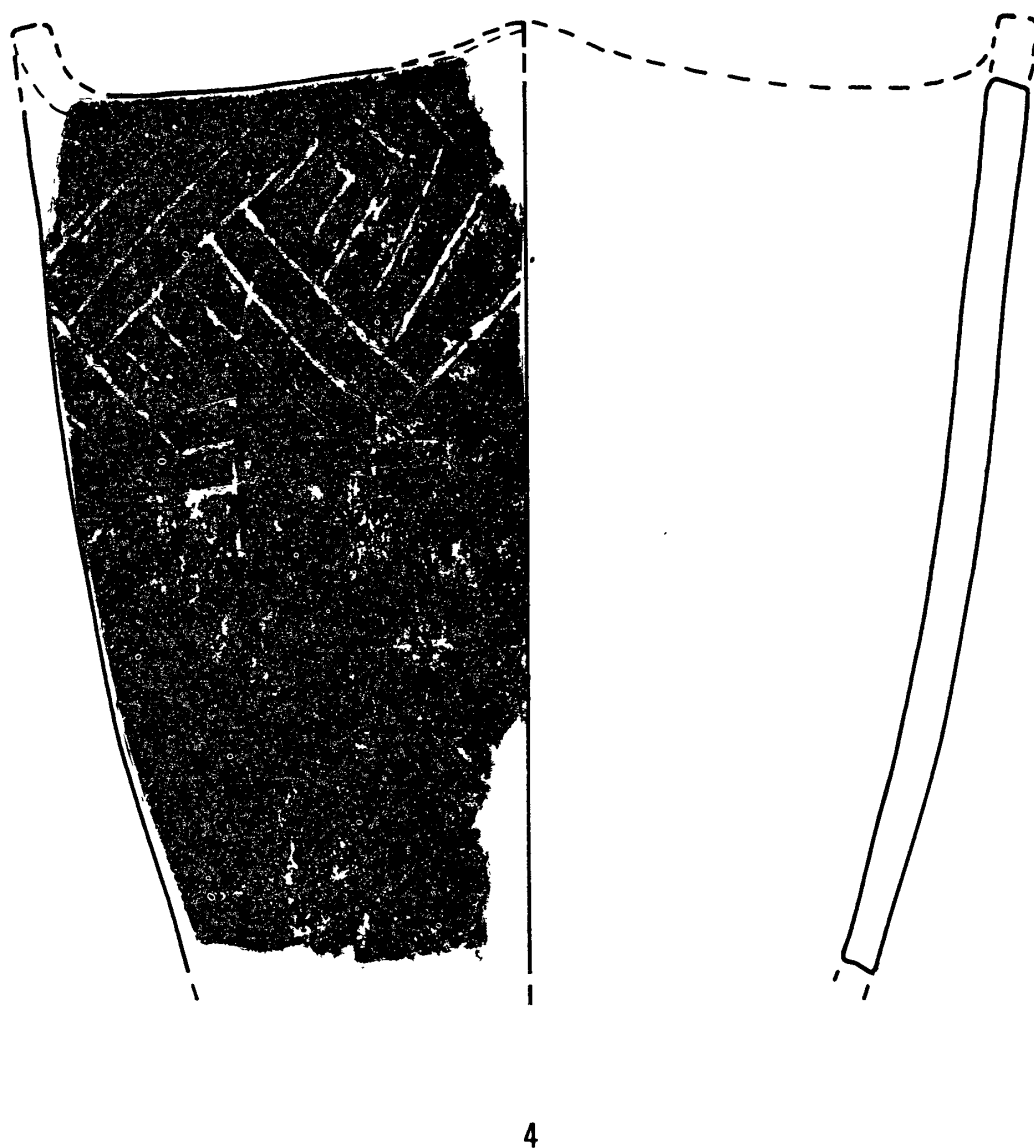
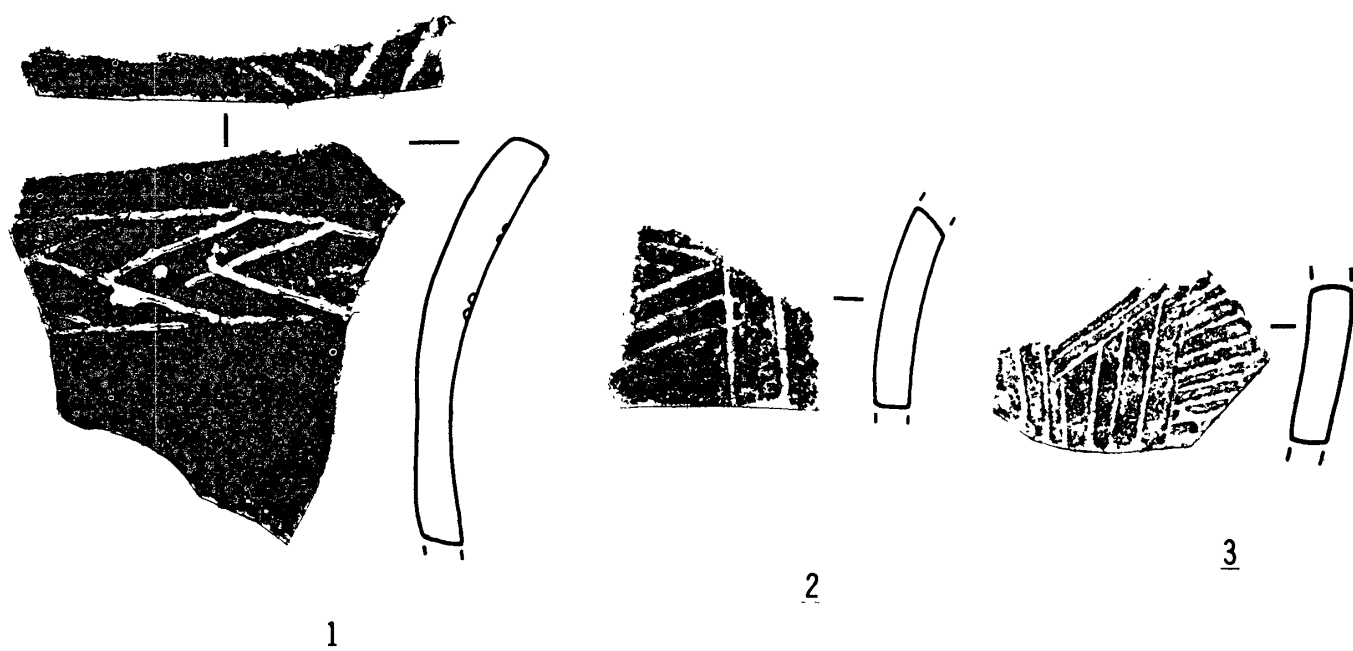
本区では(ロ)が2点(第51図1、第52図1)、(ハ)が1点(第50図2)となっている。

第51図1は口唇部と口縁外面の2ヶ所に施文する。

口唇部は山形頂部に限られ、左右にそれぞれ2条の刻文を刻むが、頂部を境に刻文は左右方向を異にする。したがって上部からみる



第50図 A-3区出土の嘉徳Ⅱ式土器



第51図 A-3区出土の嘉徳II式土器

0 5cm

とV字状をなす。文様は鮮明である。

口縁外面は1.6センチ～1.2センチの間隔で沈線を2本横走させ、その内部を横位の羽状文で埋めている。文様は鮮明である。施文順序は2本の横位沈線を先に描き、次に内部の羽状文を下から上へと埋め、施文は全体的に左から右へ移動する。本標品の口唇部文様も構図は基本的に伊波式と一致し、広義の伊波式に含めることも可能である。第Ⅳ層の出土。

第52図1は口唇部、口縁外面の2ヶ所が施文の対象となる。口唇部は1～0.8センチ間隔で右下りの斜沈線を深く刻む。

口縁外面は肥厚部が施文の対象となっており、くの字状の羽状文を横位に施文する。沈線の幅は2ミリ前後である。羽状文の施文順序は一般的に下方の沈線が先であるが、部分的に上を先に描く場合もある。第Ⅴ層cの出土。

次に(ハ)に属する1点(第50図2)について記述する。本標品は推定復元を試みた土器である。口唇部、口縁外面、胴上部の3ヶ所に施文する。

口唇部には約5ミリ間隔で三角形刺突文が深く施文されている。

口縁外面の第1文様帯は大別して2種の文様で飾られている。一つは有軸羽状文で、これは山形口縁下のみに施されている。他の部分は約2～2.5センチ間隔の縦位沈線で4分され、その内部を左下りの不規則な斜沈線で埋める。下端には1条の沈線を横走させ、文様帯を区切る。施文順序は最初に横位沈線で文様帯を区切り、次に縦位沈線で内部を区分し、最後に斜行文を施している。

第2文様帯は山形口縁直下にのみ施文される。現資料では2本の斜沈線が認められ、逆三角形を施文したかと思われる。とすると

内部を斜辺と同方向の沈線で埋める形態であろう。第2文様帯は簡略化の進行した、残存形態のようにも見受けられる。第Ⅴ層cの出土。

第4種に属するものは第52図5の1点である。本標品は沈線を斜格子状に施文するが、雑である。一部に施文順序の分るところがあり、それからすると施文順序は左から右となっている。第Ⅴ層cの出土。

第52図2・4・7の3点の口縁部破片は、前述のどの分類にも属さないもので、例外として取り扱う。

同図2は口唇部・口縁外面の2ヶ所に施文する。口唇部には刺突文を施すが、間隔は一定せず(2～5ミリ)雑である。

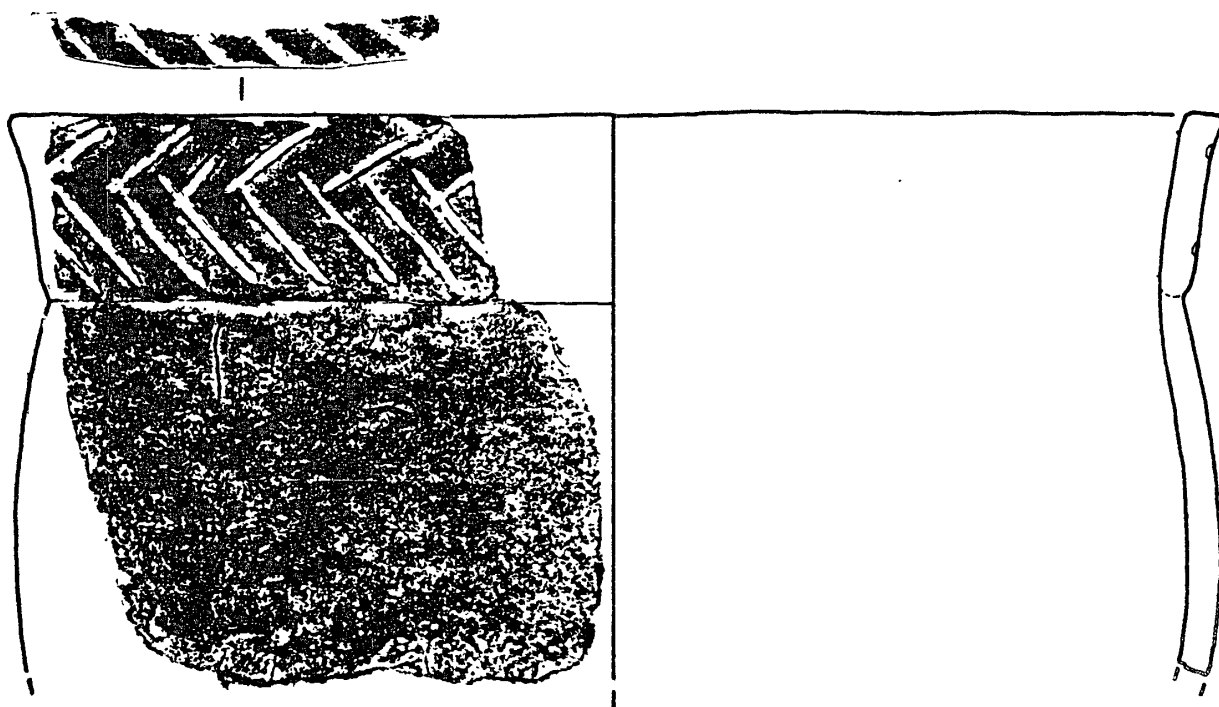
口縁外面の第1文様帯は先の鋭く尖った棒状工具を用いて施文している。頸胴部の境に2条の細沈線を4ミリ前後の間隔で横走させその上部に細沈線で文様を刻むが、沈線の方向に一定性がなく、乱雑な文様となっている。しかし頸部全体を飾るものではなく、部分的施文に終わっている。施文順序は横走の2本の細沈線を先に施文し、次に上部の縦位細沈線を描き、最後に週辺の短沈線を描いている。第Ⅴ層cの出土。

同図4は中央部に縦位の沈線を継続的に描き、左方には横位の沈線が3本認められる。全体的な文様構図は不明である。口唇上は無文。第Ⅴ層cの出土。

同図7は山形口縁の小破片である。第1文様帯に方向の異なる斜沈線を配しているが、籠目文になるのか、羽状文になるのか不明である。沈線はシャープで、文様は鮮明である。口唇上は無文。第Ⅴ層cの出土。

最後に分類不可能な胴部4点(第51図2・3、第52図3・6)について記述する。

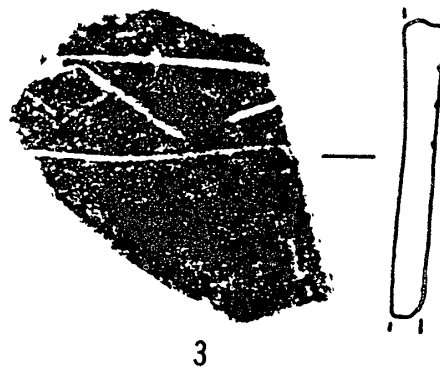
第51図2は右側に縦位の沈線が3本認めら



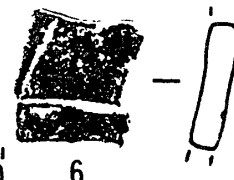
1



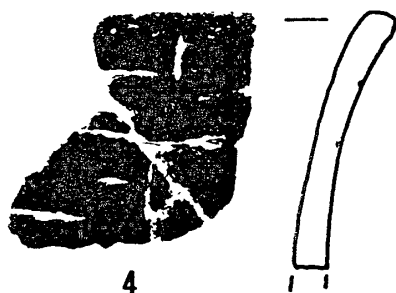
2



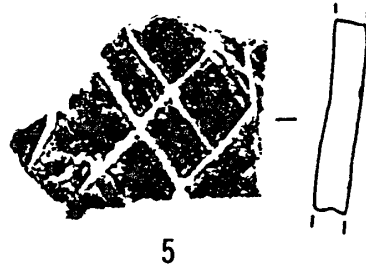
3



4



5



6



7

第52図 A-3区出土の嘉徳Ⅱ式土器

0 5 cm

れ、右端の沈線にそって破損している。その左側には複数の沈線による羽状文あるいは鋸歯状の文様を施文する。文様は明瞭で、施文順序は右側の文様を先に施文し、次に左側の文様を施文している。第Ⅳ層の出土。

同図3は先の尖った棒状工具を用いて施文する。沈線は繊細である。文様は方向の異なる複数の斜沈線を交互に配するもので、沈線の数是一定せず、また斜度も区々である。しかし、施文順序は把握できる。つまり、左側の3条の縦位沈線を最初に施し、次に中央部の上方の斜沈線、そして下方の5条の縦位斜沈線へと移行し、最後に右側の横位沈線を施す。第Ⅳ層の出土。

第52図3は1.4センチ～1.7センチ間隔で2本の沈線を横走させ、その内部に別の文様を配する。内部文様の一つは方向の異なる山形文を組み合わせ、菱形文をつくるが、線のはみ出した部分もある。本標品は胴部の資料であり、この文様が第1文様帯の一部なのか、それとも第2文様帯に属するものなのか現資料では不明である。第Ⅴ層cの出土。

同図6は横位に2条、斜め方向に1条の沈線の認められるもので、下端の横位沈線の箇所破損している。施文は浅めだが、文様は明瞭である。第Ⅴ層cの出土。

### g) 神野D式土器

伊波式土器の祖型の一つと考えられるもので、新形式に属し、これを神野D式と仮称する。

本区の出土資料は少なく、第53図1～4の4点だけで、完形品はなく、推定復元可能なものが1点あるだけである。同図2・3は同一個体と思われるもので、それぞれ第Ⅳ層、および第Ⅴ層a上部より、同図4は第Ⅴ層a下部、同図1は第Ⅴ層cよりの出土である。

### 器種・器形

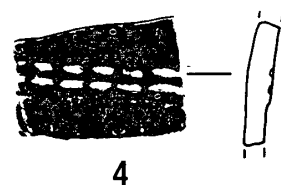
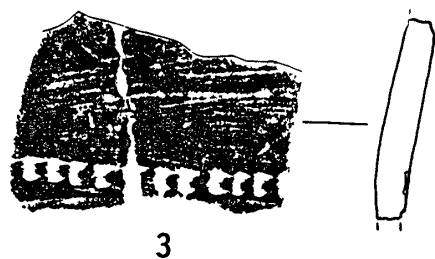
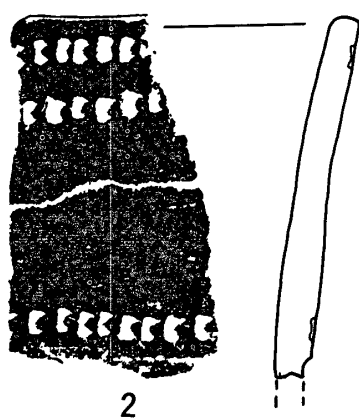
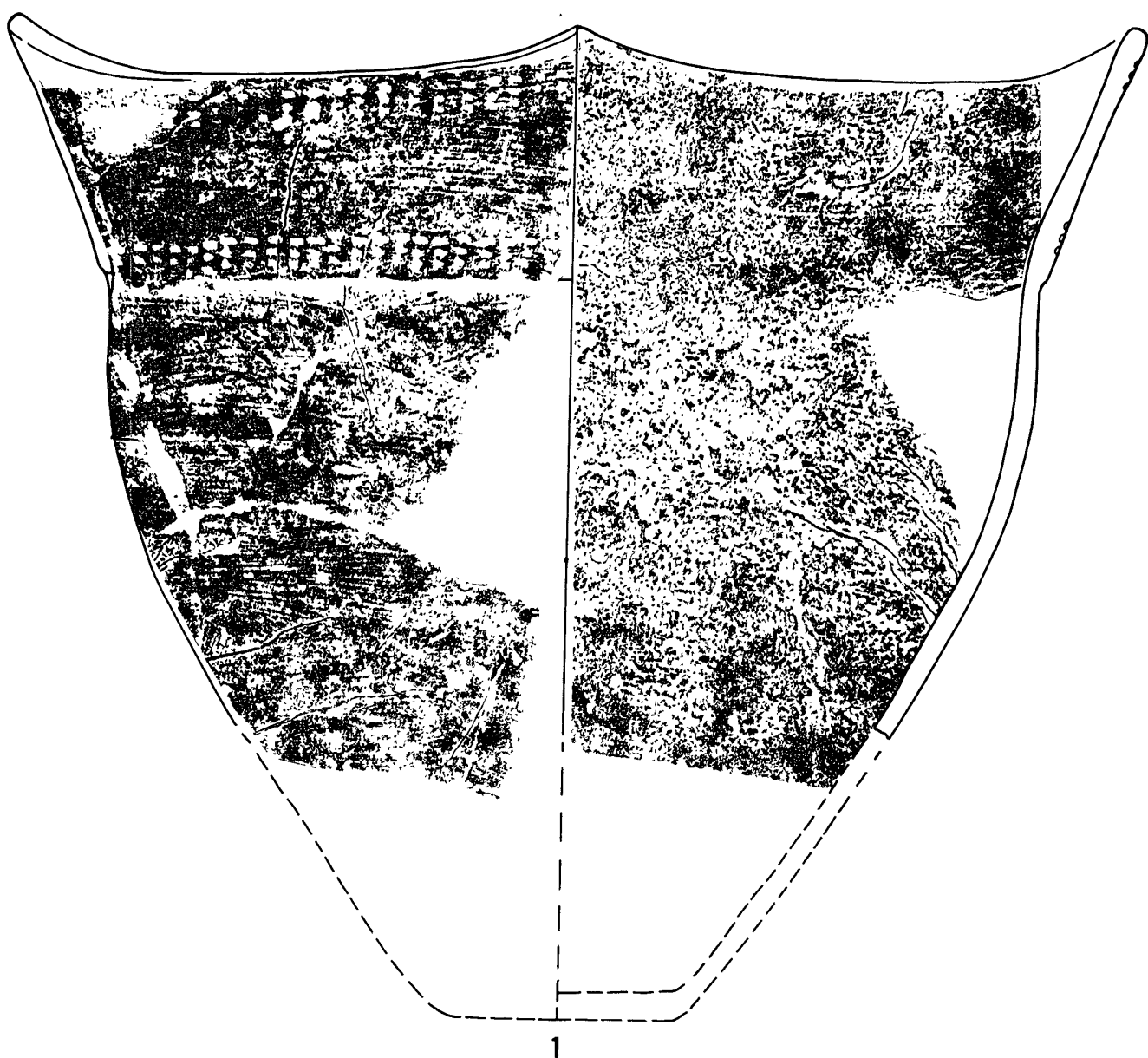
現在のところ、壺形は確認されておらず、深鉢形のみである。器形は復元を試みた同図1についてみると口径が胴の最大径より大きく、頸部でしまり、口縁は外反する平底の器形である。口縁部は4個の山形突起をもち、同部でコーナーをつくり、したがって上面観は、4つの弧を合わせたような方形を呈し、側面観は、頸部で強く外反する器形となる。そして、口縁部を肥厚させ文様帯とする。他の破片の器形もこれに準ずるものと思われる。本標品の文様帯の上下の幅は、6センチ前後であるが、同図2のように8センチ前後の幅を有するものもある。また肥厚部の成形については、同図4のように粘土を貼付して肥厚させるのではなく、胴部に篋削りを行い、結果として、疑似肥厚の形態をとるものもある。篋削りの部分は調整痕が明瞭である。いずれにしても肥厚は面縄束洞式などとは異り、微弱で目立たない。

サイズについては、第53図1によると器高が推定28センチ、口縁は長径が推定32センチ短径が推定29センチで、大型の多少ズングリした器形である。A—1区において口径推定18センチ、22センチのものが1点ずつ得られており、本型式のサイズにおけるバリエーションを窺うことができる。

焼成は比較的良く、中でも同図4は堅緻である。色調は茶褐色を基調とするが、同図2・3のように暗褐色のものや、同図4のように淡黄色のものもある。

器厚は第53図1が約6ミリ、同図2・3が約8ミリ、同図4が約5.5ミリである。胎土混入物には石英粒と金雲母？がある。同図1は両者を同程度含み、含有量は比較的多い。同図2～4は石英のみを少量含み、特に4は微量である。





第53図 A - 3区出土の神野D式土器

0 5 cm

## 文様

施文部位は、先述した口縁部の肥厚帯と口唇部であるが、口唇部に施文する例は本区では得られていない。

器面調整としては、最終的にナデ消しを行なうが、徹底せず、第53図1～4のように表裏面に擦痕を残すケースが多い。ただし、同図1の裏面は完全に消されている。擦痕は、横位の細いものであるが、同図4のように縦位のものも見受けられる。

施文具には、同図1のような三叉工具や、同図4のような二叉工具、同図2・3のような半截竹管工具などが認められる。しかし、単竈工具を使用したものは検出されていない。

文様構成は先述した口縁肥厚部の上端（第1文様帯）と下端（第3文様帯）に点刻文を施し、その中間（第2文様帯）を無文空白部とする。点刻文は、叉状工具による2点1組のものをそれぞれ1組、あるいは2組配するが、同図1のように、三叉状工具による3点1組のものも見受けられる。また、同図2・3のように半截竹管状工具（点と点は部分的につながる）による刺突文を第1文様帯に2組、第3文様帯に1組配するような例外的な組み合わせも見られる。




上記のうち、1組配するものは次項の神野E式に通じ、2組配するものは伊波式に特徴的な文様である。本区において三叉、あるいは二叉状工具を使用するものは、第V層cと第V層a下部より、半截竹管状工具使用のものは第V層a上面および第IV層より出土している。このことが使用工具の変遷を示すものか、現時点では資料不足のため明言できないが、文様上における神野E式あるいは伊波式との関係なども含め、今後の興味ある課題である。

## h) 神野E式土器

伊波式に先行すると思われるもので新型式に属し、これを神野E式と仮称することにする。

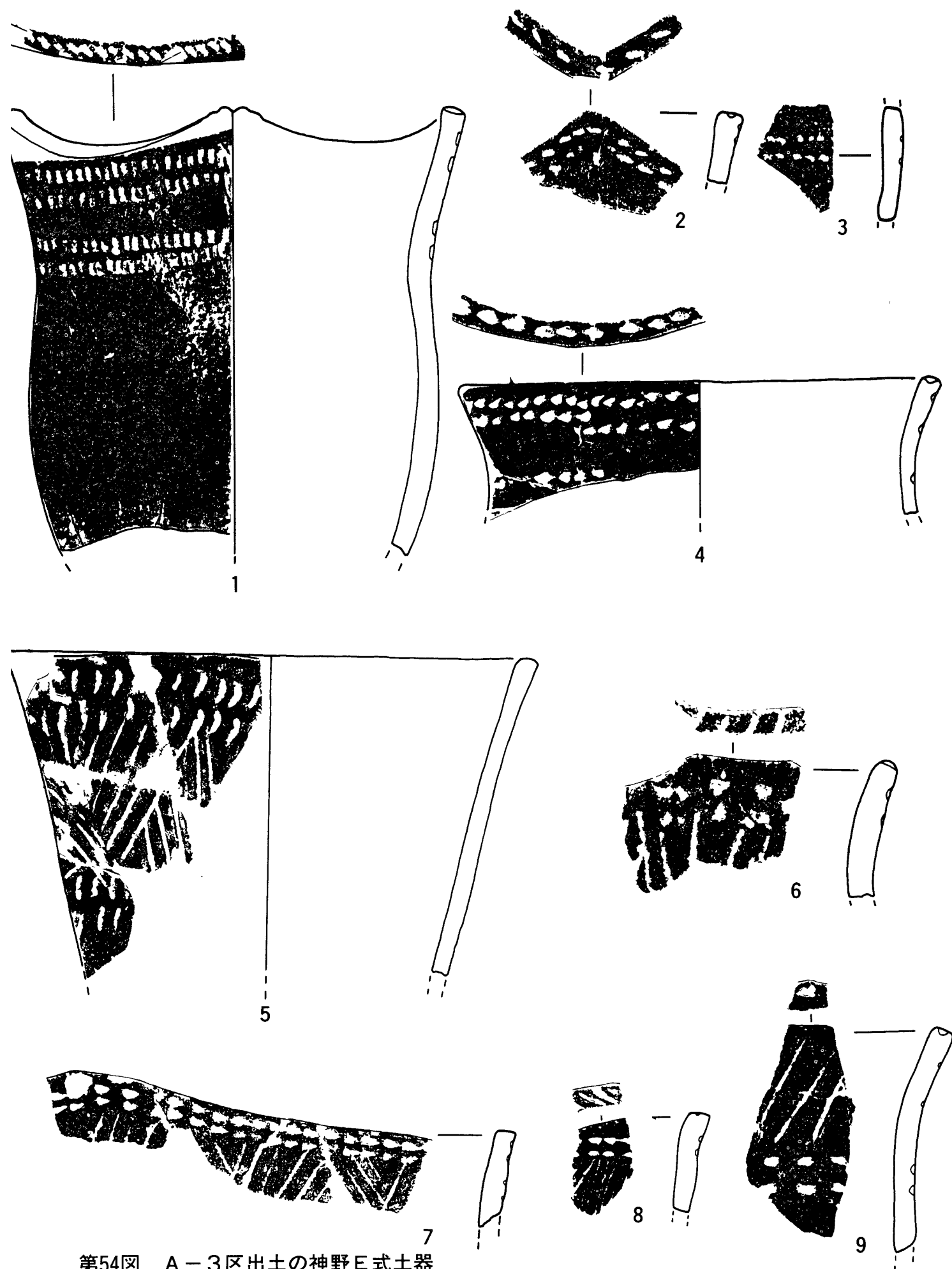
本区においては破片が9点出土（第54図1～9）した。完形品はないが、推定復元可能なものが2点得られた（同図1・5）。出土状況は第12表の通りである。

第12表 神野E式土器層位別出土状況

層序	タイプ	第1種	第2種	第3種	計
					
I					
II					
III					
IV		1	2		3
V	a	2		1	3
	b				
	c	1	2		3
VI					
VII					
VIII					
計		4	4	1	9

## 器種・器形

現在のところ壺形は確認されておらず、深鉢形のみである。深鉢形は、同図1・5を参考にすると口縁部がゆるやかに外反し、頸部がややしまり、胴部がわずかに脹らむ器形と底部から口縁へ直線的に開く2種が認められ、いずれも平底に終る器形である。口縁形態としては、山形口縁は認められるものの、平口縁の有無については現段階では不明である。山形口縁は4個の山形突起を有し、同部でコーナーを作り、上面観は丸味のある方形状を呈する。また、山形頂部に小さな抉りを設け



第54図 A-3区出土の神野E式土器

るもの（同図1）もあるが、この種の整形はむしろ例外である。

以上のように、深鉢形の基本的な器形は前項で述べた神野D式土器や次項の伊波式土器と共通する。しかし、本型式は口縁部を肥厚させない点で神野D式と異り、他方その点で伊波式と一致する。

焼成は一般的に良く、特に同図5・8は堅緻であるが、逆に同図3のように比較的脆いものもある。器色は茶褐色を基調とするが、同図2のように赤褐色を呈するものや、同図7のように煤けて黒ずんだものもある。器厚は6ミリ前後のものが多い。しかし、同図6は9ミリ近くあり、また同図4は口唇部が頸胴部よりやや厚い。胎土混入物には石英、金雲母？、岩片がある。同図2・7～9は石英粒を多く含む。同図3・4・6は石英と金雲母？を含むが、3は比較的金雲母？も多く、6は石英が著しい。同図5は石英多量のほか2～3ミリ大の岩片が散見される。

## 文様

施文部は口縁部と口唇部に限られるが、同図5・7のように口唇部を施文の対象としないものもある。

器面調整の方法としては、最終的にナデ消し手法を用いるが、ナデが徹底せず、擦痕を残すものもある。ただし、同図5・8の表面、同図1の裏面、同図4・6の表裏面には擦痕は観察できない。逆に同図7の裏面はナデ消しが行なわれず、擦痕が鮮明に残る。擦痕はほとんどが横方向だが、わずかながら斜め方向のものや縦方向のものも見受けられる。各標品ごとの擦痕の残存状況は第13表の通りである。

第13表 擦痕の残存状況

器面 図版番	表 表 面		裏 面
	文様帯	胴 部	
第45図 1	—	△	—
2	△		△
3	—		△
4	—		—
5	—	—	△
6	—		—
7	—		○
8	—		△
9	—		△

残存状況	△	○	—	
	ナデ消すが不明瞭に残る	ナデ消さず鮮明	観察されない	不 明

施文具には(イ)叉状工具、(ロ)半截竹管状工具(ハ)単筥工具、(ニ)先端の尖った工具の4種があり、(イ)は同図2・3・6～8、(ロ)は同図5、(ハ)は同図1、(ニ)は同図4・9である。叉状工具の幅は6ミリ前後が普通であるが、同図6のように1.2センチと幅広のものもある。

ところで、本型式の最も重要な特徴は口縁部の文様にある。つまり、基本的には伊波式文様に通ずるものであるが、伊波式が後述のように第1文様帯と第3文様帯に点刻文、短沈線文など同種の文様を2組配するのに対し本型式は1組配する点に差異を見出すことができる。

次に各部の文様について略述する。

文様は口縁部と口唇部に施される。口唇部の文様には列点文（同図2）、刻文（同図1・6・8）、三角形刺突文（同図4・9）の三種がある。

口縁部の文様は先述したように、口唇直下

(第1文様帯)と頸下部(第3文様帯)に又状工具による2点1組、あるいは単竪工具による2条1組の点刻文および刺突文を施し、両者の間(第2文様帯)を無文空白とするものと、数種の斜沈線文で埋めるものがある。このような文様構成等の相違も含め、口頸部文様を下記の3種に大別した。

#### 第1種

第2文様帯を無文空白とするもの。

#### 第2種

第2文様帯を数種の文様で埋めるもの。

#### 第3種

第2種の第1文様帯を省略したもの。

第1種は同図1～4である。2・3は文様の一部を残すもので、4は第3文様帯直下に横線を加える点で本型式の概念からやや外れるものであるが、とりあえず本項に含めておく。同図1は幅約4ミリの単竪工具を用いて施文するもので、施文はやや深く密である。また、第1文様帯と第3文様帯の間隔(つまり第2文様帯の幅)は約1センチと狭く、その点、他と若干異っている。

同図2は山形口縁破片で、又状工具を用いて対の点刻文を1組左から右へ施すもので、施文はやや深く、文様は明瞭である。

同図3は胴部破片で、これも又状工具による点刻文を1組施すが、同図2と違って文様は若干矮小化する。

同図4は三角形刺突文を第1文様帯に2条、第3文様帯に1条施し、その直下に沈線を加える。又状工具を用いていないために、第1文様帯の上下の文様は対をなさず、雑然とした施文となっている。また、第2文様帯につ

いても刺突文と横線の組み合わせは、本型式の概念から外れるものであり、異和感はないが、構図全体からすると本型式の範疇に含めることができる。

第2種は同図5～8の4点である。6～8は第2文様帯の下部を欠くが、本項に含めてよい資料である。まず、第1、第3文様帯の文様について見ると、同図6～8は同部に又状工具による点刻文を1組施すものである。7・8は竪幅約6ミリのものを用いており、文様は深く密である。6は幅約1.2センチの又状工具を用いており、又状部の1点はやや深めだが、他の1点は浅く、そのため後者は観察しにくい。施文はやや間隔があり、前者ほど密でない。同図5は半截竹管状工具による三日月状の刺突文を第1・第3文様帯にそれぞれ2組施すが、第1文様帯においては弧文の方向を逆にするという珍しい施文例である。第3文様帯においても同様の施文をしたか現資料からは知り得ない。

以上、4点の第2文様帯には数種の沈線文を認めることができる。同図5は三角形文の内部を方向の異なる斜沈線で埋めるもので、同図7も類似の文様を施文する。同図6も5に類する文様かと推察される。同図8は細めの斜沈線が認められるが、同種文様に終始するかどうかは不明。沈線は7・8のように繊細なものと、5・6のようにやや太めのものがある。

第3種に属するものは同図9の1点のみである。口唇直下より頸部にかけて斜沈線を施し、その下方に2条1組の三角形刺突文を2列施すが、拓影では丸味を帯びている。施文はいずれも深く鮮明である。

#### i) 伊波式土器

伊波貝塚出土の土器を標式とするもので、

本区では11点得られており、第55図1～11に図示した。完形品はなく、すべて破片である。図示したもののうち、口縁部は7点で、そのうち3点は図上復元を試みた。層位的出土状況は第14表の通りであるが、分類不能のものを種不明として取扱った。

第14表

種別 層位	1 種	2 種	3 種	不明	計
I					
II					
III					
IV	2			4	6
V	a			2	2
	b				
	c	2	1		3
VI					
VII					
VIII					
計	4		1	6	11

### 器種・器形

現在のところ壺形は確認されておらず、採集品はすべて深鉢形に属する。深鉢形の一般的な器形は、復元を試みたものを参考にする、胴の最大径より口径が大きく、口縁部は外反し、頸部でしまり、平底に終わるものである。口縁形態は山形口縁で、4個の山形突起を有する。また、同部においてコーナーを作り、上面観は4つの弧を合わせたような丸味のある方形を呈する。

焼成は概して良好だが、同図8・10のように脆いものもある。器色は茶褐色を基調とし中には煤けて黒ずんだものもあるが、そのほか同図4・5のような橙褐色や同図8・11の赤褐色なども見受けられる。器厚は6・7ミリのものが一般的であるが、同図8のように

4.5 ミリと薄いものもある。胎土混入物には石英、金雲母？、チャートなどがある。同図1・8・10・11は石英を多く含み、なかでも1は著しい。同図4・5・7は多量の石英のほか金雲母？を比較的多く含む。同図3もこの部類に属するが、特に金雲母？は細かく破碎され、微細である。

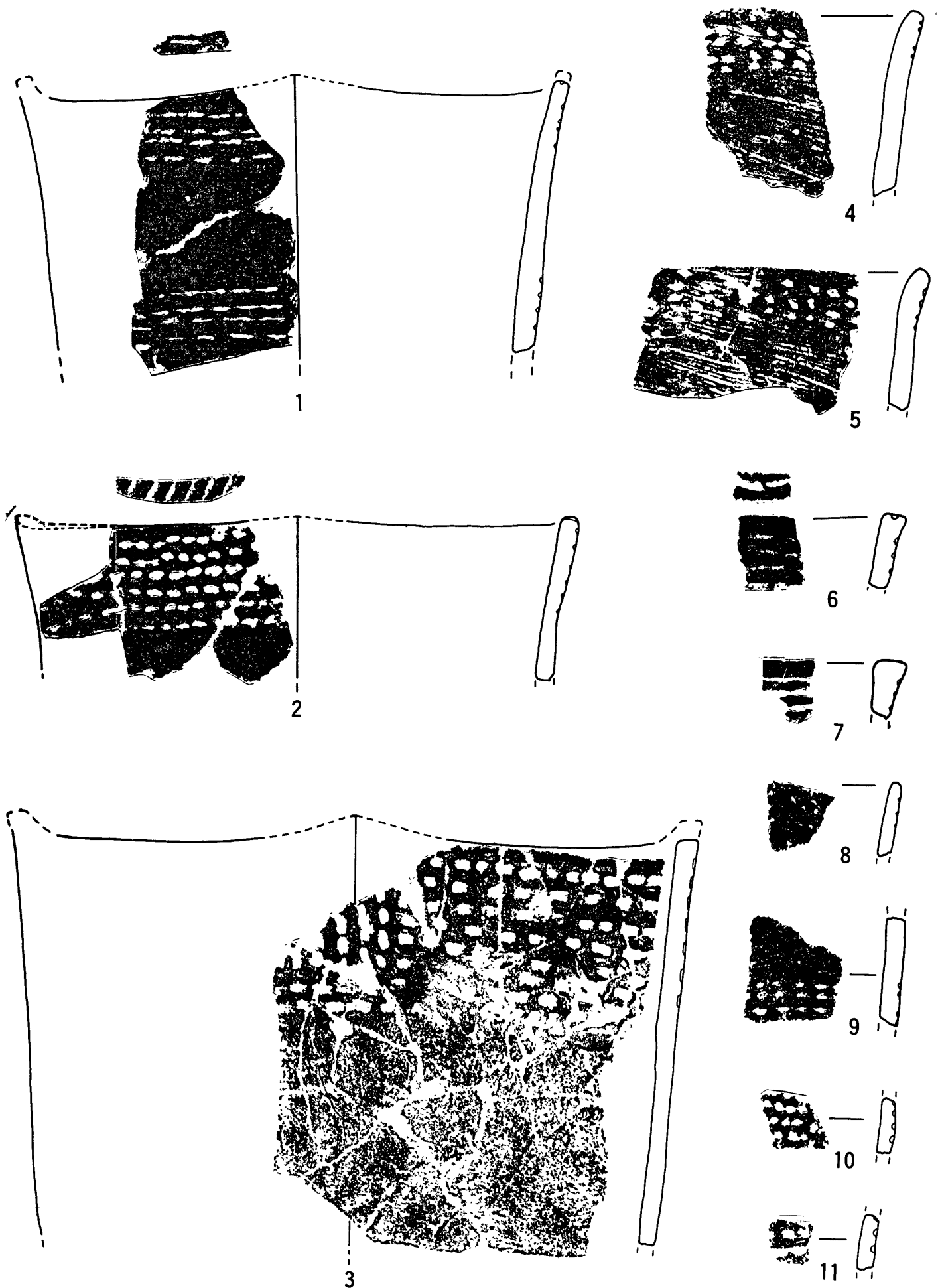
### 文様

施文部位は口唇部と口縁部であるが、同図3～5・7のように口唇部を施文の対象としないものもある。





施文前の器面調整としてナデ消し手法を行なうが、不徹底な箇所では擦痕も見受けられる。同図3・8・10には擦痕は認められない。同図4・5の表面は擦痕が著しい。器表面の擦痕は一般に横方向であるが、同図2は斜め方向にも施されている。器内面は斜め方向の擦痕が多く、同図7のみ横方向である。標品ごとの擦痕の残存状況を第15表に示した。

第15表

図番号	出土層	擦痕の残存状況		
		器表面		器内面
		文様帯	胴部	
第55図1	IV 層	△		—
2	IV 層	△		△
3	V 層 c	—	—	—
4	V 層 c	○		△
5	V 層 c	○		△
6	IV 層	△		—
7	IV 層	—		△
8	V 層 a	—		—
9	IV 層	△		△
10	IV 層	—		—
11	V 層 a	△		—



第55図 A-3区出土の伊波式土器

	ナデ消しを行わず鮮明に残る
	ナデ消すため不鮮明
	擦痕は観察されない
	不明

施文具には叉状工具、単篋工具があり、前者は同図1・2・4～9の8点、後者は3の1点だけで、前者が圧倒的に多い。なお、10・11は小破片のため不明。叉状工具の工具幅は7ミリ前後が多く、9のように約5.5ミリのものもある。単篋工具を使用したものは先述のように3のみであるが、工具の幅は約4ミリである。

文様は前述したように口唇部と口縁部に施されていて、口唇部に文様が確認できるのは同図1・2・6の3点だけである。2は刻文を斜めに施しており、施文はやや密である。1・6は刻文を口唇に平行に施すが、6はややハの字状を呈しており、偶然の形状なのかあるいはパターン化したものの一部なのか、本資料では不明である。口縁部の文様は3段認められ、上段（第1文様帯）と下段（第3文様帯）には水平方向の点刻文や連点文を施す。中段（第2文様帯）は無文空白とするものと、数種の沈線で埋めるものがある。本貝塚の伊波式土器を上記のような文様上の特徴から、次の3種に大別した。

### 第1種

口縁部上段（第1文様帯）と下段（第3文様帯）に叉状工具による2点1組、あるいは単篋工具による2条1組の点刻文等を、それぞれ2組施し、中段（第2文様帯）を無文空白とするもの。

### 第2種

第1種の第2文様帯を数種の沈線で埋める

もの。

### 第3種

変形文様を施文するもの。

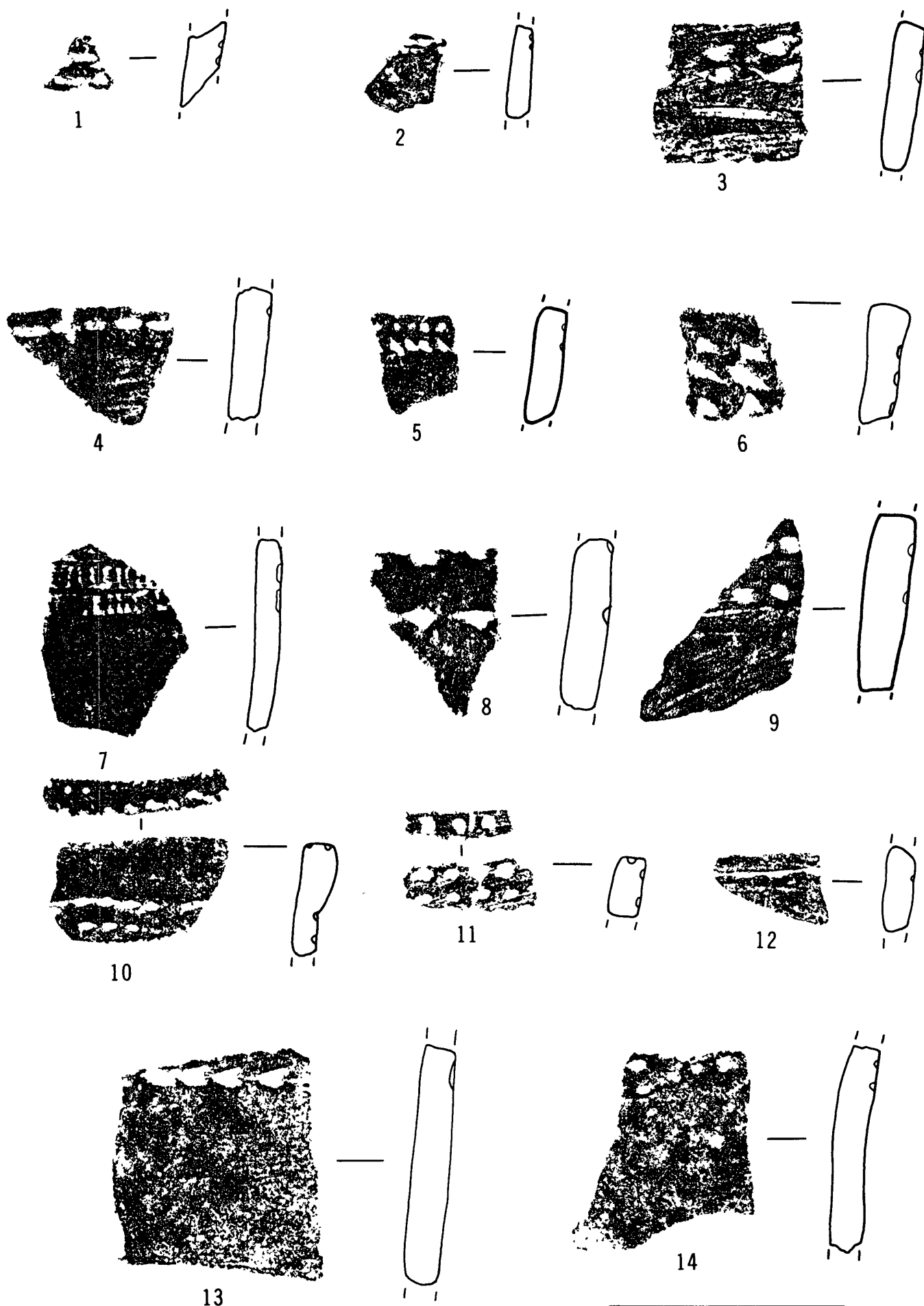
第1種に属するものは、同図1・4・5・9である。4・5・9は文様帯の下部を欠いているため、神野D式の可能性も残しているが、本項に含めた。この4点は叉状工具による2点1組の点刻文あるいは刺突文を第1文様帯および第3文様帯に2組ずつ施すものである。4・5は同一個体と思われるもので、刺突文はハの字状を呈し、深く鮮明であるが、文様自体はやや雑然としている。1は点刻文をやや深く施文する。施文の方向は左から右である。中段（第2文様帯）の無文空白部は約4.5センチの幅を有する。9は点刻文を施文する。文様はやや浅めで左から右へと施文する。

第2種に属するものは本区では出土していない。

第3種は同図3の1点である。先端の幅約4ミリの単篋工具による点刻文を横方向へ施すもので、点刻文は対になっており、4組認められる。ただし、通常の伊波式のようにこの4組を上・中・下の3段に区分することは困難である。変形文様とする所以である。また、山形直下では同種の文様を縦方向に数条施文しており、このような施文手法も伊波式に通ずるものである。文様帯の幅約5.5センチで、文様は割合深く施文されるが、保存状態が悪く観察しにくい。

種不明のものは同図2・6～8・10・11である。叉状工具による2点1組の点刻文、あるいは刺突文を2は3組、他は2組施すものであるが、破片が小さく、文様上の細分ができないものである。2は口縁に沿って点刻文





第56図 A-3区出土の伊波系不明土器

を3組施すが、この文様が3段文様のうち、最上段（第1文様帯）のものに属するのか、あるいはこの文様だけに終始するのか、もし前者であれば第1種の変形であろうし、後者であれば第3種の資料ということになる。8・10・11は刺突文、6・7は点刻文である。8は文様が華奢で、伊波式の点刻文とはかなり異った様相を帯びている。11はやや太目の刺突文で、10は押し引きの手法をとる。施文はいずれも深く密である。7は点刻文の一種で、押し引きぎみに施文されている。6の点刻文は規格的であり、その下方には中沈線（2センチ前後）の平行線文を施文する。

#### j) 伊波系不明土器（第56図1～14）

文様形態は伊波系土器（神野D式、神野E式、伊波式）に属するが、小破片のため、上記3型式のいずれに属するか不明のものである。ほとんどが胴部破片で、口縁破片は同図6・10・11の3点だけである。

出土層は同図1が第Ⅱ層、同図2～6は第Ⅳ層、7～9は第Ⅴ層a、10～14は第Ⅴ層cよりの出土。

焼成は一般に良く、なかでも7・9は堅緻である。器色は茶褐色を基調とし、そのほか12のように赤褐色のものや、5・9のように表面が煤けて暗褐色を呈するものもある。

器厚は2のように約4ミリと薄いものもあるが、6ミリ前後のものが最も多く、6・8・9のような約8ミリを計るものもある。胎土混入物には石英・金雲母？、チャート、岩片がある。5・14は1～2ミリ大の石英を混入するが、他に比べ混入量は少ない。3<sup>°</sup>・6～9・11・13は多量の石英のほか、金雲母？を比較的多く含み、前者は1～2ミリ大であるが、後者は微細である。4・12は1～2ミリ大の石英とチャートを含むが、混入量は石

英が多量であるのに対し、チャートは微量である。10は少量の石英と著しく多量の岩片を含むものである。

器面調整としてナデ消し手法を行うが、2～4・9・11～13のようにナデが徹底せず、擦痕を残すものがあり、特に3は著しい。4・12は器表面にのみ認められる。一般に擦痕は横方向か、あるいはそれに近い斜め方向であるが、2・13の裏面は縦方向である。

施文部位は口唇部と口頸部であるが、同図6のように口唇部に文様のみられないものもある。10は口唇部に点刻文、11は列点文を施す。10は叉状工具を用いるが、口唇の幅が狭く、施文は対にならない箇所もある。また、口縁部を約1.3センチ幅で肥厚させるが、施文の対象とはせず、肥厚部直下に叉状工具による点刻文を施している。肥厚は神野D式とは違ってやや厚目である。

次に口頸部の文様であるが、伊波系土器の特徴である横方向の点刻文あるいは押し引き文を施すものの、破片のため何条施すかは不明である。叉状工具を用いて施文するものは5・6・10～12・14の6点で、単筥工具を使用するものは3・7～9・13の5点である。叉状工具は幅6.7ミリのものを用いており、施文は一般に密で浅めであるが、6は深めである。単筥工具には先端三角形のものと同形状のものがある。前者を用いるものは3・8・9・13で、いわゆる三角形刺突文を構成し、施文は概して深く、観察しやすい。後者は7の1点で、押し引き文を密に施すが、施文は浅目で文様は不明瞭。

#### k) 有文破片

有文の土器ではあるが、型式を明示できないものをこの項にまとめる（第57図、第58図第59図）。完形品はなくすべて小破片である。

出土層は第57図1～22、第58図1～7が第Ⅳ層、第58図8～12が第Ⅴ層a、第59図1～29が第Ⅴ層cである。

### 器種・器形

器種については確実なものは深鉢形だけである。器厚は6ミリ前後が一般的であるが、第59図10・13のように4ミリ前後の薄いものや、第57図4・8・16、第58図1、第59図3・4・11のように約8ミリあるいは第58図3・12のように1センチ前後の厚さを有するものもある。混入物には石英、金雲母？、チャート、岩片があり、1ミリ前後のものが多い。石英は65点中63点に認められ、その中で石英と金雲母？を併用するものが29点と多く、石英のみを混入するもの（19点）がこれに次ぐ。焼成はほとんどが良好で、脆いものは小数（第57図3・7・15、第58図7、第59図14）である。器色は茶褐色を基調とするものが多いが、第57図6・9・20・24、第58図3、第59図10のような橙褐色、第58図6、第59図15のような黄褐色を呈するもののほか、第57図22第58図1、第59図7・22のように煤けて黒ずんだものもある。

器面調整としてはナデ消し技法を行うが、擦痕を残すものも多い。擦痕を残すものは26点で、うち8点は表裏面、6点は表面にのみ、12点は裏面にのみ見られ、横方向あるいはそれに近い細いものが大多数である。しかし、第59図3・6～9の裏面は粗く、特に3は貝殻条痕の可能性がある。

次に文様であるが、2種に大別した。

(イ)複数の型式にみられる文様パターン。

(ロ)既報の諸型式とは異なる文様。

(イ)の部類から記述していく。第57図1～3は嘉徳Ⅰ式あるいは嘉徳Ⅱ式の胴上部にみられる鋸歯文あるいは逆三角形と目されるものである。同図4～7・21は鋸歯文か複数の斜沈線を交互に組み合わせるもので、嘉徳Ⅰ式Aの第4種（山形直下にのみ縦位の三角形刺突文を配し、他は沈線で埋めるもの）か、嘉徳Ⅱ式の口頸部破片と思われる。

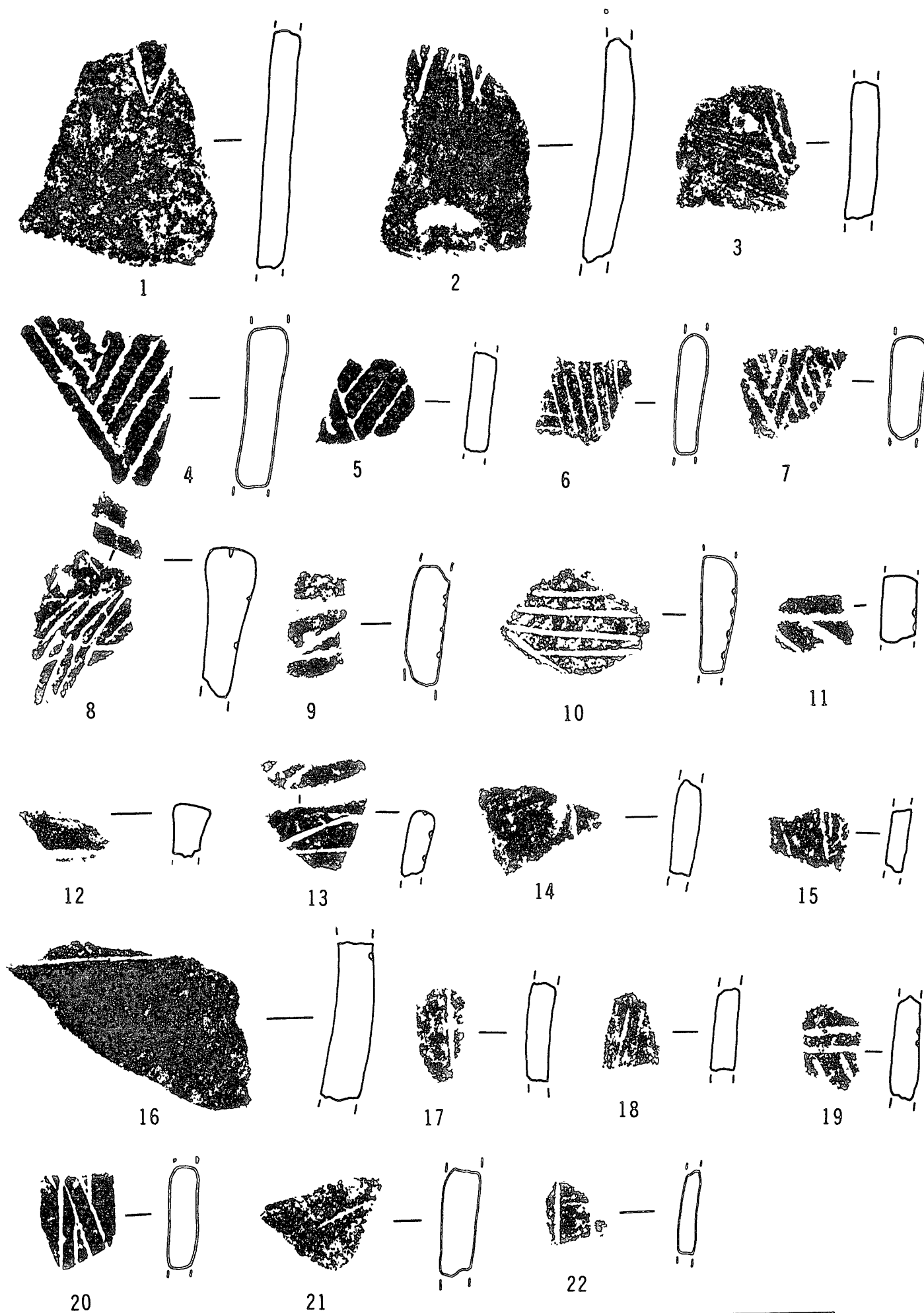
同図8は山形口縁の破片で、口唇部は約1センチと厚く、以下、漸次薄くなり、胴部は約6.5ミリである。口唇部には短沈線を深く施し、口縁部には沈線を施す。同図12・13は口縁部の小破片で、沈線の一端を有するものである。13の口唇部には斜沈線がまばらに施されており、12の口唇部は無文である。

同図9～11、14～20・22は縦位沈線、あるいは横位＋斜行沈線を施すもので、嘉徳Ⅱ式や嘉徳Ⅰ式の文様パターンの範疇に入るものである。しかしながら、なかには面縄前庭様式の胴部、伊波系土器の第2文様帯の沈線文の可能性も否定できないものもある。

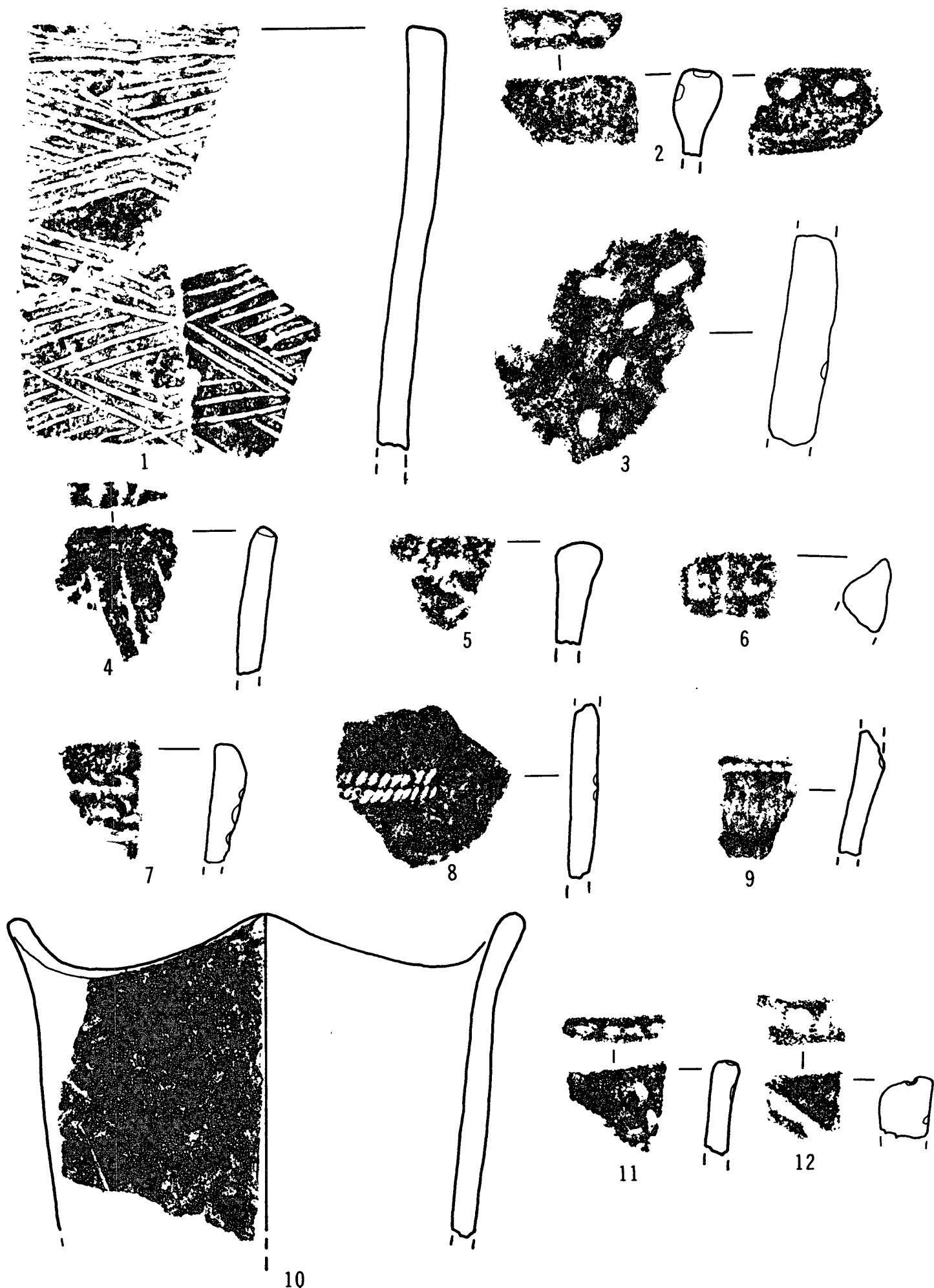
第58図4は粗悪な作りの土器で、口唇部には比較的幅広の刻文を施し、口縁部には斜行沈線を施文する。嘉徳Ⅱ式に属するものか。同図5・7は口縁片で、両者とも口唇に文様は見られない。5は口唇部の幅が約1センチと厚く、下方に行くに従い薄くなる。口縁の文様は5が雑な押し引き文を施すが、不明瞭。7は平行沈線で、後者は伊波式の可能性が強い。

同図9は肥厚口縁の下端部の資料で、肥厚部に小型の工具により押し引き文を横走させる。

同図10は山形口縁の破片で、残存部について図上復元を試みた。口径は推定11.8センチで小型の部類に属する。口縁はかるく外反し口径よりみて4個の山形突起を有していたも



第57図 A-3区出土の有文破片



第58図 A-3区出土の有文破片

0 5 cm

のと考えられる。胴上部に斜行沈線が1本認められるが、文様とみるべきかどうか判断がつかねる。

同図11は口唇部に列点文を密に施文し、口縁部には同種文様を斜行させるが、文様の性格は不明。同図12は厚さ約1センチの口縁破片で、口唇部には雑な押し引き文を深く施文し、口縁部には斜行沈線を施す。沈線は深く力強く描かれている。

第59図2は口縁破片で、口唇部には先端が丸味のある単筥工具により右から左方向へ押し引き文を施す。口縁部には方向の異なる斜行沈線が2本認められ、下端は沈線にそって割れている。

同図10・11・19は刺突文を施文するもので10は叉状工具、11は小型の単筥工具、19は先端が丸味を帯びた幅広の単筥工具を用いており、文様は伊波系あるいは面縄東洞式のものに類似する。同図18は小型の単筥工具による押し引き文を施すもので、文様はかなり密に施文されている。

同図12～14・29は沈線文と刺突文を組み合わせるもので、その限りでは嘉徳Ⅰ式（29は具志川式の胴部文様の可能性もある。）と思われるが、小破片のため明言しがたい。同図15・16は口縁破片で、口唇部には刺突文を施し15は深く、16は浅めの施文である。口縁部には沈線文を斜行（15）、横走（16）させており、2点とも嘉徳Ⅱ式あるいは嘉徳Ⅰ式に属すると思われる。同図17は口唇部が外側に若干せり出したような肥厚を呈し、口唇部は無文である。口縁部には半截竹管状工具による刺突文を横走させており、同文様と口唇との間に2条の縦位沈線を部分的に配する。

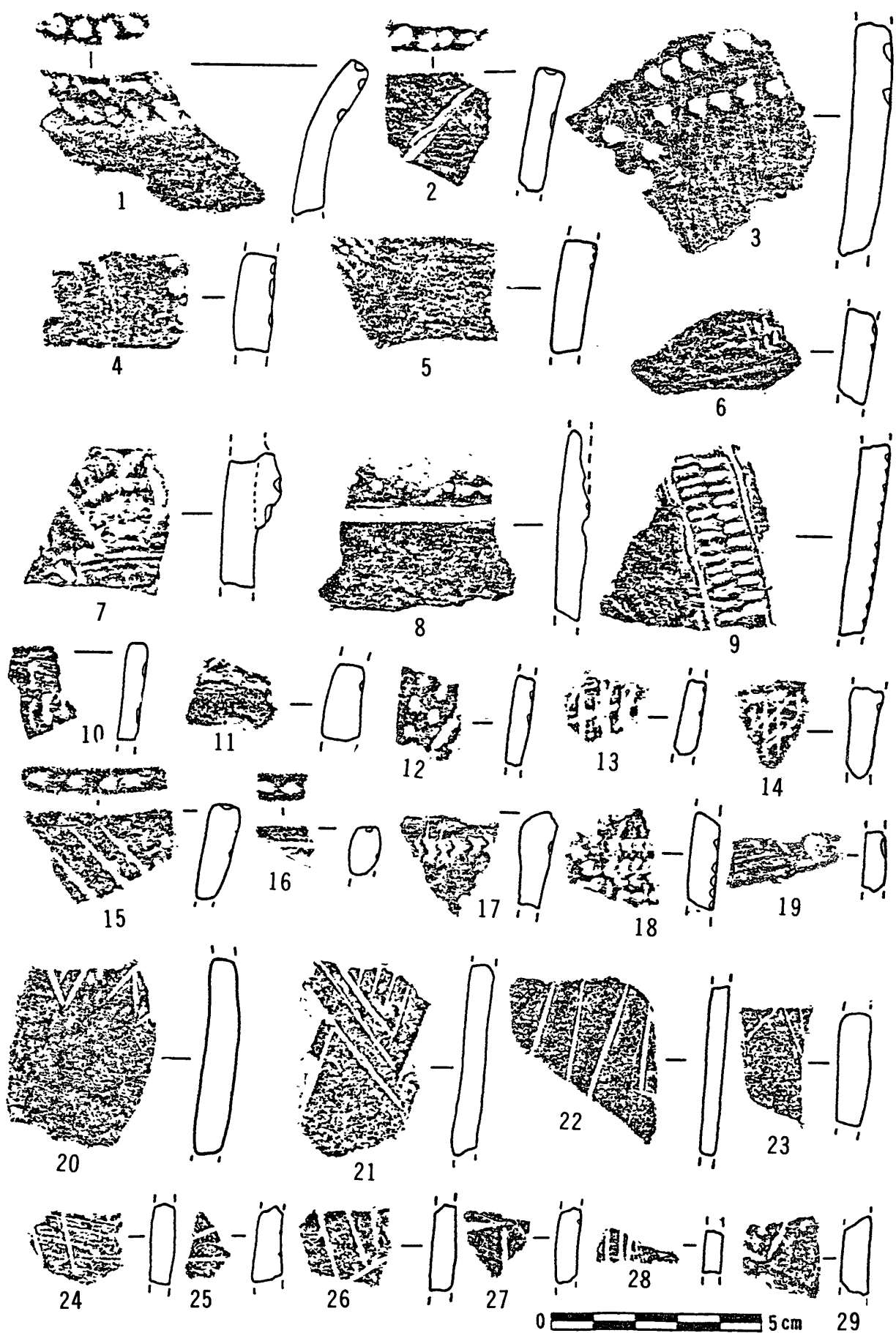
同図20～28は沈線文を施すもので、沈線は細く、シャープである。20・21・23は嘉徳Ⅰ式あるいは嘉徳Ⅱ式の胴部の鋸歯文様と考え

られ、他のものも嘉徳Ⅰ式またはⅡ式に属すると思われるが、24・28は面縄前庭式の可能性もある。

(ロ)既報の諸型式とは異なる文様

第58図1は直口に近い口縁破片で、口縁形態は平口縁を想定している。器表面には横長の菱形をモチーフとした幾何学文を施し、口唇は無文である。施文範囲は破片のため明言はできないが、胴部に及ぶとみられ、施文範囲のきわめて広い珍しい例である。この種の文様は広義の嘉徳Ⅱ式に含めてよいと考えられるが、本貝塚出土の嘉徳Ⅱ式とは施文範囲および文様構成が異なるため、一応別個に取り扱った。同図2は口唇下約2センチの口縁破片である。口縁部を肥厚させ、口唇部と口縁内面に竹管状工具により刺突文を深く施文する。口縁外面は無文である。本標品は口縁内面に施文する数少ない資料である。同図3は器厚約1センチの厚手の土器で、器表面には太めの棒状工具により列点文を斜行させるもので、2列認められる。同図6は口唇部の断面が逆三角形を呈するもので、口唇内面および口縁部に押し引き文を縦位に施すが、保存状態が悪く不明瞭である。同図8は小型の工具による刺突文を2列密に施すが、文様は途中で中断する。

第59図1は口縁がゆるやかに外反し、胴部が脹らむ器形で、口縁部を僅かに肥厚（約1.5センチ）させ文様帯とするものである。先端がささくれたような棒状工具により刺突文を口唇部に1列、口縁文様帯に2列やや深めに施す。同図3は約4.5ミリ幅の棒状工具による2点1組の刺突文を斜行させる。文様構成は横位、斜位に施されていたようである。同図4・5は斜行列点文の一部を有するもので4は太目の棒状工具、5は小型の叉状工具を使用し、比較的広い間隔を置いて施文する。



第59図 A-3区出土の有文破片

文様構成は4は同図3に、5は神野B式に近い感じを受ける。同図6は小型の工具により刺突文を部分的に深く施文するものである。

同図7は頸胴部の資料で、1.2センチ幅の凸帯（現存部においてV字状を呈する）を貼付し、凸帯上に貝殻腹縁による刺突文を施すものである。また、器面には棒状工具による刺突文も見受けられる。同図8は竹管状工具により凹線文を1条横走させ、その上方に列点文を配する。列点文は浅くディンプル状となる。同図9は約1.5センチ幅の平行沈線を斜行させ、その中を刻文で密に埋めるもので工具の先端の幅は約5ミリである。

#### 1) 無文口縁破片

本区では12点の無文口縁破片を検出した。第60図1～8は深鉢形、同図9～12は壺形と思われるものである。まず、深鉢形から記述することにする。出土層は1～4が第Ⅳ層、5が第Ⅴ層a、6～8が第Ⅴ層cである。これらの無文土器は前述した諸型式に伴うものと考えられ、特に型式設定はしなかった。

深鉢形は図上復元を試みた同図1を参考にとすると、口径は推算16.2センチで直線的に開口し、口縁上端が僅かに外反する器形である。口縁形態には平口縁（1・3・4・6～8）と山形口縁（2・5）が認められるが、前者のうち3・4・6～8は小破片のため確言はできない。山形口縁の場合、山形突起の個数は4個を想定している。口唇形態には断面が丸味を帯びたものと角張ったものがあり、前者は1～3、6・7、後者は4・5・8である。器厚は6ミリ前後のものが多いものの1は約7.5ミリと比較的厚く、3は約4.5ミリと薄い。また、2は口唇部が約8.5ミリと厚く、下方に行くに従い約6ミリと薄くなる胎土混入物には石英、金雲母？、岩片がある

石英はすべてのものに認められ混入量も多い特に1は著しく多く、手触りもザラザラする金雲母？は1～5の5点にみられ、混入量については比較的多いもの（1～3）と少ないものがある（4・5）。岩片は非常に細いものであり、意識的に混入したというよりは元来胎土に含まれていたと考える方が妥当かもしれない。

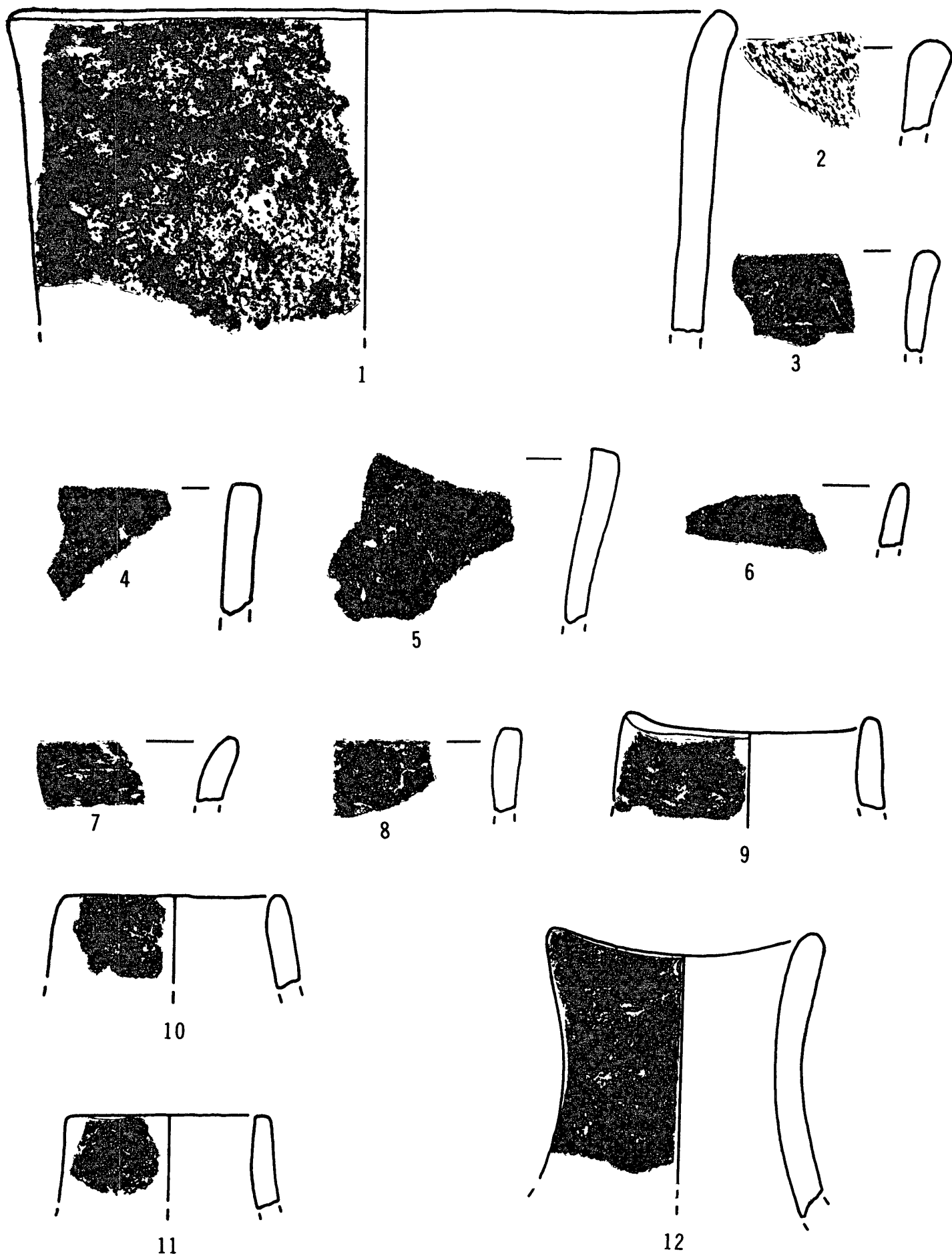
焼成は良好なものが多く、特に悪いというものは見当たらない。色調は茶褐色を基調とし7のように煤けて黒ずんだものや、2のように黄褐色を呈するものもある。

施文前の器面調整としてはナデ消し技法を採用するが、徹底していないため部分的に擦痕を残すものも多い。（2の裏面、3～5・7の表裏面）。擦痕は横方向かそれに近いものが多く、2・4の裏面のように斜め方向、3の表面のような横・斜め方向のものもある。

次に壺形土器であるが、4点（同図9～12）得られた。出土層は9が第Ⅳ層、10が第Ⅴ層a、11・12は第Ⅴ層cである。完形品はないが、4点とも口縁部の図上復元を試みた。口径は9が推算5.6センチ、10が推算5センチ、11が推算4.4センチ、12は推算6センチである。口縁形状についてみると12は頸部がすばまり、口縁部がゆるやかに外反する器形である。9～11は小破片のため詳細は不明だが、やや内傾するタイプである。

口縁形態は10・11は平口縁と思われ、9・12は山形口縁である。山形突起の個数は口径から考えて2個を対峙するように配していたと思われる。また、12は山形部において強いコーナーを作る。口唇形態には尖り気味のもの（9・10）やほぼ平坦なもの（11）、丸味を帯びたもの（12）がある。器厚は5.5ミリ～6ミリである。胎土混入物には石英、金雲母？、岩片がある。石英はすべてのものに含ま





第60図 A-3区出土の無文口縁、壺形土器

0 5 cm

れていて、混入量は多く、特に10は著しい。  
ただし、9は比較的少なめである。さらに9  
～11は金雲母？を、12は岩片を含むが、混入  
量はあまり多くはない。焼成はすべて良好の  
部類に属し、特に9・12は堅緻である。器色  
は9～11が茶褐色、12は橙褐色を呈する。器  
面調整としてナデ技法を用いているものの、  
わずかながら擦痕も見受けられる。擦痕は9  
・11・12の器表面に認められ、横方向の細い  
ものである。

以上の資料は冒頭でもふれたようにすべて  
縄文後期に属するものである。

#### m) 底部

本区において底部が29点検出された。その  
うち1点は前述した第2類土器の検出された  
第Ⅶ層よりの出土、他の28点は第Ⅰ層、第Ⅳ  
層、第Ⅴ層aおよび同層cよりの出土である。  
(第61・62図)。

本貝塚の底部は平底、丸底、尖底の3種に  
大別されるが、本区の資料はすべて平底であ  
る。第Ⅰ層の1点と第Ⅶ層で得られた1点を  
除くと、他はすべて第Ⅳ層、第Ⅴ層a、第Ⅴ  
層cの縄文後期の層での出土で、どの形式に  
属するのか不明のため、一括して説明する。  
層位別出土状況は第16表の通りである。

第16表 層位別出土状況

層序	種類	平 底							丸底	尖底	計
		A		B		C					
		イ	ロ	イ	ロ	イ	ロ	ハ			
I			1								1
II											
III											
IV		4	1	2	1	1	3				12
V	a					1					1
	b										
	c			1	1	10	2				14
VI											
VII								1			1
VIII											
計		4	2	3	2	12	5	1			29

#### (1) 平底

平底は形状により下記の3種に分類できる。

- A) 立ち上がりの部分が若干外彎状に脹らむもの。
- B) 立ち上がりの部分が胴部へやや直線的に開くもの。
- C) 立ち上がりの部分が内彎状のカーブを示すもの。

(A)に属するものは6点得られ、2種に細分される。その1つは(イ)底面から直ぐに外彎状に脹らむものと(ロ)立ち上がり部分が若干くびれ、それから外彎状に脹らむものの2種である。(イ)は第Ⅳ層より4点得られた(第61図1～4)。底部の完全なものあるいは底径の推算可能なものは得られていない。底部の厚さは0.8センチ～1.2センチである。胎土は一般的に細かく、混入物は石英を主体に金雲母？や石灰質砂粒をわずかに含む。

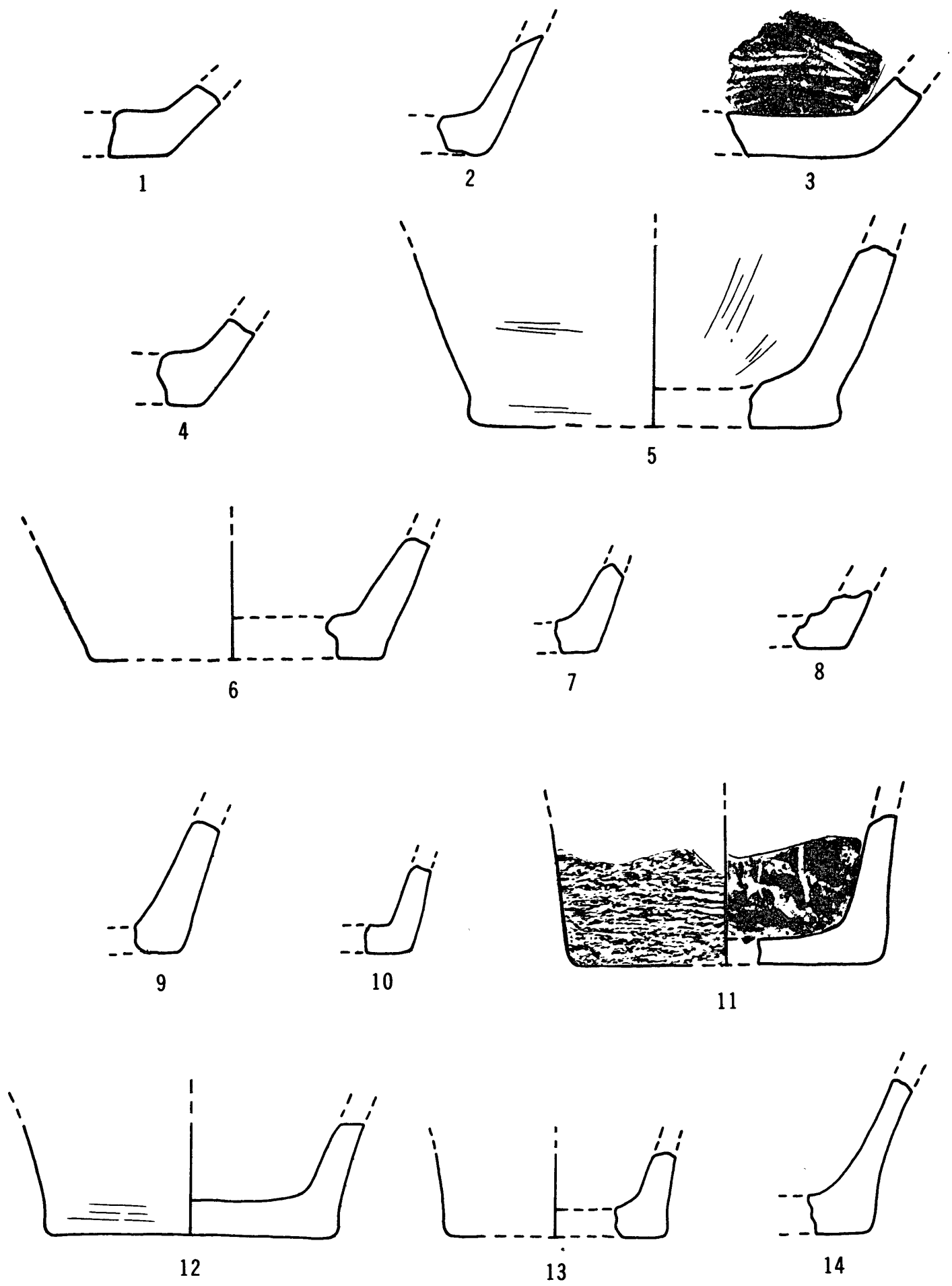
器面調整の方法を観察すると、両面ともナデ調整を行うのが一般的であり、全体的に外面は入念で、内面は雑である。第61図3は両面に条痕を施し、そのあとナデ消しているが内面は不十分のため条痕が消えきらずに明瞭に残っている。

焼成は脆いものが一般的だが、同図4のように良好なものもある。

器色は両面とも茶褐色を呈するものが2点(同図1・2)で、同図3は両面とも赤褐色同図4は外面が茶褐色、内面が灰褐色を呈している。

(ロ)に属するものは表土層と第4層からそれぞれ1点得られた。

表土層採集の1点は第61図5に示すもので



第61図 A-3区出土の底部破片

0 5cm

所属年代は不明だが、器形その他の特徴から縄文後期の所産と考えられる。底径は推算 8 センチで、底部の厚さは約 1 センチである。胎土に含まれる混入物をみると、石英を主体に、その他金雲母？、長石、赤色粒などをわずかに混入する。混入物は粗く、肉眼で容易に観察できる。器面調整をみると両面ともナデ調整を行っているが雑である。また、両面にわずかに擦痕が見受けられる。焼成はきわめて良く、器色は両面とも淡橙褐色を呈している。

第Ⅳ層より得られた 1 点は第 61 図 6 に示すもので、前項の同図 5 に比べるとくびれは不顕著である。底径は推算 6.4 センチ、底部の厚さは約 9 ミリである。混入物は石英を主体とし、他に金雲母？等を含む。器面調整をみると、両面ともナデ調整がおこなわれている。焼成は良好で、器色は両面とも茶褐色を呈する。

次に、(B)に属するものは 5 点得られ、2 種に細分した。(イ)は開きが大きいもの（65 度前後）で、(ロ)は開きが小さくやや直立タイプ（80 度前後）のものである。(イ)は第Ⅳ層より 2 点（第 61 図 7・8）、第Ⅴ層 c より 1 点（同図 9）の計 3 点得られたが、いずれも小破片で底径は不明である。底部の厚さは約 8 ミリである。胎土に石英と金雲母？を含んでおり同図 7・8 の 2 点には石灰質砂粒もわずかに見受けられる。器面調整の方法を観察すると 3 点ともナデ調整を行っているが、同図 8 の内面は著しく破損しており詳細は不明である。また、同図 7 の内面には篋調整痕が明瞭に残っている。焼成は 3 点とも良好で、器色は両面とも茶褐色を呈するものが 2 点（同図 7・8）、他の 1 点（同図 9）は外面が暗褐色、内面は黄褐色を呈する。

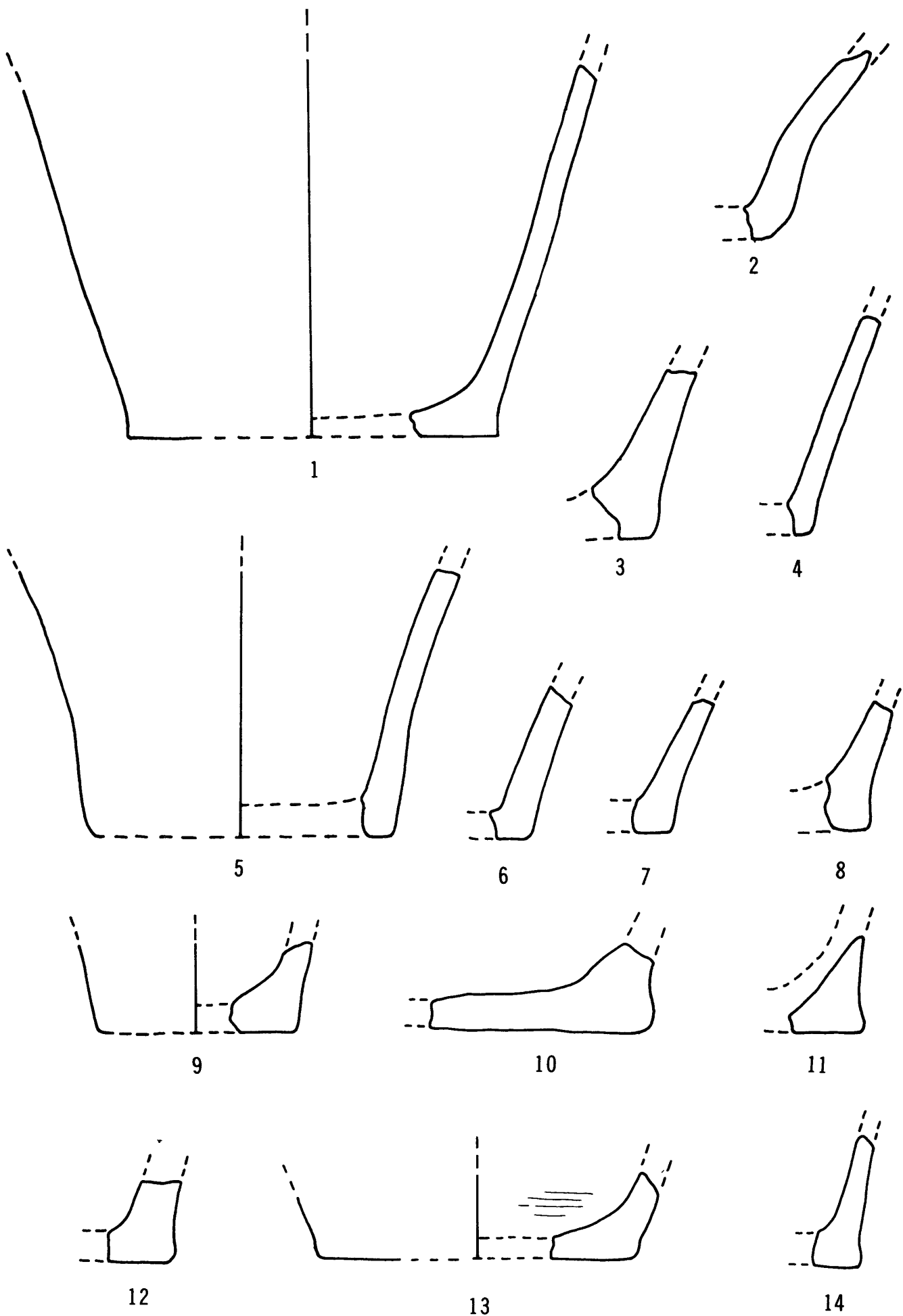
(ロ)に属するものは第Ⅳ層より 1 点（第 61 図

10）、第Ⅴ層 c より 1 点（同図 11）の計 2 点である。そのうち同図 11 は底径の推算が可能で約 6.8 センチである。底部の厚さは 2 点とも約 6 ミリである。混入物をみると同図 10 は石英を主体に金雲母？をわずかに含み、同図 11 は石英の他に石灰質砂粒を微量含む。器面調整をみると同図 10・11 とともにナデ調整を行っているが、外面には擦痕の残る箇所もある。また、同図 11 の内面には篋調整痕が明瞭に残る。焼成は 2 点とも良好で、器色は同図 10 が両面とも暗褐色、同図 11 は両面とも橙褐色を呈している。

(C)に属するものは 16 点得られ、3 種に分類される。(イ)は底面から内彎状のカーブを描きながら立ち上がるもの、(ロ)は(イ)と同形だが、下端が若干くびれるもの、(ハ)も(イ)と同形だが底面が若干上げ底をなすもの、以上の 3 種である。そのうち(イ)に属するものは 12 点と最も多く、第Ⅳ層より 1 点（第 61 図 12）、第Ⅴ層 a より 1 点（同図 13）、第Ⅴ層 c より 10 点（同図 14、第 62 図 1～9）検出された。底径の推算可能なものは 5 点で、最大は第 62 図 1 で推算 8 センチ、最小は同図 9 で推算 4.4 センチである。詳細は第 17 表の通りである。底部の厚さは 5 ミリ～8 ミリのものが一般的であるが第 61 図 14 は約 1 センチを測り、他のものに比べるとやや厚い。

第 17 表 推算底径

底 径 \ タイプ	A		B		C			計
	イ	ロ	イ	ロ	イ	ロ	ハ	
4 cm～4.9 cm					2			2
5 cm～5.9 cm								
6 cm～6.9 cm		2		1	2	1		6
7 cm～7.9 cm								
8 cm～8.9 cm					1			1
9 cm～9.9 cm							1	1
計		2		1	5	1	1	10



第62図 A-3区出土の底部

0 5cm

混入物は石英を主体とし、他に金雲母？や石灰質砂粒をわずかに含んでいる。全体的に混入量は少なく、肉眼での観察は困難なものが多い。器面調整の方法について観察してみると両面ともナデ調整によるものが一般的である。第61図12、第62図8の2点はナデが不十分のため、外面に擦痕がかるく残っている。また、竅調整痕が残っているものも3点（第61図12、第62図2・5）あり、第61図12は内面に幅広の竅調整痕が明瞭に残っている。第62図2・5の2点は内面に縦位のかい竅調整痕が見受けられる。

焼成は一般的に良く、器色は両面とも茶褐色のものが最も多く、その他外面が茶褐色、内面が暗褐色を呈するもの、あるいは逆に両面とも橙褐色、黄褐色のものも見受けられる

(ロ)に属するものは第Ⅳ層より3点（第62図10～12）、第Ⅴ層cより2点（同図13・14）の計5点得られた。そのうち、底径の推算可能なものは同図13の1点で、底径は推算 6.6センチである。底部の厚さは5～7ミリのものが一般的である。混入物は石英を主体としており、その他わずかに金雲母？を含む。器面調整をみると一般にナデ調整を行っており、ナデが不十分のため擦痕が消えきらずに残っているものは同図13・14の2点である。同図13は内面にかすかに残っており、14は外面に横位の擦痕がかすかに残っている。

焼成はすべて良好で、脆いものは見受けられない。器色は両面とも茶褐色を呈するものは3点（同図11・13・14）、同図10は両面とも黄褐色を呈し、同図12は外面が暗褐色、内面は茶褐色を呈する。

(ハ)に属するものは第Ⅶ層より1点出土した（第45図10）。

本標品は上げ底気味で、その点、他のものと特徴が異っている。底径は推算 9.4センチ

で、底部の厚さは約7ミリである。胎土に1ミリ前後の石英を多量混入する。器面調整をみると両面に斜位の条痕様の粗い調整痕が見受けられるが、いずれもナデられ不明瞭である。また、外面は若干手ざわりがザラザラしている。焼成は良く、器色は両面とも茶褐色を呈する。

本資料の検出された第Ⅶ層は神野A式土器、九州系縄文土器および同層下部では室川下層式土器を伴出し、縄文前期に比定される層である。室川下層式土器、神野A式土器の底部は尖底あるいは尖底的丸底が想定され、また前記九州系土器とも器質、器面調整、その他の特徴を異にしている。以上のことからこの平底がどの型式と関係するのか、今のところ明らかでない。

#### n) 春日式類似土器

口縁部がキャリパー状に内彎する特異な器形の土器が第Ⅶ層で1点（第45図12）検出された。

本標品は口縁部だけの資料であり、したがって全形は窺えないが、前述のように口縁上端が内彎してキャリパー状を呈する。以下の器形は不明であるが、口径は推算21センチで南島の土器の中では大型に近い。口唇の断面形態は舌状を呈し、器厚は厚いところで約8ミリ、大部分は約7ミリである。胎土の混入物は石英を主体に長石を含み、後者もかなり目立つ。一般に粒子は細かいが、石英には稀に3～4ミリの粗いのも見受けられる。焼成は良い。器色は両面とも暗褐色を呈し、表面上部にはわずかに煤も付着している。

器面は条痕とナデの技法によって調整され表面には縄文様の列点も見られるが、著しく摩耗していて判然としない。裏面は大部分ナデられるが、横位の条痕も部分的に残ってい

る。裏面は調整が雑でデコボコしており、平滑さはみられない。

文様は口縁部に施され、口唇部と裏面は施文されない。胴部以下は欠損のため不明である。

口縁部には幅のある竅を用いて波状の凹線文を描く。凹線文は上下2条を基本とするように、空間部を別の沈線で埋める場合もある。凹線文は左から右の方向で描かれ、凹線が方向を変える箇所では施文順序をおさえることができる。竅幅は約4ミリで、凹線は深く、力強く描かれている。また、本標品の下端にそって凹線を横走させているが、同部で破損しているために詳細は不明。表面の地文は先述のように縄文様の文様であり、その点、本標品は重要な資料と言える。

以上、本標品の特徴について略述したが、本資料の器形上の大きな特徴はキャリパー状に内彎する口縁形態であり、また、文様上の特徴としては地文に縄文様の文様を施文していることを上げることができる。本資料を河口貞徳氏にみて頂いたところ、口縁器形は南九州の春日式に類似するが、春日式には縄文施文は見られず、その点で春日式と異なるようである。本資料は第Ⅶ層の出土、室川下層式や神野A式などと共伴関係にあり、したがって、時期は縄文前期末に比定してよいと思う。以上の状況から春日式の影響を受けた可

能性は十分考えられ、器形上の特徴から一応春日式類似土器と仮称した。

### ○) 疑縄文土器

第Ⅶ層において疑縄文に類する土器が1点検出された。第45図13に示す胴部の小破片で器種・器形については不明である。

器厚は約6ミリと薄手に属し、胎土は石英粒を少量含む。焼成はやや脆く、器色は両面とも暗褐色を呈する。

文様は縄文を模したと思われるもので、斜め方向に列点文を密に施文する。列点文の大きさは一様ではなく、大小認められる。施文は浅く不明瞭。

裏面はナデ調整を行っている。

疑縄文に類するものはB-3区とB-5区でも胴部片がそれぞれ1点出土しているが、本区のものとはそれらと胎土、焼成など器質においても多少異っている。また文様においても本区のものはやや丸形の列点文が浅く施文されるのに対し、B-3区やB-5区のものとは5～7ミリ程のやや長い列点文をジグザグ状に深く施文している。

前述したように本資料は第Ⅶ層で出土しており、室川下層式や神野A式などと共伴関係にあることから縄文前期に比定できると考えられる。

## Ⅵ お わ り に

序章にも記したように、本貝塚については調査を行ったA、B両トレンチを一括報告する予定で準備を進め、原稿・図版・実測図等

すべて完了したが、資料が膨大となったため大幅に予算を超過してしまい、一冊にまとめることは困難となった。そこで今回はAトレ

ンチについてのみ報告し、Bトレンチについては次回の第8号にゆずらざるを得なくなった。終章の本項も当初、A・B両トレンチを総括する形でまとめたため、それをそのまま本号に掲載するわけにはいかなかった。そこで当初の原稿は次号にゆずり、今回はとりあえずAトレンチにつき概括することにする。

本トレンチは2m×6mの小規模のもので、これを2m四方ごとの3区に区分し、各区を南よりA—1、A—2、A—3と呼ぶことにした。今回報告するのは、この3区のうちA—1、A—3の両区である。

本トレンチは前にも記したように、砂丘遺跡の特徴の一つである側壁の崩壊がはなはだしく、調査中、幾度も身の危険を感じたので地山までの試掘を断念し、途中で切り上げた。したがって、本トレンチにおける最古の文化層を確認するには至らなかったが、下層文化の一面を実見することはできたし、大局的には隣接のBトレンチに準ずるものと推察される。つまり、本トレンチも室川下層式を最古とし、以後、順次変化していくものと解されるのである。

本トレンチはBトレンチと違い、面縄前庭様式の単純層が欠如し、縄文前期層から直ちに同後期層へと移行する。つまり、中期層を欠くのである。したがって面縄前庭様式の詳細を明かにすることはできなかった。しかしながら、縄文前期末については新型式の神野A・B両式を得るなど大きな成果があった。

神野B式の出土は本トレンチに限られ、しかも出土量も少く正体は未だ十分つかめていないが、器形からすると面縄前庭様式に通ずるところもあり、今後、両者の関係を検討してみる必要があるように思う。なお今回、面縄前庭様式を具志川式、神野C式、面縄前庭

式の3型式に細分したが、おのおのの特徴については次号で概括したい。

本トレンチの第V層はA—1区と同3区とでは若干層相を異にする。つまり、A—1区では暗褐色の単純層であるが、A—3区では同層が白砂層の介在によって上下に2分されるのである。そのため同層をa・b・cの3層に細分したが、同層のお蔭で若干の土器について型式上の前後関係を垣間見ることができた。これについては今後なお、資料の補強が必要であるが、同層の状況から神野D式およびE式が伊波式の祖型と推察され、貴重な示唆を得た。

沖縄諸島の先史土器は当初の汎九州的なものから次第に南島化・沖縄化の進められるプロセスとして把握することが可能である。この過程をどのように概念化すべきか、数年前より模索しているが（註1）、地域性を反映させて、南島式土器（広く南島に分布する土器＝室川下層式など）、中琉式土器（中部琉球に分布する土器＝面縄前庭様式、面縄東洞式、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式など）、沖縄式土器（沖縄諸島に特徴的な土器＝伊波式系統など）の概念で捉えた方が、土器文化の性格もより明瞭になるのではなかろうか（第63図）。

石器は少なく、種類も石斧、磨石、石皿の3種に限られた。ほとんどが破損品で全形の把握できるのは磨石の1点だけであった。A—3区出土の有孔石製品はサンゴ石を素材とする点で類例の少ない資料といえる。

骨製品も少なかった。10数点得られ、実用と装飾用の2種に大別されるが、前者は僅少で、後者が多かった。実用具とみられるものには弓筈状の鹿角製品が1点あり、南島における初の例として注目される。また、装身具とみられるものには鯨骨や鹿角、鳥骨などを利用したものがあり、この方も素材の点で注

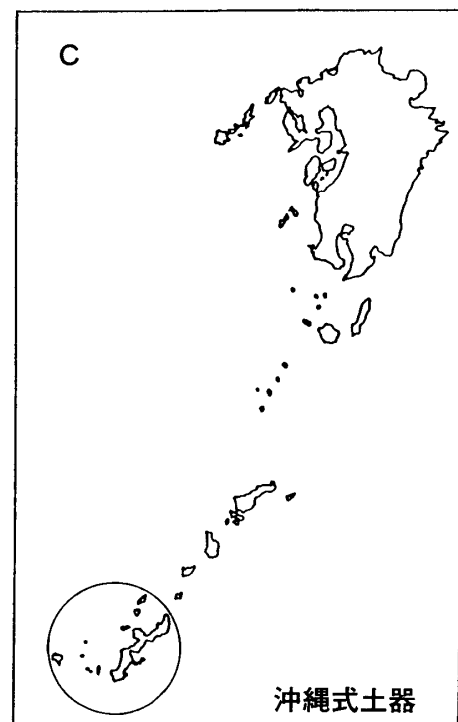
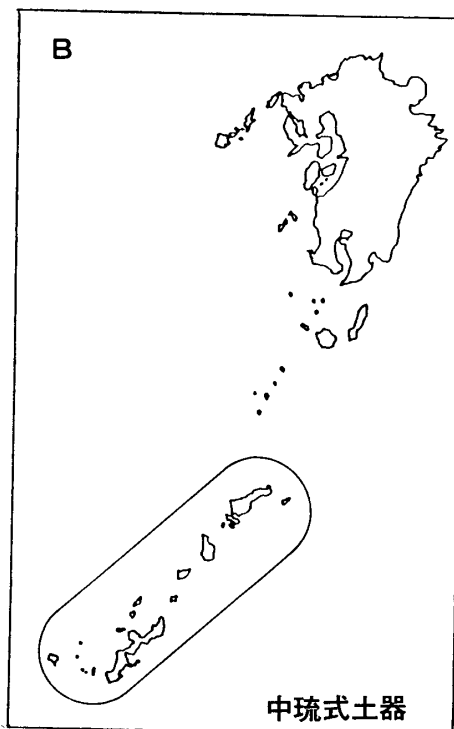
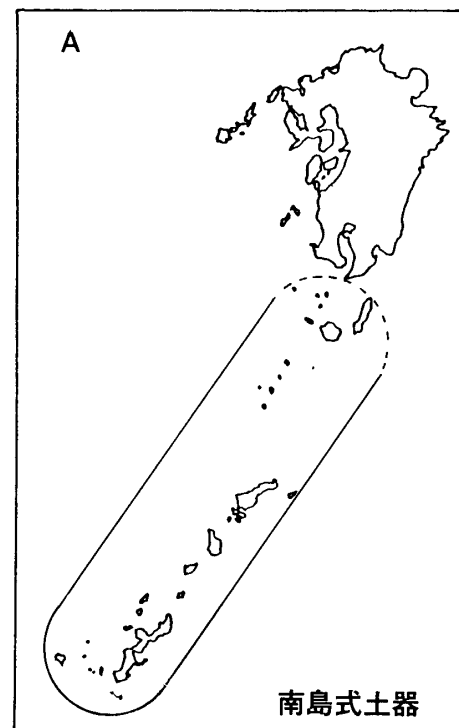


目に価する。

貝製品は比較的豊富であった。これも実用具と装身具類に分類されるが、後者が卓越しており、その中ではイモガイ等の螺塔部に1孔を有するビード状の遺物が圧倒的に多かった。他は南島の縄文時代に一般的にみられるもので、新種と目されるような製品は見受けられなかった。

### 註

1. 高宮廣衛「沖縄研究の現状〈考古学〉」  
『沖縄文化の源流を考える』沖縄県  
1983。発表は前年（1982）の10月16日。  
そのほか数篇において類似の見解を表明



第 図 土器分布圏の推移

# 沖縄・奄美諸島の考古編年表

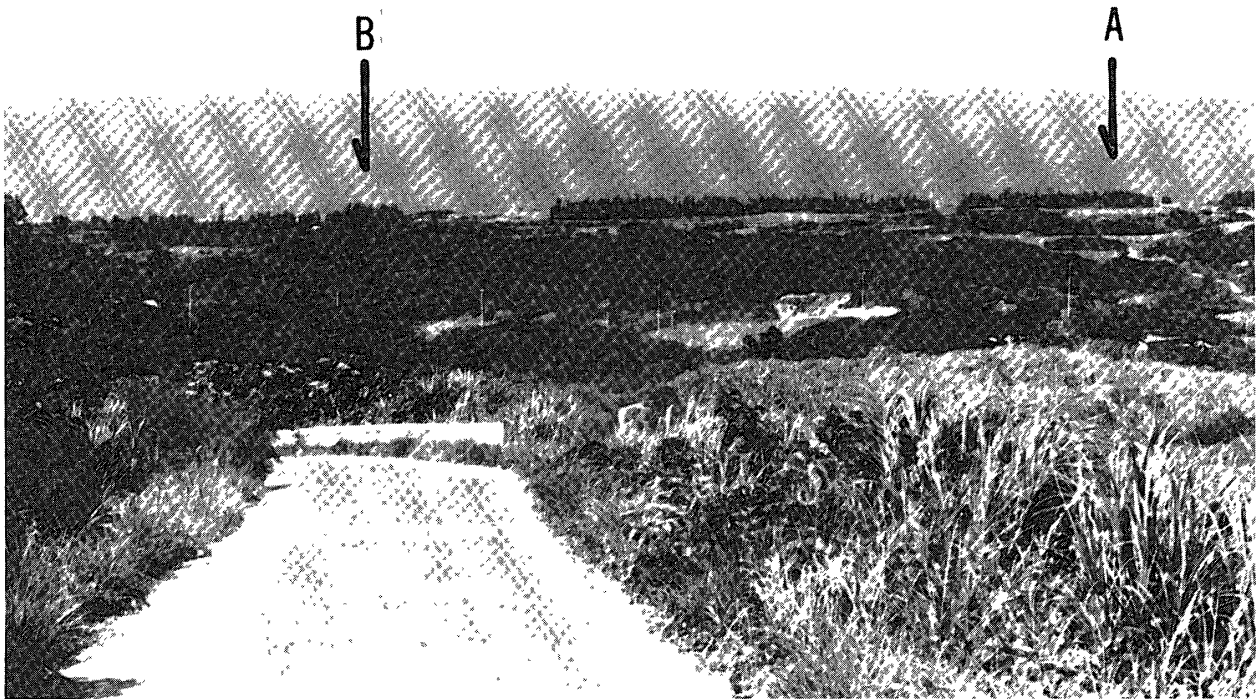
年代	時代	南九州の土器型式	奄美諸島の土器型式	沖縄諸島の土器型式
10,000	縄	瀬戸内系、南九州系、北九州	南九州系、南島系、薩南系	
		・隆帯文 爪形文	爪形文	爪形文 { ヤフチ式 東原式
		・連点鋸歯文 ・石坂式 ・吉田式 ・前平式 押型文	・換系文 ・凸帯換系文	
8,000	縄	・手向山式 ・平椀式 ・塞ノ神Aa式 ・塞ノ神Ab式 ・塞ノ神Bc式 ・塞ノ神Bd式 ・蟲式 ・曾畑式 ・阿多V類 ・深浦式 ・春日式	・網目文	
		・並木式 ・阿高式 ・○ ・岩崎下層式	・(羽状連点文) ・(連点、波状文) ・(横位沈線文) ・(櫛描連点文) ・蟲式 ・曾畑式 ・阿多V式	室川下層式 神野A式(仮称) 曾畑式 神野B式(仮称)
		・○ ・南福寺式・協和式	赤連系	面縄前庭様式 1 具志川式(仮称) 2 神野C式(仮称) 3 面縄前庭式
4,000	縄	岩崎磨消縄文 神田KⅡ式 ・出水式 ・松山式 ・市来Ⅰ式 ・市来Ⅱ式 ・市来Ⅲ式 ・草野式 ・○ ・岩崎上層式 ・指宿式	凸帯爪形文	神野D式(仮称) 神野E式(仮称) 伊波式 荻堂式 大山式 室川式
		・○ ・岩崎上層式 ・指宿式	松山式 市来Ⅰ式 市来Ⅱ式 一湊式 草野式 ・(嘉徳Ⅰ式A) ・(嘉徳Ⅰ式B) ・(嘉徳Ⅱ式) ・(面縄西洞式)	
		・○ ・岩崎上層式 ・指宿式		
3,000	縄	上加世田式 人佐式 黒川式 井手下式 夜白式	※大洞系	室川上層式 宇佐浜式
		高橋Ⅰ式 高橋Ⅱ式	高橋Ⅰ式 高橋Ⅱ式	真栄甲式
		・入来式 ・入来Ⅱ式 ・山ノ口式	入来式 入来Ⅱ式 山ノ口式	具志原式
2,300	弥	・松木Ⅰ式 ・松木Ⅱ式 ・中津野式	・(宇宿上層式b)	
		免田式	中津野式 ・(宇宿上層式a)・(兼久式)	アカシヤンカー式
1,700	弥			
1,700	古墳			
1,700	平安初			

縦列は系統、印は地域固有の型式、( )は南島式、※大洞式は東北系統、○印は未だ型式名のついていないもの

◎本表は第5回南島文化市民講座(1984年1月28日、於沖縄タイムス)に使用するため、河口貞徳氏作成の南九州及び奄美諸島の編年に沖縄諸島(高宮試案)を加えたもので、弥生時代以降については地域の事情に鑑み、最下段に「古墳～平安期」を新設した。

図

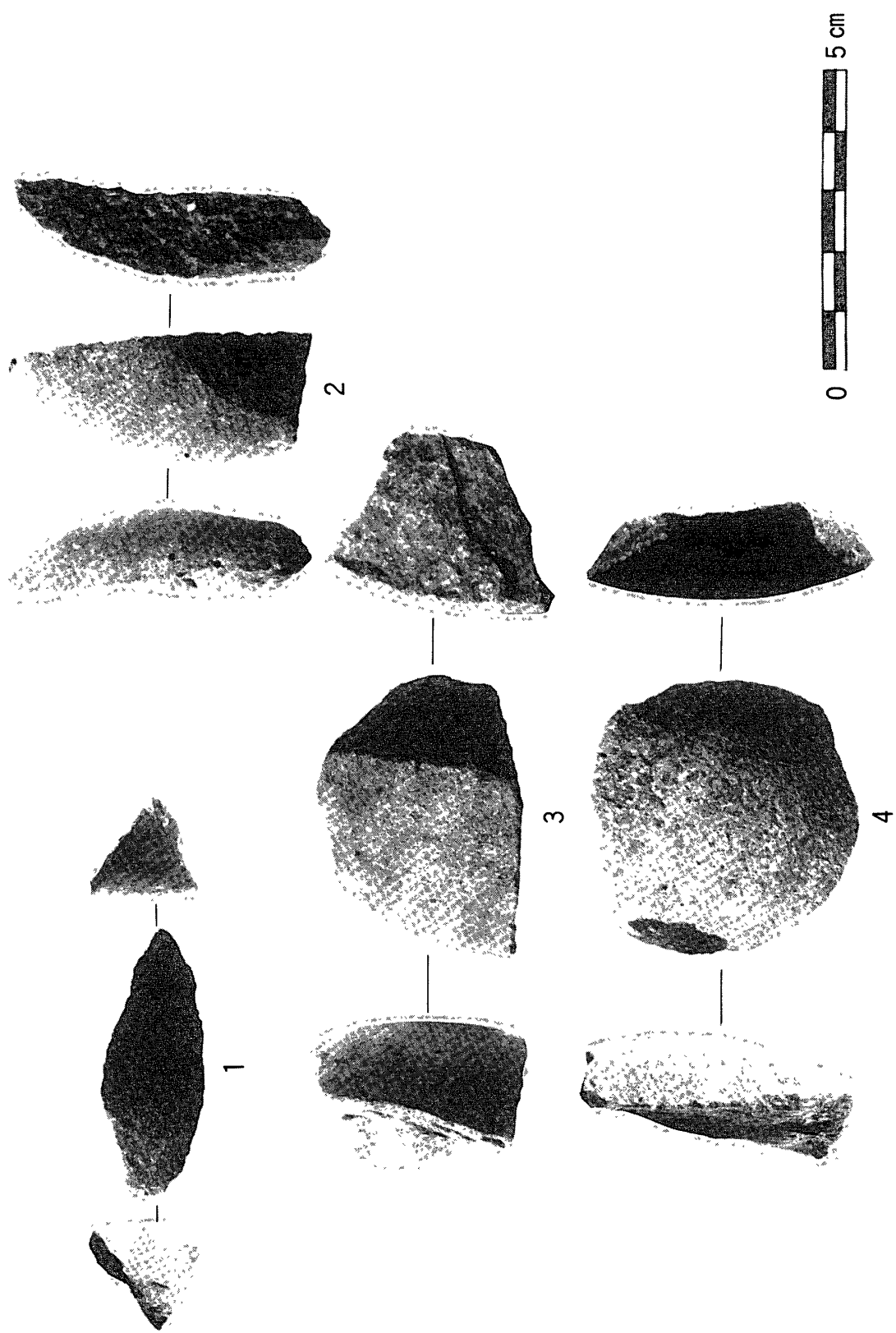
版



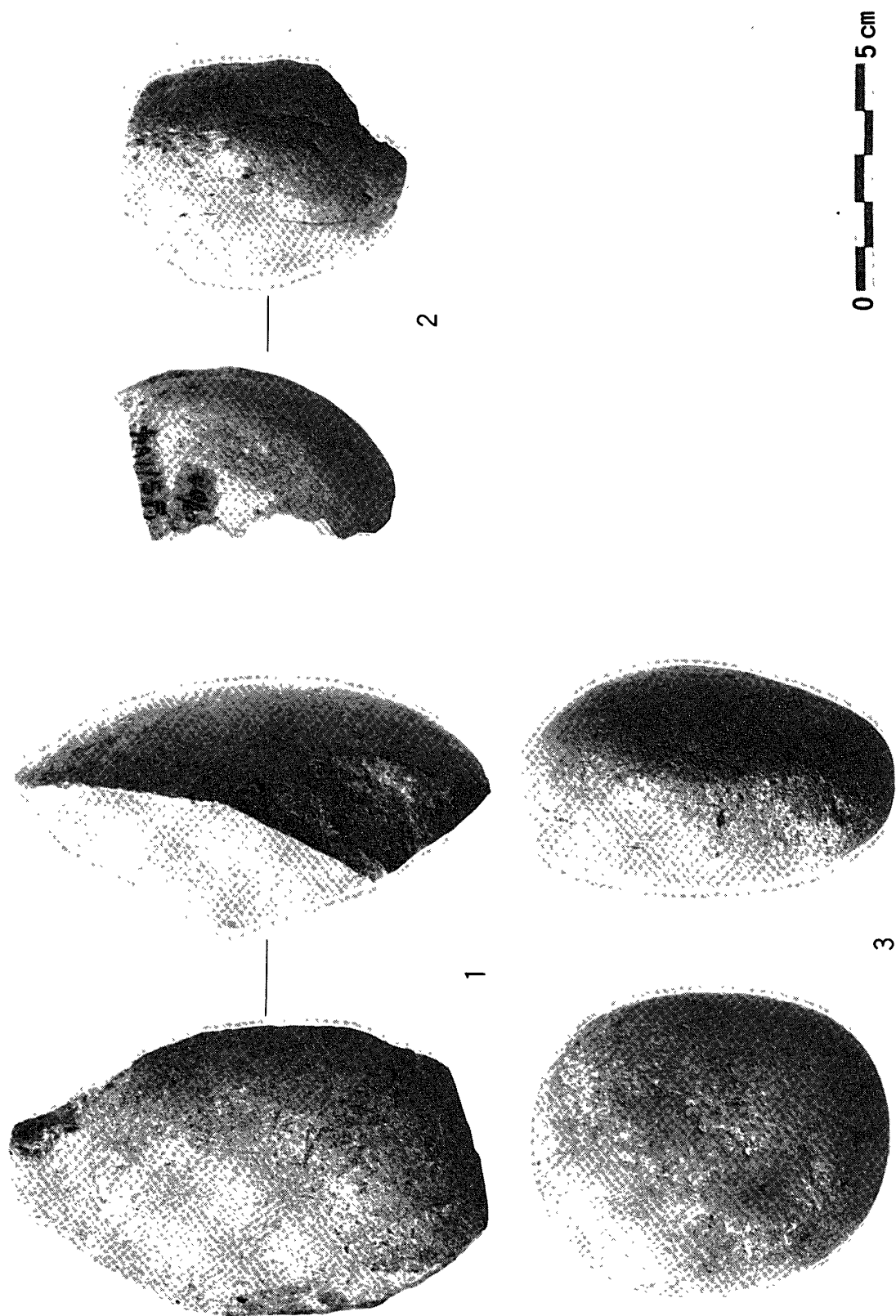
上：内陸より望む（A・神野貝塚、B・スセン當貝塚）。下：海側より。



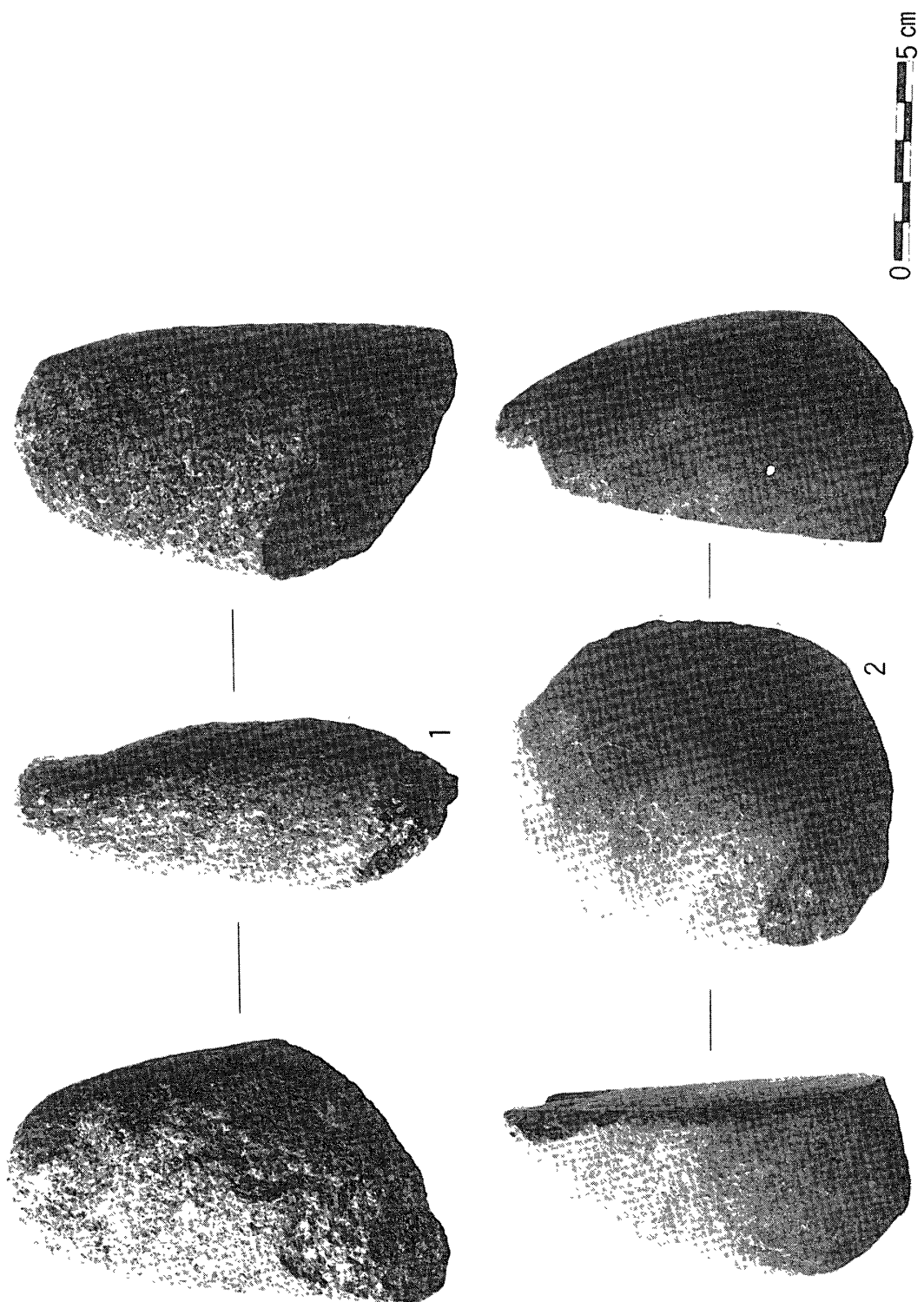
図版1 神 野 貝 塚



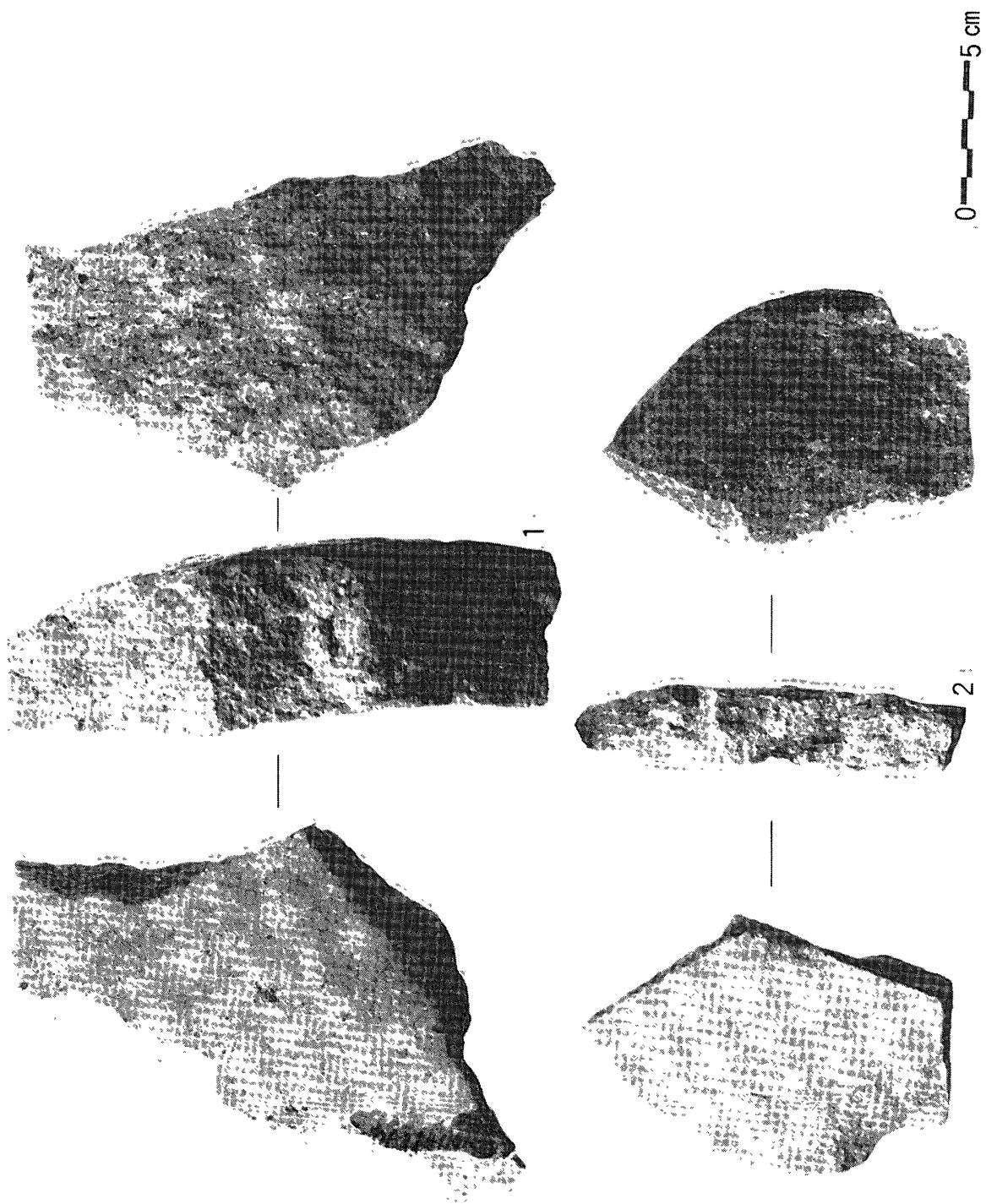
図版2 A - 1 区出土の石器



図版3 A - 1 区出土の石器



図版4 A - 1 区出土の石器

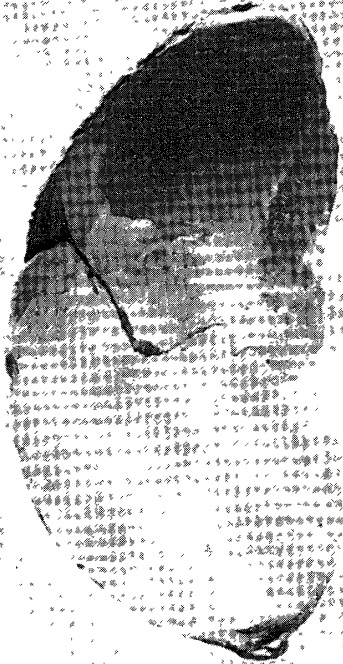


図版5 A - 1 区出土の石器

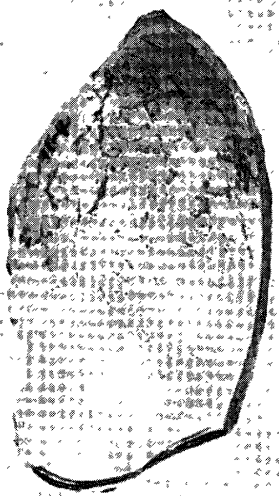




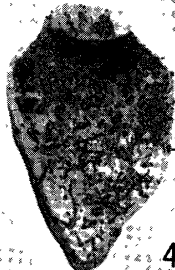
図版6 A-1区出土の骨・角・牙製品



1



2

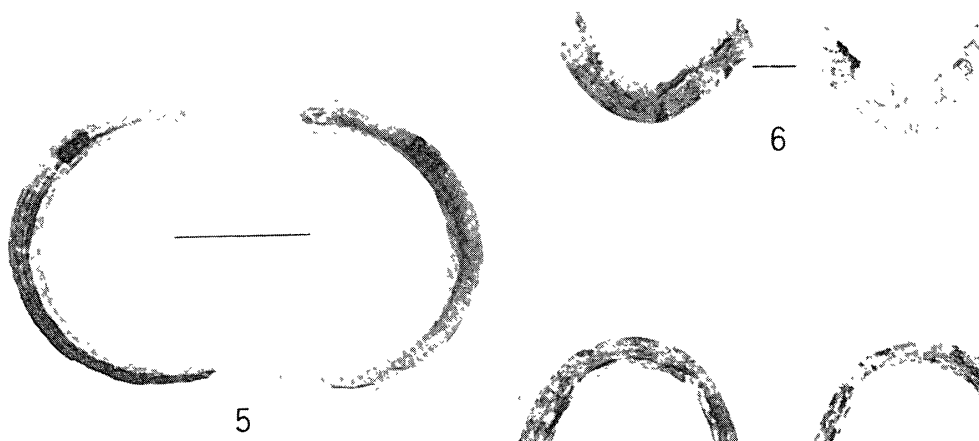
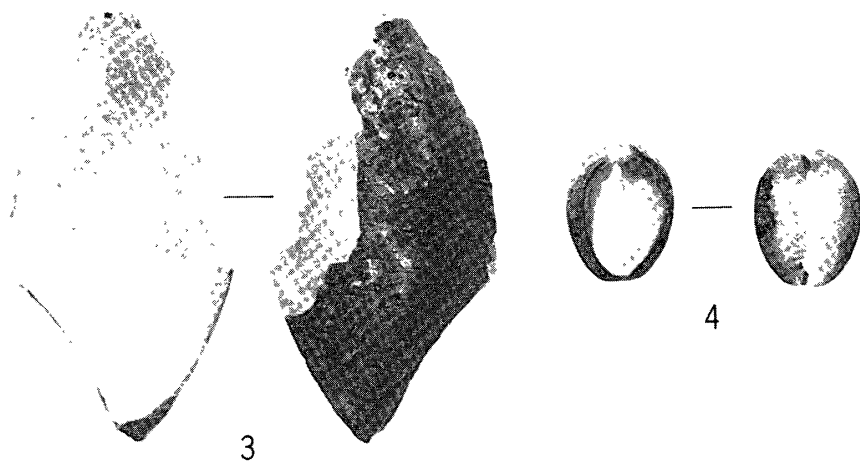
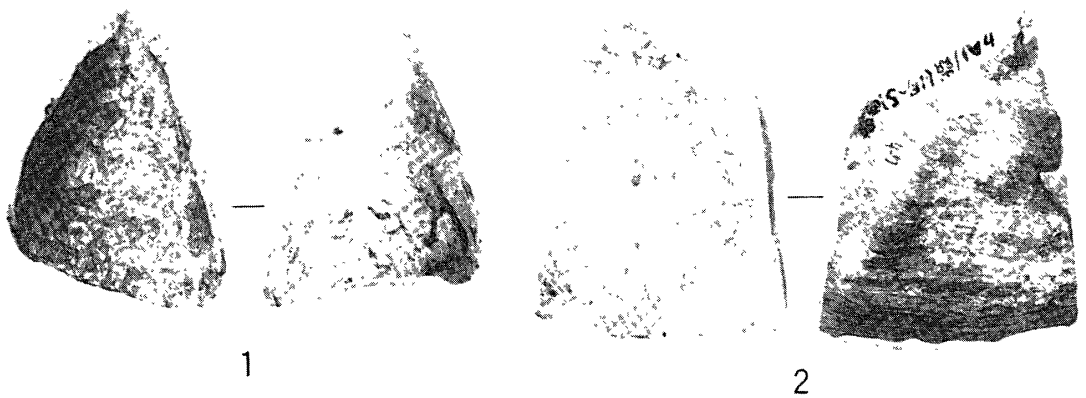


4

3

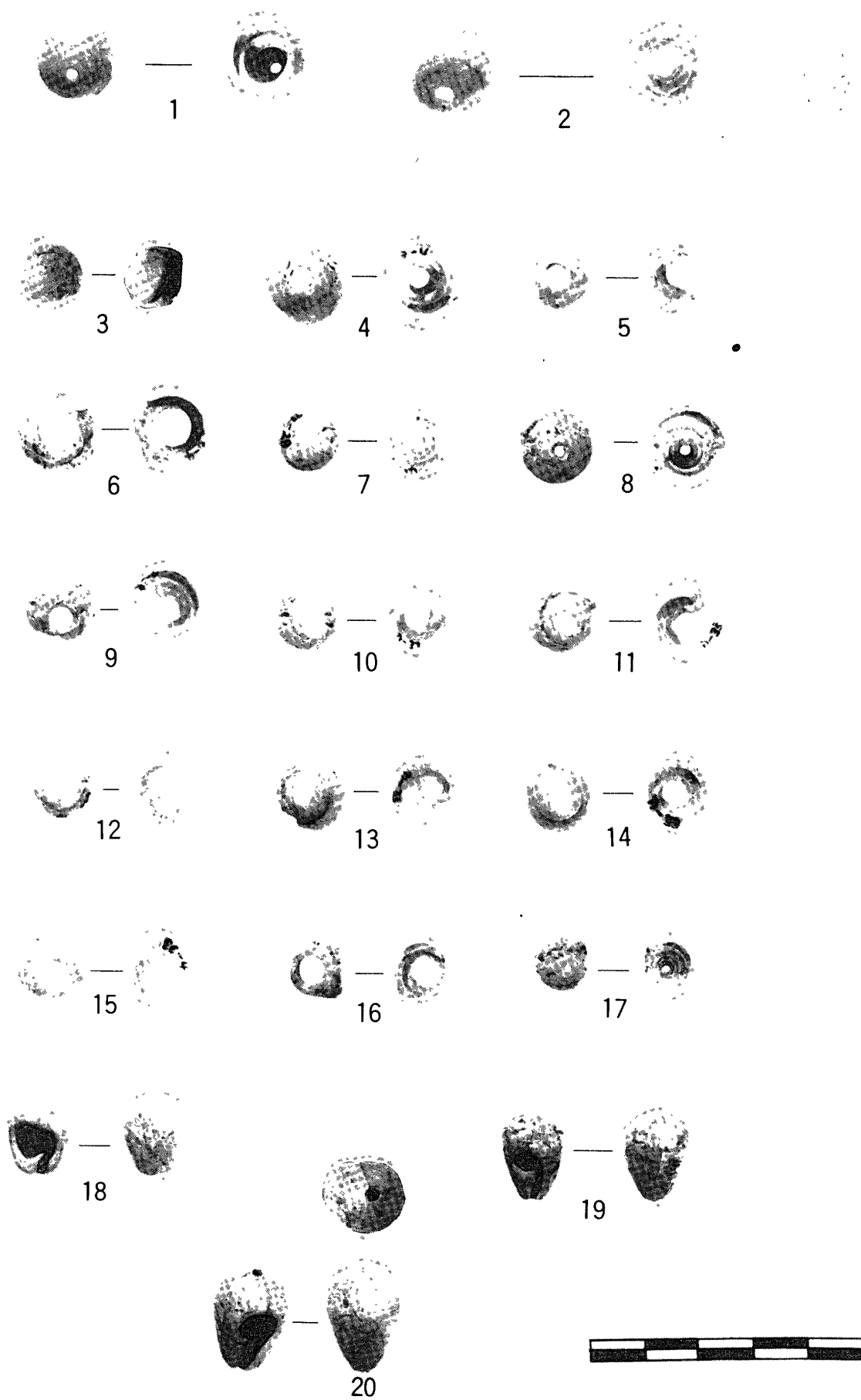
0 5 cm

図版7 A - 1 区出土の貝製品

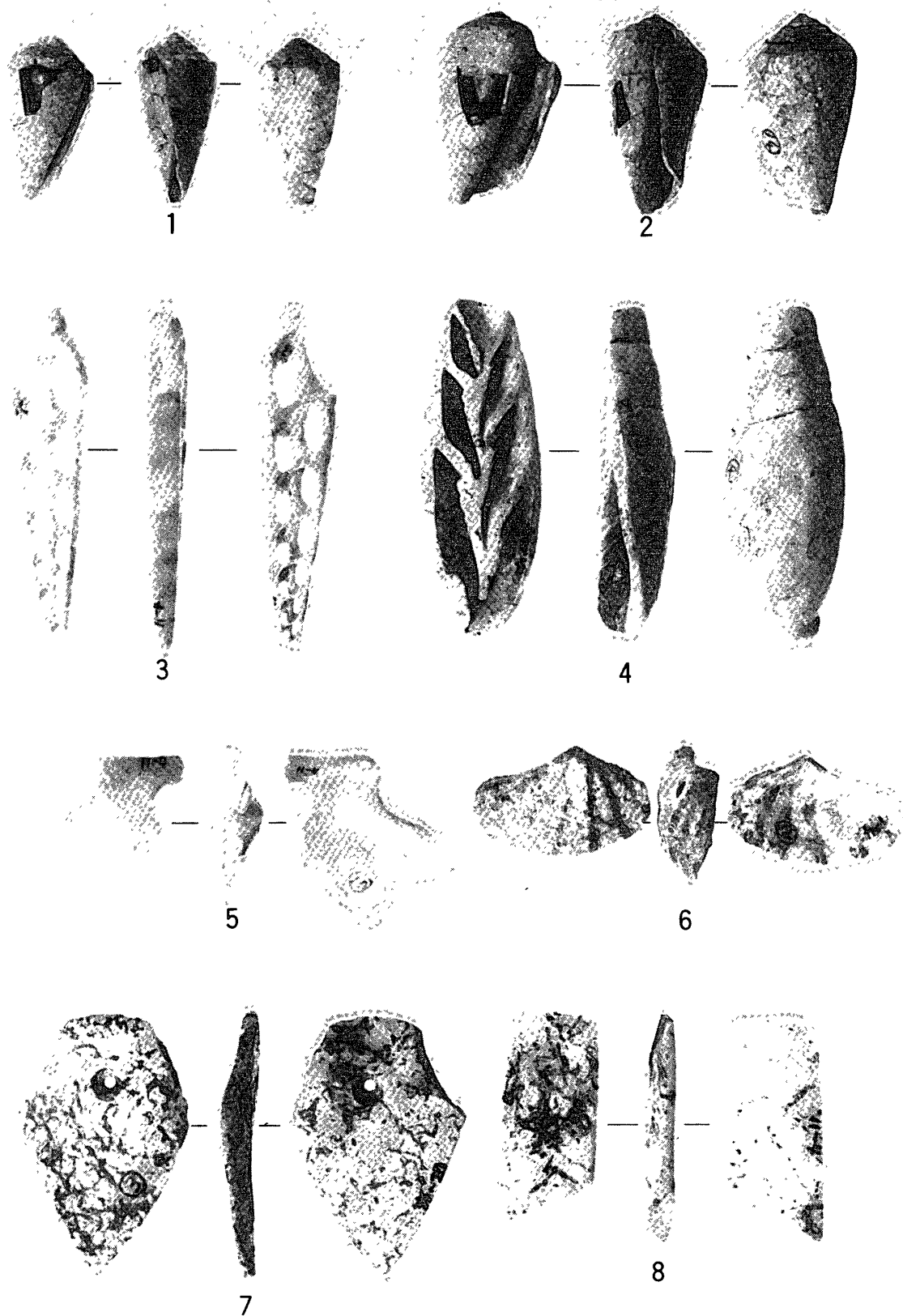


0 5 cm

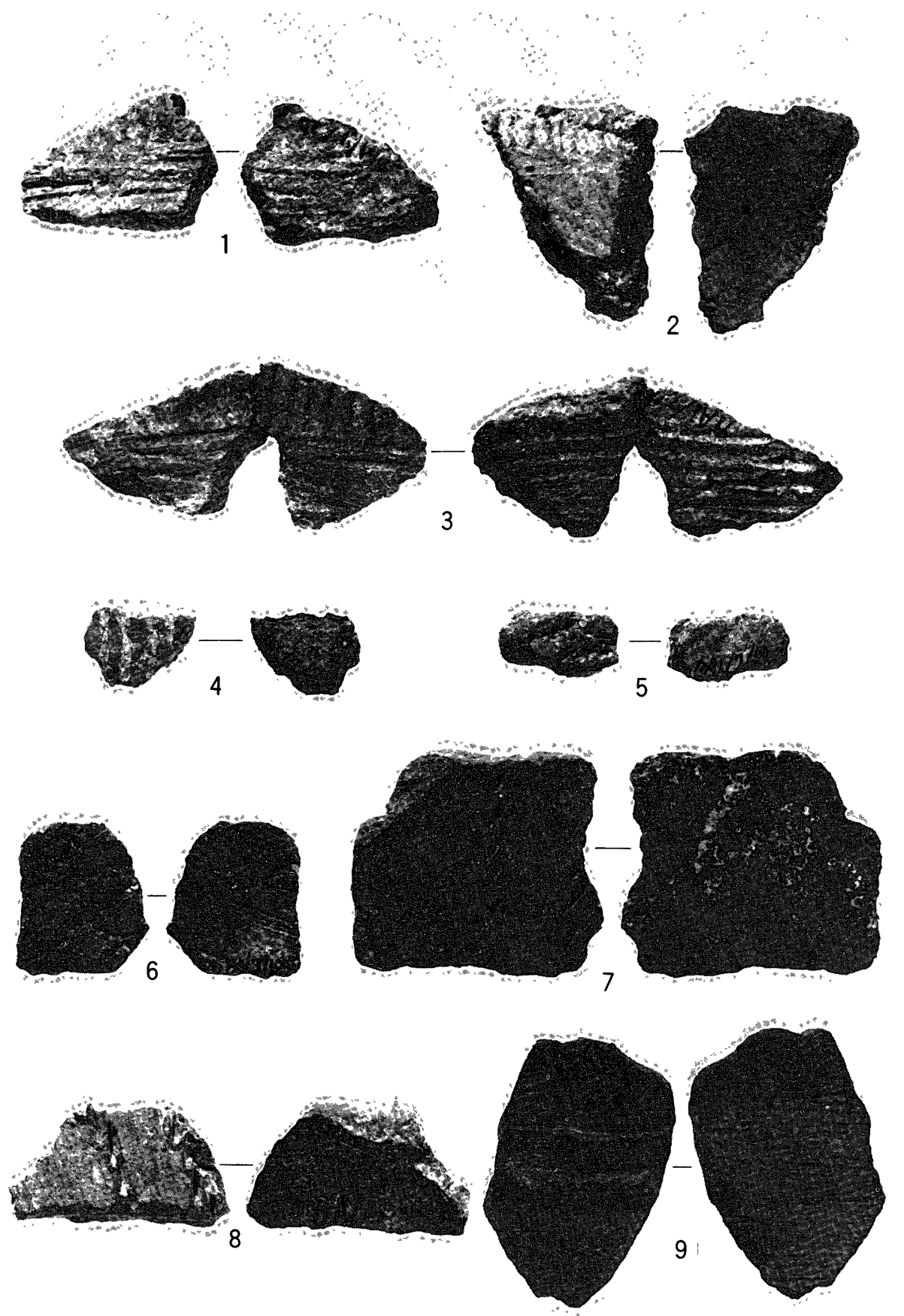
図版8 A-1区出土の貝製品



図版9 A - 1 区出土の貝製品

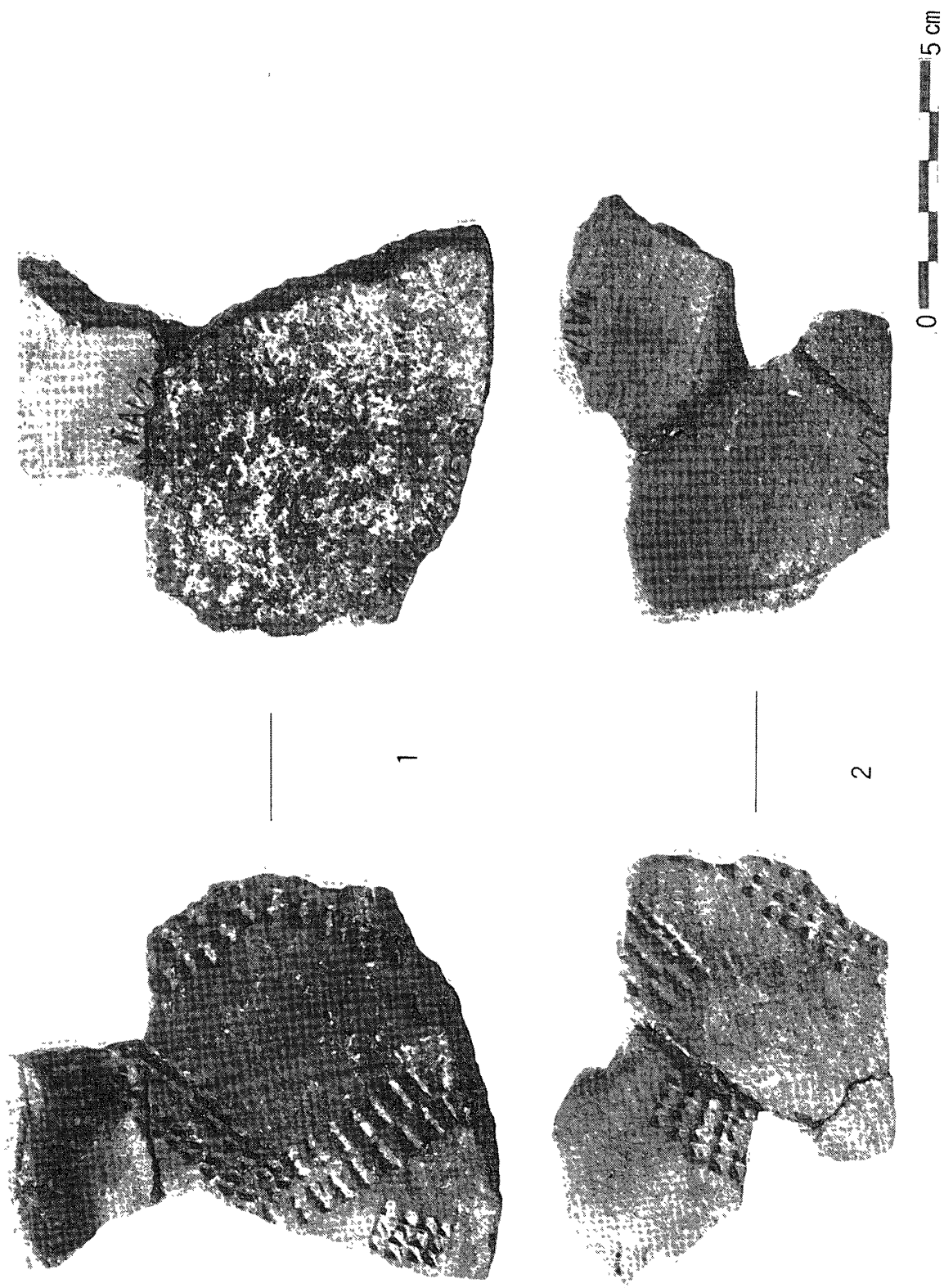


図版10 A - 1 区出土の貝製品



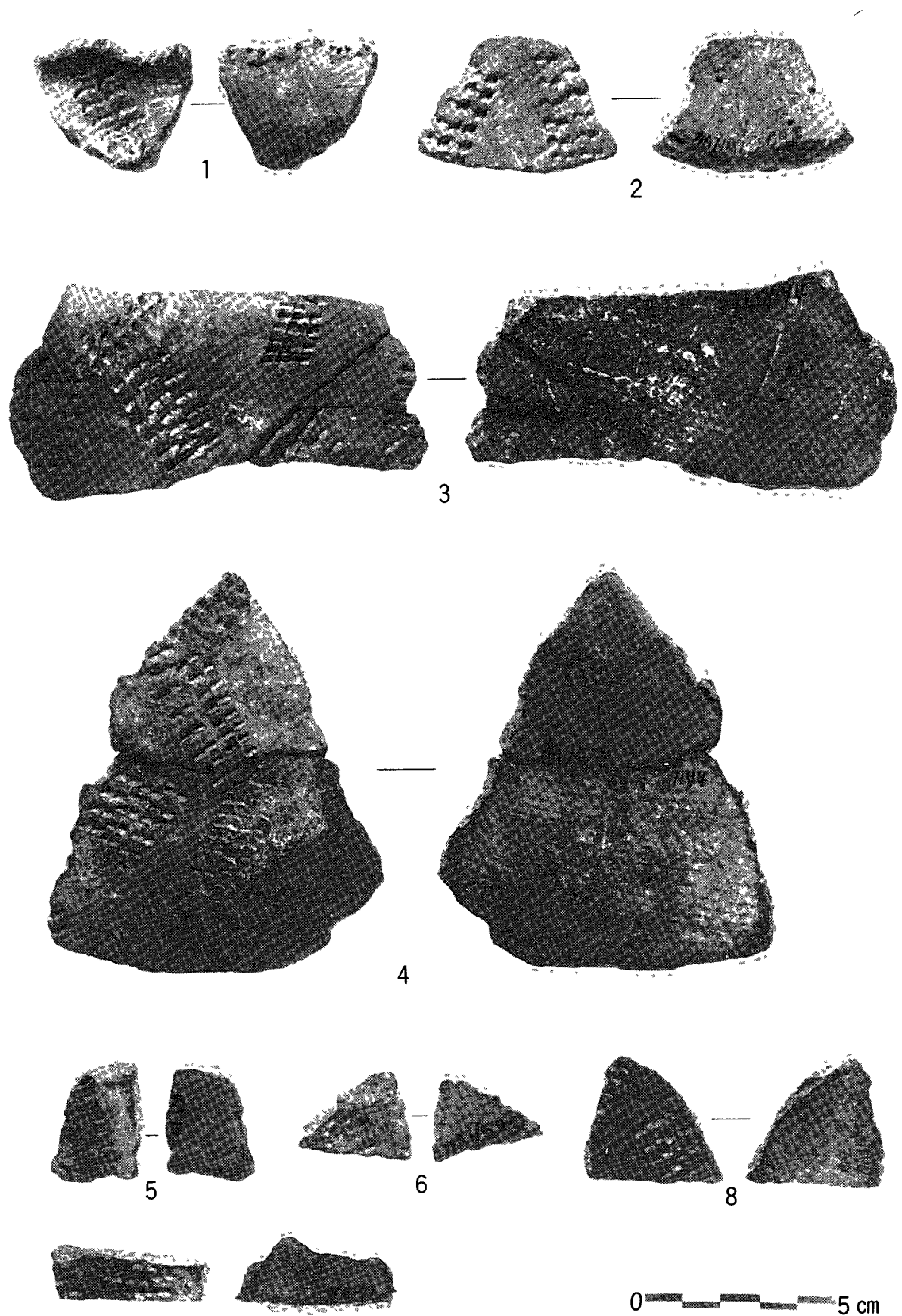
0 5 cm

図版11 A-1区出土の神野A式、室川下層式、轟式土器



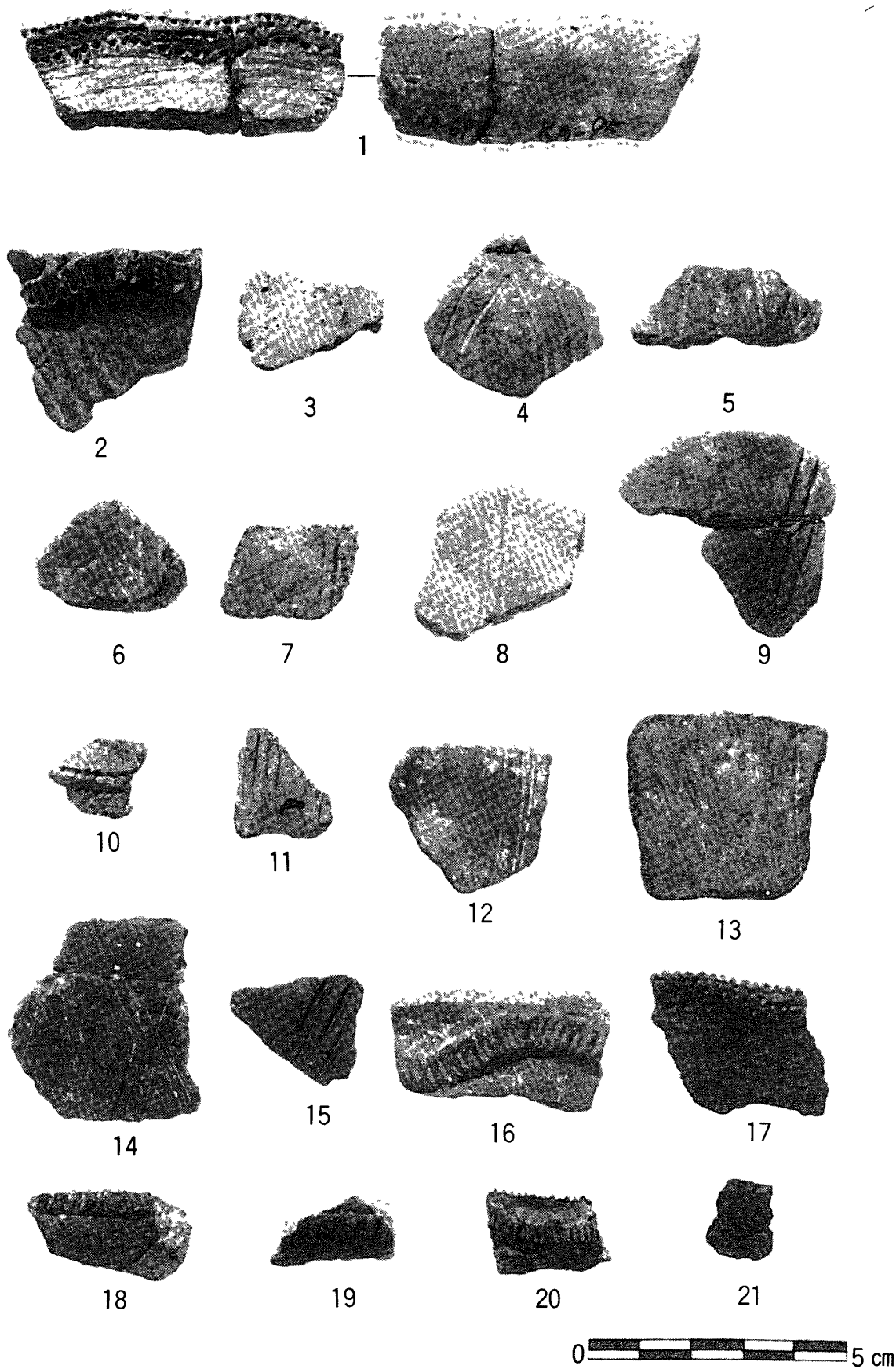
図版12 A - 1 区出土の神野 B 式土器



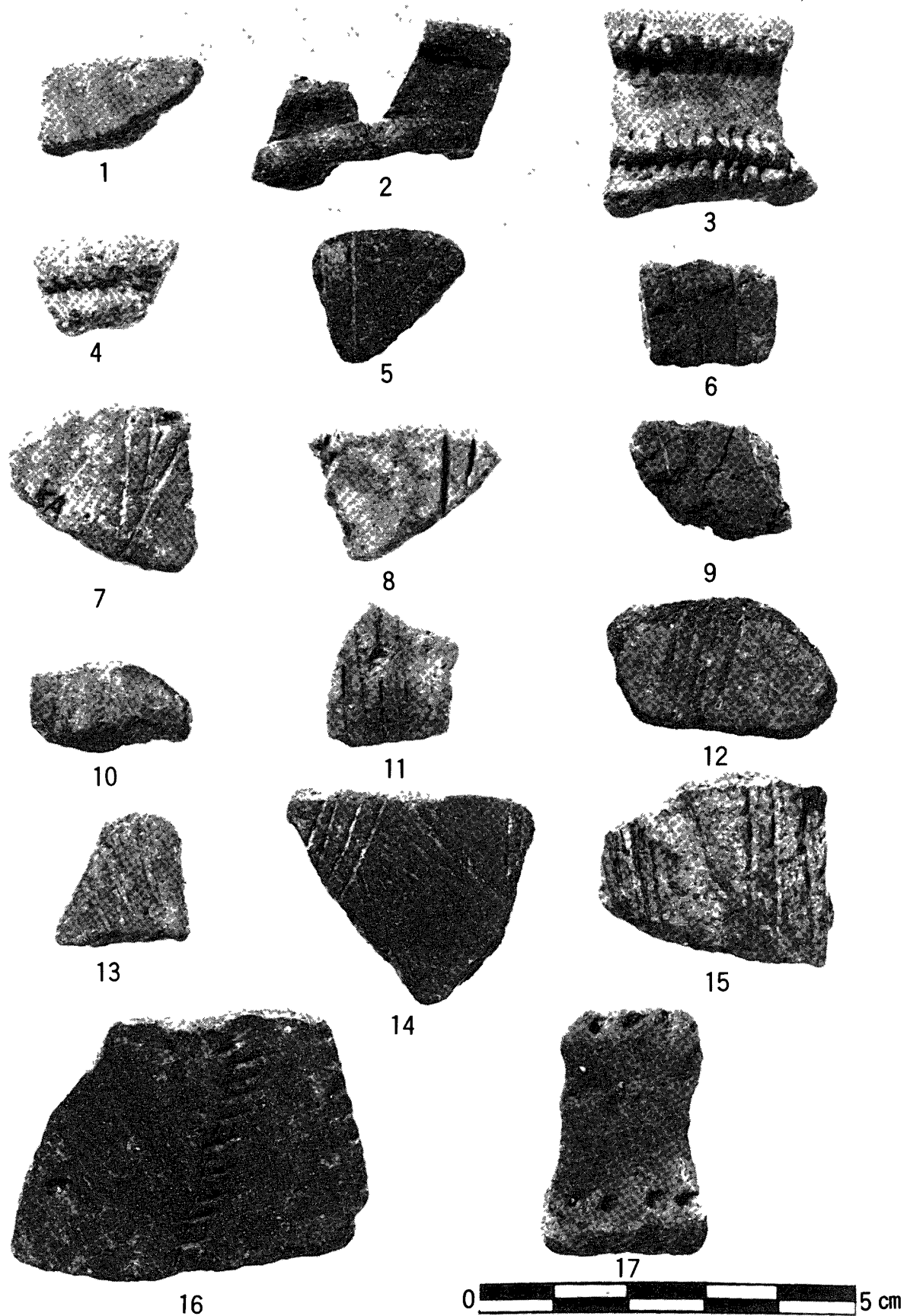


図版13 A - 1 区出土の神野 B 式土器

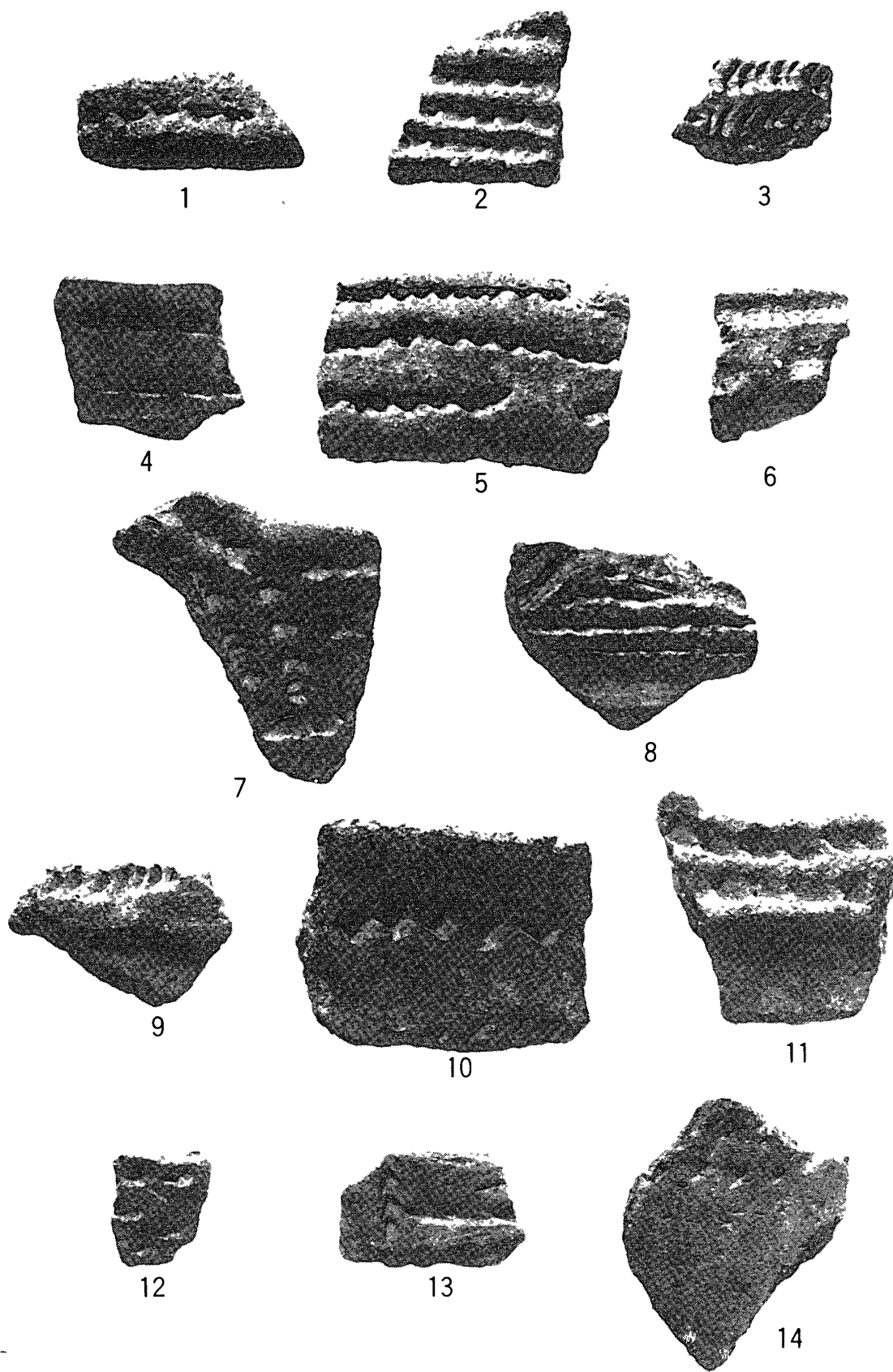




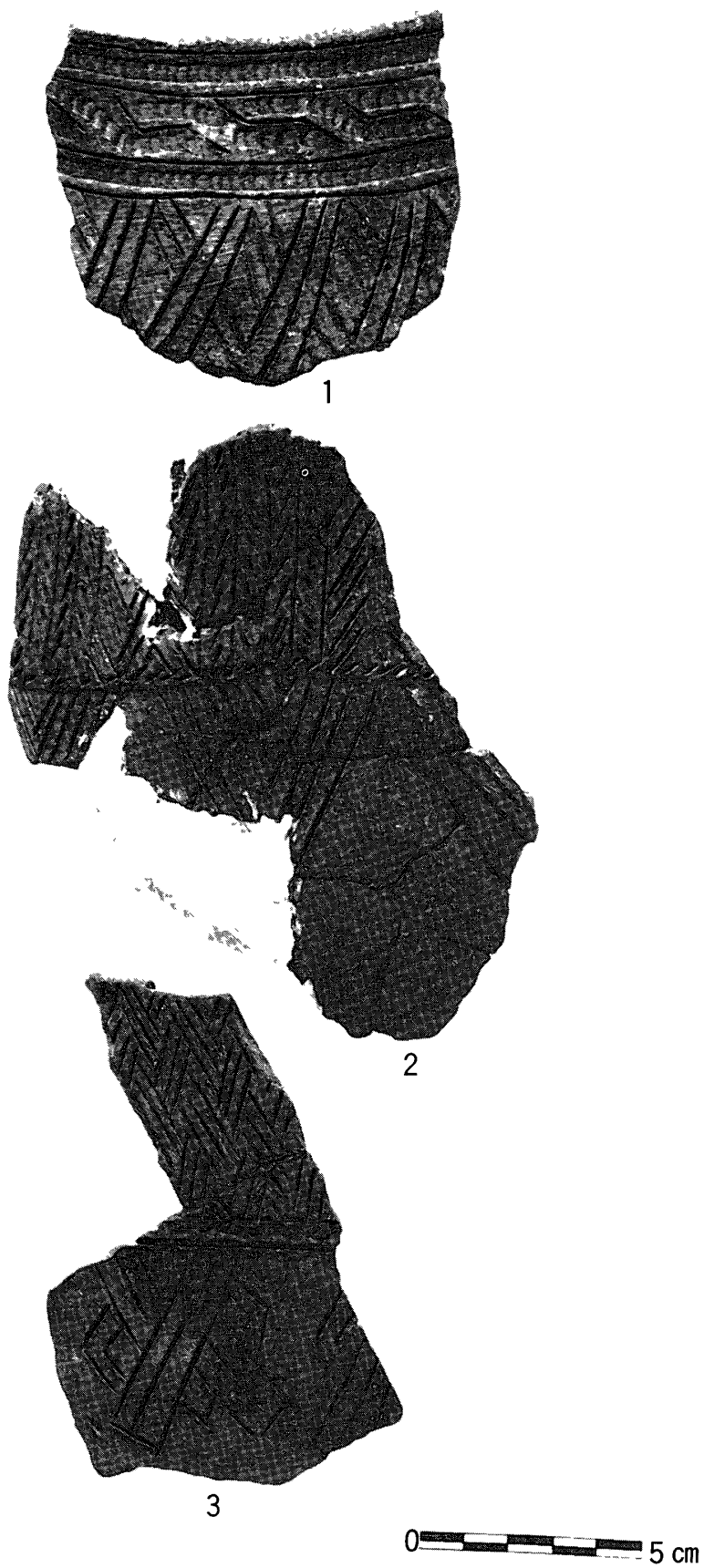
図版14 A-1区出土の面縄前庭様式土器



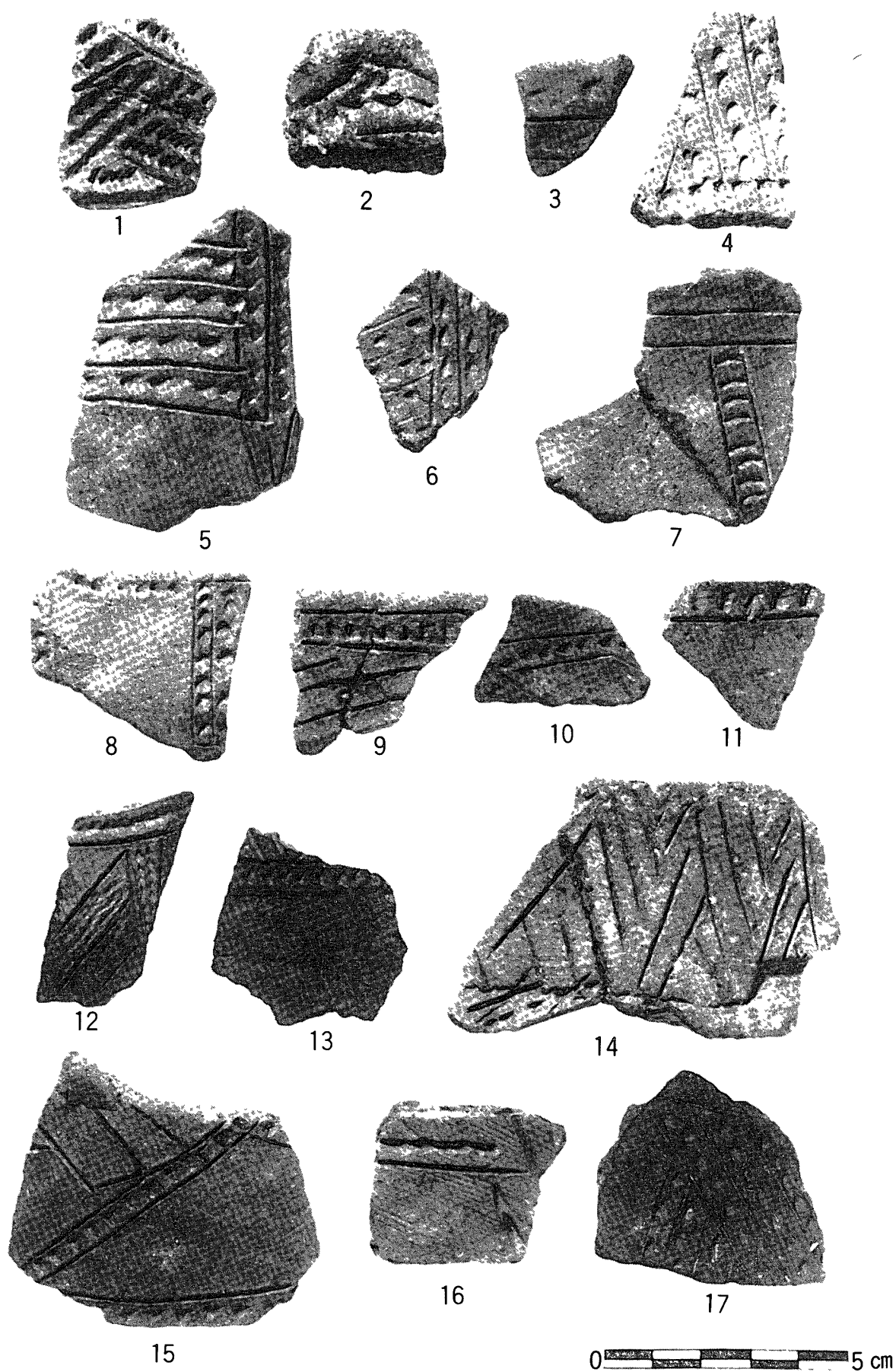
図版15 A - I 区出土の面縄前庭様式土器



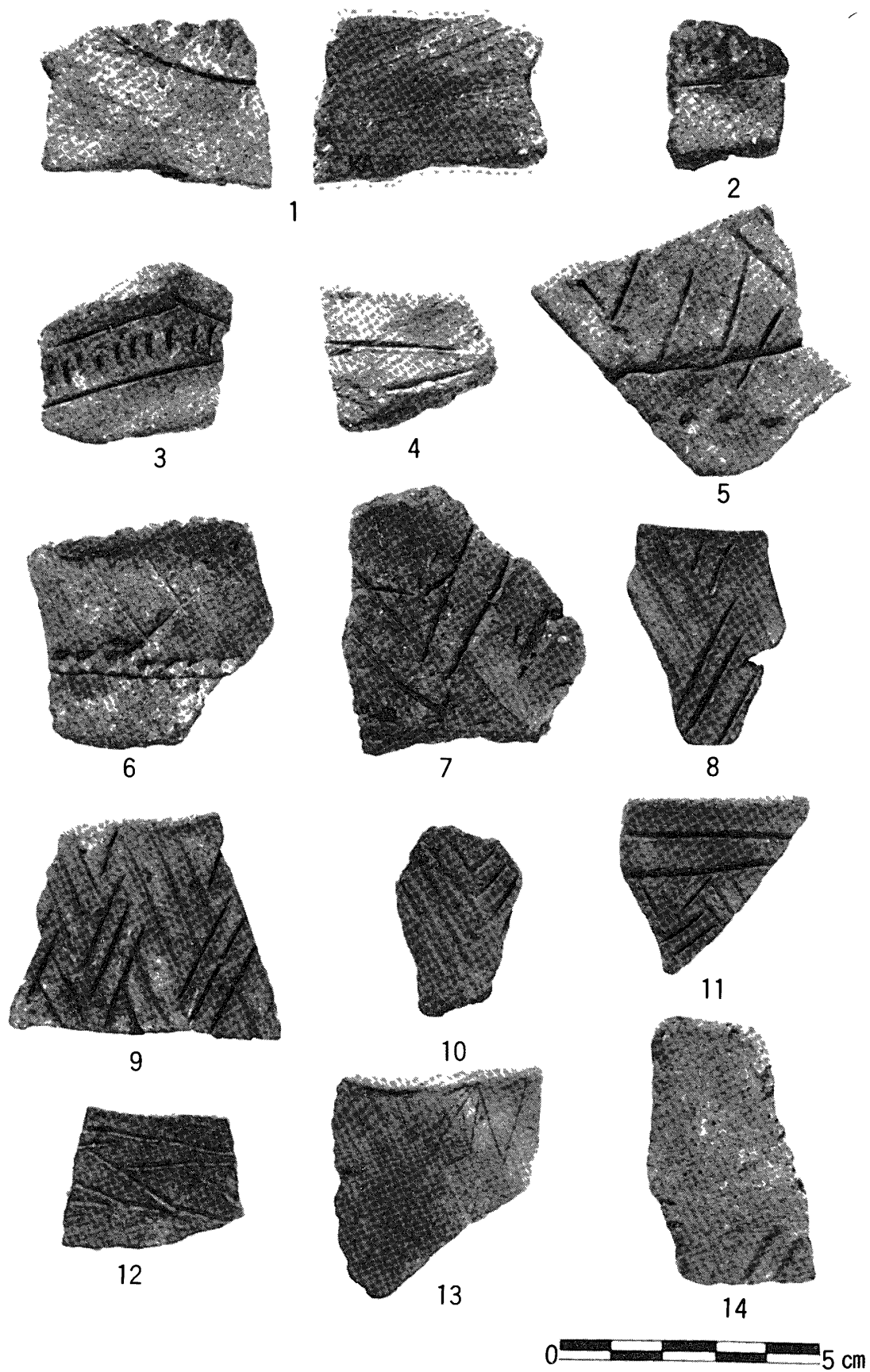
図版16 A - 1 区出土の面縄東洞式土器



図版17 A - 1 区出土の嘉徳 I 式 A 土器

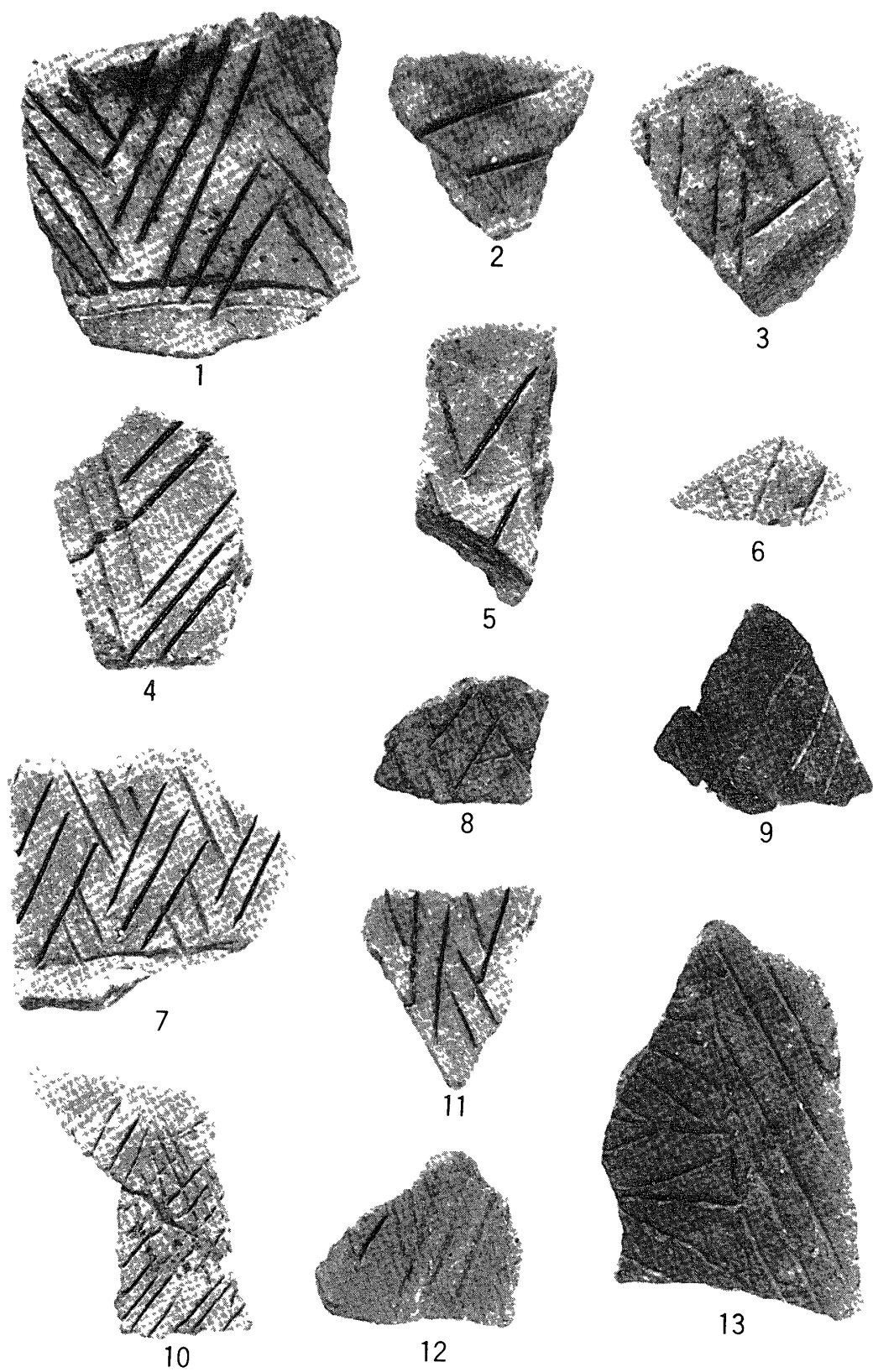


図版18 A - 1 区出土の嘉徳 I 式 A 土器

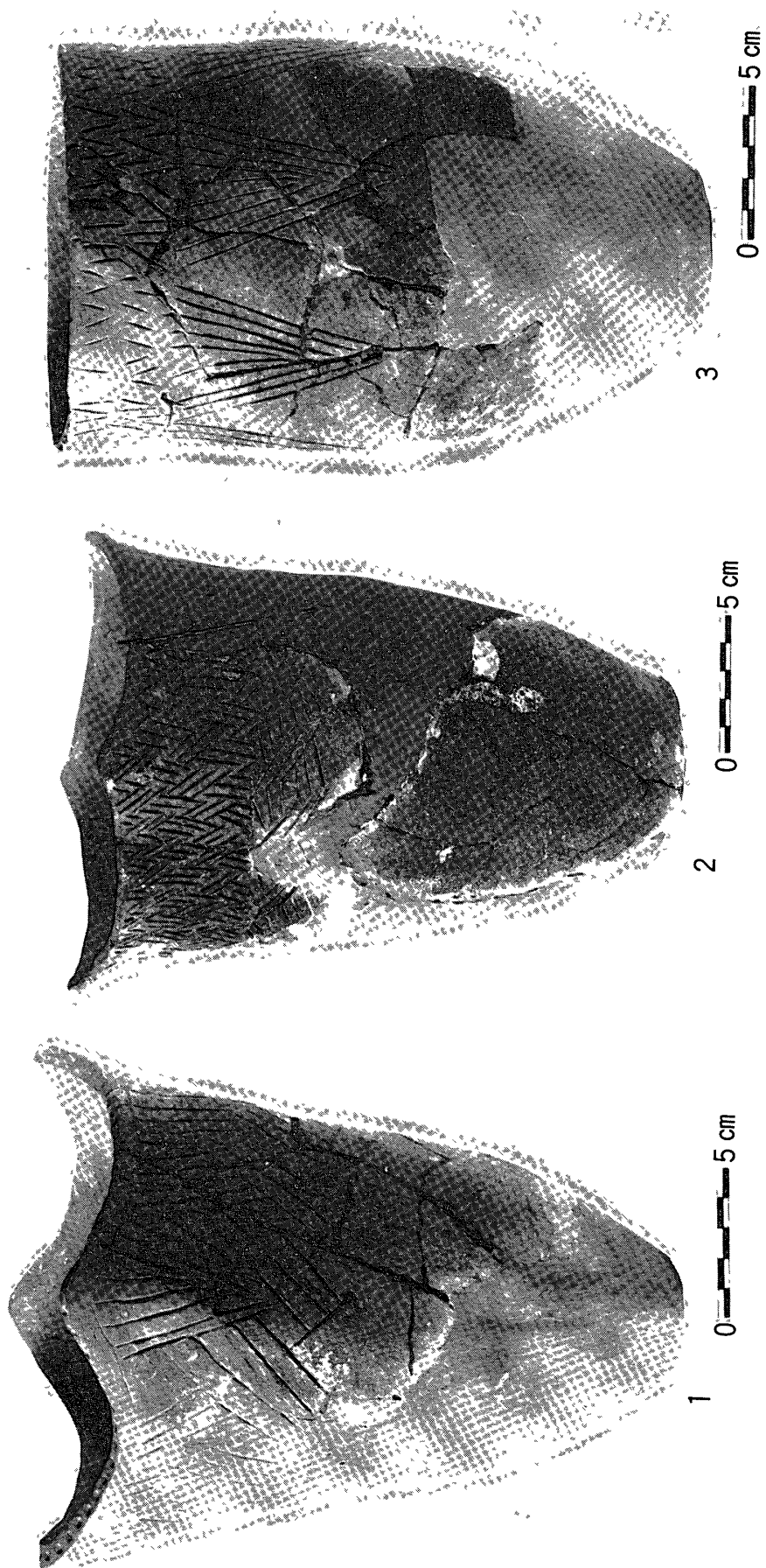


図版19 A - 1 区出土の嘉徳 I 式 B、同 II 式土器



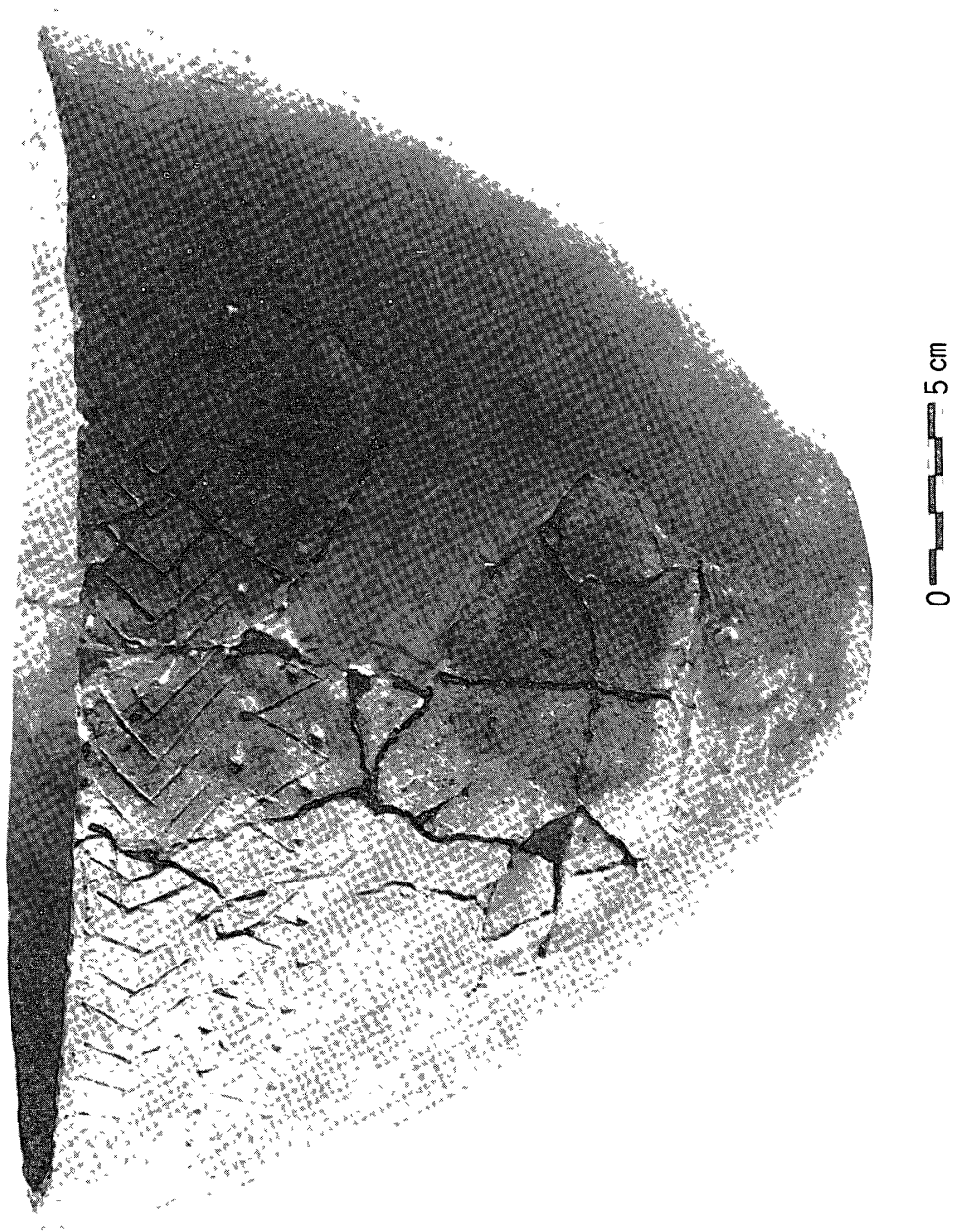


図版20 A - 1 区出土の嘉徳II式土器

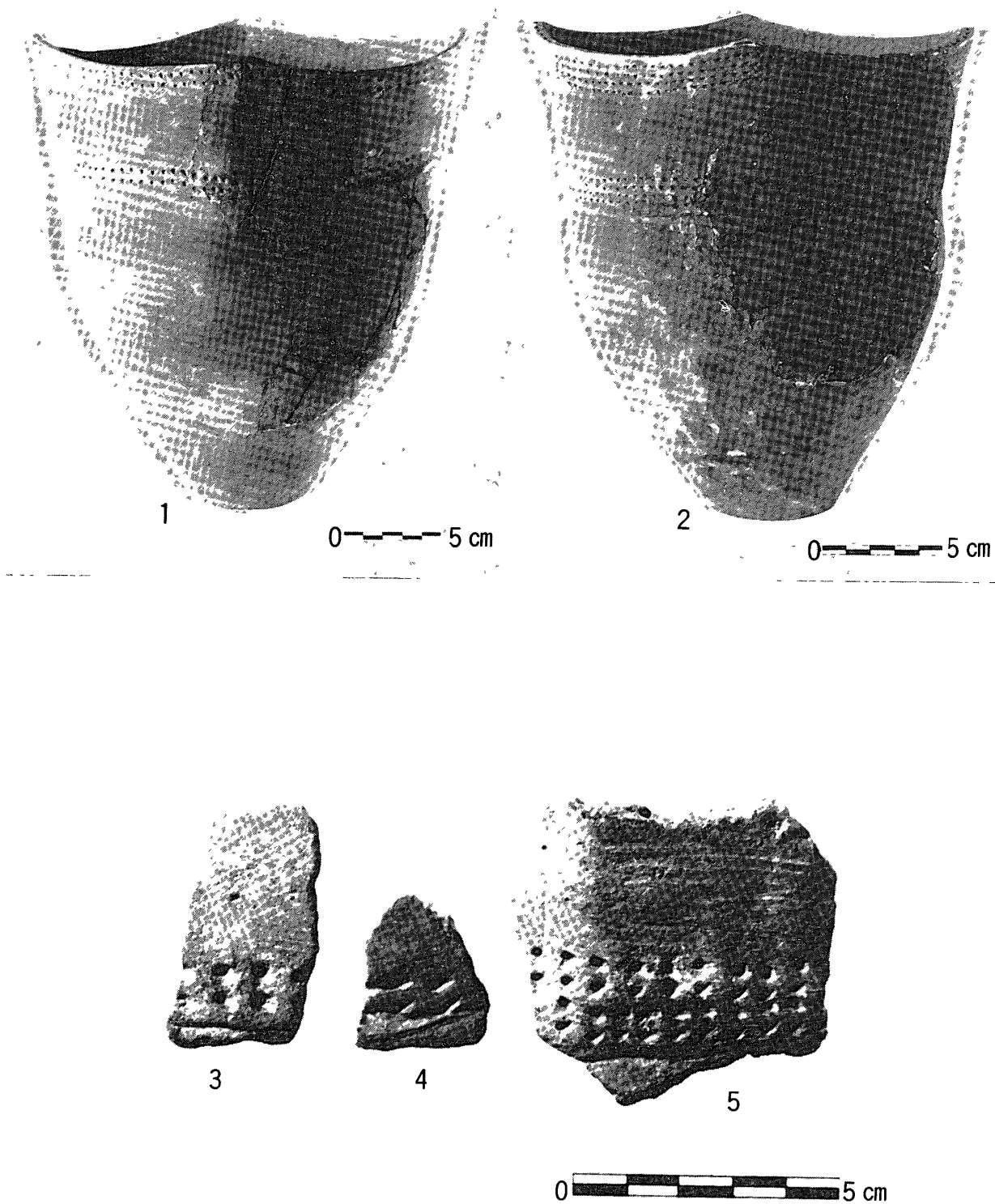


図版21 A - 1 区出土の嘉徳Ⅱ式土器

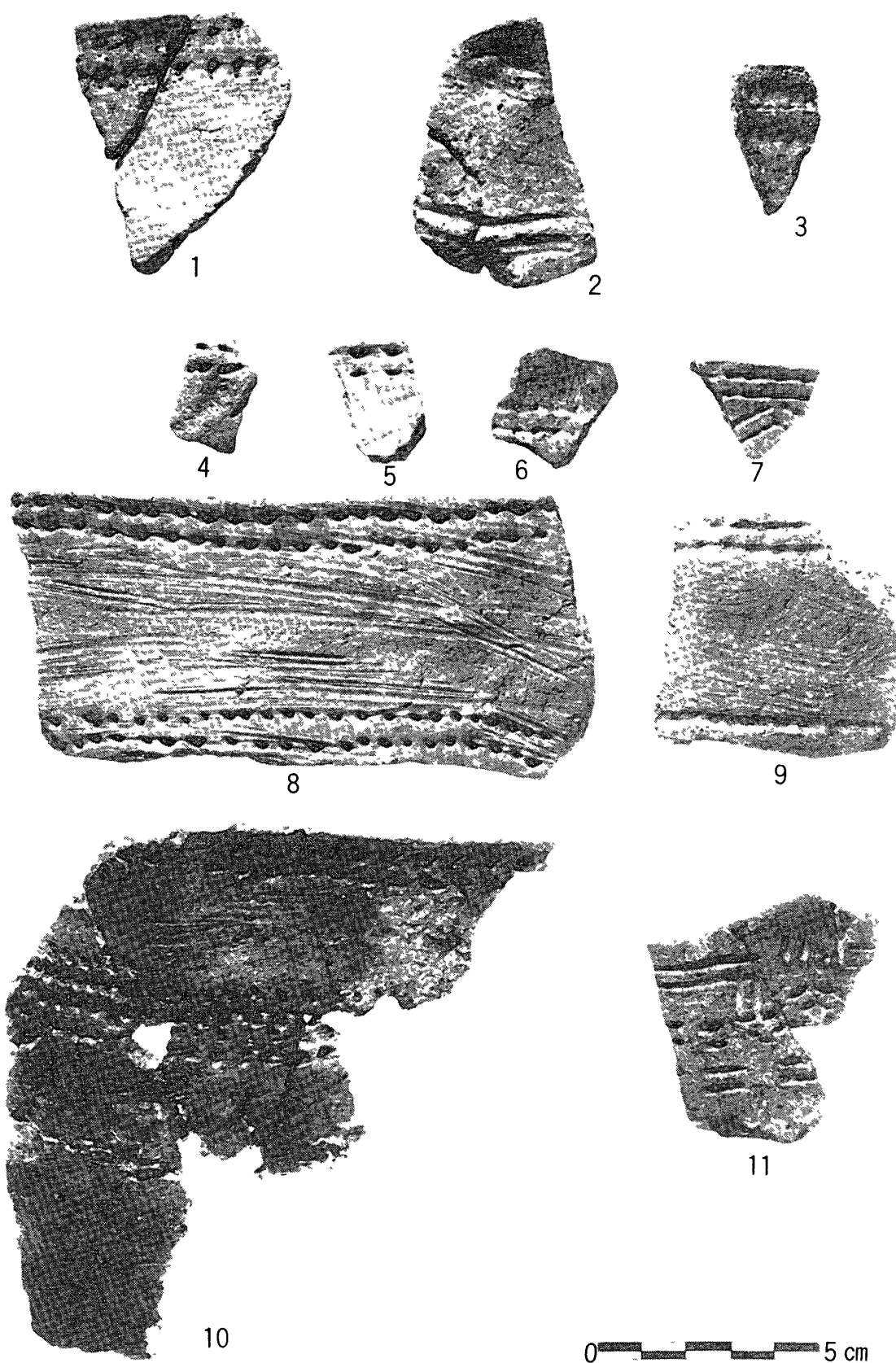




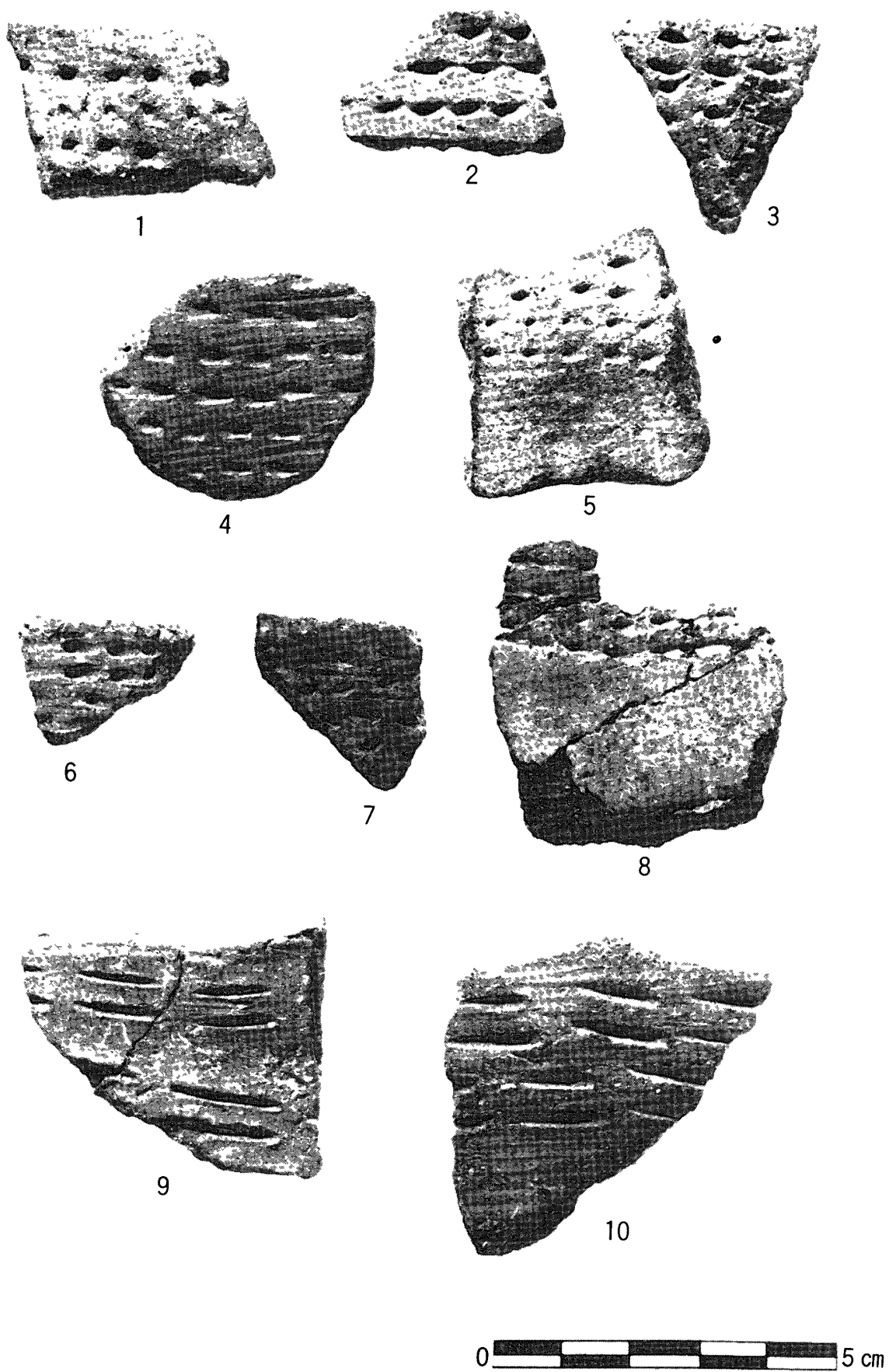
図版22 A - 1 区出土の嘉徳Ⅱ式土器



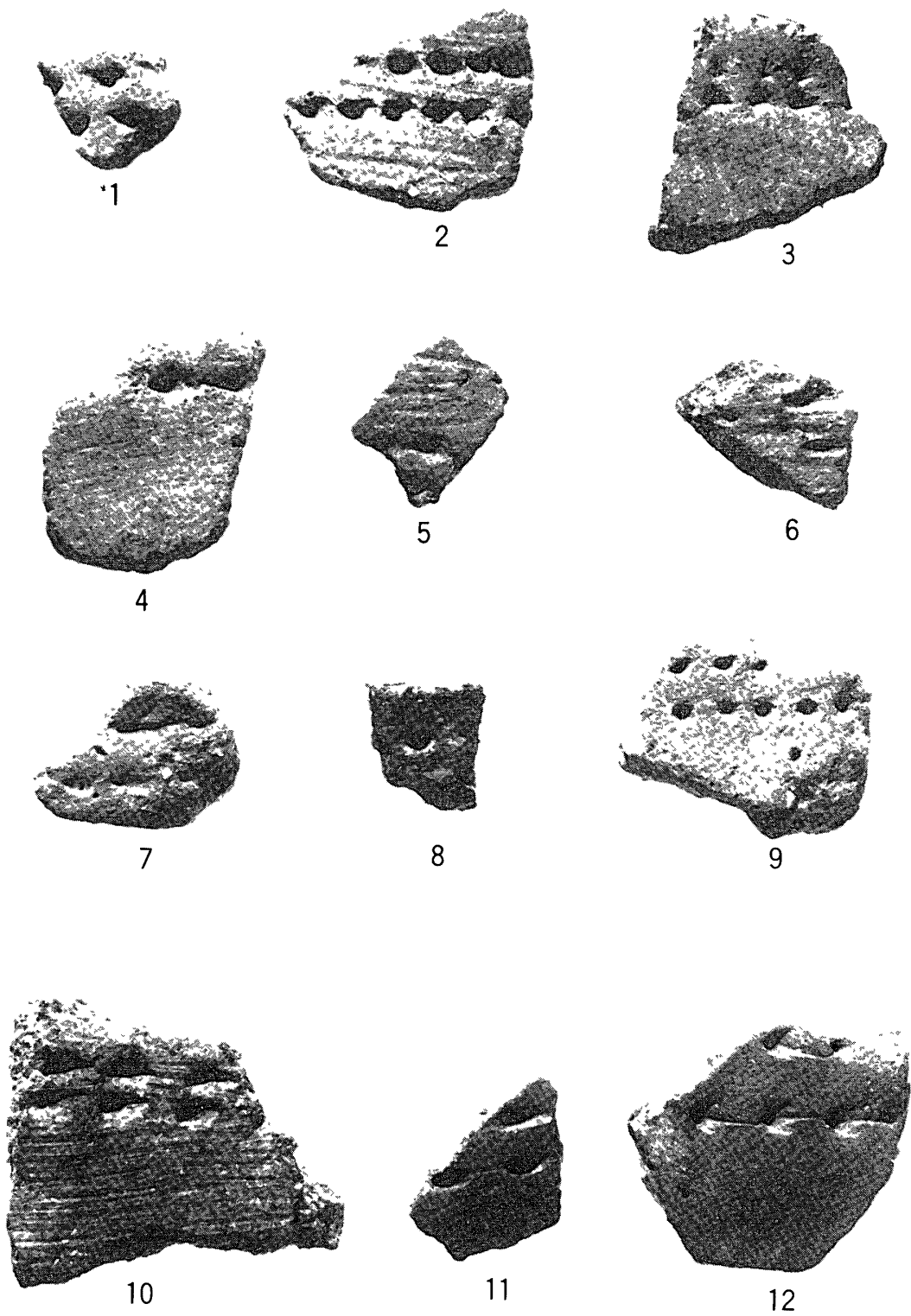
図版23 A - 1 区出土の神野 D 式土器



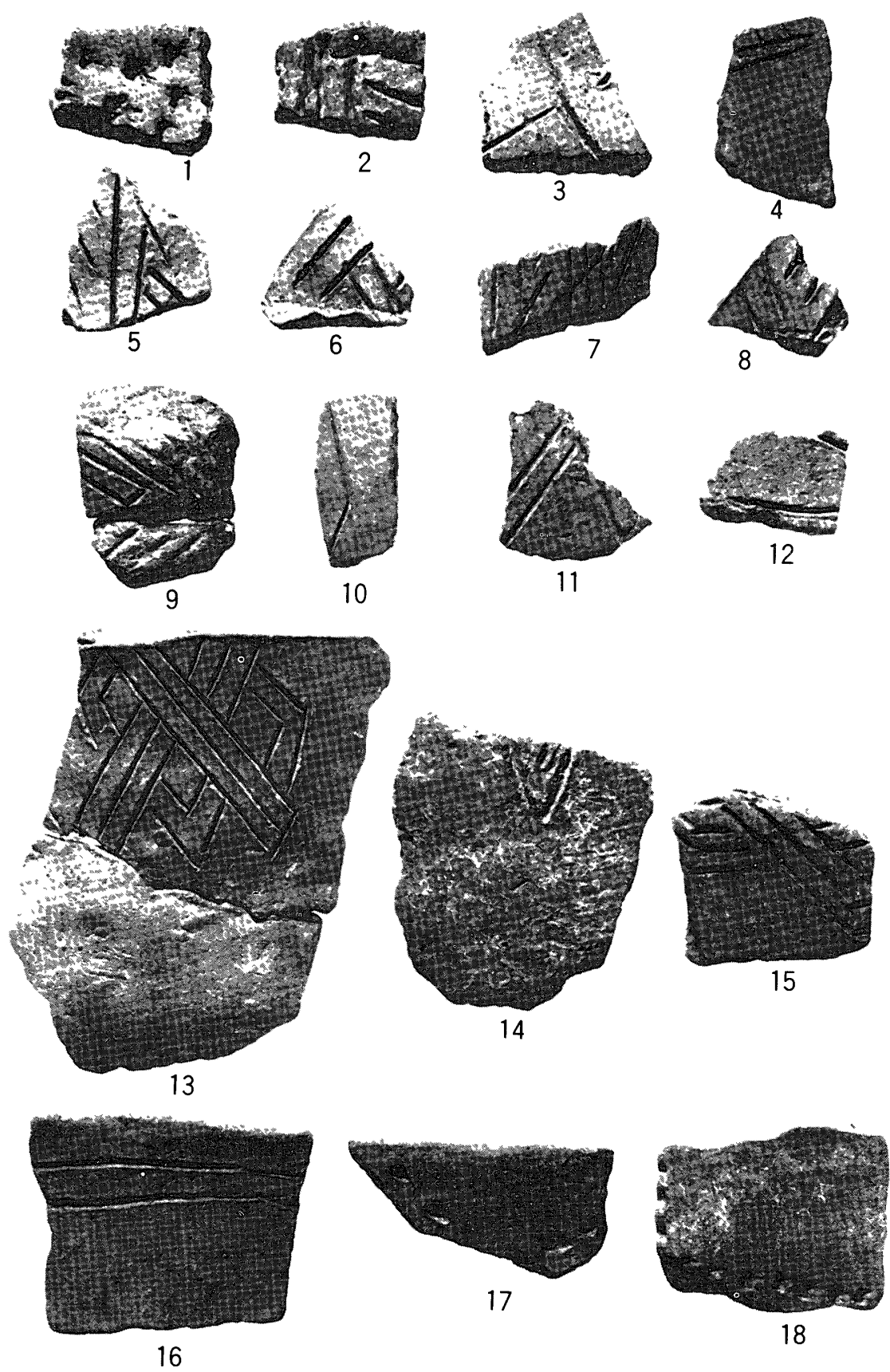
図版24 A - 1 区出土の神野 E 式土器



図版25 A - 1 区出土の伊波式土器



図版26 A - 1 区出土の伊波系不明土器



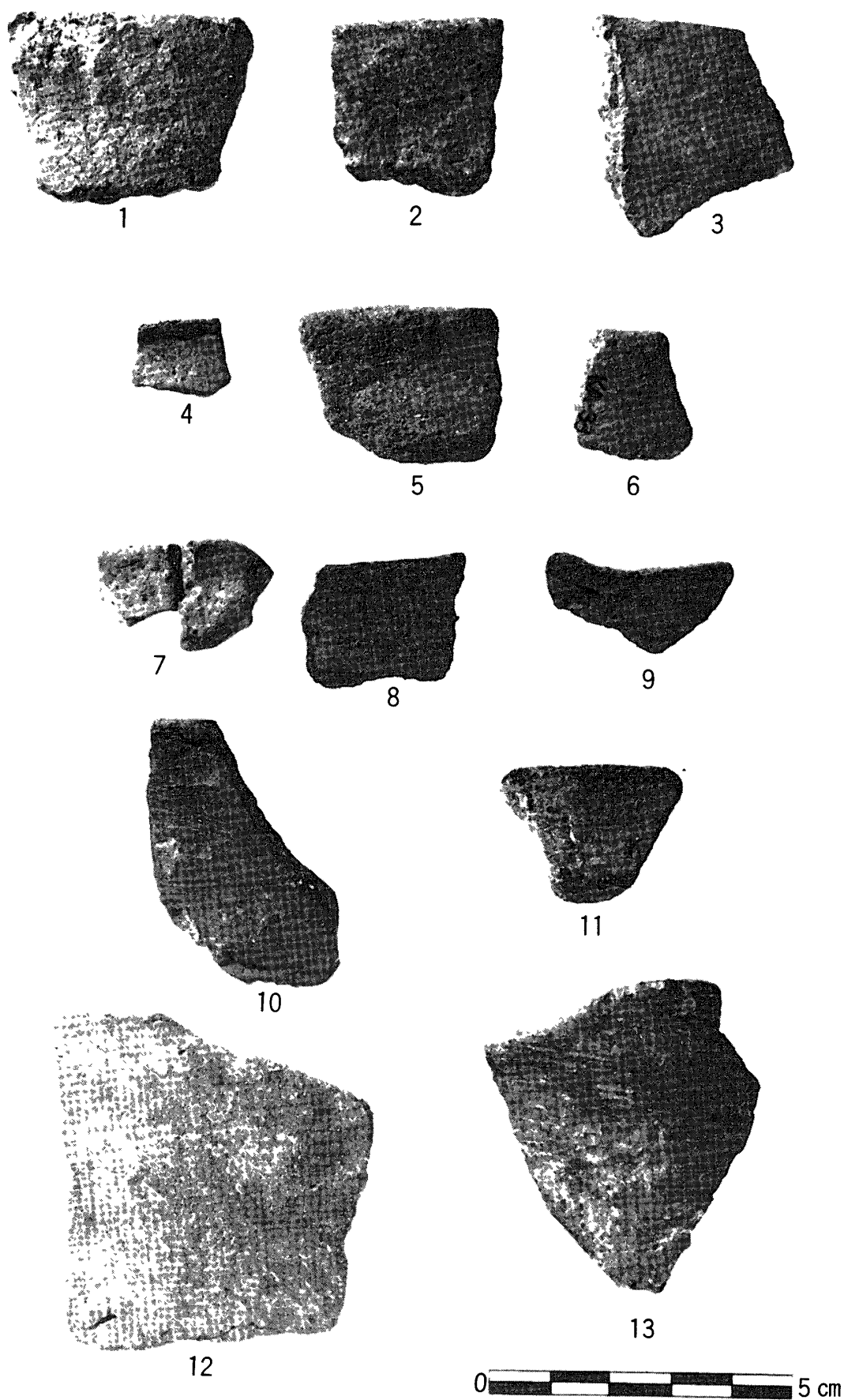
0 5 cm

図版27 A - 1 区出土の有文破片



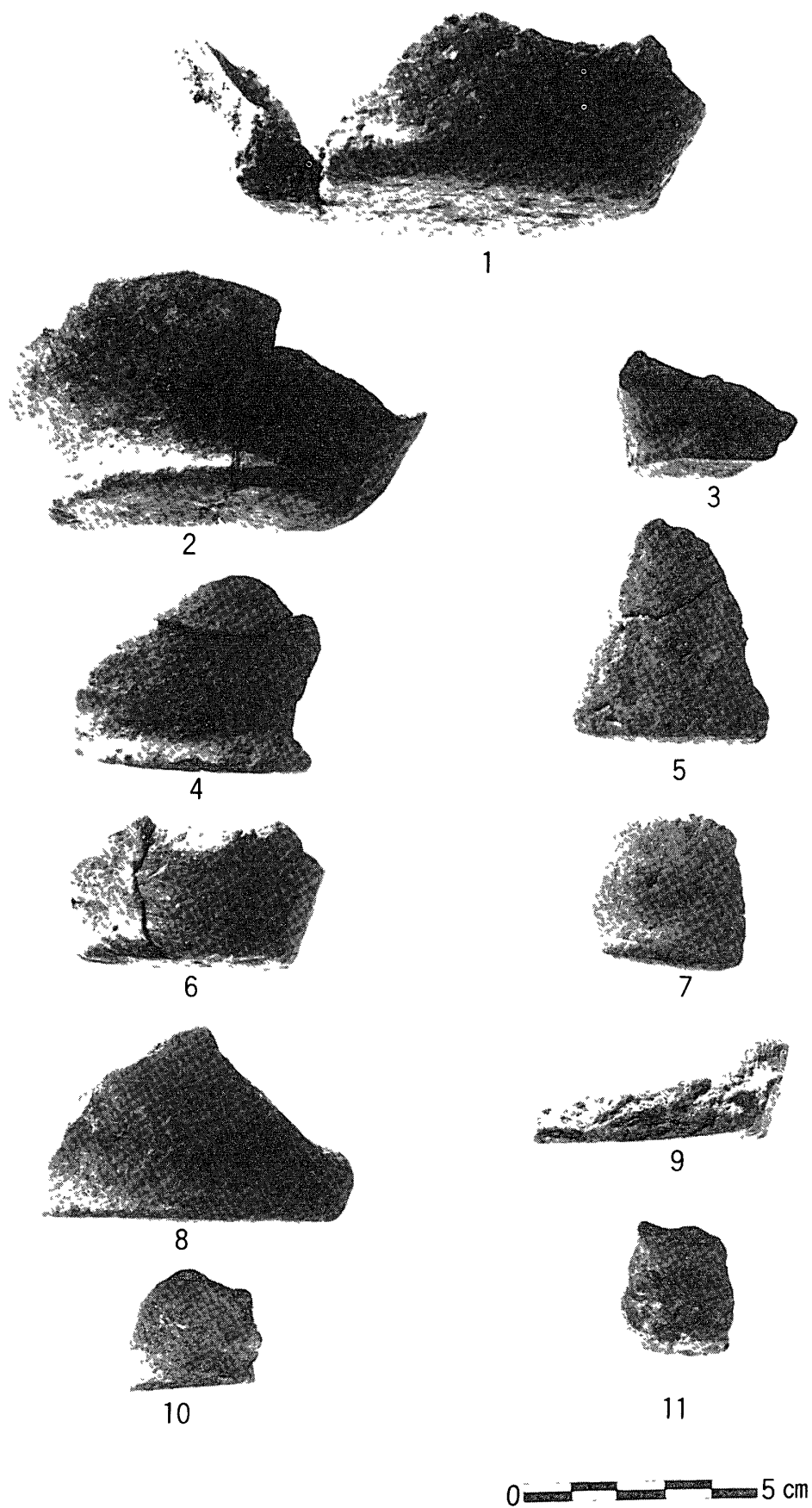


図版28 A - 1 区出土の無文口縁 a

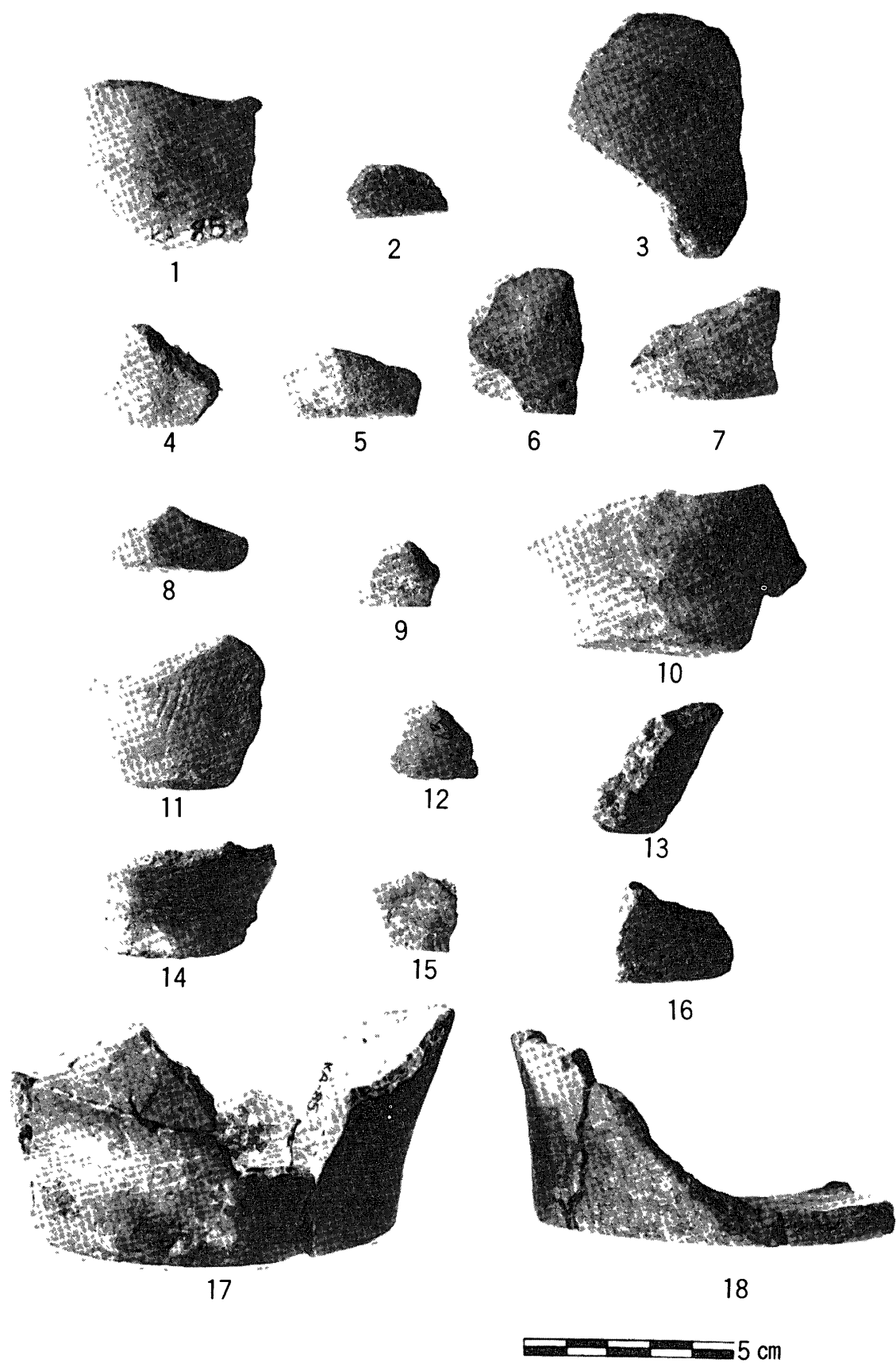


図版29 A - 1 区出土の無文口縁 b

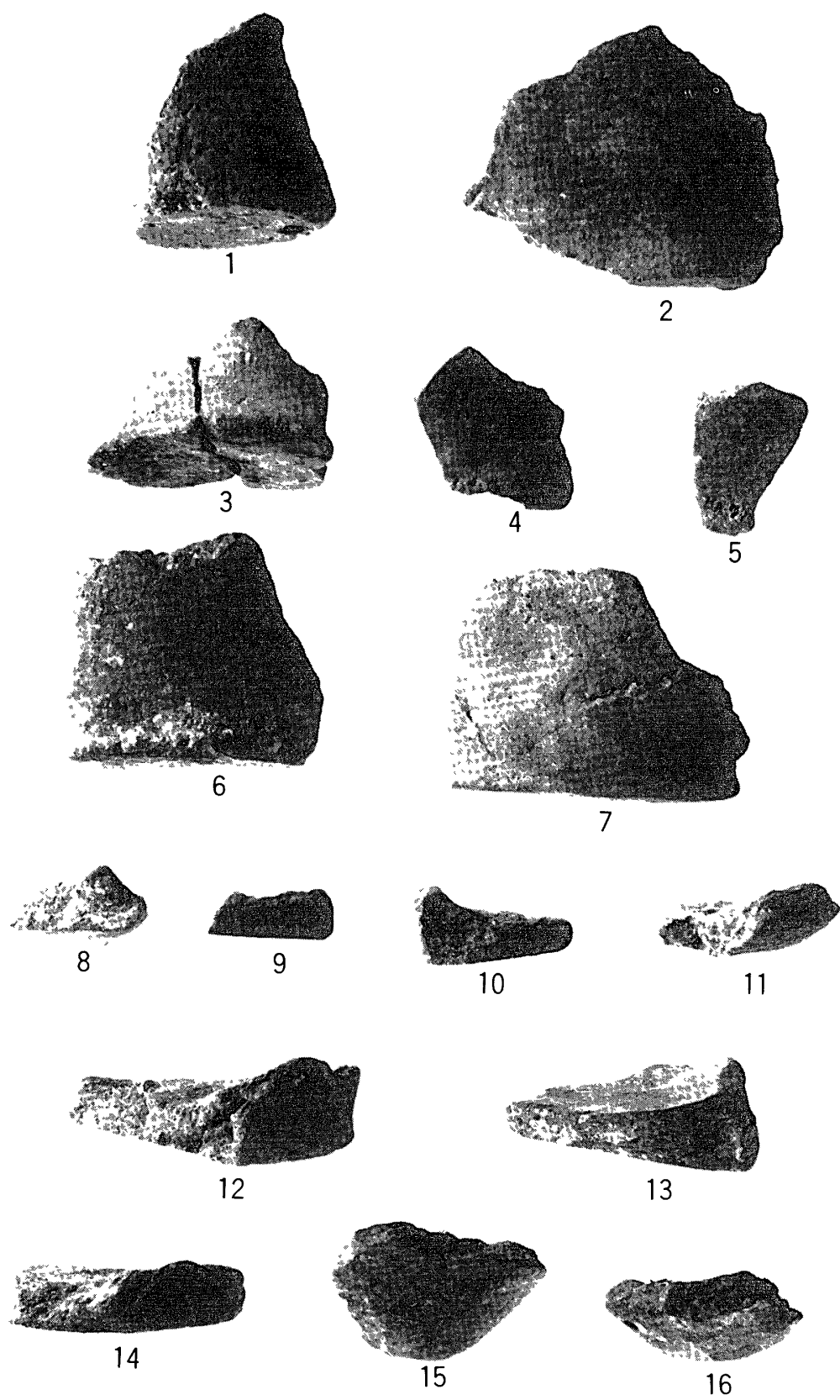




図版30 A - 1 区出土の底部

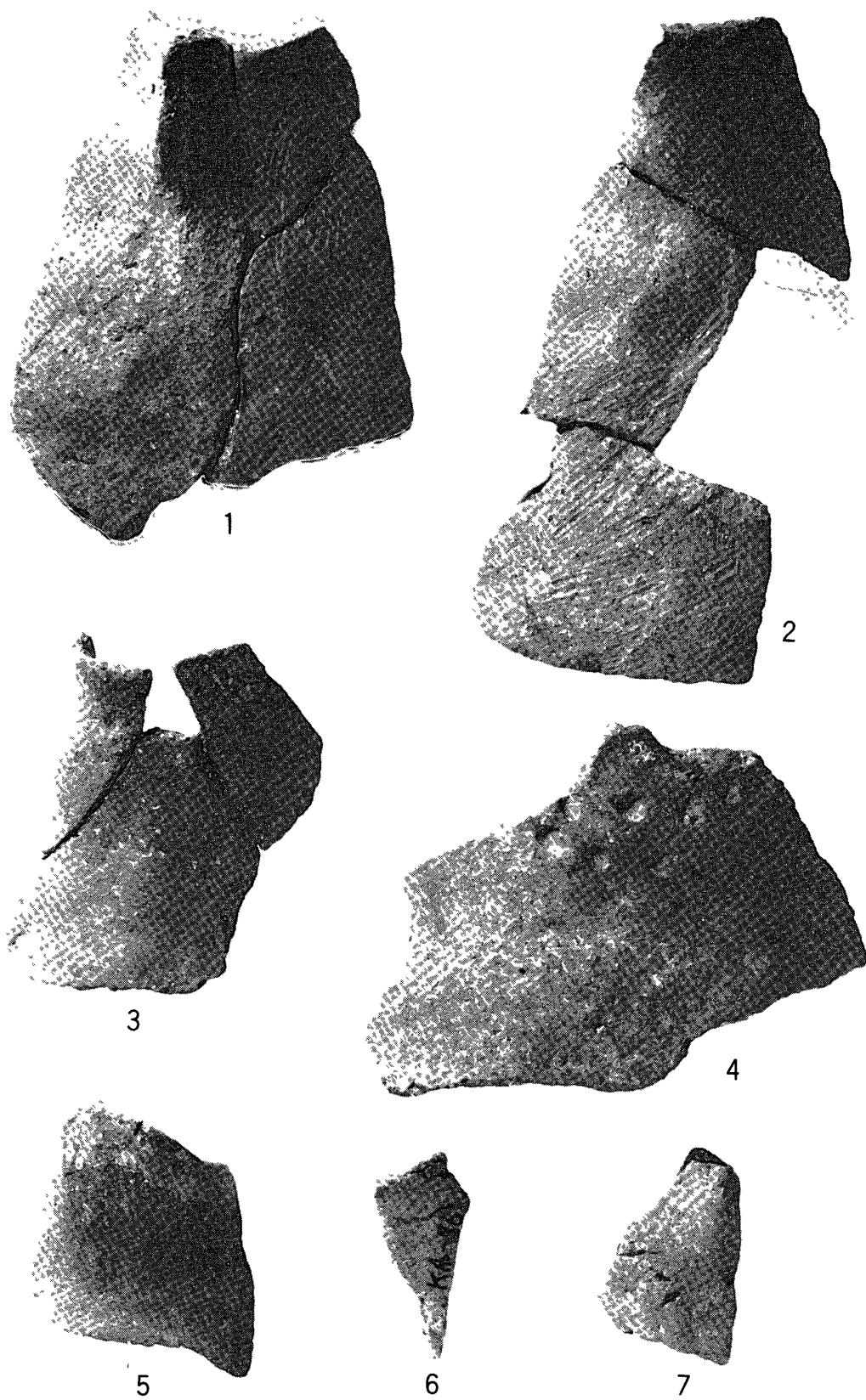


図版31 A - 1 区出土の底部



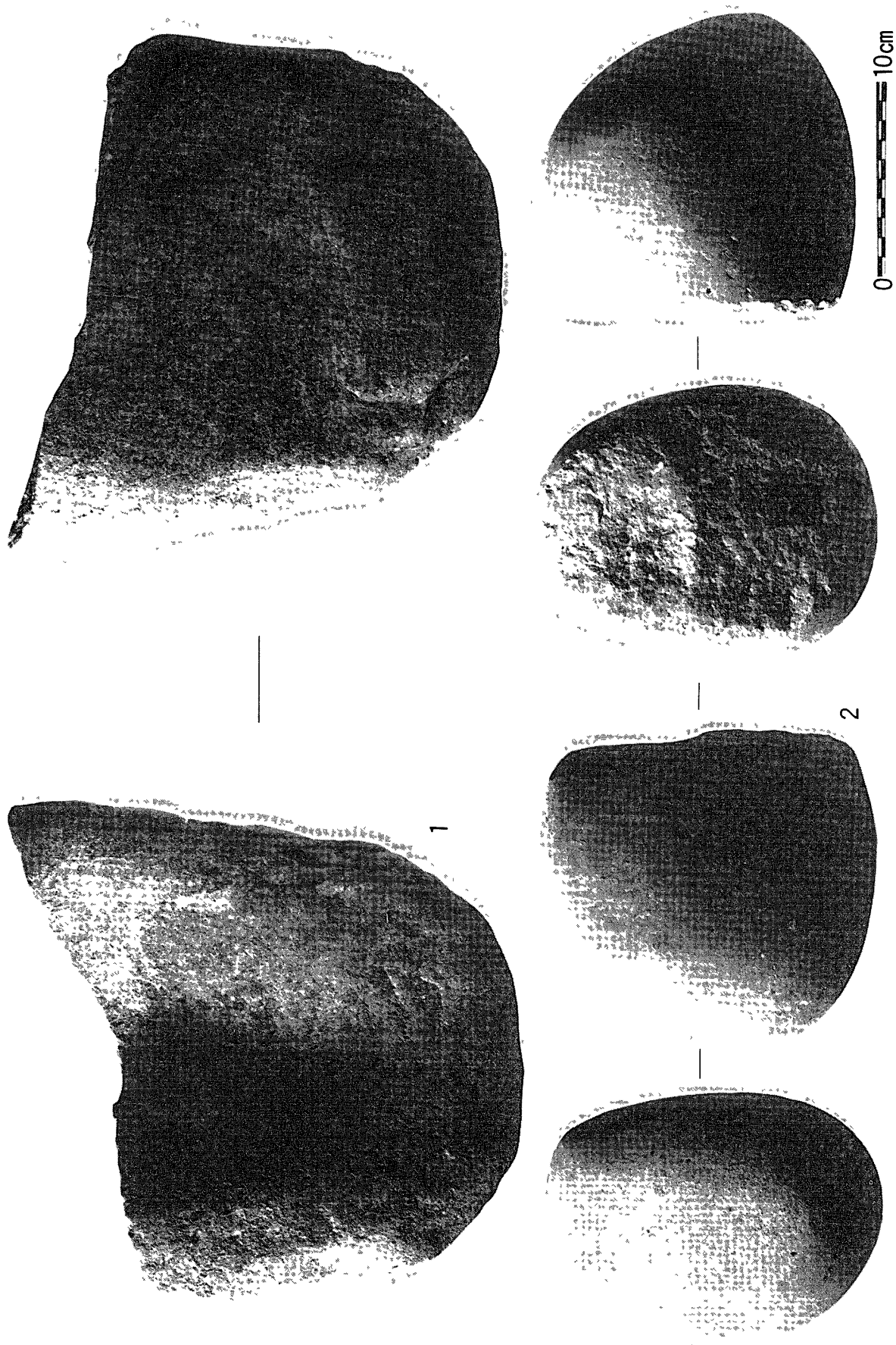
0 5 cm

図版32 A - 1 区出土の底部

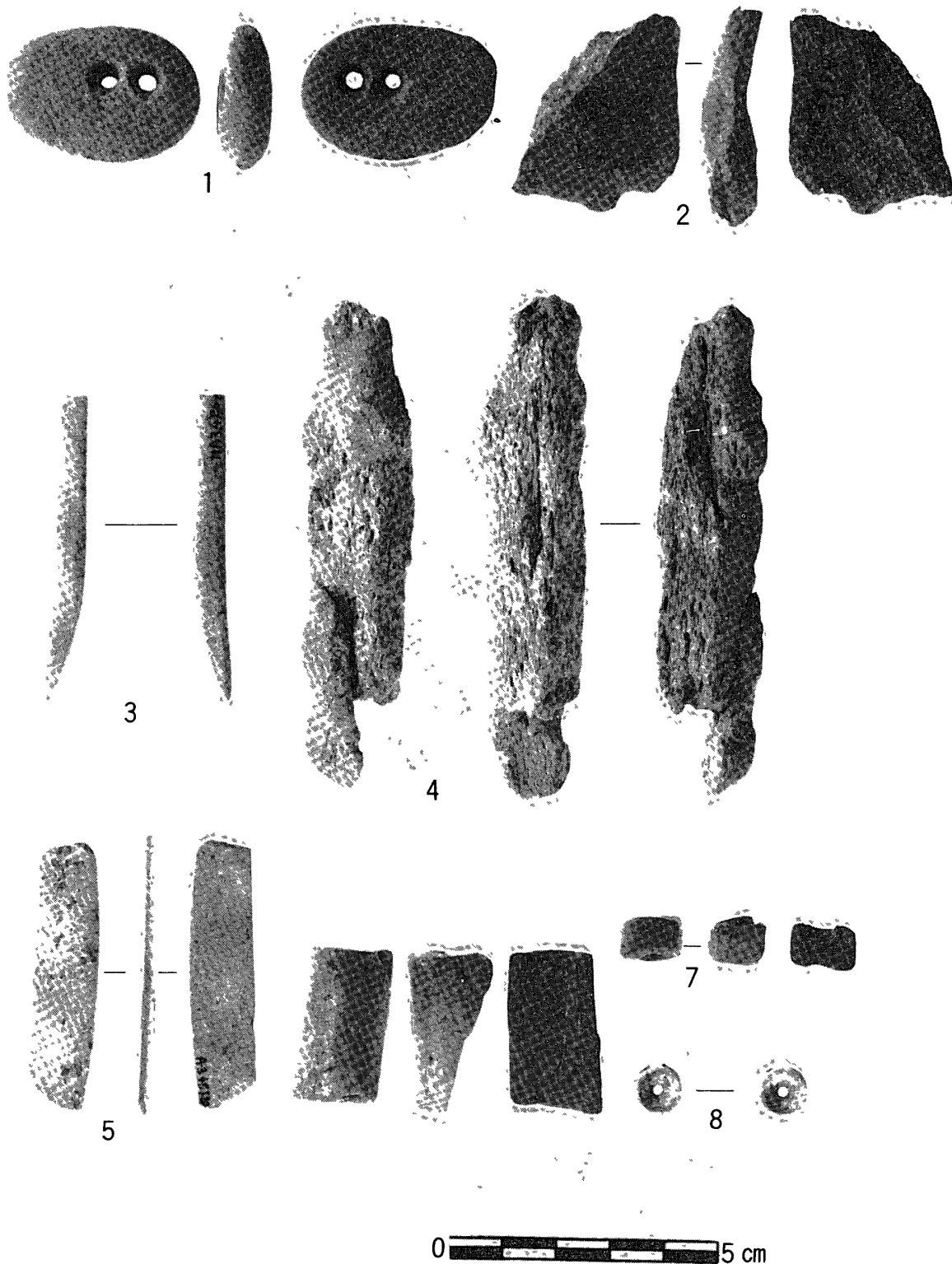


0 5 cm

図版33 A - 1 区出土の壺形土器

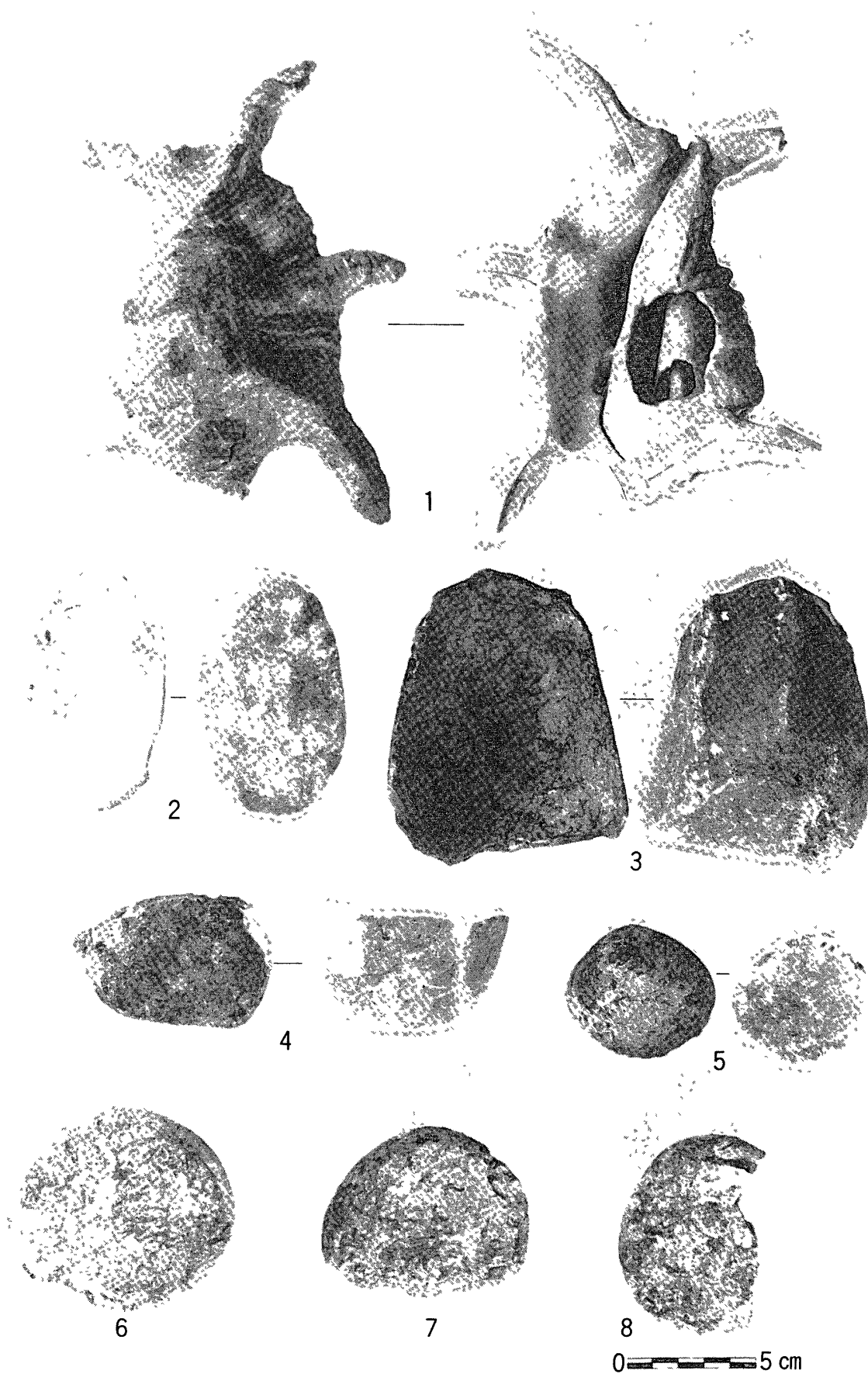


図版34 A-3区出土の石器

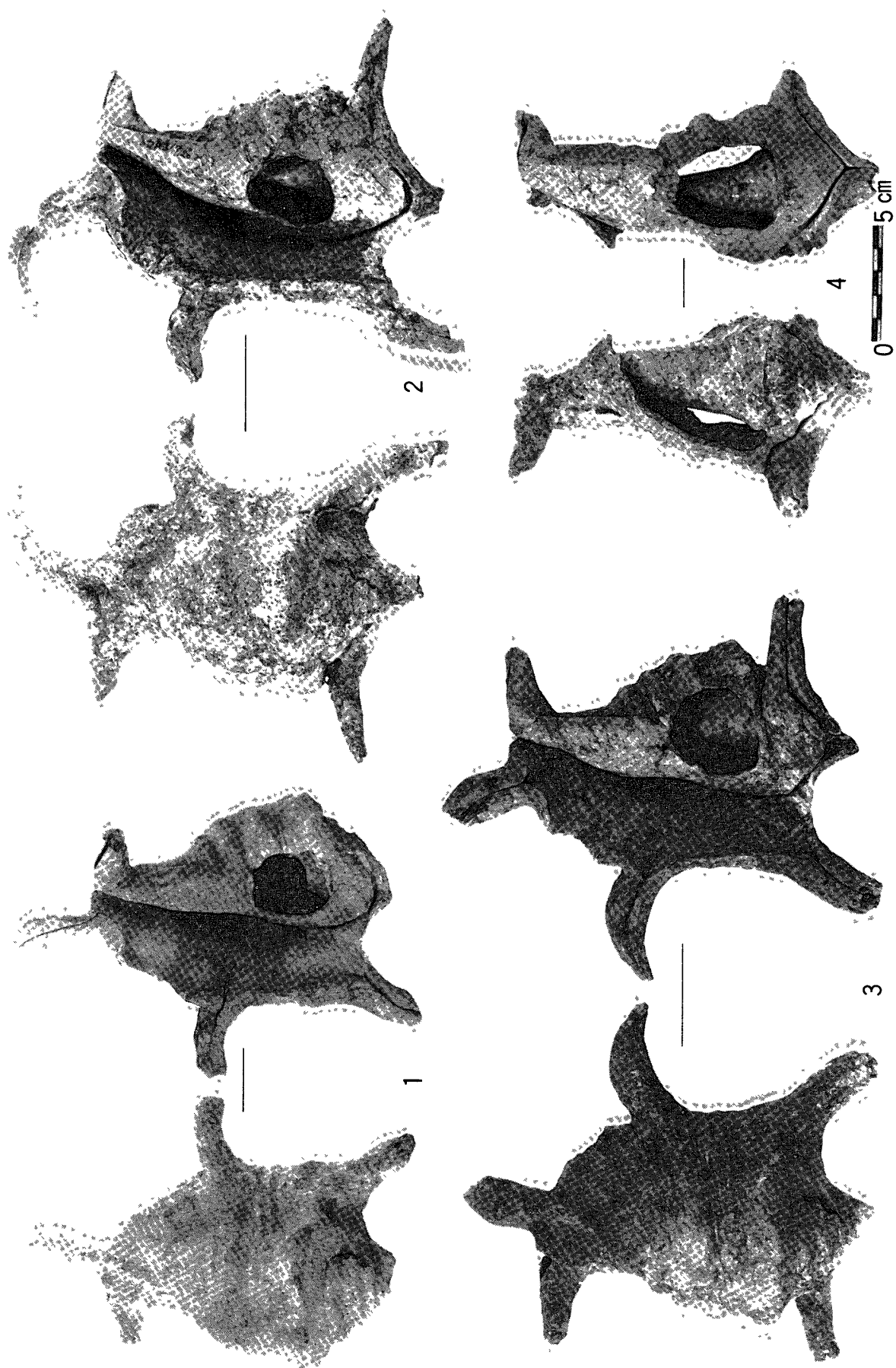


図版35 A - 3区出土の石器、骨・角製品





図版36 A - 3区出土の貝製品

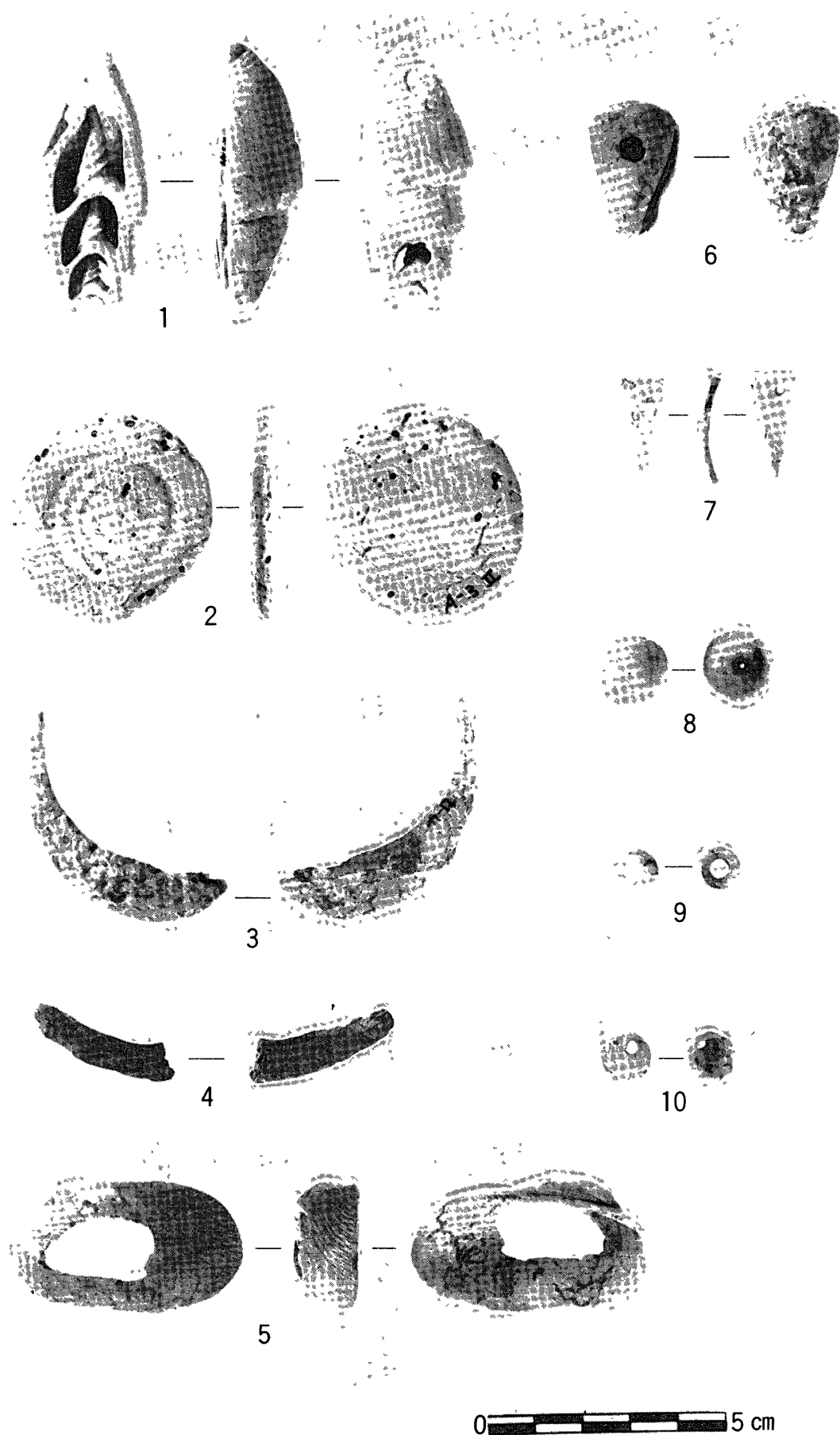


図版37 A - 3 区出土の貝製品

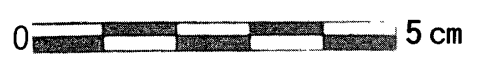
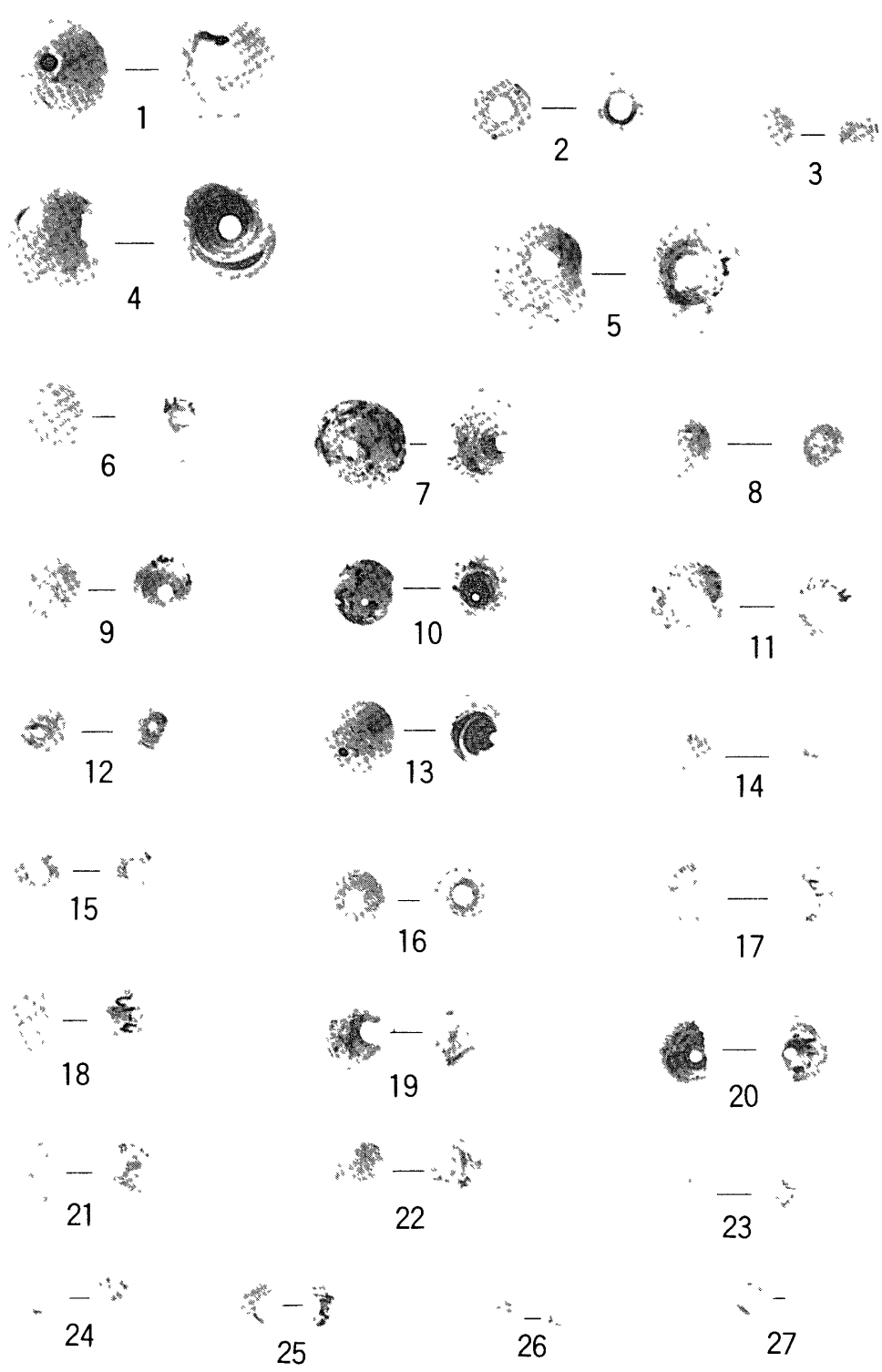




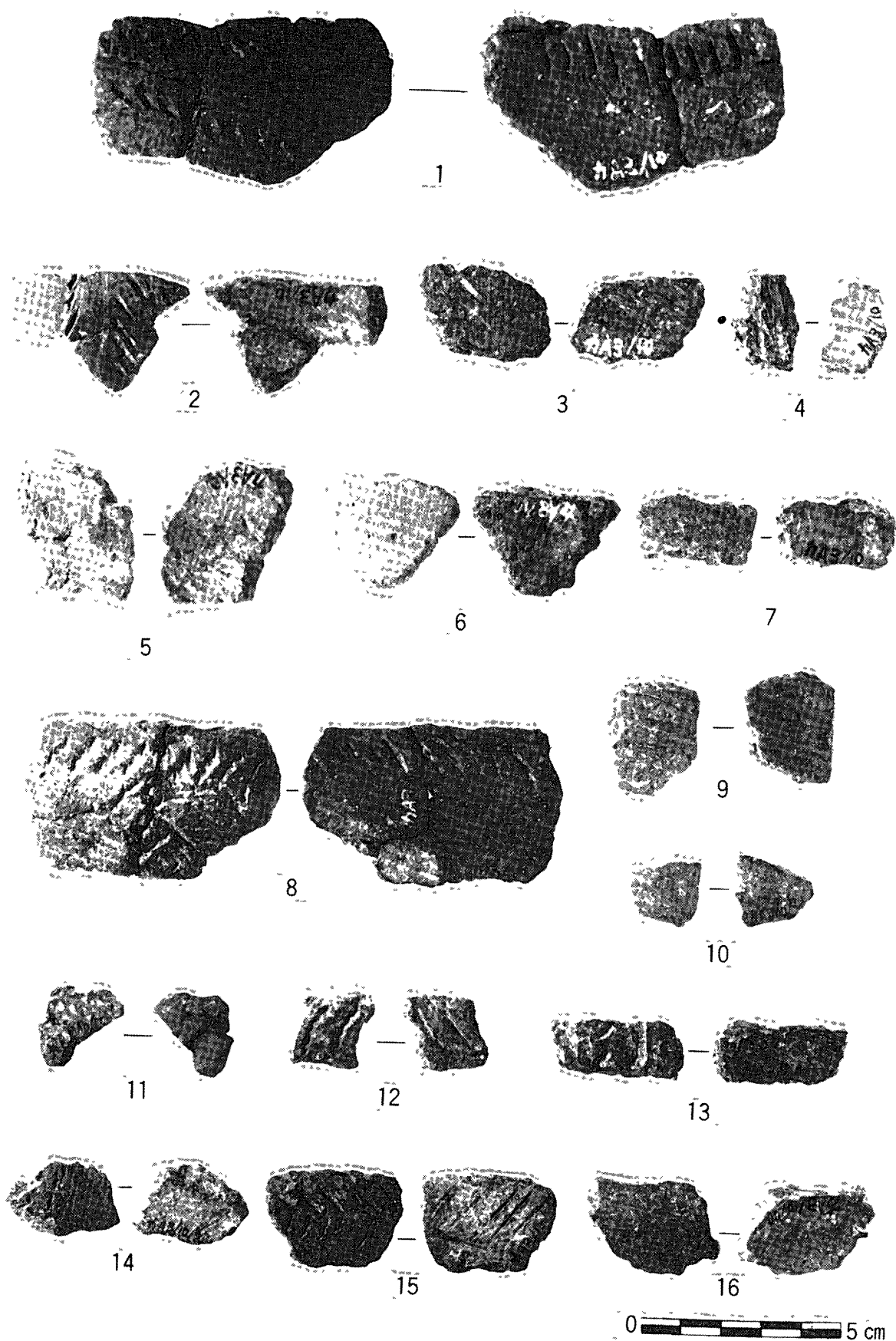
図版38 A - 3区出土の貝製品



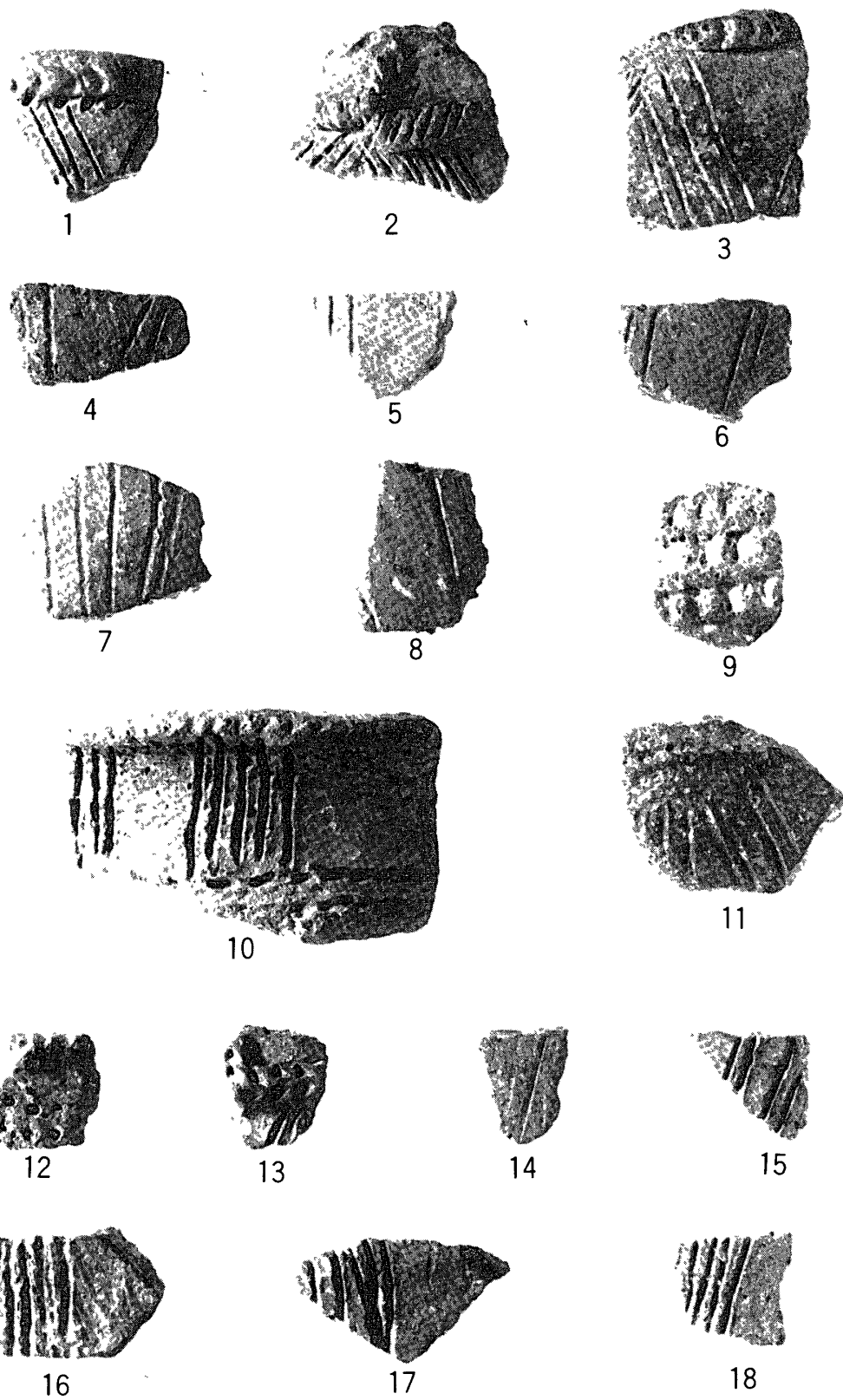
図版39 A - 3区出土の貝製品



図版40 A - 3区出土の貝製品

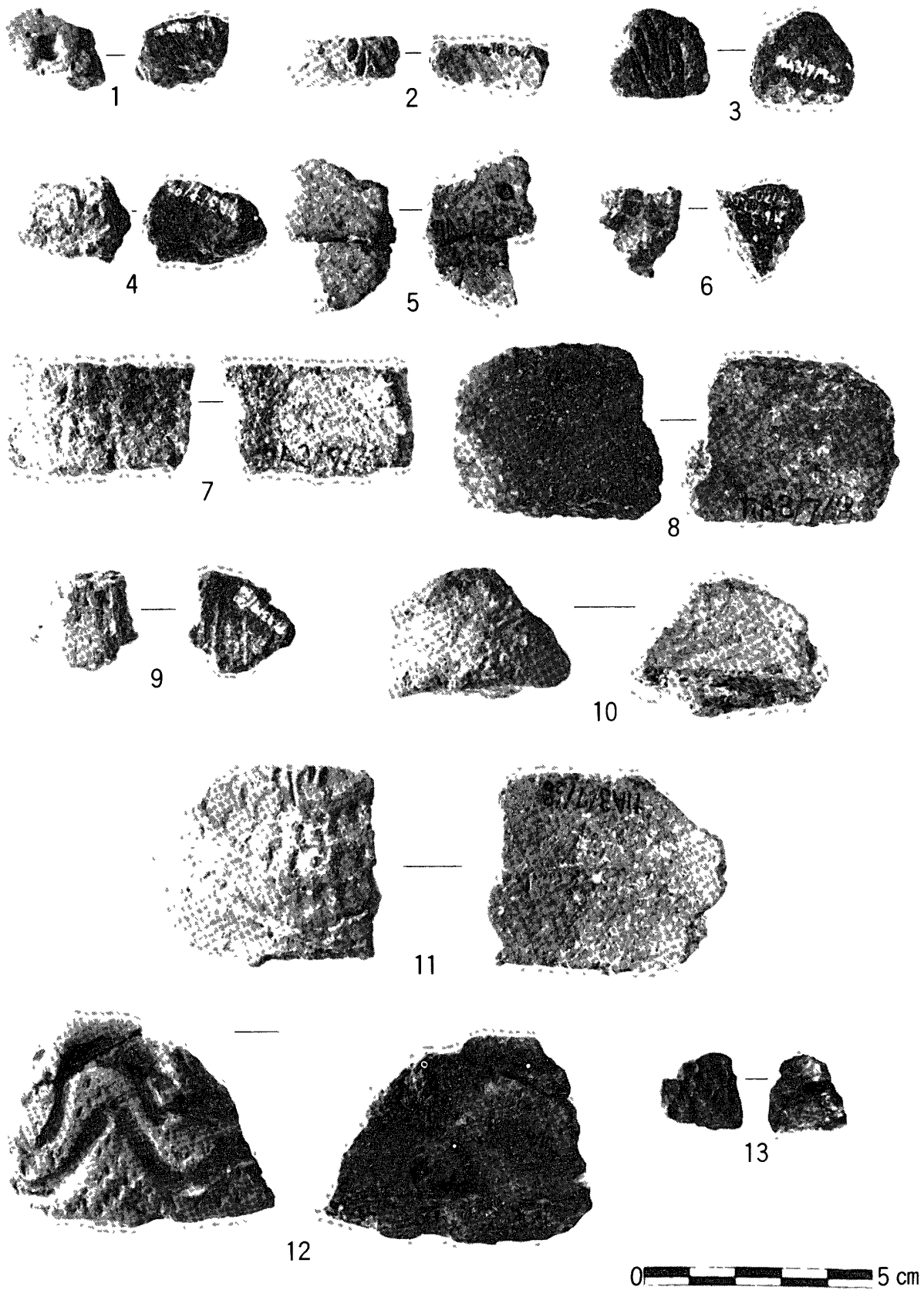


図版41 A - 3区出土の室川下層式土器

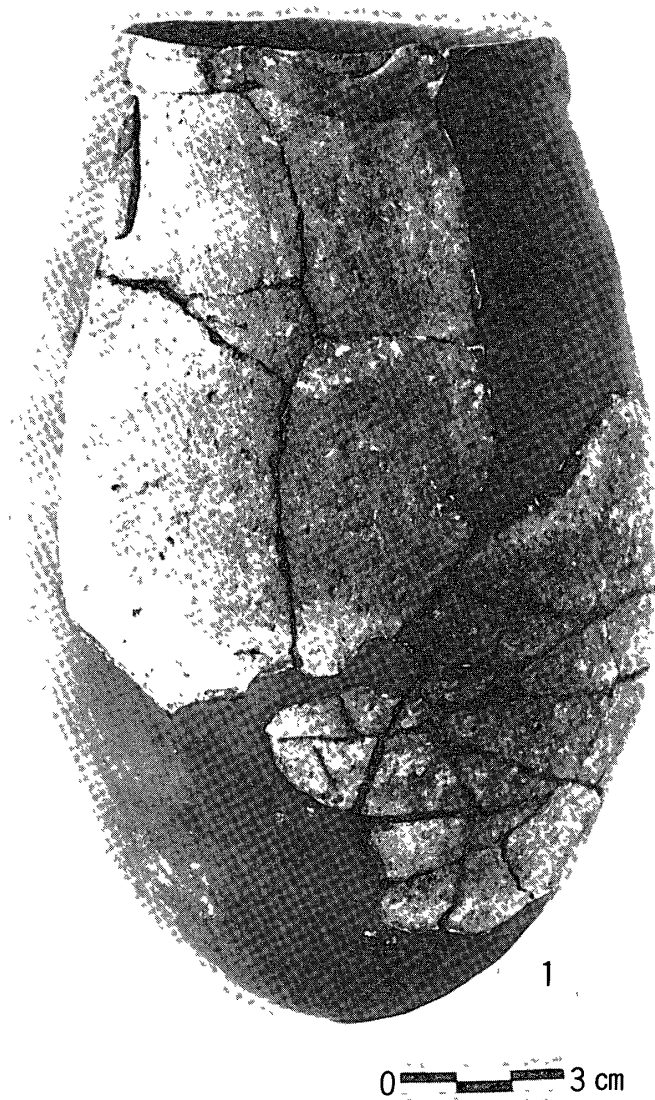


0 5 cm

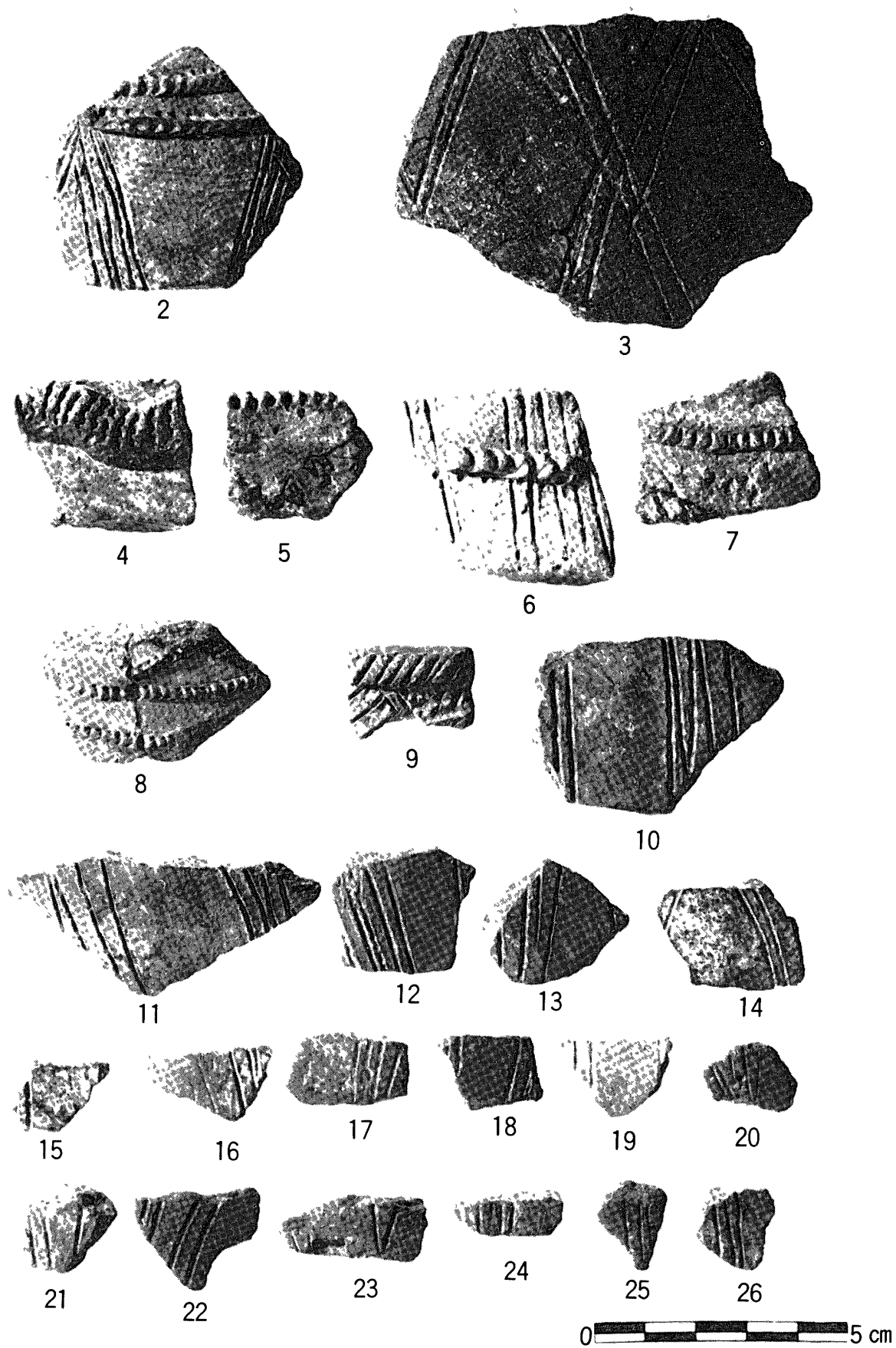
図版43 A - 3区出土の面縄前庭様式土器



図版42 A — 3区第Ⅶ層出の室川下層式、神野A式、春日類似土器及び底部

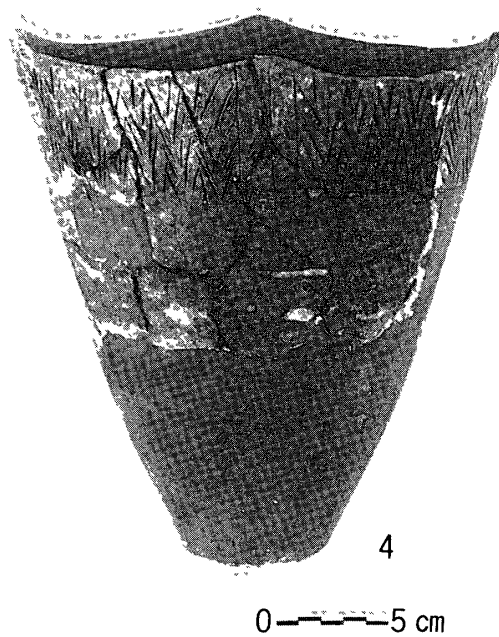
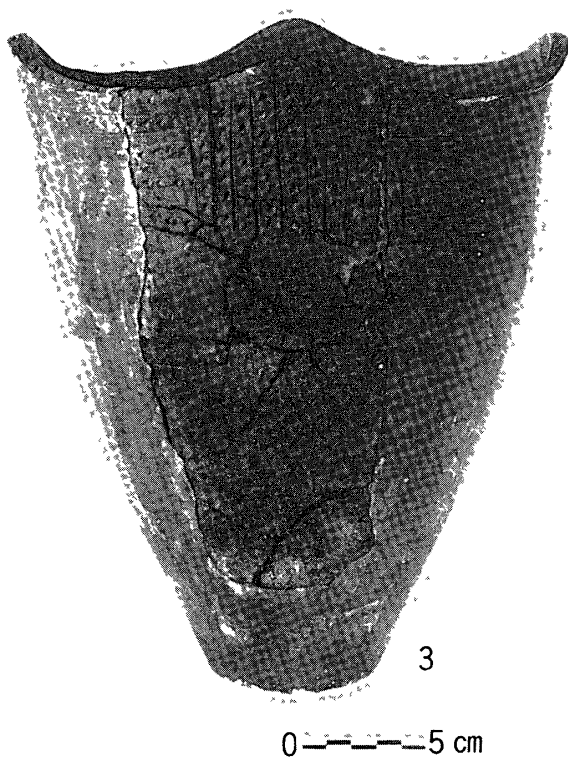
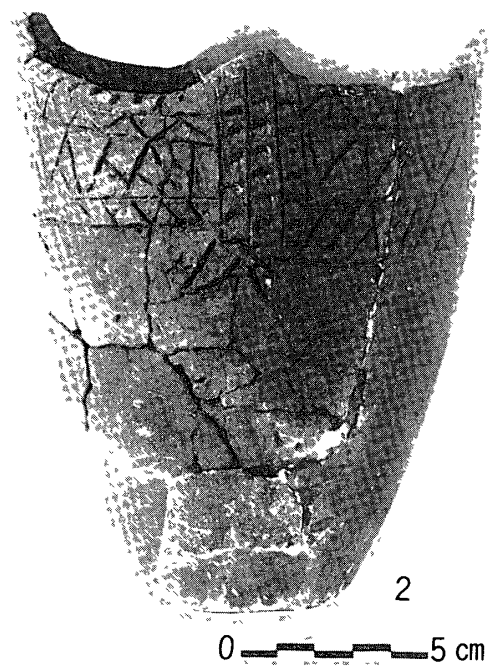
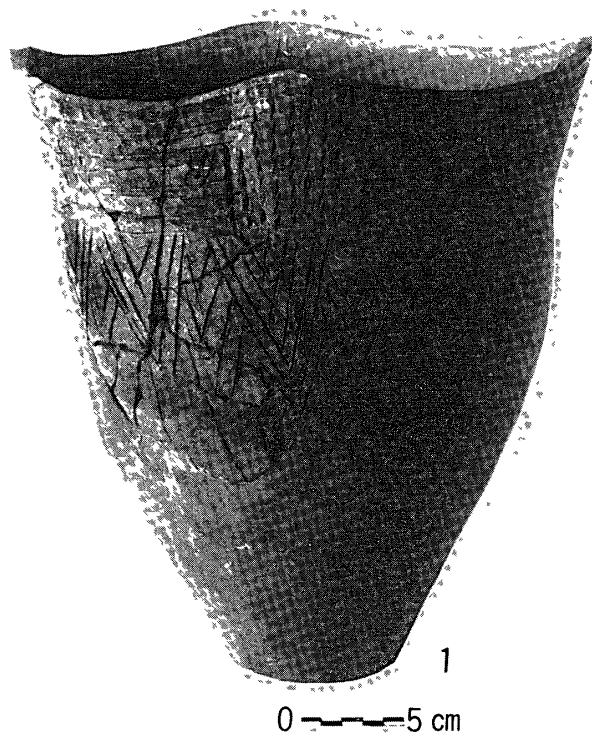


図版44<sup>1</sup> A - 3 区出土の面縄前庭様式土器

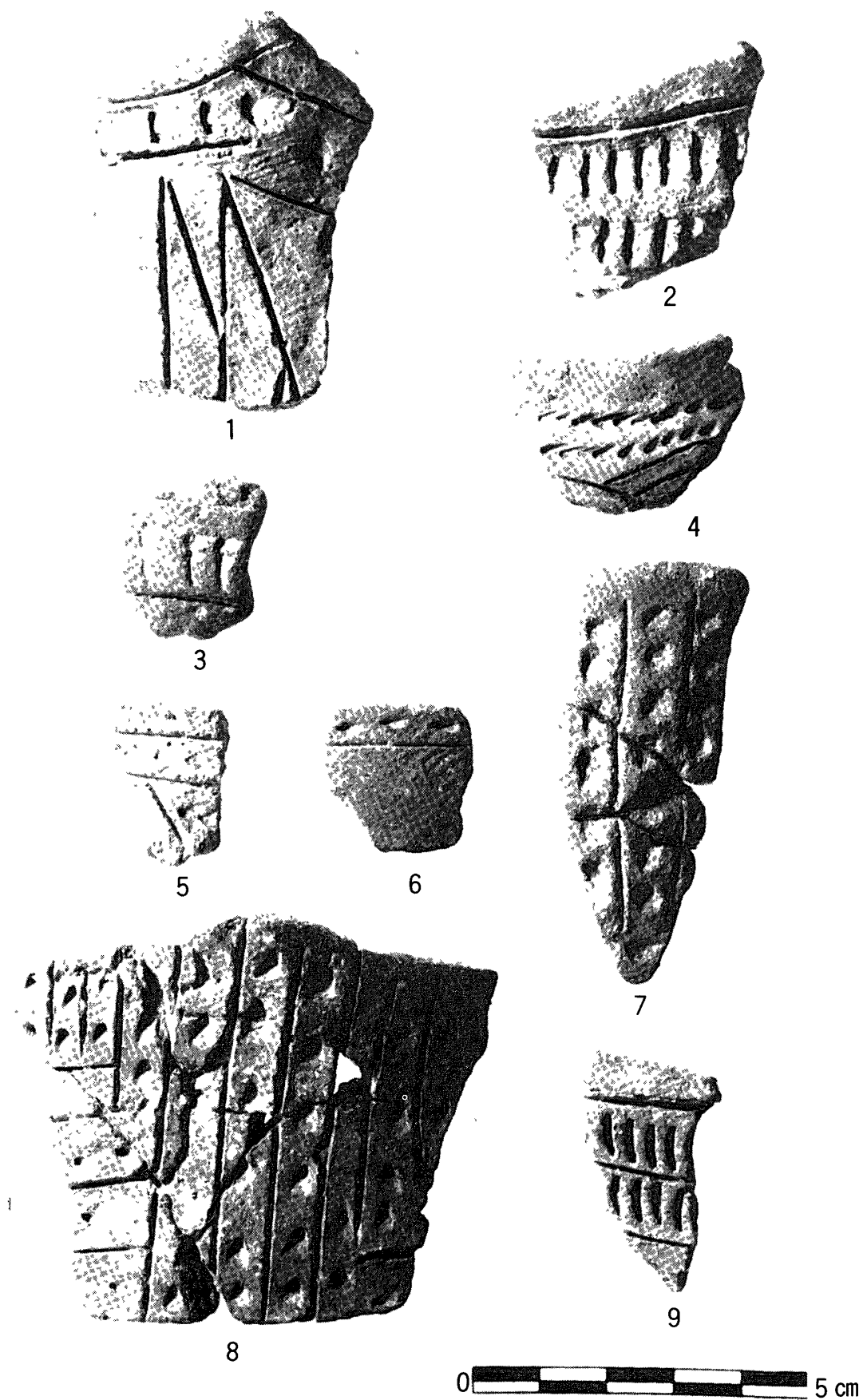


図版45 A - 3区出土の面縄前庭様式土器

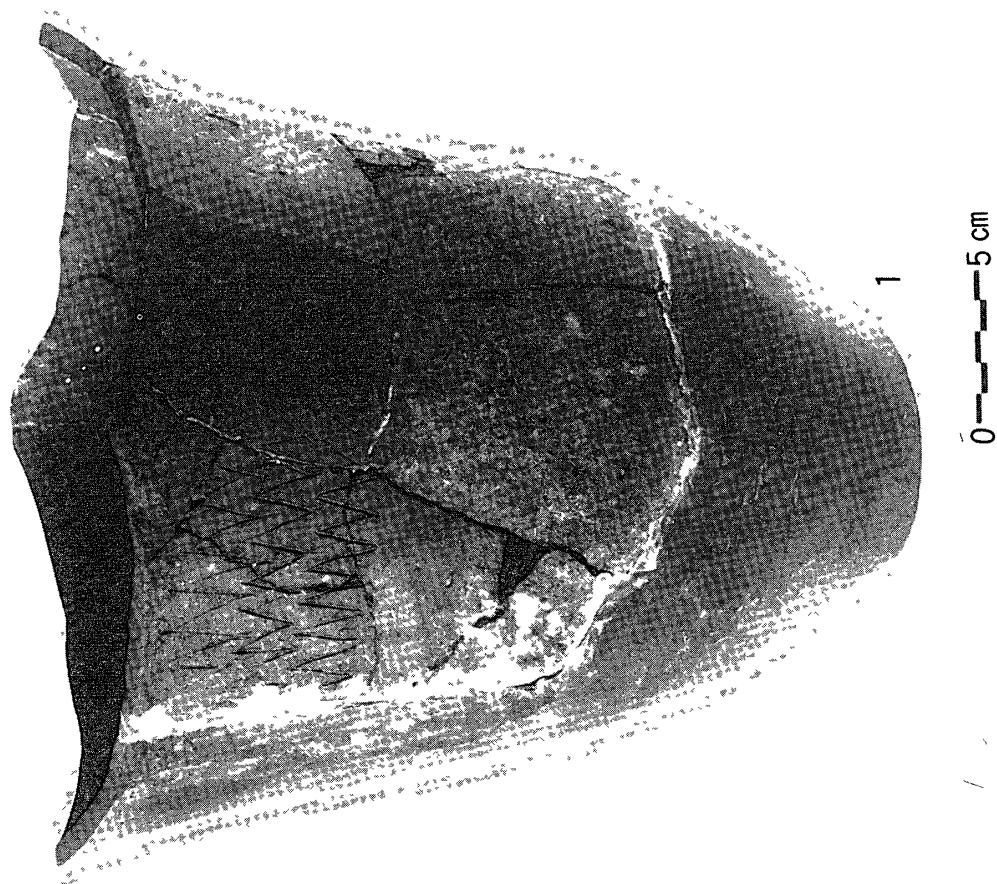
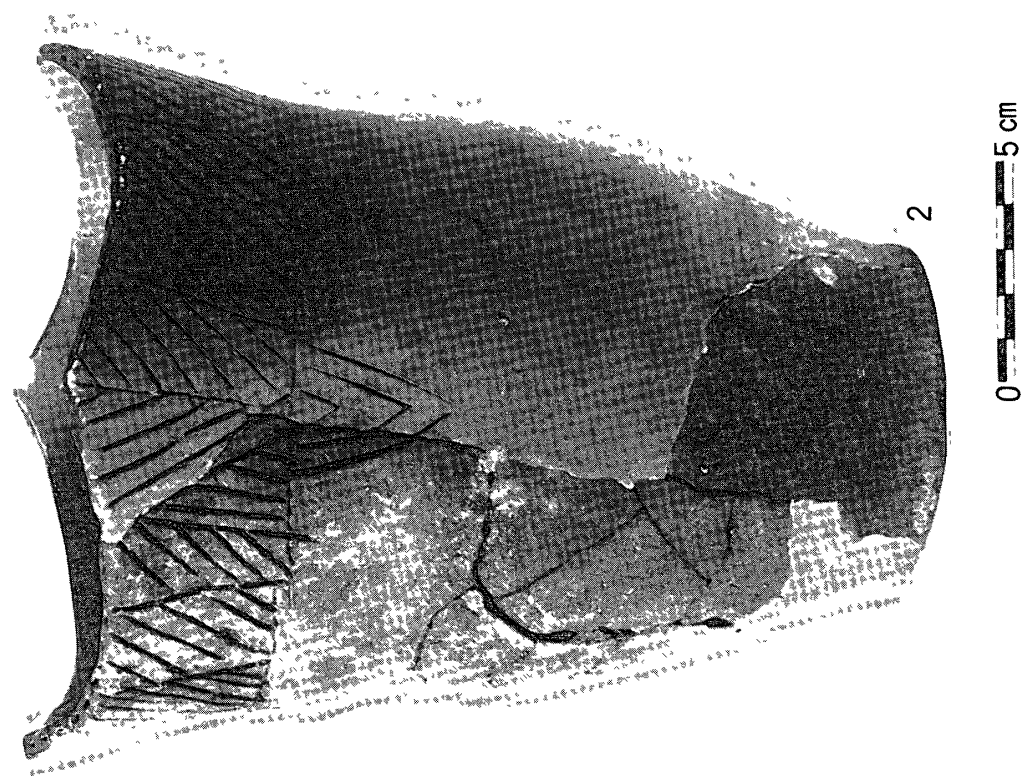




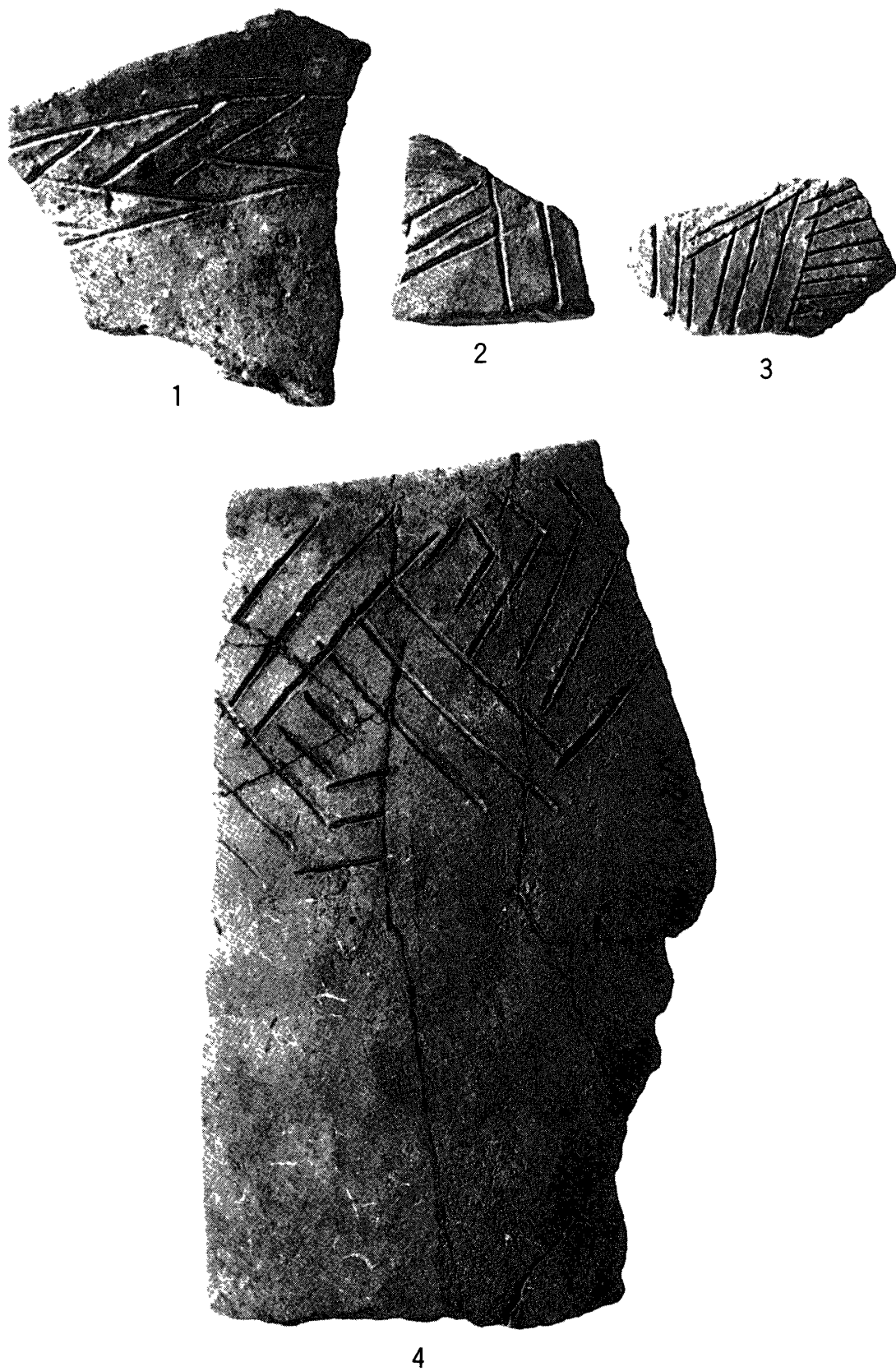
図版46 A - 3区出土の嘉徳 I 式 A 土器



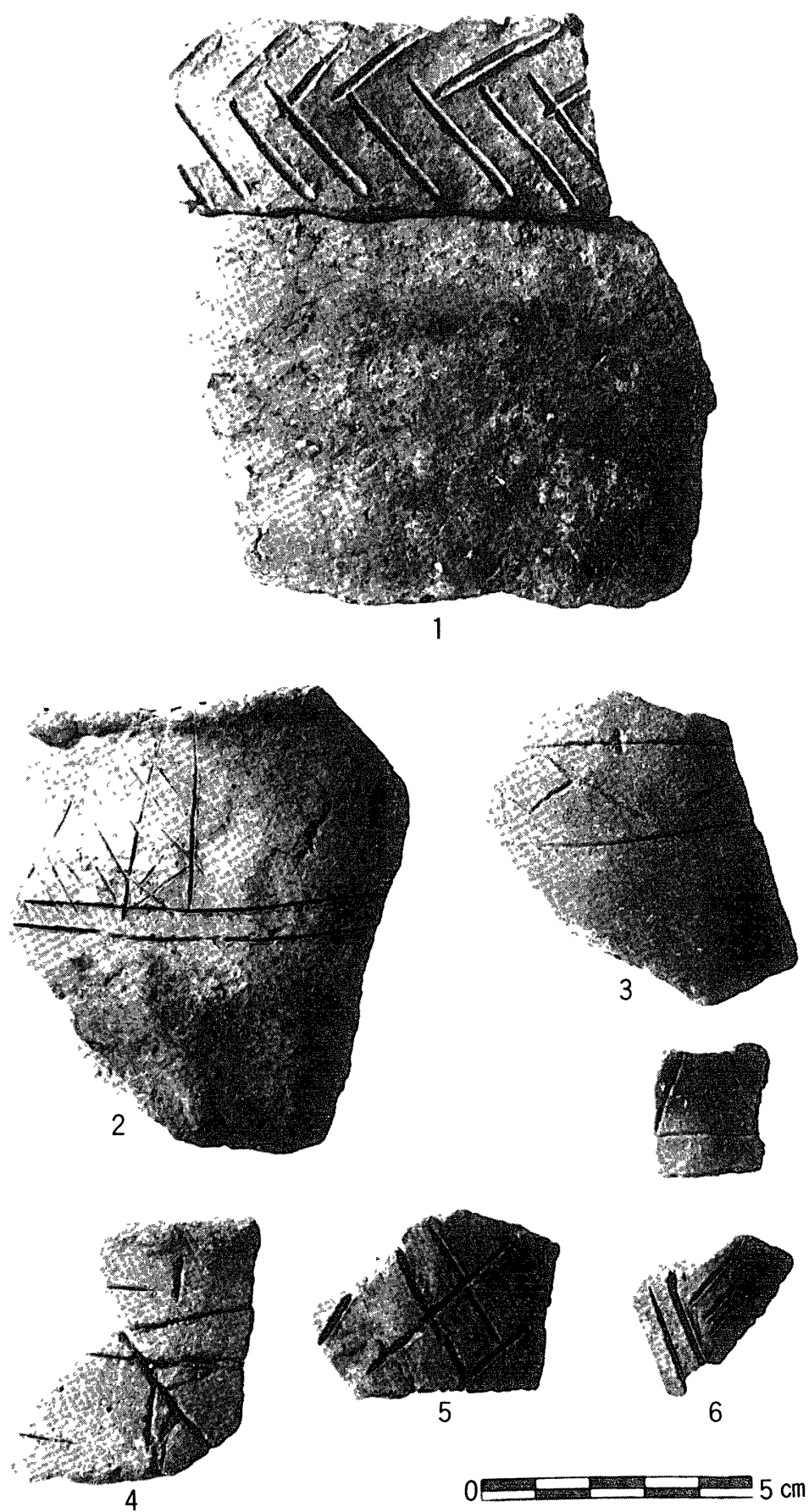
図版47 A - 3区出土の嘉徳Ⅰ式A・B土器



図版48 A - 3区出土の嘉徳II式土器

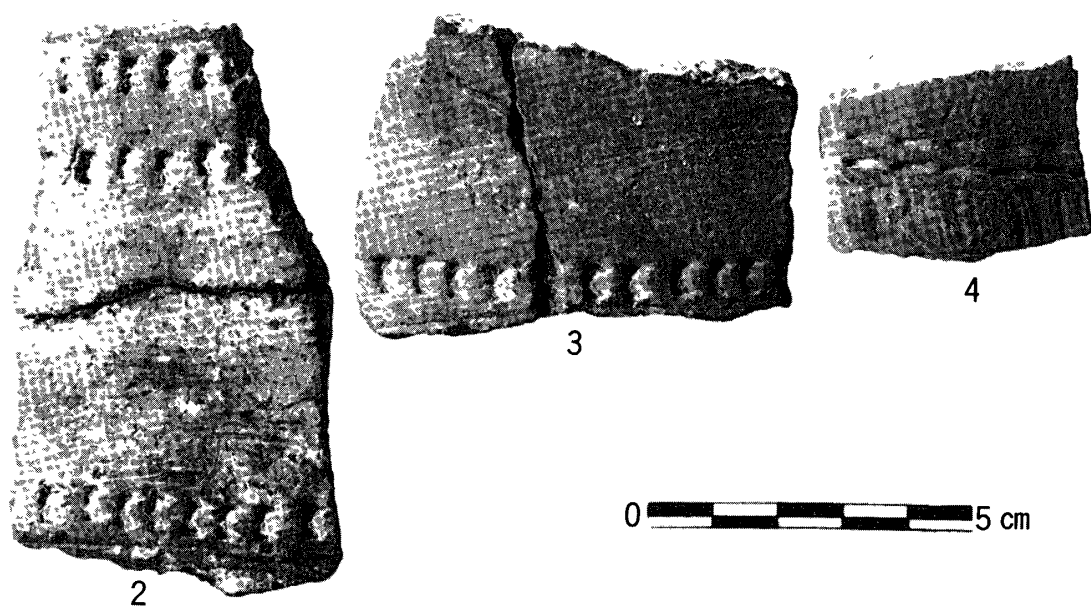
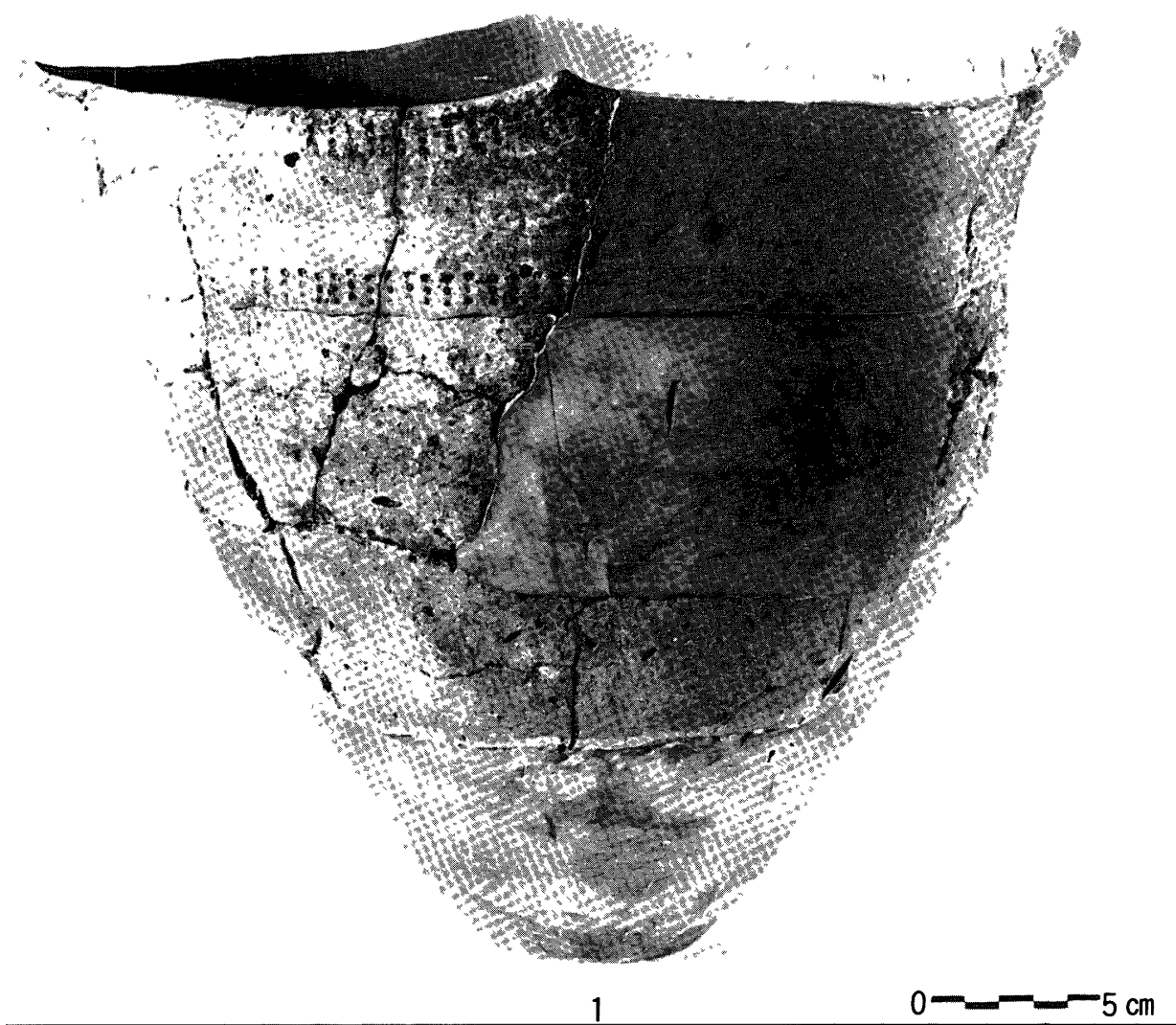


図版49 A - 3区出土の嘉徳II式土器

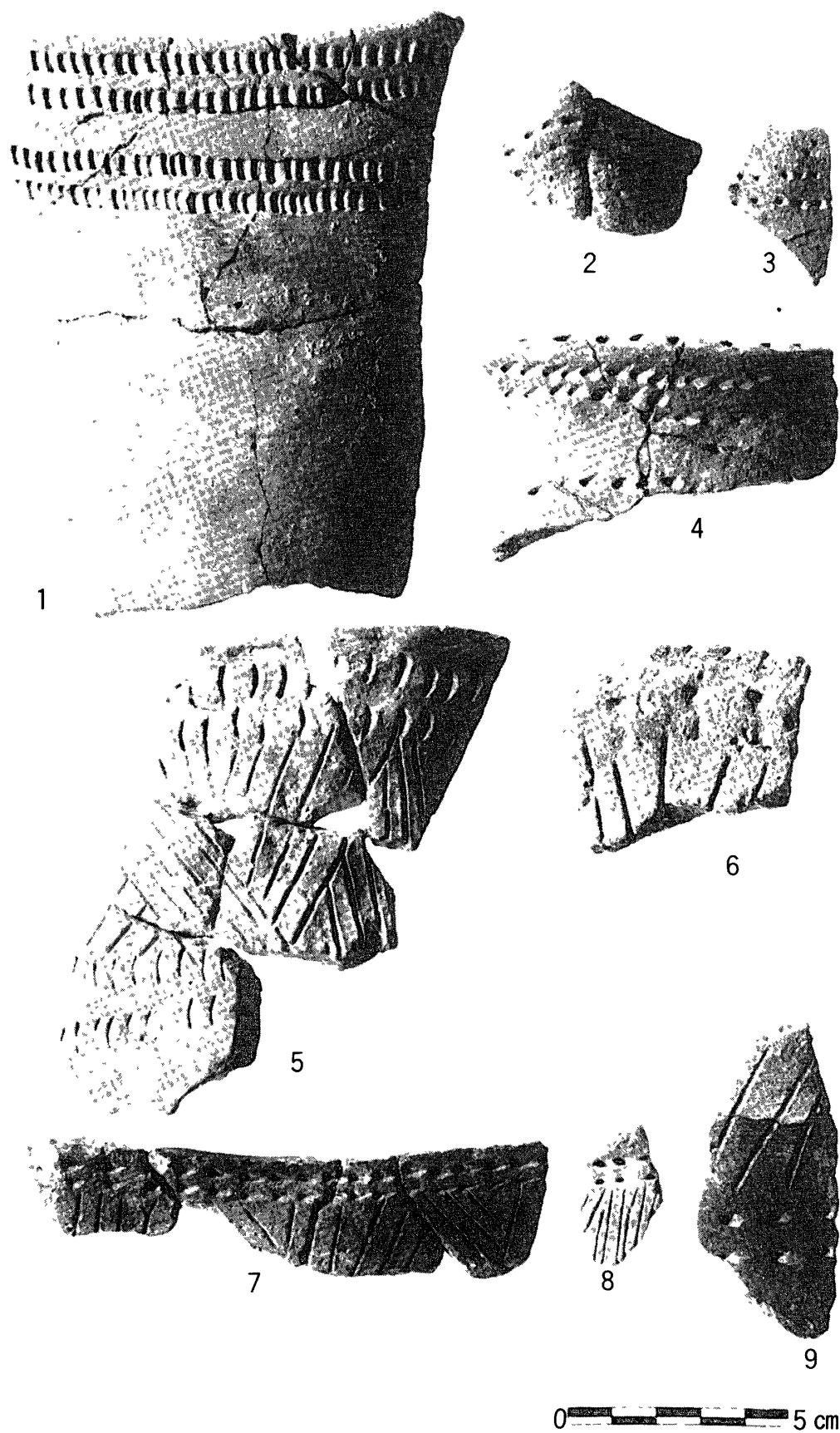


図版50 A - 3区出土の嘉徳II式土器

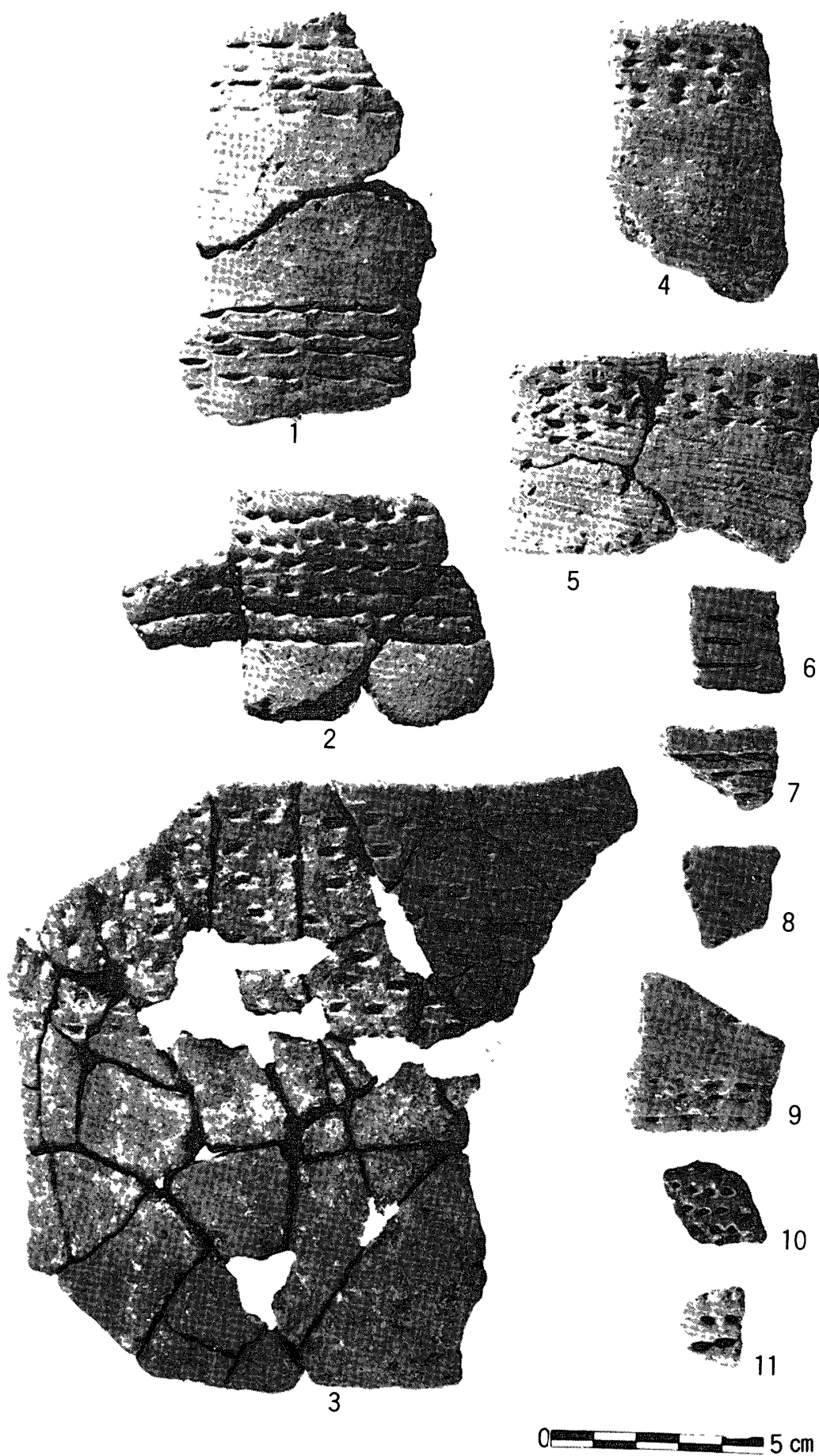




図版51 A - 3区出土の神野D式土器

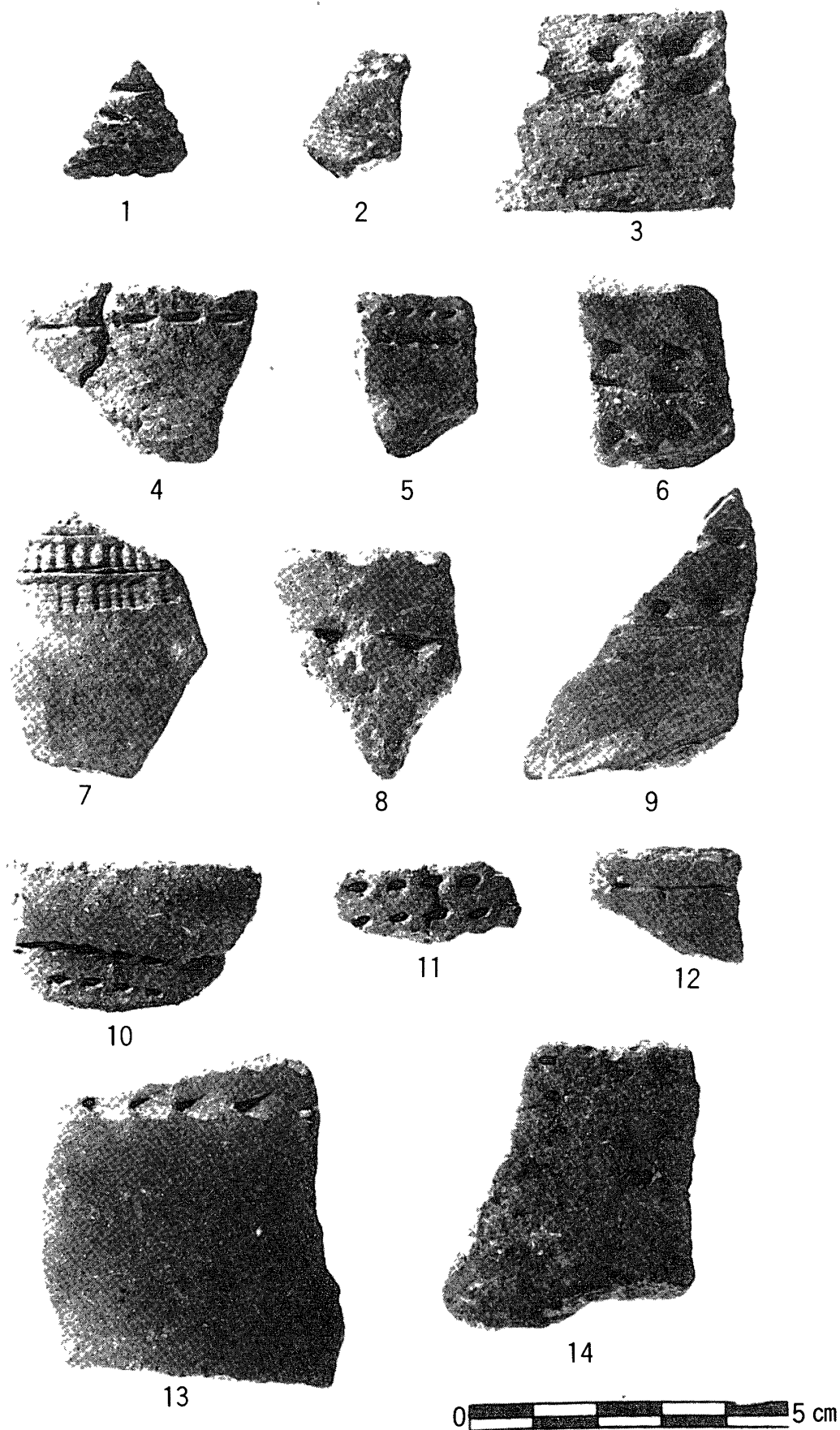


図版52 A - 3区出土の神野E式土器

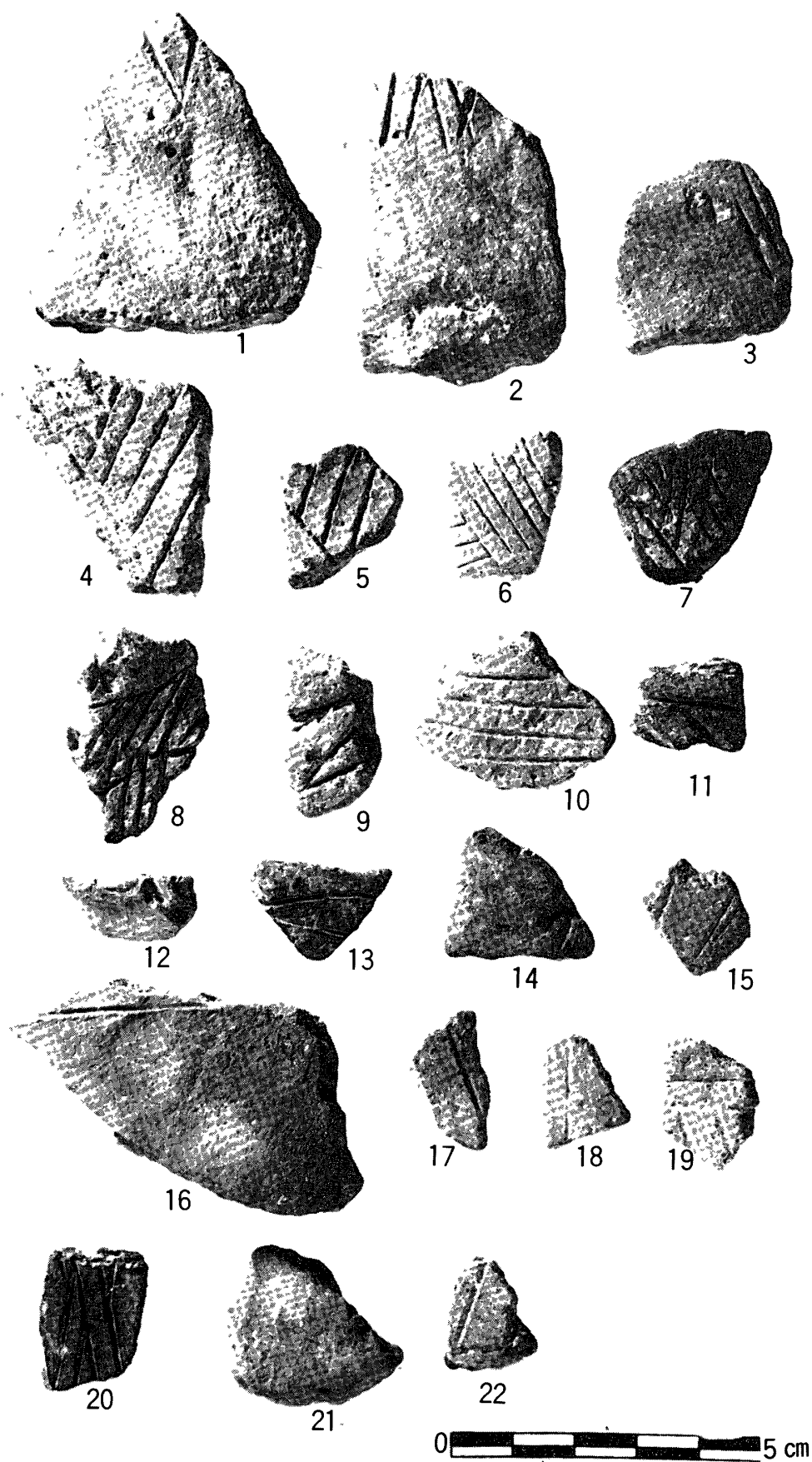


図版53 A - 3区出土の伊波式土器

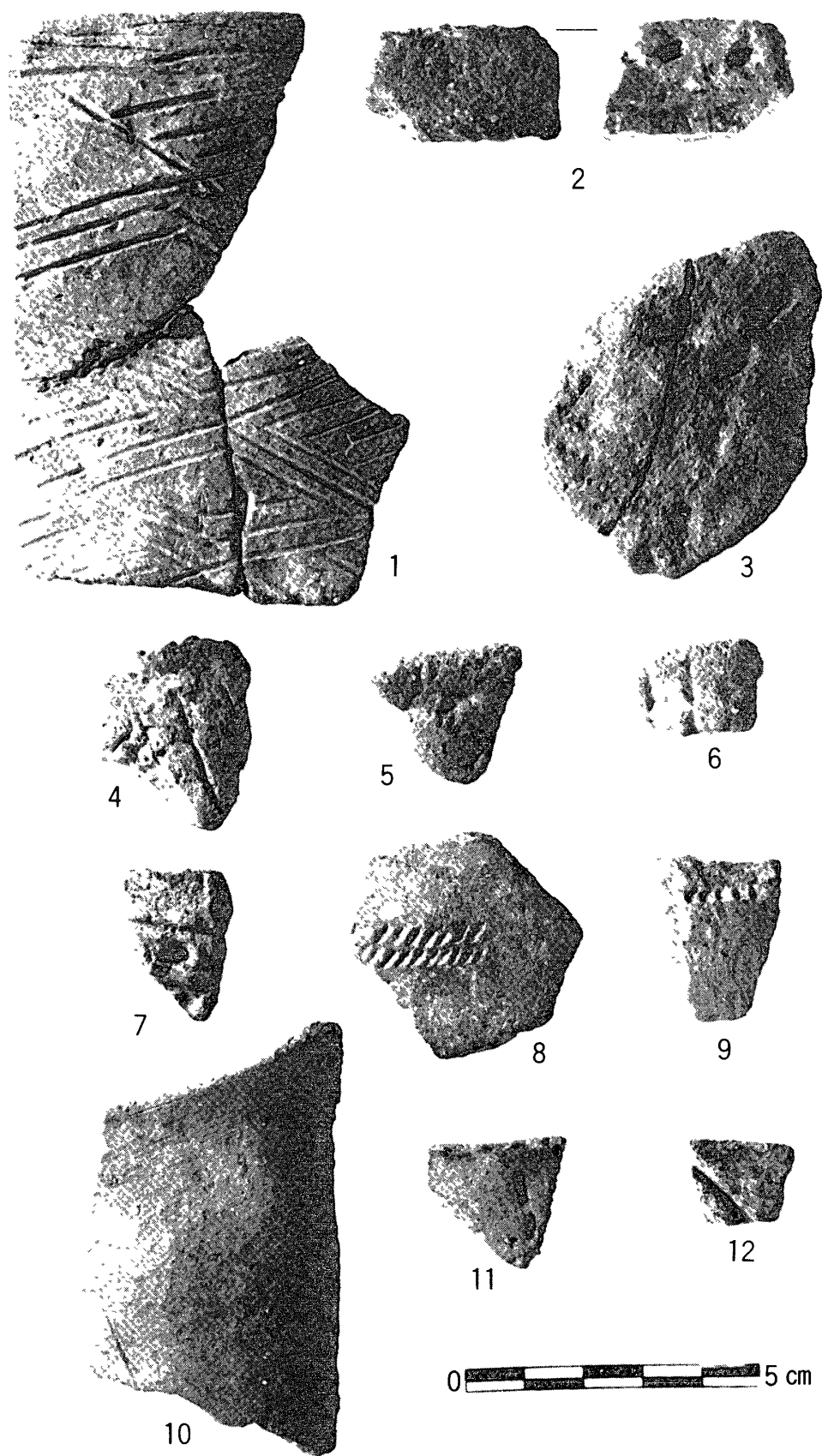




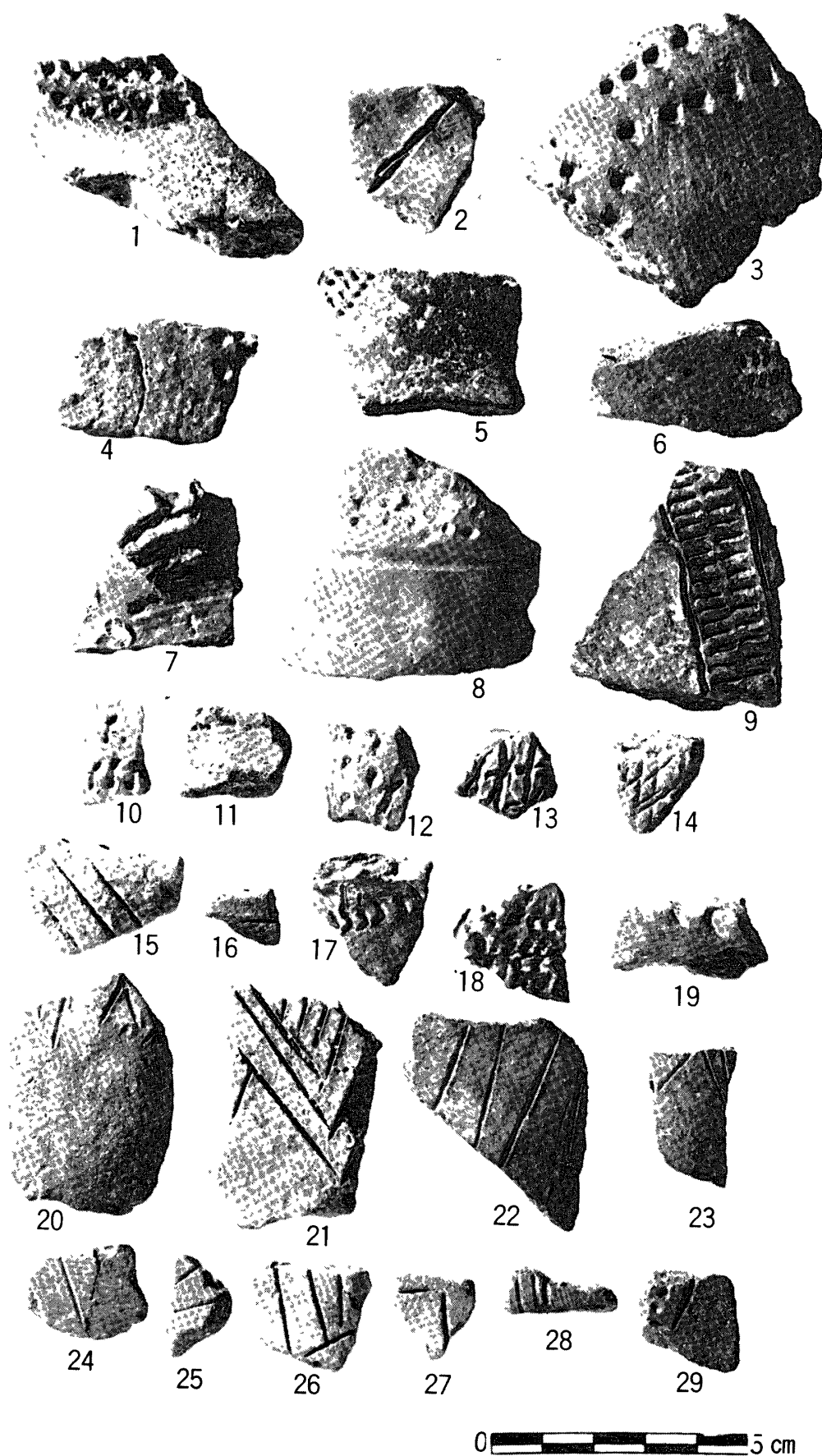
図版54 A - 3区出土の伊波系不明土器



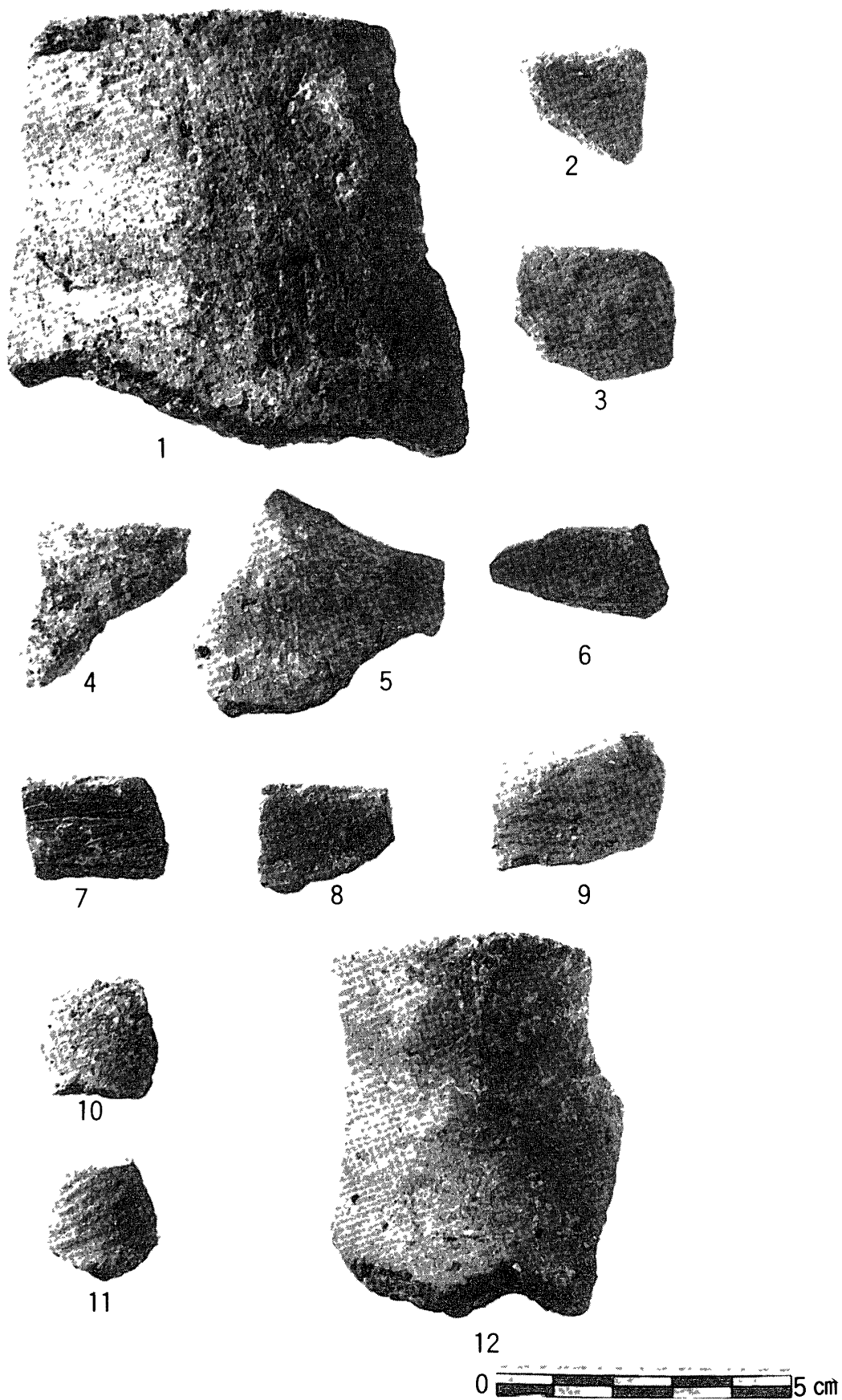
図版55 A - 3区出土の有文破片



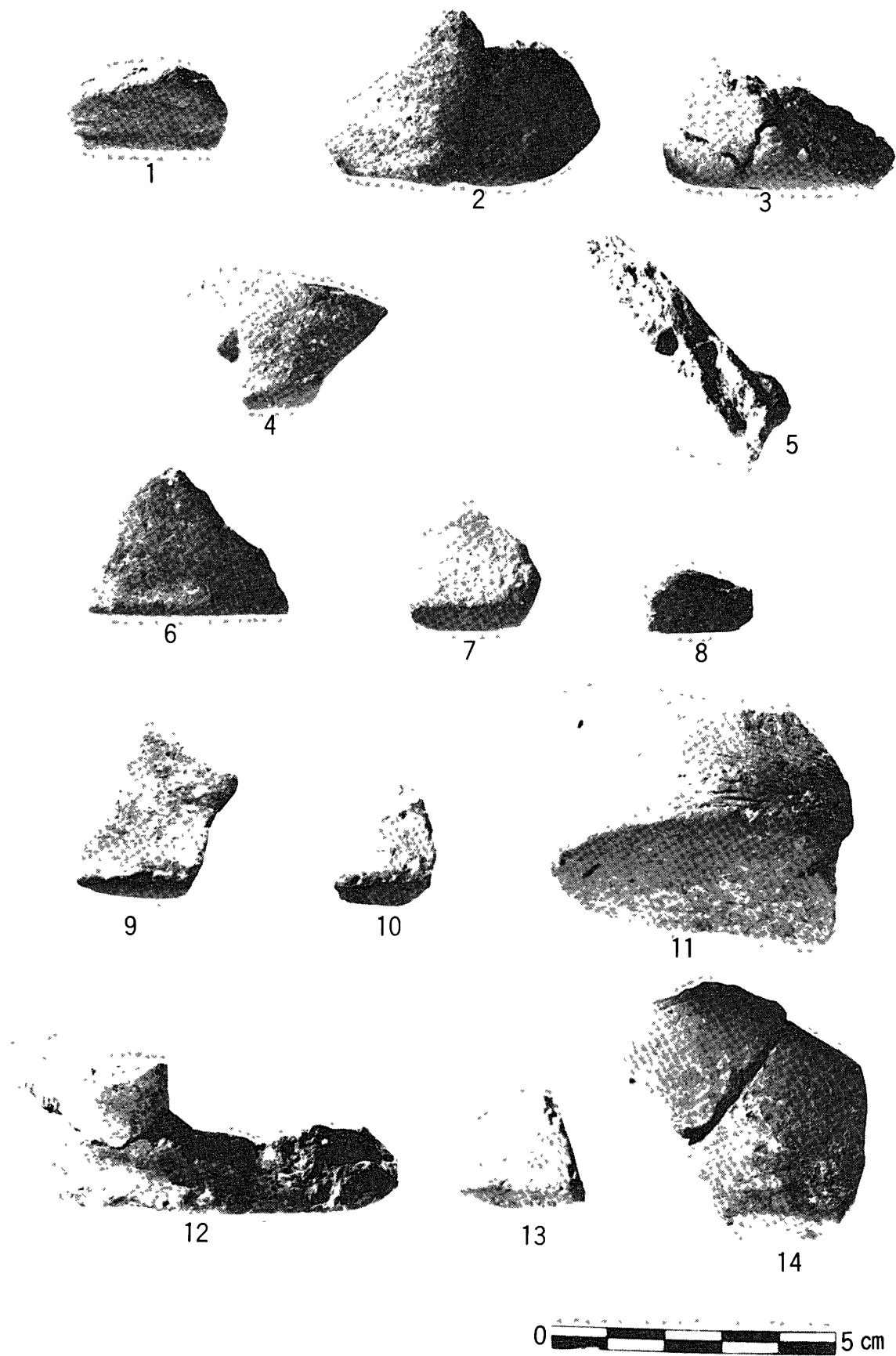
図版56 A - 3区出土の有文破片



図版57 A - 3区出土の有文破片

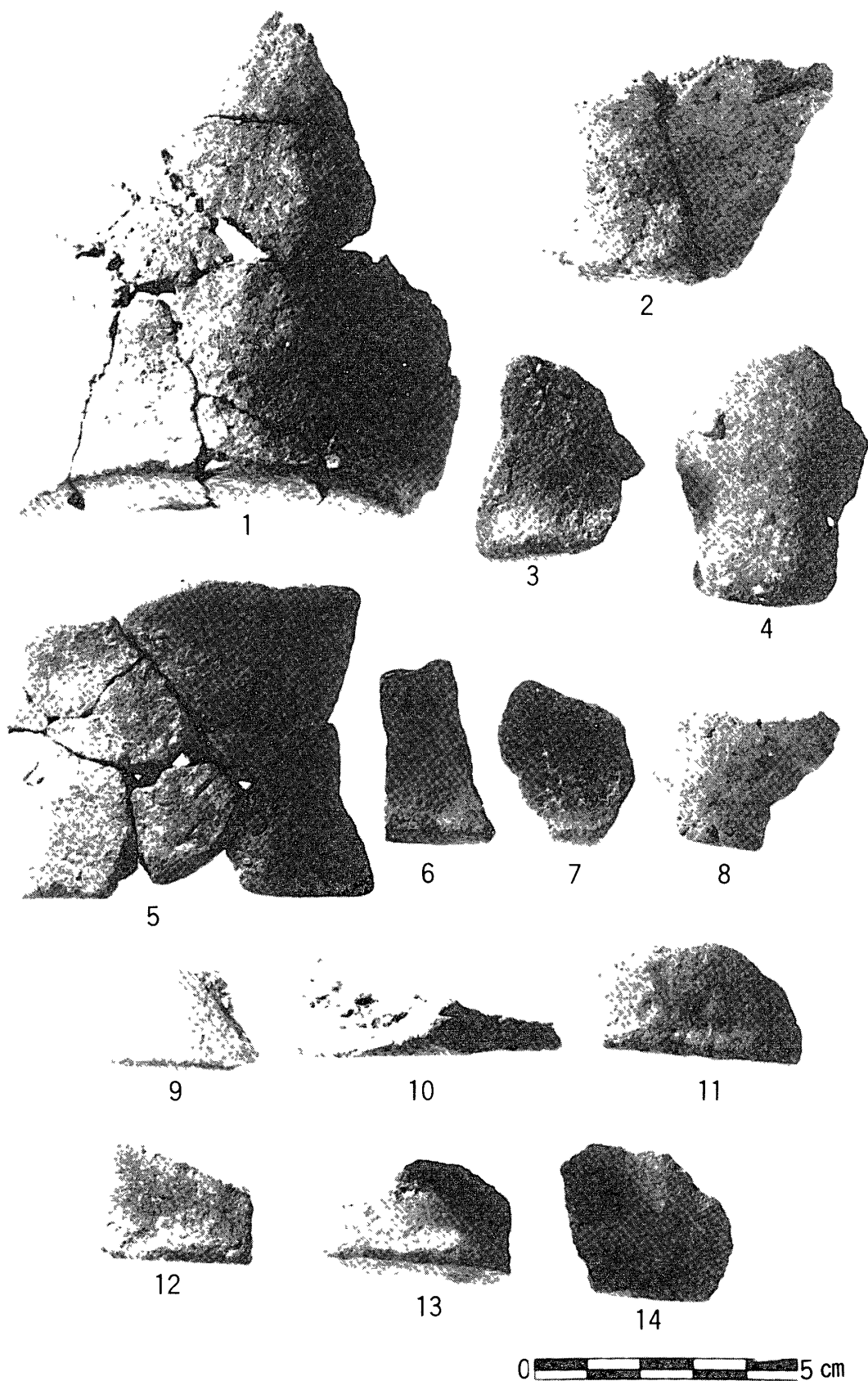


図版58 A - 3区出土の無文口縁、壺形土器



図版59 A - 3区出土の底部





図版60 A - 3区出土の底部